福岡市埋蔵文化財調査報告書第773集

三苦 4

三苦遺跡群第5次発掘調査報告

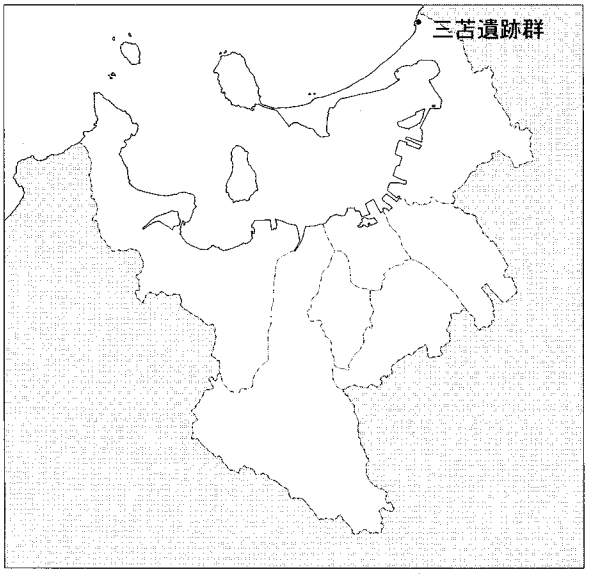
2003

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第773集

三　苫　4

三苫遺跡群第５次発掘調査報告

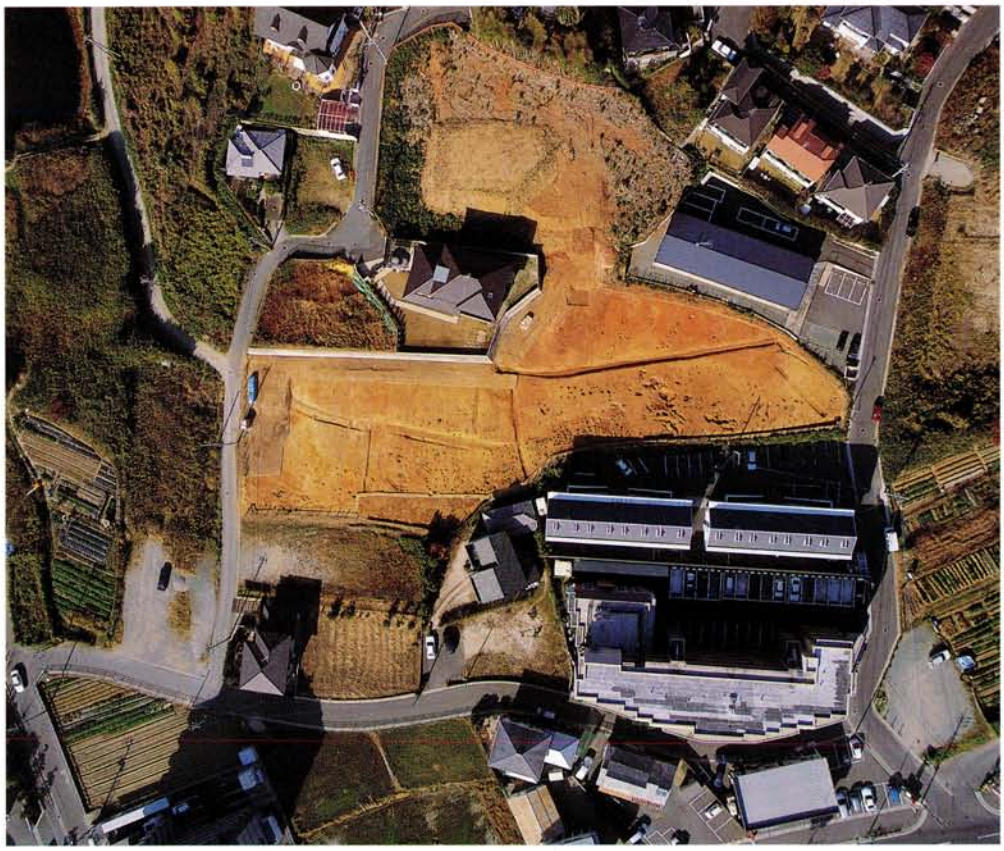


遺跡略号　MTM-5
遺跡調査番号　００１５

２００３
福岡市教育委員会

巻頭図版1　三苫遺跡第5次調査区全景

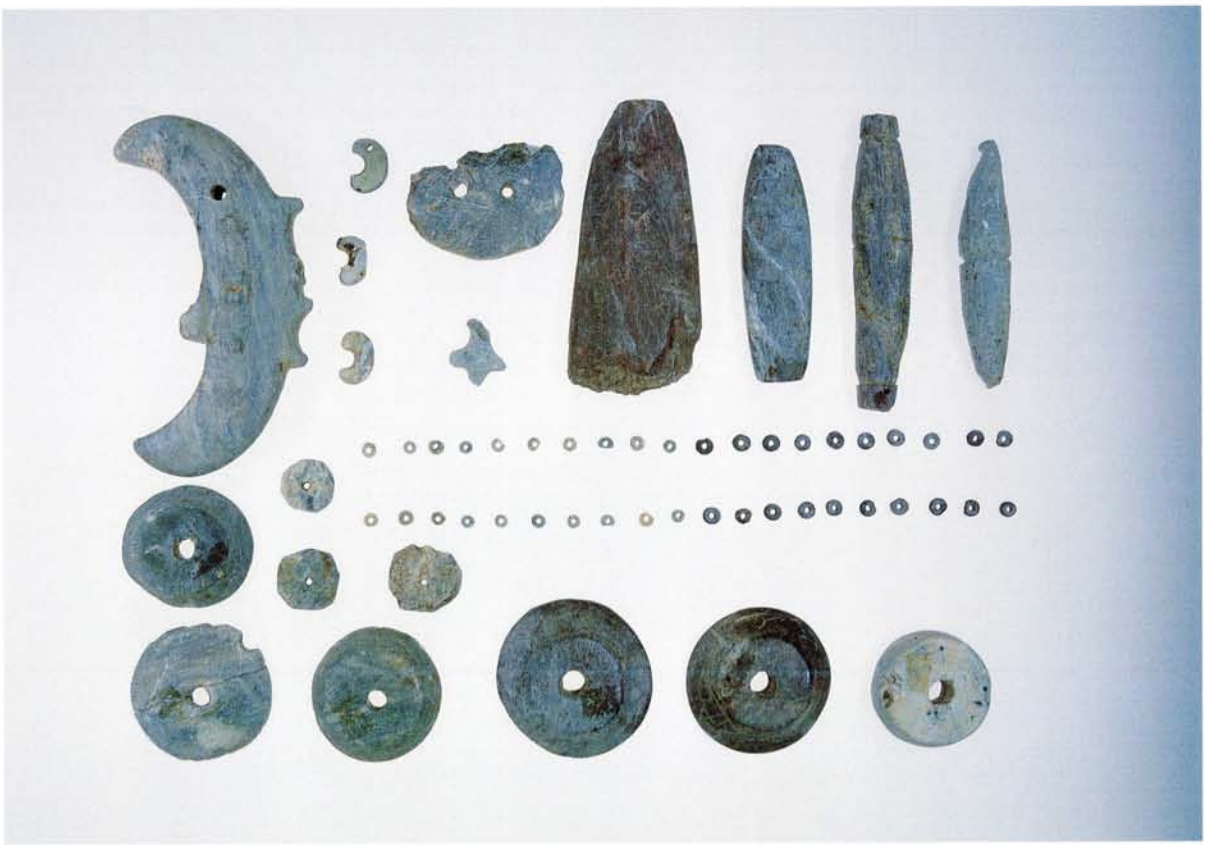
巻頭図版2　三苫遺跡第5次調査A区全景



巻頭図版3　三苫遺跡第5次調査B区全景

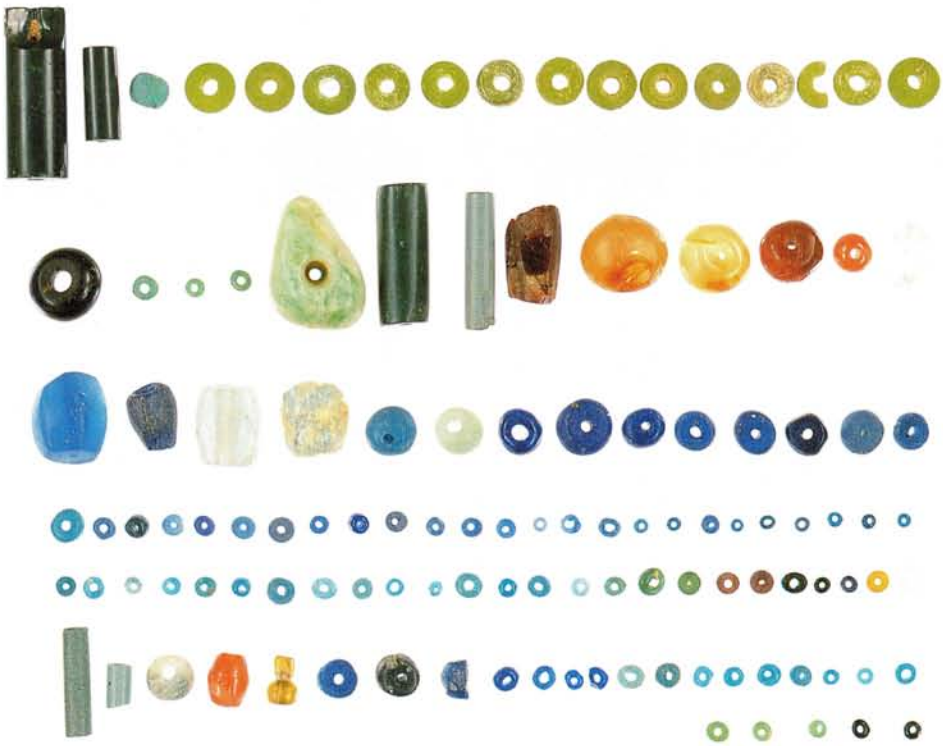
巻頭図版4　三苫遺跡第5次調査C区全景

巻頭図版5　三苫遺跡第5次調査A区出土遺物1



巻頭図版6　三苫遺跡第5次調査A区出土遺物2

巻頭図版7　三苫遺跡第5次調査A区出土遺物1



巻頭図版8　三苫遺跡第5次調査A区出土遺物2

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に残し伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業の増加に伴い、やむを得ず失われていく埋蔵文化財について発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本報告による三苫遺跡第５次調査では、縄文時代から中世にかけての多くの遺構を調査し、古墳時代の集落と古墳群全体の調査を行うなど、多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、三苫浜土地区画整理組合をはじめとする多くの方々にご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成１５年３月３１日

福岡市教育委員会
教育長　生田征生

例　言

1．本書は、東区三苫６・７丁目地内における区画整理事業に先立って、福岡市教育委員会が平成12年度・13年度に実施した三苫遺跡第５次調査の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆は中村啓太郎・本田浩二郎があたった。なお、Ｂ区・Ｃ区については中村、Ａ区・Ｄ区については本田が担当した。編集は中村と協議のうえ本田があたった。

3．本書に使用した遺構実測図は中村・本田・高木誠・春田城二・安藤史郎・安藤峰正・今村佳子・徳留大輔・石井淳子・金子朋子・渡辺誠が作成した。
また、製図には中村・本田・渡辺があたった。

4．本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北であり、真北より６°21西偏している。

5．本書に使用した遺物実測図は中村・本田・渡辺が作成し製図した。遺物実測図の縮尺は土器類を1/2・1/4に統一し、石器類は1/1・2/3・1/2に統一した。
なお、旧石器時代の遺物については実測・報告は吉留秀敏が担当し、Ｃ区出土の鉄器については福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が担当した。

6．検出した遺構については、調査時に遺構の種別を問わず検出順に通し番号を付し、遺構の性格を表す略号を付した。

7．本書で使用した写真は中村・本田が撮影した。

8．本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本 文 目 次

第一章. はじめに
1. 調査に至る経緯 …… 1
2. 調査体制 …… 2
3. 遺跡の位置と環境 …… 3

第二章. 調査の記録
1. 発掘調査の概要 …… 5
2. A区の概要 …… 15
a. 旧石器時代の調査 …… 19
b. 縄文時代の調査 …… 29
c. 弥生時代の調査 …… 43
d. 古墳時代の調査 …… 53
e. 古代・中世の調査 ……186
3. B区の概要 ……201
縄文時代の調査 ……202
古代の調査 ……205
4. C区の概要 ……221
弥生時代の調査 ……223
古墳時代の調査 ……233
5. D区の概要 ……289

第三章. まとめ ……293

表　紙　第５次調査Ａ区出土滑石製品
裏表紙　第５次調査Ａ区出土遺物

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

近年、福岡市は人口の増加に伴い、市内各所において開発の波が押し寄せている。特に福岡市東部地域では急速な市街化・区画整理などの再開発が進んでいる。東区三苫6、7丁目地区周辺においても美和台団地、西鉄三苫駅が近いことなどの立地条件より宅地化が進み、計画的で良好な町づくりが必要であると考えられ、三苫地区における土地区画整理事業が計画された。この計画に伴い、平成3年10月11日、(仮称)三苫浜地区土地区画整理事業組合設立準備会より福岡市教育委員会埋蔵文化財課へ事業対象地についての埋蔵文化財事前審査願いが提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、事業対象地が周知の遺跡である三苫遺跡群の範囲内であることから試掘調査が必要であると判断し、平成4年2月10日に行われた地権者等への事前説明会の後に関係諸氏よりの同意を得て、同年2月16日～3月25日の期間に対象地内の試掘調査・踏査調査を行った。これらの試掘調査の結果、対象地内には住居跡・溝・柱穴等の遺構が良好な状態で遺存していることが確認された。また同年5月、事業に追加となった京塚地区についても事前審査願いが提出され、8月に一部についての試掘調査が行われた。先の試掘調査の成果と合わせ、事業対象地内の約3.5haについて発掘調査が必要であるとの結論に達し、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、造成工事により止むを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。その後、対象地周辺において発掘調査（第２次・第３次・第４次調査）が行われ、遺跡群内の様相が徐々に明らかになった。特に第２次・第３次調査は事業対象地に接して行われたものであり、旧石器時代から古代にかけての遺物と遺構が検出され、古墳時代の集落が良好な状態で遺存していることが確認された。古墳時代の集落は対象地内にも濃密に展開していることが予想された。これらの調査成果より、当初予想されていた調査期間、費用ともに大幅に増大する可能性が考えられたことから、申請者と工程・費用についての協議を重ねた。最終的には事業地の一部が自然公園として整備され保存されることが決定されたため調査対象地からは除外し、約1.7haの面積Ａ区・Ｂ区・Ｃ区の3地点について発掘調査を行うこととなった。平成12年4月6日、福岡市三苫浜土地区画整理組合が正式に設立され、福岡市との間に発掘調査に関わる契約を締結し、樹木伐採作業などの条件整備が完了した平成12年６月１日より重機による表土掘削を開始し、調査に着手した。調査途中、事業対象地内を巡る周回道路建設予定地についても遺跡範囲内に位置していたことが確認され、新たに追加された調査対象地をＤ区として設定し調査を行った。また、Ｃ区とした丘陵部を削平して建設される道路の法面部分等についても事業計画の変更があり、調査区を2000㎡ほど拡張し調査を行った。これらの変更により当初の終了予定より１ヶ月以上調査期間を延長し、平成13年10月12日に終了した。

なお、調査期間中には三苫小学校・和白小学校両校生徒を対象とした遺跡見学会・体験発掘を実施、また三苫地区老人会による遺跡見学会も行った。

2．調査の組織

事業主体　福岡市三苫浜土地区画整理事業組合

調査主体	福岡市教育委員会	教育長		生田　征生
調査総括	同	埋蔵文化財課	課長	山崎　純男
	同	埋蔵文化財課	調査第２係長	田中　寿男（現任）
				力武　卓治（前任）
調査庶務	同	文化財整備課		御手洗　清
事前審査	同	埋蔵文化財課	事前審査　係長	池崎　譲二（現任）
				田中　寿男（前任）
	同	埋蔵文化財課	主任文化財主事	米倉　秀紀（現任）
				大庭　康時（前任）
	同	埋蔵文化財課	事前審査係	田上　勇一郎（現任）
				大塚　紀宜（前任）
				加藤　隆也（前任）
調査担当	同	埋蔵文化財課	調査第２係	中村　啓太郎　本田　浩二郎

調査員　今村佳子　高木　誠　春田城二　徳留大輔　岩満　聡　福田匡朗

調査作業

阿部幸子	池　聖子	井料国彦	大音輝子	小川秀雄	金子二三枝	小池温子
小路丸嘉人	小路丸良江	幸田信乃	指原姶子	園田　豊	薗部保寿	副田澄子
尊田絹代	田中フキ子	田端名穂子	塚本よし子	寺園恵美子	徳永榮彦	豊田厚子
永田律子	永田優子	中野裕子	中村幸子	夏秋弘子	花田則子	吹春哲夫
増田ゆかり	松岡芳枝	宮崎雅秀	村本義夫	森垣隆視	安河内康矩	安田光代
安元尚子	吉川暢子	脇田　栄	安藤峰正	安藤史郎	阿部純子	池田俊祐
池田真由美	稲崎龍也	井上ヨシ子	太田陽一	大庭みゆき	荻野須美子	折田信子
川波和美	川野美恵子	木村芳任	熊代　薫	古長博美	佐賀　文	堺　裕子
崎村雄介	櫻澤　勤	竹原吉秋	田中智子	富永美樹	中谷賢治	永松弘恵
西村　登	野田トヨ子	花田昌代	廣幡千寿留	藤澤義一	藤田ルミ子	保坂由美子
桃野千代美	光安昌子	柳瀬あき	山下真由美	山田マサ子	中村文美	仲谷真一朗
井上志峰	石井淳子	金子朋子	小田裕樹	渡辺　誠	上田龍児	西田絵美

整理作業　林由紀子　有島美江　鳥飼悦子　室以佐子

遺跡調査番号	００１５	遺跡略号	ＭＴＭ－５
調査地地番	東区三苫６・７丁目地内	分布地図番号	28　三苫
開発面積	10ha	調査面積	18,004m²
調査期間	2000年６月１日～2001年10月12日		

なお、調査期間中には株式会社鹿島建設九州支店・株式会社玉野コンサルタントの皆様からご協力を賜った。記して感謝する次第である。

3. 遺跡の位置と環境

a. 位置と環境

三苫遺跡群は福岡市の東部、玄海灘に面した海ノ中道の基部に位置し、古砂丘上に形成された丘陵上に立地する。地名の由来は古く、神功皇后西進の時、烏賊津臣命が、海神に航海の安全を祈って、船の苫３つを海中に投じ、その漂着地を三苫と称したことからと言われている。またその苫を神体として海神を祭ったとされるのが綿津見神社である。

周囲の遺跡を概観すると三苫遺跡群の南西、海の中道には三苫黒山遺跡(2)、奈多砂丘Ａ遺跡(3)、Ｂ遺跡(4)と連なる。このうち奈多砂丘Ｂ遺跡は部分的ながら調査が行われ旧石器時代の遺物、弥生時代後期～古墳時代にかけての集落が検出されている。その先には大宰府との関わりが指摘される、古代の漁労及び製塩遺跡である海の中道遺跡や金印を出土した志賀島が位置する。東をみると、三苫永浦遺跡群(5)が位置する。区画整理に伴う大規模な調査が行われ、旧石器時代の遺物、弥生時代～古墳時代の集落、前方後円墳２基を含む古墳群が確認されている。この南の下和白遺跡(6)では旧石器時代～中世にかけての遺構、遺物が調査されている。この中に位置する飛山古墳群では３基の石室が確認され、竪穴系横口石室の１号墳では滑石製の有孔円盤や臼玉が副葬されており、本遺跡群の滑石工房との関連が考えられる。さらに南の博多湾に面した唐原遺跡群(7)では弥生時代後期～古墳時代前期に至る大規模な集落が調査され、多量の漁労具や陶質土器、外来系土器が確認されている。さらに古墳時代後期の円墳も確認されている。

※　文中の番号と図面の番号は一致する。

b. これまでの調査

第１次調査　平成２年、共同住宅建設に伴う調査。第５次調査B区の東に位置する。古代の掘立建物２棟、生産遺構（工房跡）、中世の溝等が検出されている。古代の集落について調査者は「贄」としてのとしての生鮮食品を貢納していた「厨戸」の可能性を指摘している。

第２・３次調査　平成６・７年、小学校建設に伴う調査。第５次調査A区の東に接して位置する。旧石器時代、縄文時代後晩期の遺物、弥生時代～中世の集落を検出した。特に古墳時代、４世紀末～７世紀初頭の集落が中心で、竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝等が検出されている。特筆すべき遺構として、滑石製品製作工房跡と考えられる竪穴住居がある。多数の滑石製品及び未製品が出土している。

第４次調査　平成８年、道路拡張に伴う調査。中世後期～近世初頭にかけての遺構、遺物が確認されている。

三苫京塚古墳　平成元年、宅地造成に伴う調査。第5次調査B区の西に位置する。6世紀後半の円墳１基、弥生時代中期後半～後期初頭の竪穴住居１軒が検出されている。特筆すべき遺物として1号墳出土の三累環頭太刀があげられる。尚、今回の第5次調査で新たに古墳群が確認されたことにより、三苫京塚古墳を三苫古墳群A群と名称を変更した。

1. 三苫遺跡群
2. 三苫黒山遺跡
3. 奈多砂丘A遺跡
4. 奈多砂丘B遺跡
5. 大和白遺跡
6. 三苫永浦遺跡群
7. 唐原遺跡

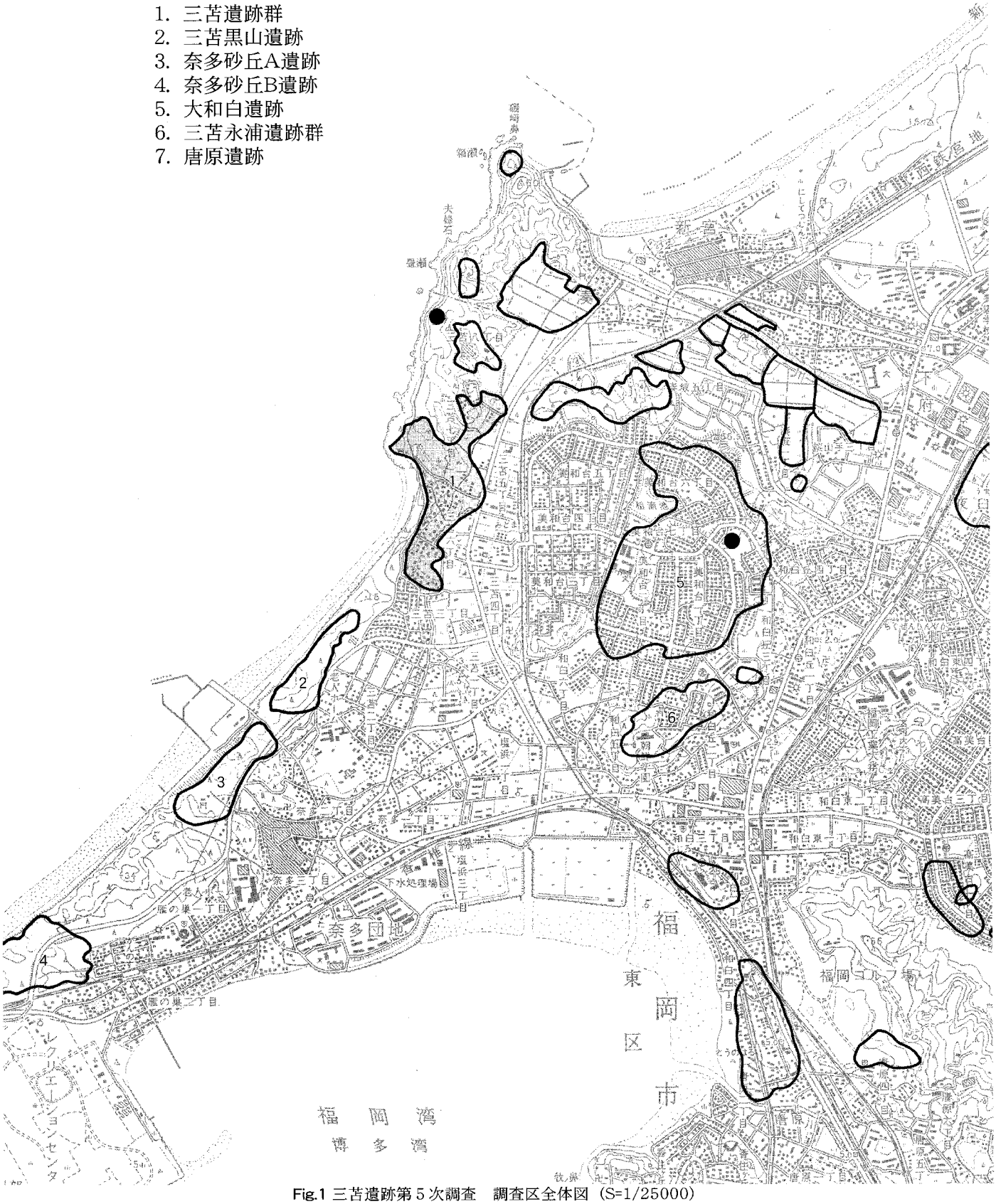


Fig.1 三苫遺跡第５次調査　調査区全体図（S=1/25000）

第二章．調査の記録

三苫遺跡群は、博多湾岸の北側に位置する海の中道砂層の東側基部、玄界灘に面する第三紀堆積岩によって海岸沿いに形成された独立丘陵から派生する低丘陵の東側緩斜面上に立地している。遺跡群の範囲は南北0.8km×東西0.3kmを測り、南北方向に延伸する形状を呈している。遺跡群の西側は30～80mで玄界灘に面する海岸部に接し、海岸部は高さ10～20mの浸食崖を形成し、海の中道砂丘に接する。遺跡群内では、これまでに第１次調査から第４次調査までが行われている（Fig.３）。今回報告を行う三苫遺跡群第５次調査は、三苫浜地区土地区画整理事業に先立って行われた発掘調査であり、総調査面積は18,000㎡に及ぶ。調査は試掘調査によって遺構の存在が確認された４地点で行われた。調査地点は着手順にＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区とそれぞれ呼称し、調査を行った。調査は重機によって現地表面から20～40cm前後の厚さで堆積する耕作土層を除去することから着手した。

調査を行った遺構検出面は各調査区で異なり、Ａ区では標高４～12m前後を測る第三紀元層の風化土である黄褐色粘質土面からややシルトがかった淡黄褐色土層面上で遺構検出を行った。畑地開墾により遺構包含層は大幅に削平されており、全く検出されない箇所も存在する。

Ｂ区での遺構検出面は標高７m前後を測る黄褐色粘質土層から黄褐色粘質シルト層面上で行った。Ｂ区は三苫古墳群A群（三苫京塚古墳）が占地する丘陵の東側裾部に位置しており、標高８～10m前後を測る丘陵端部では、宅地造成時に大幅に削平されていたためか遺構は検出されなかった。

Ｃ区はＡ区へと延びる丘陵の頂部付近の西側斜面から北側裾部にかけて設定した調査区であり、標高８～22m前後を測る。丘陵頂部付近での遺構検出面は黄褐色粘質シルト層から砂質を含む黄褐色粘質土層面であり、丘陵の北東側斜面上では丘陵の基盤となる古砂丘の砂層上部まで開墾により削平されており、遺構の多くは消滅していた。

Ｄ区では標高19～22m前後を測る黄褐色粘質シルト層面上で遺構検出を行った。

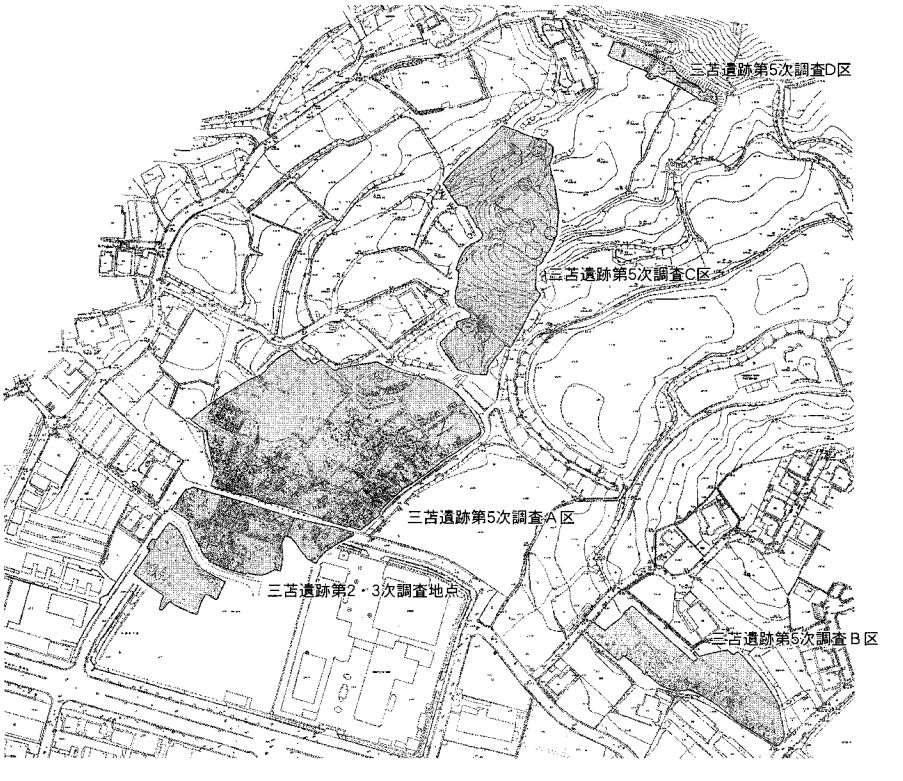


Fig.2 Ａ区遺構実測図（S=1/4000）三苫遺跡第５次調査

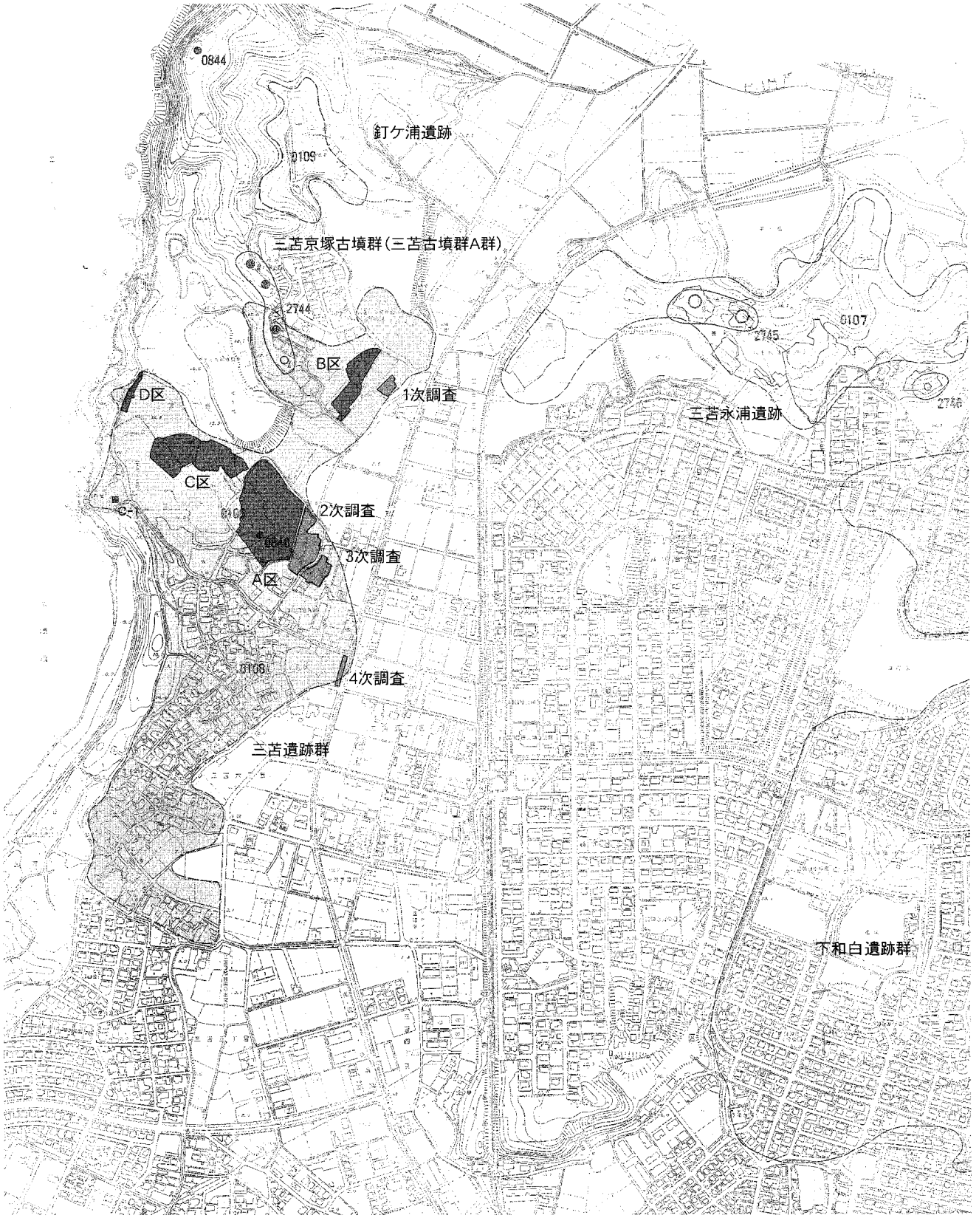


Fig.3 調査区位置図 (S=1/8000)

1．発掘調査の概要

今回、報告を行う第５次調査地点は、三苫小学校建設に先立って行われた三苫遺跡群第２次・第３次調査点の北側に隣接している。

調査対象地は、区画整理事業対象地範囲内で試掘調査により遺構が確認されたＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区の四地点に分けて設定し、条件整備が整った段階で順次着手した。調査対象地は戦前の開墾によって、ほぼ全域にわたって段造成がなされており、標高４～22mを測る。Ａ区・Ｃ区・Ｄ区は区画整理範囲内を東西方向に走る同一の低丘陵上の東側・中央部・西側にそれぞれ位置しているが、Ｂ区は三苫京塚古墳の調査が行われた北側の丘陵東側裾部付近に位置している。

調査の方法は、各調査区毎に任意に座標軸を設定し、それを基に10mのメッシュを組みグリッドを設定して行った。各調査区で設定した任意座標は、調査中に国土座標を用いて読み込みを行い、各調査区の位置関係などの整合性を測った。Ａ区・Ｃ区については調査区が接していたため、同一の座標を用いてグリッドを設定し、調査を行っている。

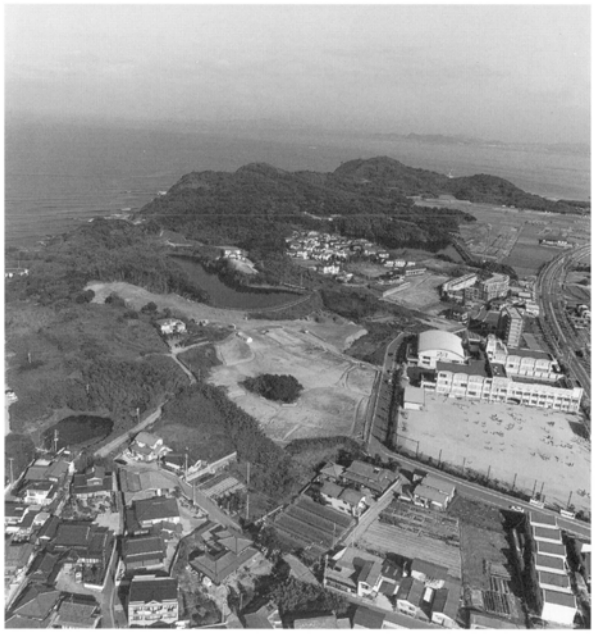
各調査区の記録は1/100・1/200の縮尺で地形測量を行い、1/20の縮尺で遺構実測を行った。重要と思われる遺構については1/10・1/20の縮尺で個別に図化を行った。

写真は35㎜モノクロ・カラースライド、６×７モノクロ・カラースライドで撮影し、補助用として35㎜カラーフィルムによる撮影を行った。遺跡全景写真・調査区毎の空中全景写真はラジコンヘリコプター・セスナを使用して撮影を行った。

各調査区の遺構番号は、Ａ区では0001～、Ｂ区では2001～、Ｃ区では3001～、Ｄ区では4001～とし、遺構の種別にかかわらず検出順に付してたため、各調査区での遺構番号の重複はない。

以下に各調査区の概要について簡単な説明を行う。

Ph.1 第５次調査区全景（南西から）



Ph.2 第５次調査区全景（南から）

A区の概要

A区の調査は、調査予定範囲内の伐採作業・樹木搬出作業終了後に着手した。A区とした調査区は第５次調査範囲の東側約9000㎡の面積を測り、第２・３次調査地点と隣接している調査区である。調査は、試掘調査と第２・３次調査の成果をもとに、現地表面から10～30cm程堆積する腐葉土・耕作土を重機によって除去したのち、検出された黄褐色粘質土層面上において遺構面を設定し、遺構精査を行った。調査対象地は近代の開墾によって段々畑状に造成されており、畑の間には農水路として溝が掘削されており、溝部分では遺構は削平され消滅していたが、それ以外の部分からは遺構が検出される。

A区では後期旧石器時代から中世後半代にかけての遺構・遺物が検出された。

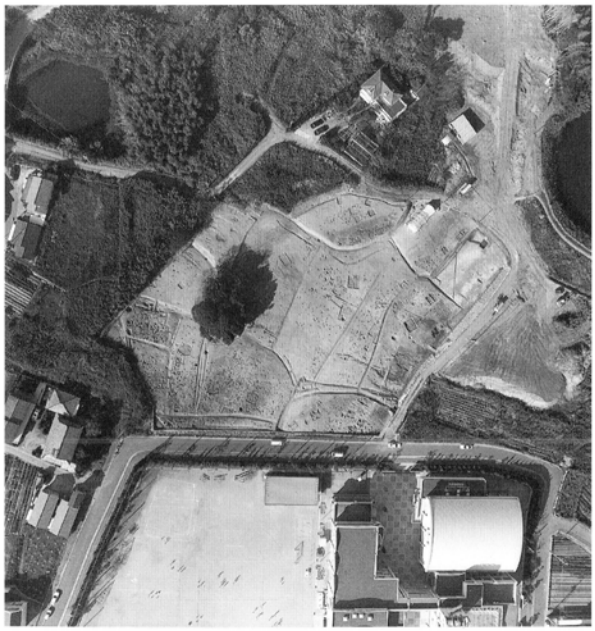
旧石器時代の遺物は、遺構精査時に検出面である黄褐色粘質土層面上面から出土したものと、調査トレンチから出土したもの、古墳時代住居などの遺構埋土より出土するものがある。古墳時代の住居掘削や畑地開墾などにより旧石器時代の遺物包含層のほとんどは失われていたと考えられる。。

縄文時代に属する遺物は、前期～後期・晩期に位置づけられる石鏃・削器・剥片などの石器類の他に、阿高式系土器・三万田式土器などの土器類が少量が出土した。遺構としては縄文時代後期後半の時期が考えられる土坑の検出が初現となる。土坑は標高11.5m前後の丘陵東側斜面で検出され、土坑内には腰岳産黒曜石の石核素材が数点埋納されていた。

弥生時代に属する遺構・遺物は、予想されていたよりも検出は少なかった。隣接する第２・３次調査や三苫京塚古墳の調査では、弥生時代後期の円形住居が調査されており、本調査地点においても同時期の集落の一部が検出されると推測されていたが、土坑などの遺構が検出されただけである。住居などは古墳時代の住居やその後の開墾などにより消滅してしまったものと考えられる。遺物は中期末から後期前半にかけての土器・石器類、前期の石器類などが出土しており、該期には集落が本調査地点付近に展開していたことが推測される。

古墳時代の遺構・遺物は本調査で検出されたものの大半を占める。４世紀から７世紀初頭にかけての竪穴住居が60軒以上・掘立柱建物が９軒以上・土坑や建物としてまとめきれなかった柱穴群・溝などの遺構が検出された。第２・３次調査の成果と合わせると100軒以上の住居が検出されたことに

Ph.3 第５次調査区全景（南東から）



Ph.4 A区全景（東側上空から）

なる。これらの住居は規模・配置などで分類されるが、６世紀前半代に急激に増加する傾向が見られる。第２・３次調査と同じく滑石工房と考えられる住居なども検出されており、集落内の構造復元に貴重な知見をもたらす成果といえよう。遺物は土師器・須恵器・陶質土器・子持勾玉などの滑石製品・礫石錘などの石器などの遺物が出土している。

古代・中世の遺構は掘立柱建物や廃棄土坑・土坑墓・溝などの遺構が検出された。中世の遺構は調査区南側に集中して検出される。南側には一辺30m以上を測る方形区画の溝などが検出され、屋敷として使用されていたことが判明した。遺物は土師器・須恵器・瓦器椀・貿易陶磁器・滑石製品などが出土した。

Ｂ区の概要

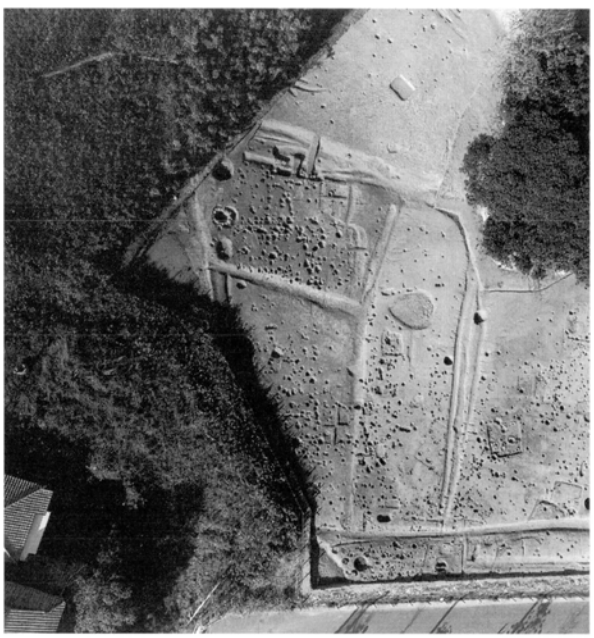
Ｂ区は調査対象地範囲内の北東側に位置する調査区であり、三苫遺跡群範囲の北東端部にあたる。低丘陵の東側斜面上の標高７～10mの間に立地する。調査区の東側には第１次調査地点、北西側丘陵頂部付近には三苫京塚古墳が存在する。これらの調査区が立地する低丘陵は、Ａ区・Ｃ区・Ｄ区が立地する南側の低丘陵と同様に、独立丘陵から東側方向へと派生する標高20m前後を測る低丘陵である。

Ｂ区は当初、区画整理事業計画の予定区外であり、調査着手前に追加された地区であった。このため事前の試掘調査などは行っていなかった。調査区の現況は竹林であり、すでに過去において地形の改変が行われていることが予想された。

伐採終了後、まず踏査から始めた。平成12年8月7・8日に試掘を行い、約5000㎡の対象地全域に重機によって15本のトレンチを設定した。その結果、対象地全域は削平により地形の改変が著しいことが判明し、特に西側斜面の高所部においては遺構・遺物とも確認されず、東側の低位部分の2522㎡について調査を行うこととなった。

調査は試掘調査に引き続き重機によって表土層を除去することから着手した。掘削により生じる排土を調査対象から除外した高所部に掻き上げるためかなりの時間を要した。厚さ10～20cm前後の表土層を除去すると黄褐色粘質土～粘質シルトとなり、この土層上面を遺構検出面として設定した。

Ph.5 Ａ区全景 （南東側上空から）



Ph.6 Ａ区全景・南端部付近（東側上空から）

検出した遺構は、縄文時代及び同時代と考えられる土坑10基、古代から中世の掘立柱建物８棟、造成遺構１、土壙墓１、土坑多数、柱穴多数、近世以降の溝３条等である。調査区の中心を成す遺構の時期は古代と中世である。

遺物は調査面積に比べて非常に少量であり、縄文時代後晩期の土器、石鏃等の石器類、土師器、須恵器、貿易陶磁類等がコンテナ10箱程度が出土したのみである。出土遺物の大半は中世の造成遺構、SX-2011から出土したものである。このSX-2011埋土からは耳環が１点出土しており、須恵器の出土と共に周囲に古墳が存在していた可能性を伺わせる。

Ｃ区の概要

Ｃ区は調査対象地範囲のほぼ中央部に位置する低丘陵の頂部付近から南側斜面にかけて位置している。この地点も他の調査区と同様に、戦前の開墾によって段造成が激しくなされ、最上段部と下段部

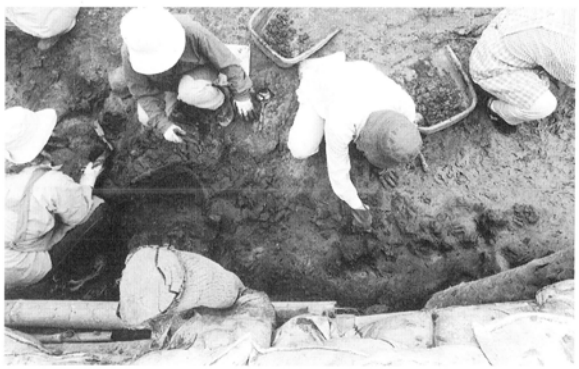
Ph.7 Ａ区作業風景（東から）

Ph.8 Ａ区遺構検出状況（南東から）

Ph.9 Ａ区作業風景（北西から）

Ph.10 Ａ区作業風景（北西から）

Ph.11 作業風景（西から）



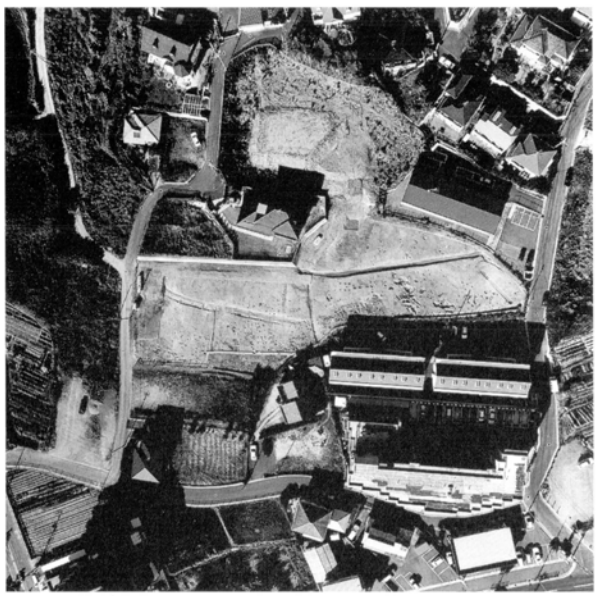
Ph.12 作業風景（南東から）

以外では遺構の大部分が消滅していた。

Ｃ区は丘陵斜面の標高約８ｍ～22mの間に立地する。この低丘陵は古砂丘を基盤として第３紀層の風化土によって形成されている。現況は雑木林であった。伐採前は良好に旧地形が保たれているように思われたが、同区もまたＡ、Ｂ区同様に近代以降の畑による地形の改変が著しく、果樹園や畑地開墾による段造成がなされていた。このため遺構は段の縁部分に残るのみである。

調査着手時の計画では、丘陵頂部付近の東斜面上に検出された古墳３基と東側斜面中段の造成面で検出される遺構のみの調査予定であった。平成12年度の調査終了時点では、調査は当初の予定より進んでおり、Ａ区はほぼ全面の遺構検出が終了しており住居などの遺構の調査も3/4分については終了していた。Ｂ区の調査は完全に終了しており、Ｃ区の調査についても図化作業などを残しほぼ完了している状況であった。

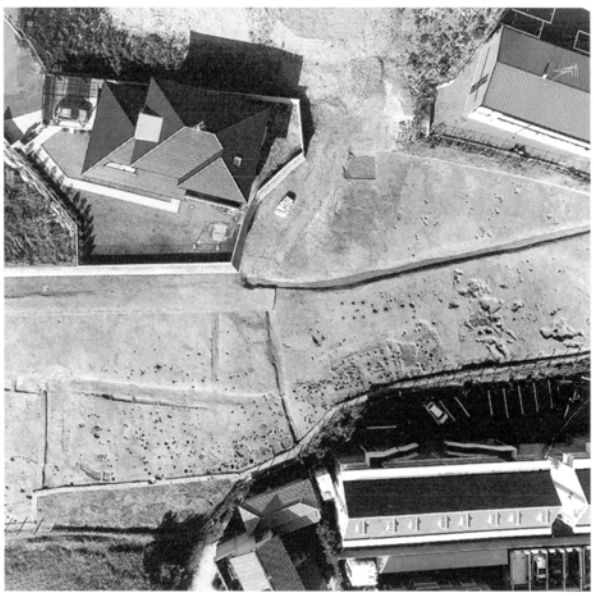
そこで配置していた調査担当者２名を、平成13年度よりＡ区担当の１名に変更し、調査体制の整



Ph.13 Ｂ区全景（南東側上空から）

Ph.14 Ｂ区全景・部分（南東側上空から）

Ph.15 Ｂ区全景・部分（南東側上空から）



Ph.16 Ｂ区全景・部分（南東側上空から）

理を行った。その後、C区を東西方向に分断するように計画された道路の北側法面部分についての工法が変更され、これにより丘陵西側が大幅に削平されることが判明したため、調査対象範囲が西側に拡大した。また海岸側に面した丘陵西斜面においても、遊歩道を区画整理範囲内の周回道路にする工事計画が確定したため、調査対象地が新規に追加・拡張されるなどの区画整理事業計画自体に変更が生じた。このため市内の別の遺跡についての発掘調査を行っていた調査担当者１名が８月に入り急遽、三苫遺跡の調査に合流し、約２ヶ月間の期間で調査対象地を確定し、拡張した部分についての発掘調査を行うこととなった。

調査は対象地の伐採・木材の搬出後に、重機が先行して表土剥ぎを行いながら調査対象地面積を確定させ、その後、あるいは並行して人力で遺構検出・遺構掘り下げを行った。C区の最終的な調査面積は5296㎡となった。

Ph.17 C区全景（東側上空から）

Ph.18 C区全景（北側上空から）

Ph.19 C区全景（南西側上空から）

Ph.20 C区古墳群検出状況（南側上空から）

調査区は厚さ10～20cmの表土を除去するとシルト質を含む黄褐色粘質土の地山面となるが、段直下では造成による削平が丘陵の基盤である古砂丘の砂層まで達していた。遺構はシルトを含む黄褐色粘質土の地山面で確認される。また調査区の東側部分には東側方向へ開口する谷地形が入り込んでいたようである。

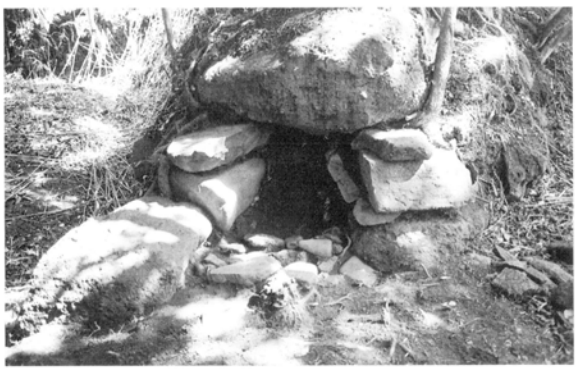
検出した遺構は、弥生時代中期末の貯水遺構、古墳10基（調査は8基）、中世の造成遺構、土坑

Ph.21 C区　SX-3011全景（北東側上空から）

Ph.22 C区　SX-3011近景（北東側上空から）

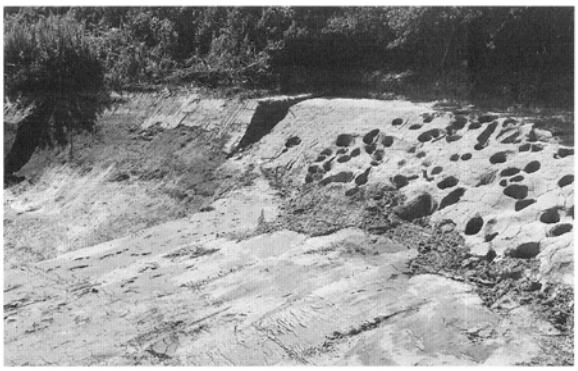
Ph.23 C区調査着手前状況（西から）

Ph.24 C区調査着手前状況（北西から）

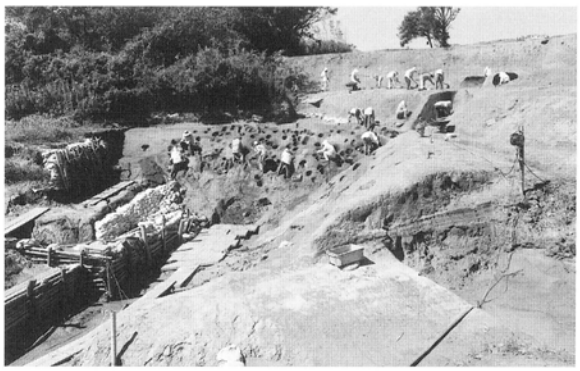


Ph.25 C区調査着手前状況（南西から）

Ph.26 C区調査着手前状況（北西から）



Ph.27 C区調査終了後（北から）



Ph.28 C区作業風景（北から）

(古墳の可能性があるもの１基)、建物としてはまとめきれない柱穴等である。

古墳群については一部踏査を行ったが、前述した調査状況により時間的な制約を受け、十分にその性格を把握したとは言い難い。開墾などに伴う地形改変によって墳丘が消滅したものが多いため未調査部分については確認できていない古墳が存在する可能性がある。

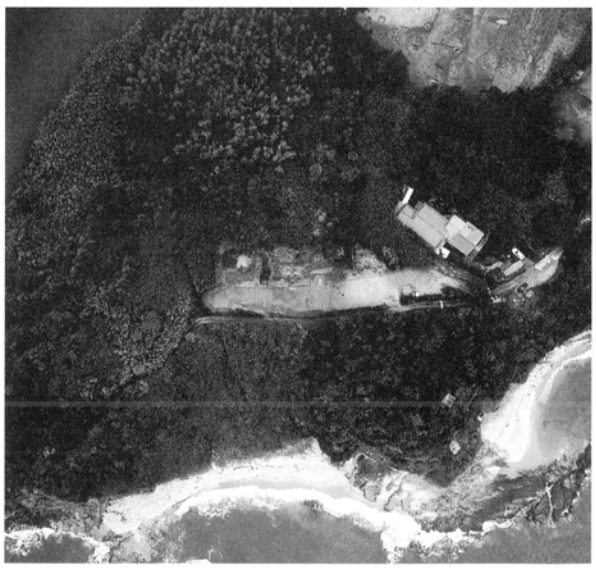
なお、C区西側部分については、D区とした調査区との間の部分約4000㎡が区画整理範囲内で自然公園として保存されることが決定していたため、人力による試掘調査・踏査を行ったのみである。試掘調査から自然公園範囲内に２基以上の古墳と考えられる構造物が地表下に残存していることが確認されている。保存されることとなった自然公園内には開墾時に破壊された古墳石室の石材を転用して作られた畑の石垣などが確認される。

遺物は弥生土器・石鏃などの石器・滑石製品・ガラス玉などの玉類・土師器・須恵器・鉄器・貿易陶磁類等がコンテナケース35箱分出土した。この内24箱はSX-3011から出土した遺物である。

なお、今回調査を行ったC区の古墳群は、着手以前に行われた試掘調査・踏査においても確認されておらず、福岡市文化財分布地図に登録されていない新規の古墳群であったため、本古墳群を三苫古墳群B群として登録し、これに伴い三苫京塚古墳群を三苫古墳群A群と改称した。

D区の概要

D区は調査対象範囲内の北西側端部に位置しており、区画整理範囲内に計画された周回道路建設予定地についての調査である。調査区西側は高さ20m前後の断崖となり海岸部につながる。調査 区付近も他の調査区と同様に開墾によって段造成がなされ、遺構が消滅している部分があった。遺構面はシルト質を含む黄褐色粘質土層面上にて設定した。遺構面の標高は21m前後を測る。調査区北側の遺構面上には包含層が薄く堆積しており、土坑などの遺構が検出された。調査は平成13年７月に着手し、同年８月に終了した。遺物は縄文時代から古墳時代にかけての土器・石器などがコンテナケース１箱分出土した。土師器などの遺物は細片が多く摩滅されており、石器以外は図化できなかった。



Ph.29 D区全景（西側上空から）

2．A区の概要

三苫遺跡第５次調査はＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区の４地区、計18,000㎡の対象面積について行った調査であるが、Ａ区はこの内の9740㎡について行われた調査である。発掘調査は、調査予定範囲内の低木などの樹木伐採作業・搬出作業が終了し、その他の条件整備が整った段階で着手した。

Ａ区は平成６・７年度に行われた三苫遺跡第２・３次調査地点と隣接している調査区であり、表土掘削は試掘調査と第２・３次調査の成果をもとに開始した。現地表面より10～30cm程度の厚さで堆積する腐葉土・耕作土を除去したのち、黄褐色粘質土層面上において遺構検出面を設定し、調査区西側から遺構精査を開始した。調査対象地全域は近代から戦後にかけての畑地開墾により段造成がなされており、畑間には農業用水路として幅１ｍ前後の溝が掘削されていた。この溝は遺構検出面より深さ30cm～１ｍ前後で掘削されており、溝部分にかかる遺構は削平され消滅する。遺構は丘陵西側から北東側にかけての標高４～12m前後の緩斜面上で検出される。

Ａ区の調査では、後期旧石器時代から中世後半代にかけての遺構・遺物が検出された。以下に各時代の調査についての概要をまとめた。

(一) 旧石器時代

旧石器時代に属する遺物は、遺構精査時に検出面である黄褐色粘質土層面上面から出土したものと、調査トレンチから出土したもの、古墳時代の住居など後世の遺構埋土より出土するものとに分けられる。遺構検出時に出土した遺物とトレンチ調査から出土した遺物は、基本的に旧石器時代の遺物包含層である黄褐色粘質土に包含されたものであり、埋没時の原位置を比較的保っているものと考えられる。後世の遺構埋土から出土した遺物は、検出された80点以上の石器の大半を占めており、古墳時代の住居掘削や畑地開墾などによって、旧石器時代の遺物包含層のほとんどは失われてしまったと考えられる。

出土遺物はナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・台形様石器・瑪瑙製の楕円形石器・剥片・細石刃核・細石刃などであり、確実に後期旧石器時代の時期と考えられる遺物は30点を数える。

(二) 縄文時代

縄文時代に属する遺物は、前期から後晩期にかけての石鏃・削器・剥片などの石器類が出土した。また、土器類は後期初頭に位置づけられる阿高式系土器・後期後葉の時期に位置づけられる三万田式土器などが検出されたが、いずれも細片資料であり出土数も数点であった。

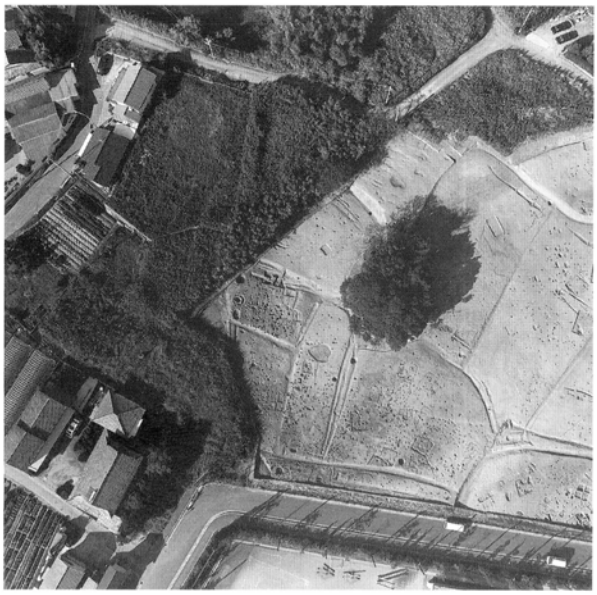
遺構としては後期後半の時期が考えられる土坑の検出が初現となる。土坑は標高11.5m前後の丘陵東側斜面で検出され、土坑内には腰岳産黒曜石の石核素材が数点埋納されていた。出土した石核原石は一カ所ないし二カ所に試打撃痕が見られ、石材の質が確認された後に海岸伝いに搬入されたものと考えられる。石核としての打面調整を行ったものと、ほぼ礫状態のものがあり、北部九州における腰岳産黒曜石の流通形態・経路を考える上で貴重な資料を得ることができた。

三苫遺跡以外の博多湾岸に所在する遺跡からも同様の黒曜石埋納遺構が検出されており、原石・素材の状態で海岸伝いを流通し海岸部の遺跡で集積された後に、さらに内陸部へと流通するルートが想定される。

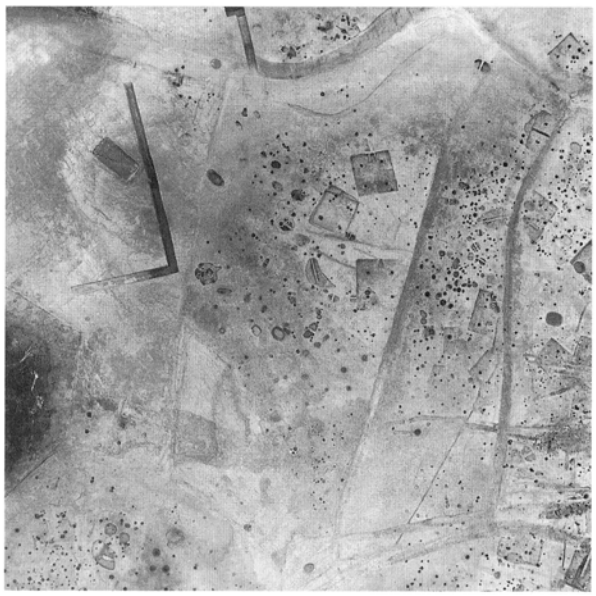
Fig.4 A区地形図（S=1/400）

（三）弥生時代

弥生時代に属する遺構・遺物は、調査着手以前に予想していたよりも検出は少なかった。隣接する第２・３次調査や調査区北側に存在する三苫京塚古墳の調査では、弥生時代後期の円形住居が調査され、Ａ区西側で調査を行ったＣ区では弥生時代後期の貯水遺構が検出されており、本調査地点においても同時期の集落が検出されると考えられていた。調査では弥生時代後期の土坑などが検出されただけである。弥生時代の住居などの遺構の多くは、古墳時代住居の掘削や中世の段階での造成、近代に行われた畑地開墾などの地形改変により消滅してしまったものと考えられる。調査で出土した遺物には、弥生時代中期末から後期前半にかけての土器・石器類、前期の石器類などがあり、後期の時期には集落が本調査地点付近に広範囲にわたって展開していたことが推測される。



Ph.30 Ａ区調査状況（南東側上空から）



Ph.31 Ａ区調査状況（南東側上空から）

Ph.32 Ａ区調査状況（南東側上空から）

Ph.33 Ａ区調査状況（南東側上空から）

(四) 古墳時代

古墳時代に属する遺構は、本調査区で検出された遺構の８割以上を占めており、調査の主体をなす。主要な遺構としては、４世紀代から７世紀初頭にかけての時期の方形竪穴住居が60軒以上・掘立柱建物９軒以上・円形土坑などの土坑群や建物としてまとめきれなかった柱穴群・溝などの遺構群が検出された。隣接する第２・３次調査の成果と合わせると100軒以上を数える古墳時代の住居群が検出されたことになる。これらの住居群はその規模・丘陵上での配置・付帯施設などで分類することが可能であるが、概観して６世紀前半から中頃の時期にかけて急激に増加する傾向が見られ、集落が最盛期を迎えたことが分かる。

福岡市内で行われた那珂・比恵遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけて存続する遺跡群の調査では、この５世紀末から６世紀前半代にかけては住居の減少傾向が見られる時期であり、立花寺Ｂ遺跡などの一部の遺跡でまとまった数の住居が検出されるだけである。このような偏りのある集住には

Ph.34 Ａ区調査状況（南東側上空から）

Ph.35 Ａ区調査状況（南東側上空から）

Ph.36 Ａ区調査状況（南東側上空から）

Ph.37 Ａ区調査状況（南東側上空から）

様々な要因が考えられるがあまり定かではない。

集落内には、第２・３次調査と同じく滑石工房と考えられる作業用住居なども検出されている。

遺物は土師器・須恵器・陶質土器・滑石製子持勾玉・滑石製臼玉・紡錘車などの多種にわたる滑石製品・礫石錘・叩き石・砥石などの石器などの遺物が多数出土している。

調査区中央部南側付近には現在、神社が存在する。神社周辺は周囲より１m前後高く盛り上がった直径15m前後の円墳状に遺存しており、福岡市埋蔵文化財分布地図には三苫高畑古墳として登録されていた。神社は区画整理組合と地元と間の協定により、区画整理後も現地で保存されることが決定されていたため、保存範囲確定作業を行った。神社周囲の耕作土・腐葉土などを除去したところ、畑地開墾時には周囲の土だけが掘り下げられ、偶然円墳状に削り残されただけの自然地形であることが判明した。これにより福岡市埋蔵文化財分布地図から三苫高畑古墳としての登録を抹消した。円墳状に残存する神社周辺は開墾による削平を受けておらず、遺構は良好に残存しているものと考えられるが、保存されるため調査は行っていない。周辺からは弥生土器甕底部片・磨製石斧・礫石錘などの遺物が表採された。

（五）古代・中世

古代・中世の遺構は、掘立柱建物や廃棄土坑・土坑墓・区画溝などが検出された。中世に属する遺構の多くは調査区南側に集中して検出される。この南側地区からは大規模な段造成や、一辺30m以上を測る方形区画の溝などが検出された。これに伴う掘立柱建物群・石組井戸遺構・廃棄土坑などの遺構群も検出され、調査区南側付近が屋敷地として整備・使用されていたことが判明した。同様の区画溝は調査区東側でも検出されており、周辺に30m前後の方形区画が採り入れられた屋敷地群が展開していたことが推測される。遺物は土師器・土師質土器・瓦質土器・須恵器・瓦器椀・貿易陶磁器・滑石製品などが出土した。

Ａ区の調査では以上のような時期の遺構・遺物が検出された。遺物は総量でコンテナケース250箱分が出土している。

これより各時期の主要な遺構と出土遺物についての説明を行う。

Ph.38 Ａ区調査終了後（北西から）

Ph.39 Ａ区調査終了後（北東から）

a．旧石器時代の調査

第５次調査地点Ａ区では、第２・３次調査での成果を受け、旧石器時代に属する遺物の検出が予想されたため、弥生時代・古墳時代から中世にかけての調査が終了した時点で、調査区内にトレンチを設定し掘り下げを行った。以下に調査方法・土層・概要・出土遺物についての説明を行う。

調査の方法

第５次調査Ａ区は第２・３次調査地点に隣接しており、旧石器時代に属する遺物の出土は予想されていたが、遺構検出の段階から該期の遺物が検出面より出土しはじめており、前調査と同様に良好な状態で検出されることが推測された。トレンチは遺構検出段階で旧石器時代・縄文時代の石器が出土した地点を中心とし、調査区に設定した10mグリッドを基に幅２m単位で設定を行った。掘り下げは土層観察を行いながら５cm前後ずつ掘り下げを行い、遺物が検出された地点と高さを記録して取り上げを行った。調査トレンチは丘陵斜面の地形に対して直行、または平行になるように各地点で設定し、丘陵の堆積状況・削平状況も観察できるように設定を行った。

調査トレンチは計15カ所に設定し、順次掘り下げを行った（Fig.５）。後述するが、トレンチ３・５から少量の石器類が検出されたのみで、他のトレンチからは剥片・礫・瑪瑙原石・上面より沈み込んだ土器などの遺物が検出されただけであった。旧石器時代に属する出土遺物は遺構検出時に出土したものを含めて80点前後を数える。

土層（Fig.６）

第５次調査Ａ区や第２次・第３次調査地点が立地する丘陵は第３紀層の風化土によって形成されている。この丘陵は海岸部に沿うように形成された独立丘陵から派生する低丘陵の一つでであり、東西方向に延びる地形を呈している。独立丘陵本体は南北1500m前後、東西500m前後、標高40m前後を測り、本調査地点が立地する低丘陵は南北100m前後、東西360m前後を測る。標高は23m前後を最高点とし、標高４～８m前後で裾部が開く。丘陵全体は近代以降に開墾されて、段々畑が営まれていたことが知られている。開墾は丘陵西側の海岸部にまで及んでおり、丘陵本来の地形から大きく改変されている。丘陵北側斜面には雨水によって開析された谷状の地形が点在し、農水池造成や畑地開墾より２m前後の段造成がなされている。

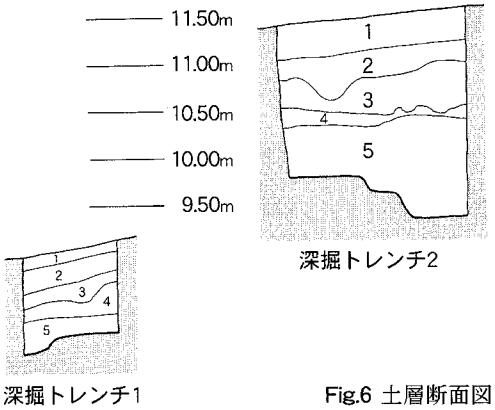
Ph.40 土層観察トレンチ全景（南東から）

Ph.41 旧石器時代グリット完掘状況（北西から）

Ph.42 旧石器時代グリット完掘状況（北西から）

Fig.5 旧石器時代グリット位置図（1/400）

※図中 ●番号はFig.8・Fig9に対応する



トレンチ土層
深掘りトレンチ1
1. 黄褐色粘質土　調査時の地山上層
2. 暗黄褐色粘質土
3. 暗黄褐色粘質土+黄白色砂質土
4. 赤褐色砂質土+黄白色粘質土
5. 黄白色粘質土

深掘りトレンチ2
1. 耕作土
2. 黄褐色粘質土　遺構検出面
3. 暗黄褐色砂質土+黄白色粘質土
4. 赤褐色粘質土
5. 淡赤褐色粘質土+黄白色粘質土
（花崗岩風化土層）
トレンチ1
1. 暗黄褐色粘質土　調査時遺構検出面
2. 暗赤褐色粘質土　調査区の北側のみ堆積
3. 赤褐色粘質土　　黄白色粘質土が混合
4. 淡赤褐色粘質土+黄白色粘質土

Fig.6 土層断面図（S=1/80）

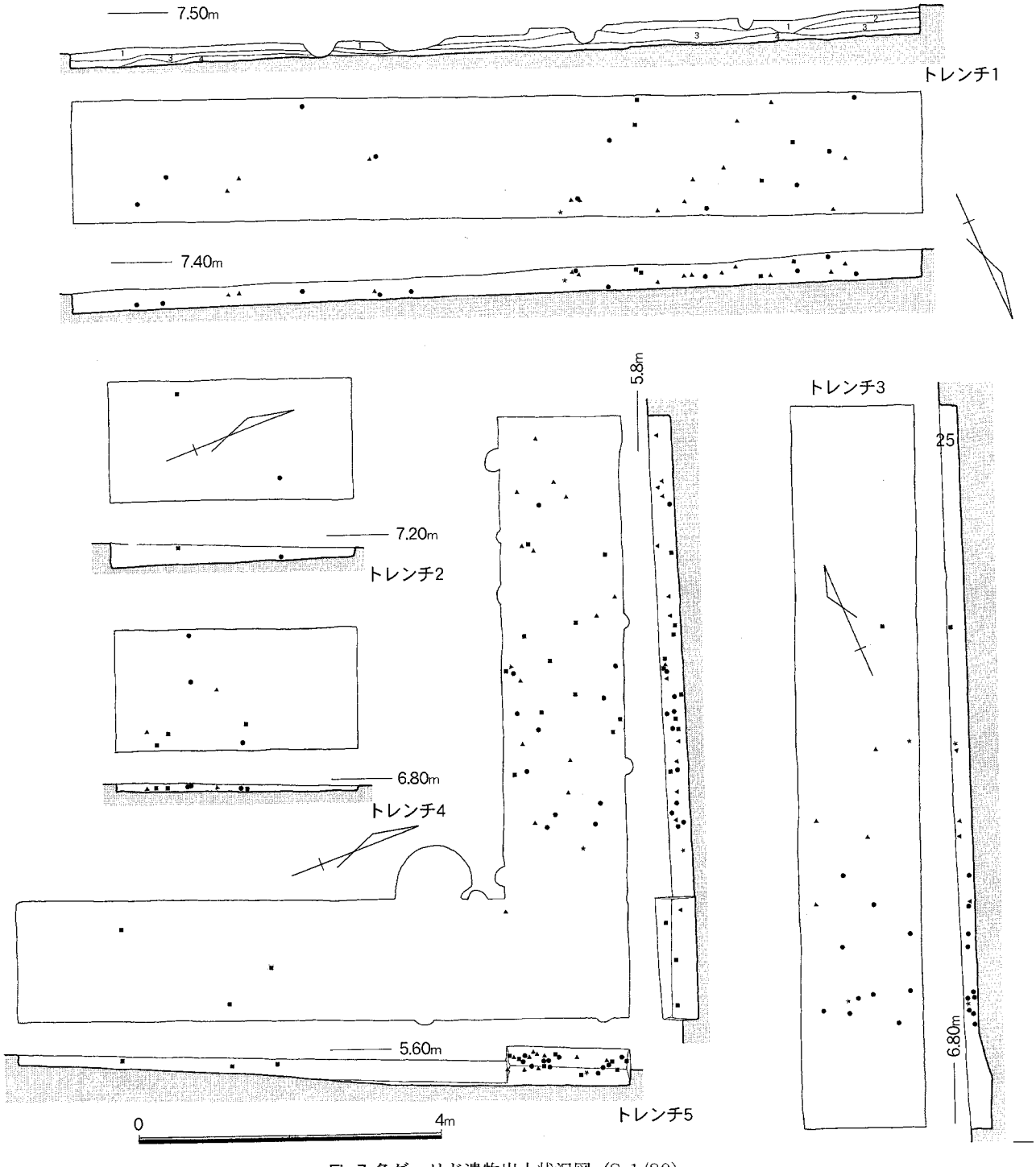


Fig.7 各グッリド遺物出土状況図（S=1/80）

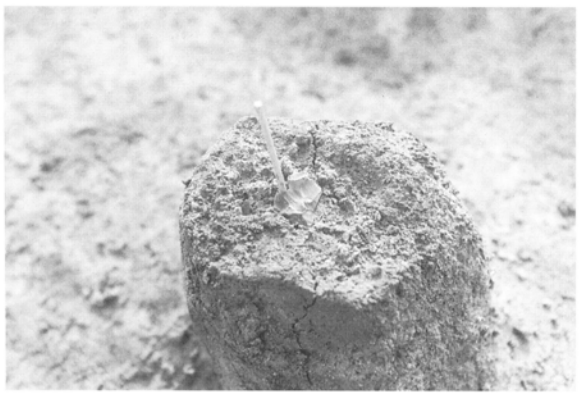
Ｃ区とした調査区で古墳群が検出される丘陵頂部から南側斜面にかけては、北側斜面に比べ緩やかな斜面となるが、果樹畑の段造成が裾部付近までなされており、旧状は留めていない。丘陵西側は海岸部につながり、20m前後の断崖となる。Ｄ区とした調査区が位置する丘陵西側裾部の断崖上には、遊歩道が丘陵を削平して設置されている。

Ａ区や第２・３次調査地点が立地する丘陵東側斜面は扇状地状に広がりを持ち、他方向の斜面と同様に畑地開墾による段造成がなされている。これらの段造成は、中世の段階で行われた段造成を一部踏襲しており、畑の畦道、農水路にその痕跡が見られる。丘陵東側の裾部は、第３次調査地点付近まで延びており、Ａ区は標高４～12m前後の緩斜面上に位置する。

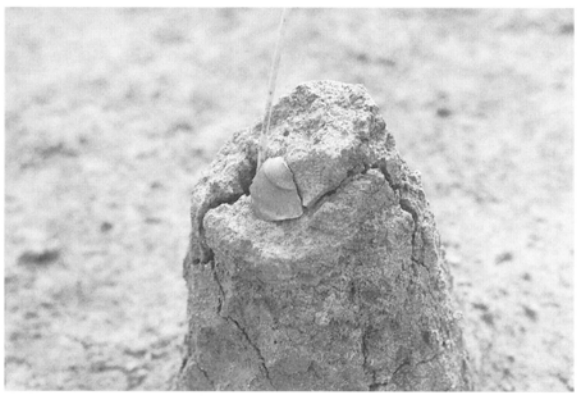
調査区の現地表面には20～40cm前後の耕作土が堆積しており、これを除去すると縄文時代以降の遺構が検出される黄褐色粘質土層面が検出される。丘陵東側に位置する第２・３次調査地点では遺構検出面は赤褐色粘質土層面で設定されているが、この層は本調査地点の遺構検出面である黄褐色粘質土層面上に堆積する層であり、本調査地点では削平のため、調査区東端部側を除いて検出されなかった。Ａ区では遺構検出面以下に堆積する土層を確認するため、調査区内数カ所に深堀トレンチを設定し、土層の観察を行った。

深堀トレンチ１はH-6区東端部に設定したトレンチである。H-6区は調査区の立地する丘陵の標高8.5m前後の尾根線より東側に位置する地点である。１層には遺構検出面である黄褐色粘質土層が10cm前後の厚さで堆積する。付近は開墾により削平を受けた地点であり、調査区東側では20～30cm前後厚さで堆積する土層である。２層には暗黄褐色粘質土が堆積する。この層は１層の黄褐色粘質土が変成した層で20cm前後厚さで堆積する。３層には暗黄褐色粘質土と黄白色砂質土の混合層が堆積する。４層には赤褐色砂質土と黄白色粘質土との混合層が堆積する。５層には黄白色粘質土が堆積する。深堀トレンチ１で観察される２層以下の層には遺物は全く含まれていない。

深堀トレンチ２は調査区西端部のI-2区で設定したトレンチである。標高11.5m前後を測る丘陵東側斜面上の地点である。１層には現地表面である耕作土が堆積する。２層には遺構検出面である黄褐色粘質土が堆積する。この層は深堀トレンチ１の１層に対応する層である。３層には暗黄褐色砂質土と黄白色粘質土との混合層が堆積する。４層には赤褐色粘質土が堆積する。５層には淡赤褐色粘質土と黄白色粘質土層の混合層が堆積する。



Ph.43 旧石器時代遺物出土状況（北東から）



Ph.44 旧石器時代遺物出土状況（南西から）

Ph.45 旧石器時代遺物出土状況（北から）

旧石器時代の調査

1）概要

1994,95年に実施された本遺跡２、３次調査において旧石器時代遺物の出土があり、同じ丘陵の西側に隣接する５次調査でも該期の遺物が包含されていることが予測された。調査開始後まもなく古墳時代以降の遺構内の覆土中等からナイフ形石器や剥片類が出土し、その存在は確実となった。しかし、５次調査区は主に畑地や排水路などの造成による旧地形の削平や改変が著しく、保存状況の比較的良好な調査区南側も古墳時代遺構等が多く分布し、旧石器時代包含層の残存可能な範囲は限られていた。縄文・弥生時代の調査が終了した後に比較的削平の及んでいない場所を対象として発掘を行った。

調査はグリットに沿って１５カ所にトレンチを設けて掘り下げを行った。調査面積は合計約250㎡である。その結果、調査区内南端の第３，５トレンチ（以下では「Ｔ３、Ｔ５」と略する）に少量の石器類が出土したのみであり、それ以外のトレンチでは何らの遺物も出土しなかった。したがって調査区内ではほとんどの場所で旧石器時代包含層は失われていたと考えられた。

2）Ｔ３、Ｔ５調査区の遺物出土状況

両トレンチでは基盤層上部をなす古砂丘上部の風化二次堆積土壌中に少量の遺物が出土した。何れも検出面から約20cmの深さまで包含されていたが、砂岩や硅化木など基盤岩の小礫や弥生時代以降の土器小片も同一レベルで出土している。本来のユニットの一部をなしていたとみるより、長期にわたり遺物が土壌とともに斜面に沿って動き、二次的に再堆積したとも考えられた。したがって石器類に縄文時代遺物などが混入していることもありうるだろう。

Ｔ３はＥ・Ｆ12グリットに設けた幅2m、長さ12mの調査区の南半部に16点の石器類が出土した。内訳はナイフ形石器2点、剥片３点、砕片11点である。石材はナイフ形石器１点の硅岩以外、全て黒曜石である。この他に径10cmほどの砂岩板石が出土したが、人工遺物であるかは判断できなかった。ここではナイフ形石器(1,3)と剥片(22)を報告する。

Ｔ５はＩ11・12グリットに設けた幅2m、長さ18mのＬ字形の調査区であり、北西部に偏って８点の石器類が出土した。内訳はナイフ形石器１点、剥片２点、砕片５点である。石材は剥片、砕片の計３点が硅岩であり、他は黒曜石であった。なお他に硅化木片や硅岩なども出土したが、自然破砕礫と判断した。ここではナイフ形石器(2)と剥片(19)を報告する。

3）その他の遺物の出土分布(Fig.10)

旧石器時代調査区以外でも調査区の各所で該期石器類が出土した。それらの遺物は調査区中央を西から延びる低丘陵を挟み、南北の両斜面と丘陵頂部テラス部の大きく３カ所に分布している。丘陵頂部テラス部は標高6.5～5.5m付近でやや平坦となる部分であり、報告したＴ３、Ｔ５の位置である。Ｔ３はこの中央部、Ｔ５は北側斜面に下がった位置にある。この両トレンチの周辺遺物をA群とした。次に南側斜面ではD－10～12グリット付近で標高約6mの径約20mの範囲に遊離した少量の遺物が分布する。この遺物をB群とした。さらに北側斜面ではI－５グリット付近を頂点に斜面下方へ東西約40m、南北約50m、標高8～4mの範囲に十数点の遺物が分布する。これをC群とした。

4）出土遺物(Fig.8・Fig.9)

(1)あらまし

５次調査では多数の石器類が出土したが、所属時期を明らかに出来る資料は少ない。確実な旧石器時代遺物はＴ３、Ｔ５以外は２５点であり、以下では全体を器種ごとに区分し、報告する。

(2)ナイフ形石器

１～３は小型のナイフ形石器である。１は漆黒色黒曜石の縦長剥片を素材とする。素材基部を先端としブランティングを一側縁に施す。２は暗灰色黒曜石の縦長剥片を素材とする。背面に自然面があ

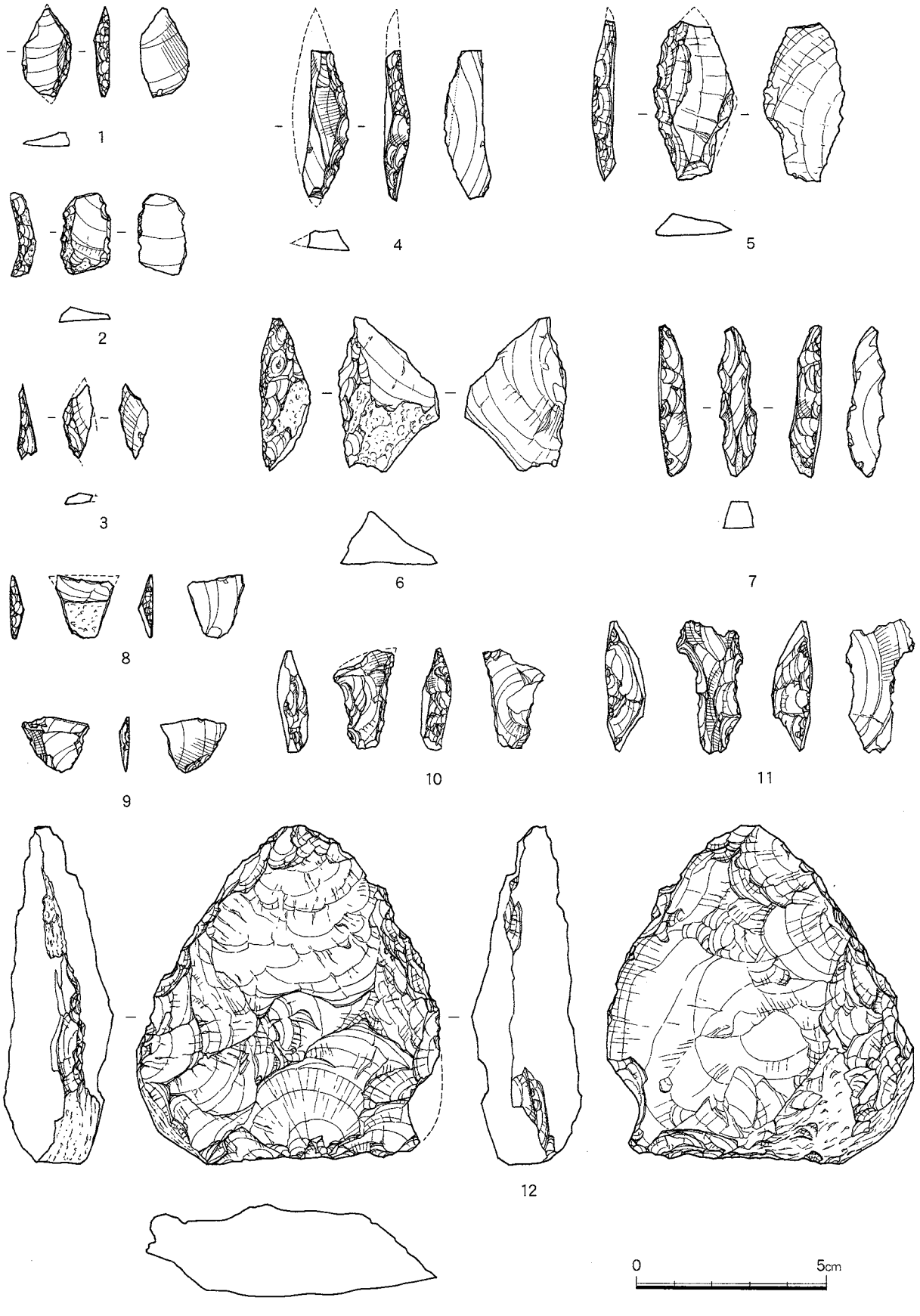


Fig.8 旧石器時代出土遺物1（S=2/3）

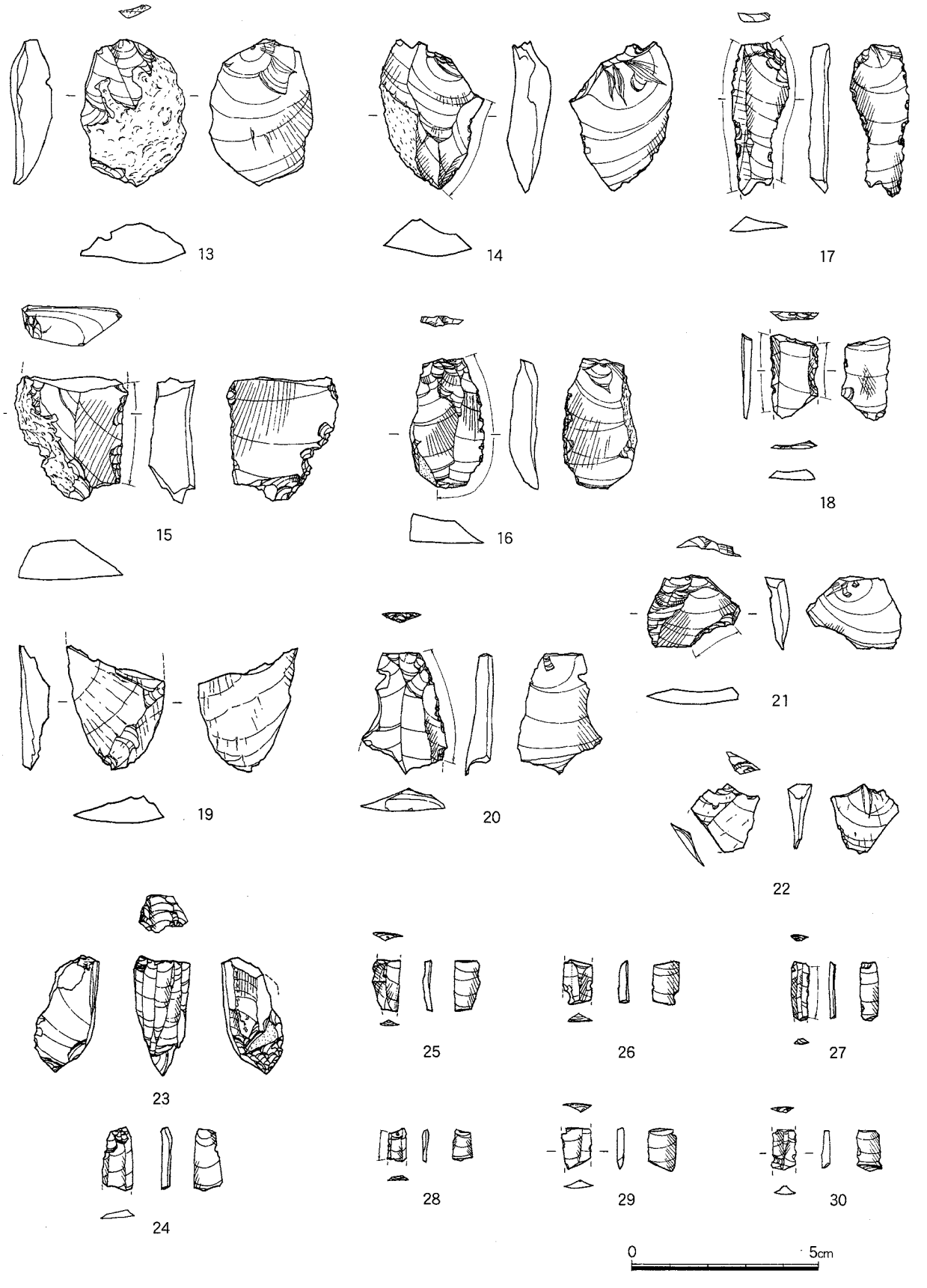


Fig.9 旧石器時代出土遺物2（S=2/3）

り、剥離工程初段階の剥片とみられる。素材基部を先端としブランティングを一側縁に施す。刃縁に刃こぼれ状の微細剥離が認められる。３は硅岩の剥片を素材とする。先端と基部を欠損する。ブランティングは一側縁と見られる。

４～６は横長剥片を素材とするナイフ形石器である。４は漆黒色黒曜石の横剥ぎ剥片を素材とした「国府型ナイフ形石器」である。先端と左側縁部を欠損する。５は安山岩の横長剥片を素材とする。先端と側縁にガジリがある。背面はポジ面と見られる。ブランティングは二側縁に施される。６は暗灰色黒曜石の不定型剥片を素材とする。背面に自然面が残る。剥片打面側の一側縁に荒いブランティングを施す。

(3)三稜尖頭器

７は弱透明黒色黒曜石の横長剥片を素材とする、小型の三稜尖頭器である。背面に素材面を残す。調整は主剥離面のみからであり、稜上からの調整はない。「角錐状石器」とすべきか。

(4)台形石器

８，９は小型の台形石器である。８は漆黒色黒曜石の縦長剥片を素材であるが、背面に自然面と側方からの調整剥離面が残り、剥離工程初段階の剥片と見られる。両側は丁寧なブランティングを施す。先端の刃縁部はガジリにより欠損する。９は漆黒色黒曜石の縦長剥片を素材とし、ブランティングを一側縁に施す。先端の刃縁部には二次的な小剥離と研磨面があるが調整とは考え難い。これらは「百花台型台形石器」と考えられる。

(5)台形様石器

10は漆黒色黒曜石の横長剥片を素材とする台形様石器である。背面に素材面、左側基部に打面の一部を残す。両側のブランティングは主剥離面側からを施す。刃部はやや傾斜している。11は漆黒色黒曜石の横長剥片を素材とする台形様石器である。背面に素材面を残す。両側のブランティングは主剥離面側からを施し、やや緩やかである。刃部はやや傾斜している。

(6)楕円形石器

メノウ製の大型剥片を素材とする大型石器である。平面「おむすび」状の形態であり、右基部を欠損する。当初石核との認識をもったが、背面の剥離面の特徴や周縁の二次調整、主に右側縁の刃部形成などからみて最終的に石器と判断した。図では仮に長軸を主軸とし、尖頭部を先端として示す。腹面には円礫素材面の一部と主剥離面を大きく残す。背面は大きく５面の剥離面で構成され、大略先端→左側→基部の順に剥離される。この調整剥離は稜上剥離であり、剥離面は平坦でヒンジを生じている。左側縁と基底部に潰れが見られる。

(7)剥片

13～22は剥片である。半数以上の６点に二次調整や微細剥離が認められ、刃器などとしての利用が推定できる。13～15は背面に自然面を残す不定形剥片である。自然面からは全て円礫であり、牟田産の黒曜石に類似する。16～20は縦長剥片であり、石材のために観察が困難な19を除く全てに二次的剥離が認められる。打面調整や剥離面調整は入念に行われている。21、22は不定形剥片であり、剥離（作業）面の調整剥離などに伴うものとみられた。なお、18の腹面に細かな線状痕が認められるが、この剥片は全体に摩滅、ガジリが多く使用痕などかは不明である。これらの剥片から見るとこぶし大以下の大きさの原石に直接打面、作業面を形成し打面単設で行われる縦長剥片の剥離工程が予測される。

(8)細石刃核

23は漆黒色黒曜石の剥片素材を用いた細石刃核である。左～背部にガジリがある。細石刃剥離は進行している。右側が平滑な自然面（古い剥離面）、左側が主剥離面である。素材は自然面の特徴から腰岳産黒曜石と考えられる。右側縁辺に石核調整が認められる。打面は作業面側からの調整剥離が

認められる。広義の「舟底形」細石刃核であり、同様の形態は春日市門田遺跡などに類例がある。

(9)細石刃

24～30は細石刃である。全て黒曜石である。何れも一端もしくは両端が折れている。25背面左側に直交方向の３面の剥離面があり、細石刃核の側辺にあった石核調整を取り込んでいることがわかる。したがって23ではない入念な石核調整をもつ船底形細石刃核の存在が予測できる。27、28には一側縁に微細剥離が認められる。

５）小結

以上、三苫遺跡第５次調査出土の旧石器時代遺物について報告した。既に記したように今回の調査では安定した包含層を確認することが出来なかった。ここでは検出した石器類の評価を行うと共に隣接し調査が行われた前回の２，３次調査の成果とあわせて三苫遺跡の旧石器時代資料について総括しておきたい。５次調査で出土した石器類は以下の通りである。

A群（丘陵頂部テラス部）…ナイフ形石器、楕円形石器、剥片、砕片

B群（丘陵南斜面）…ナイフ形石器、台形様石器、剥片

C群（丘陵北斜面）…ナイフ形石器、台形石器、台形様石器、三稜尖頭器、剥片、細石刃核、細石刃

これらはあくまで分布上近接して出土しただけであり、同一の石器群とは限らない点を注意したい。とくにC群はナイフ形石器を中心とするものと細石器が区分されるのは明らかである。前者をＣ１群、後者をＣ２群と区分する。

このように今回の調査で少なくとも４つの石器群を検出したことになる。それぞれの時期についてみると、まずA群は小型のナイフ形石器が主であり、調整も縦長剥片素材で一側縁調整、性格不明ながら楕円形石器などの存在からＡＴ降灰以前の後期旧石器時代前半期に位置づけられる。北東約400mの位置にあり、近時期の三苫永浦遺跡Ａ地区石器群よりやや古い位置づけとなる。B群は資料数が少ないが、ナイフ形石器や片面調整の台形様石器など不定型な横長剥片素材の利用などから後期旧石器時代後半期に下がるものと見られる。東側に隣接して検出されている２・３次調査１期石器群と近い時期が想定される。Ｃ１群は国府型ナイフ形石器があり「瀬戸内技法」の存在から後期旧石器時代後半期でも古い段階と予測できるが、非サヌカイト石材の利用などから著者の２期まで下がると考える。なお百花台型の小型の台形石器はこの段階には未確認であり、時期は下がる可能性が高い。Ｃ２群は舟底形細石刃核をもち「福井技法」以降の細石器段階でも新相に位置つけられる。これは２・３次調査で２期石器群とした「野岳・休場型」に類似する古段階の細石器より後出するものである。資料数は少ないが、本遺跡における石器群の推移は現時点で以下のように考えられる。

５次Ａ群→（三苫永浦遺跡Ａ地区石器群）→２・３次１期石器群、５次Ｂ群→５次Ｃ１群→２・３次２期石器群→５次Ｃ２群。

このように本地点が断絶を経ながらも後期旧石器時代を通じて生活域として利用された背景には、雁ノ巣遺跡などと同様に海の中道から続く古砂丘列の後背地の南面する低丘陵であり、眺望や水利、防風など狩猟活動や居住環境としての地理的条件に恵まれたことが大きな要因と考えられよう。

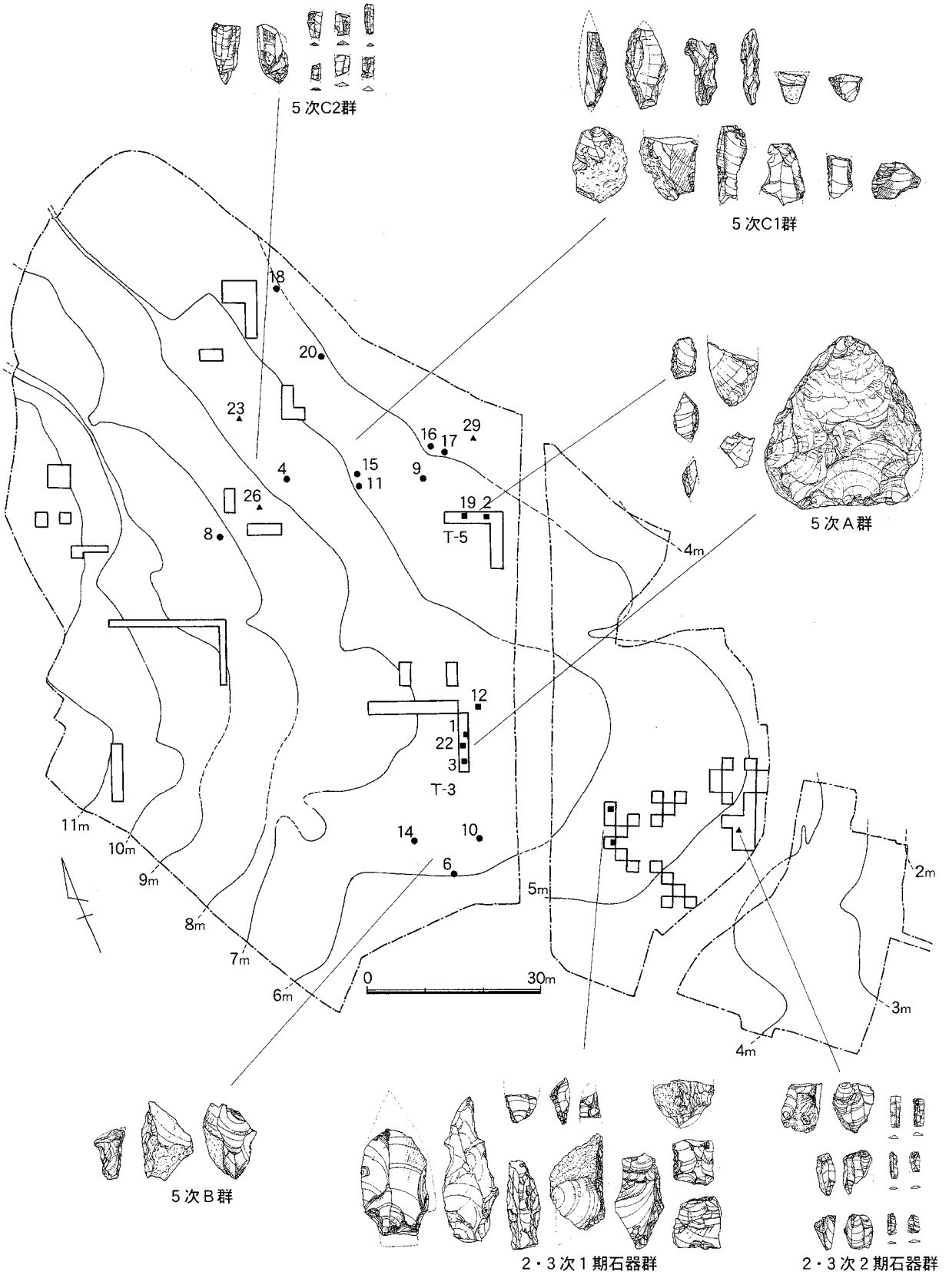


Fig.10 旧石器時代遺物出土位置図（S=1/1000）

A区出土旧石器時代石器観察表

単位はcm、g

図面番号	出土遺構	器種	石材	全長×全幅×器厚	重量	備考
Fig.8-1	T-3-3	ナイフ形石器	黒曜石	2.3×1.25×0.4	0.90	
Fig.8-2	T-5-57	ナイフ形石器	黒曜石	2.0×1.3×0.4	1.48	
Fig.8-3	T-3-22	ナイフ形石器	硅岩	1.6×0.65×0.45	0.44	
Fig.8-4	SP-1539	ナイフ形石器	黒曜石	3.9×1.05×0.6	2.78	国府型
Fig.8-5	遺構検出	ナイフ形石器	安山岩	4.1×2.0×0.5	4.93	サヌカイト
Fig.8-6	SP-0540	ナイフ形石器	黒曜石	3.8×2.5×1.3	8.77	
Fig.8-7	遺構検出	三稜尖頭器	黒曜石	4.0×0.9×0.7	2.81	
Fig.8-8	SD-1076	台形石器	黒曜石	1.5×1.5×0.35	0.89	百花台型
Fig.8-9	SD-1025	Usedフレーク	黒曜石	1.9×1.7×0.3	0.60	
Fig.8-10	SP-0477	台形様石器	黒曜石	2.4×1.5×0.7	2.54	
Fig.8-11	SD-1002	台形様石器	黒曜石	3.3×1.65×1.0	4.28	
Fig.8-12	SC-0401内ピット	楕円形石器	瑪瑙	8.75×8.0×2.5	179.53	
Fig.9-13	遺構検出	剥片	黒曜石	3.8×2.65×1.0	10.67	
Fig.9-14	SP-0448	Usedフレーク	黒曜石	3.6×2.6×1.0	9.23	
Fig.9-15	SD-1000包含層	Usedフレーク	黒曜石	3.2×2.95×1.15	12.02	
Fig.9-16	北側包含層	削器	黒曜石	3.4×1.95×0.7	5.51	
Fig.9-17	SC-0894	Usedフレーク	黒曜石	4.0×1.5×0.5	2.60	
Fig.9-18	北側包含層	Usedフレーク	黒曜石	2.15×1.2×0.2	0.88	
Fig.9-19	T-5-20	剥片	硅質岩	2.7×2.5×0.7	4.42	
Fig.9-20	L-8遺構検出	Usedフレーク	黒曜石	3.2×2.3×0.6	2.97	
Fig.9-21	SC-0399埋土	Usedフレーク	黒曜石	1.9×2.5×0.45	1.68	
Fig.9-22	T-3-7	剥片	安山岩	1.8×1.7×0.6	0.82	ガラス質安山岩
Fig.9-23	SK-0941	細石刃核	黒曜石	3.0×1.5×1.5	5.64	腰岳産類似
Fig.9-24	遺構検出	細石刃	黒曜石	1.65×1.3×0.25	0.29	破片２
Fig.9-25	SK-0640	細石刃	黒曜石	1.3×0.7×0.2	0.16	
Fig.9-26	SC-0050埋土	細石刃	黒曜石	1.1×0.7×0.2	0.18	
Fig.9-27	遺構検出	細石刃	黒曜石	1.5×0.5×0.15	0.10	
Fig.9-28	遺構検出	細石刃	黒曜石	0.8×0.5×0.15	0.02	
Fig.9-29	SP-1498	細石刃	黒曜石	1.1×0.7×0.2	0.17	
Fig.9-30	遺構検出	細石刃	黒曜石	1.0×0.65×0.2	0.13	

b．縄文時代の調査

隣接する第２・３次調査においては、縄文時代後晩期に属する土器・石器などの遺物が出土するが、該期の遺構は検出されていなかった。第２・３次調査地点は丘陵裾部の低位面上に位置し、第５次調査Ａ区はその西側の丘陵緩斜面上であることから、調査着手以前は縄文時代に属する遺構が良好な状態で検出されることが予想されていた。表土を除去し調査に着手した段階での遺構面は、畑地開墾により段造成がなされ古墳時代の住居も床面以下まで削平されていた状況であり、調査区東側付近では縄文時代の遺構もほぼ消滅しているものと考えられた。石器などの遺物は包含層や古墳時代の埋土から多数出土しており、調査区内に該期の集落などの遺構が存在していたと考えられる。

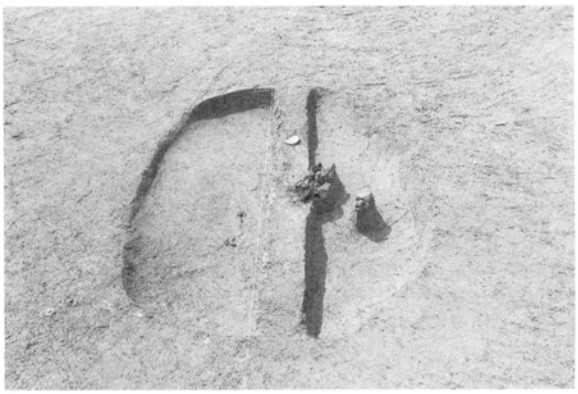
Ａ区で縄文時代の遺構が検出されたのは調査区西側端部付近の標高11.0m前後の丘陵東側斜面上の地点である。付近は開墾時にも比較的浅い削平を受けたのみで、弥生時代の遺構も良好に遺存する箇所であった。

以下に検出された遺構と出土遺物についての説明を行う。

(一) 土坑

SK-0001 (Fig.11)

I-3区で検出された縄文時代の土坑である。土坑の平面形は楕円形を呈し、長径1.2m×短径0.95mを測る。検出面の標高は11.0m前後で、検出面から土坑底面までの深さは15cm前後を測る。土坑埋土は暗黄褐色土で、土坑内には黒曜石の石核原石５点が埋納された状態で検出された。遺存状



Ph.46 SK-0001遺物出土状況（北西から）

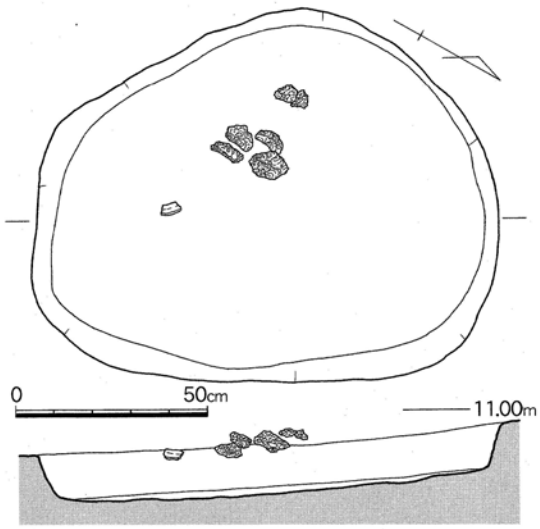
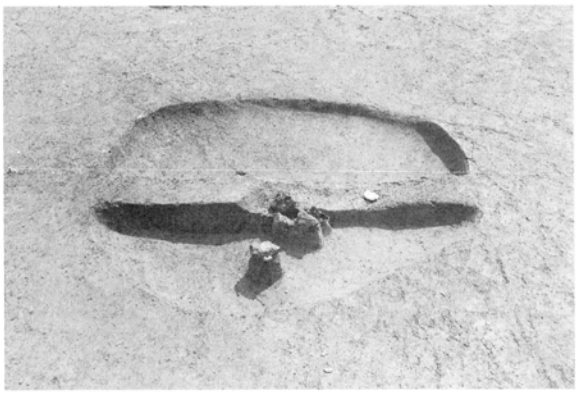
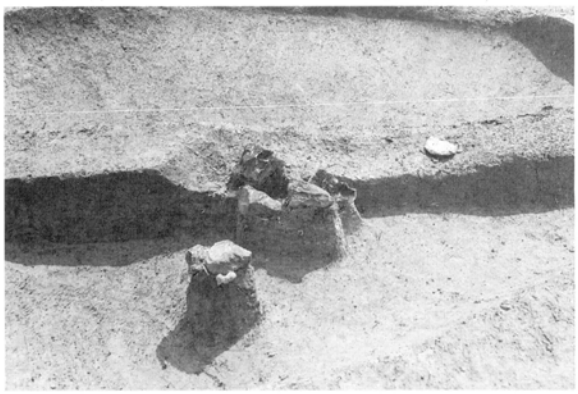


Fig.11 SK-0001遺構実測図（S=1/20）



Ph.47 SK-0001遺物出土状況 （南西から）



Ph.48 SK-0001遺物出土状況・近景（南西から）

況より土坑上部は削平を受けていると考えられ、本来は10点以上の石核原石が埋納されていたものと推測される。

出土遺物をFig.13～16に示した。

１～４・６～８がSK-0001より出土した石核原石である。いずれも腰岳産の黒曜石であり、自然面を多く残す。各原石には採集地で行われたと考えられる試打撃痕が一カ所ないし二カ所観察できる。これは石核としての質を確認するため打撃であり、全ての原石に対して行われていた。２・３は更に剥離を加えて、打面調整を行い、石核調整を行っている。石核原石は大別して石核としての打面調整を加えるものと加えていないものとに分けられる。採集地である腰岳周辺からは、海岸伝いに流通する経路が想定されるが、その段階で(1)調整済みの石核として流通する場合と、(2)未調整の石核原石として流通する場合の二通りの形態が考えられる。

同様の石核原石の埋納遺構は、海岸線沿いに位置する他の遺跡からも検出されており、一旦そのような拠点遺跡に集積された後に海岸部から内陸部へと流通していた経路が考えられる。また、この場合でも(1)石器材料として石核調整したものを流通させる場合と、(2)石核原石として未調整の状態で流通させる場合とに分けられる。これらの流通形態の解明は資料の増加を待たなければならず、今後の課題としたい。

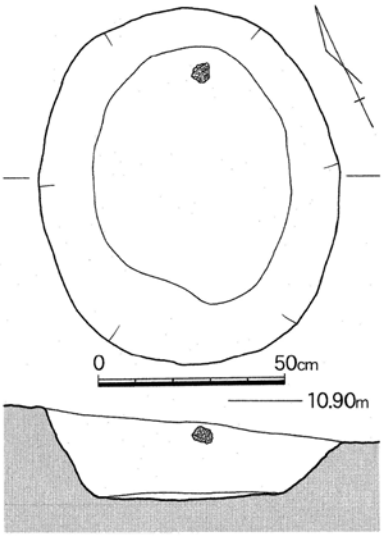


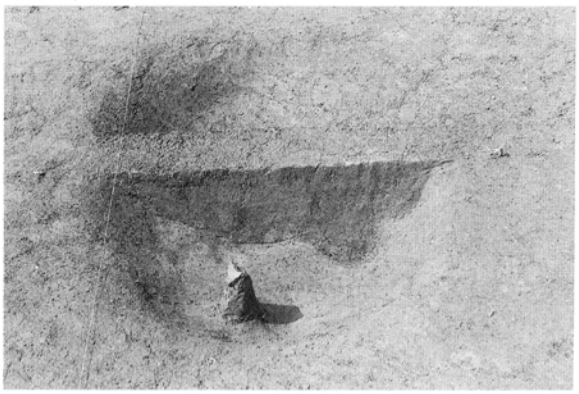
Fig.12 SK-000３遺構実測図（S=1/20）

SK-0003（Fig.12）

I-3区で検出された縄文時代の土坑である。SK-0001に隣接して検出される土坑であり、平面形は南北方向に延びる楕円形を呈しており、長径0.95m×短径0.8mを測る。SK-0001と同様に黒曜石の石核原石が埋納されていたが、上部は削平を受けているため、１点のみが検出されただけである。

出土遺物をFig.15-5に示した。

SK0001・SK-0003より出土した各石核原石の重量は次の表に示した。



Ph.49 SC-0387遺構実測図（S=1/40）

図番号	出土遺構	重　量
Fig.13-1	SK-0001	173.18 g
Fig.13-2	SK-0001	184.26 g
Fig.14-3	SK-0001	70.95 g
Fig.14-4	SK-0001	263.33 g
Fig.15-5	SK-0003	47.37 g
Fig.15-6	SK-0001	195.04 g
Fig.16-7	SK-0001	83.81 g
Fig.16-8	SK-0001	112.78 g
	平均値	141.34g

Ph.50 出土遺物実測図（S=1/1・1/2・1/4）

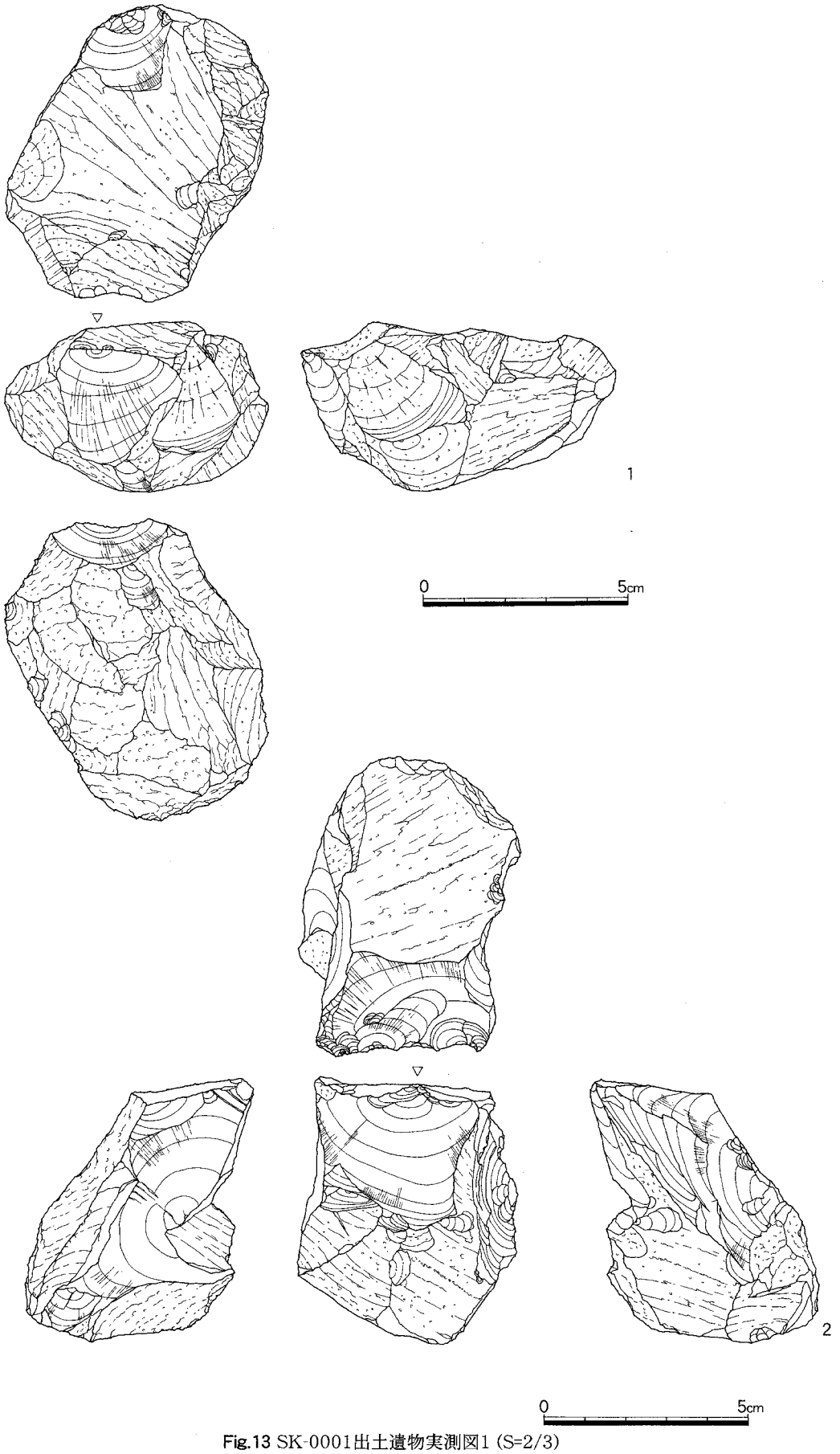


Fig.13 SK-0001出土遺物実測図1 (S=2/3)

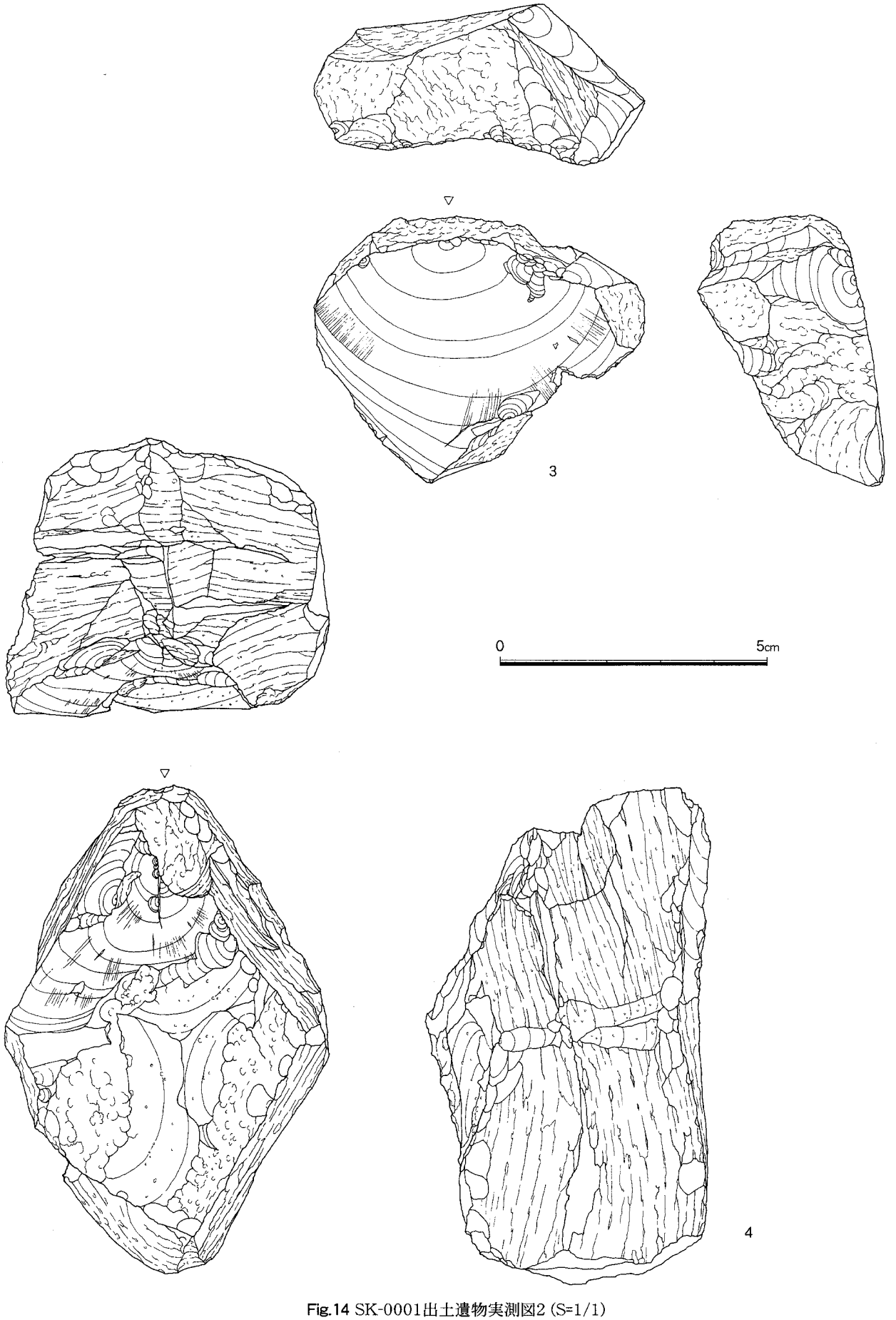
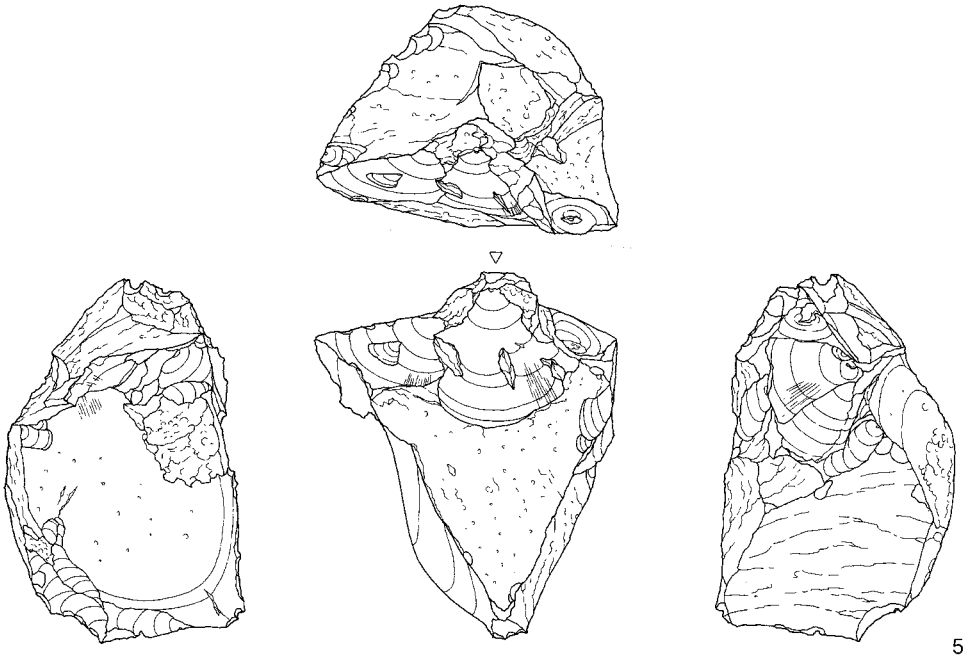


Fig.14 SK-0001出土遺物実測図2 (S=1/1)



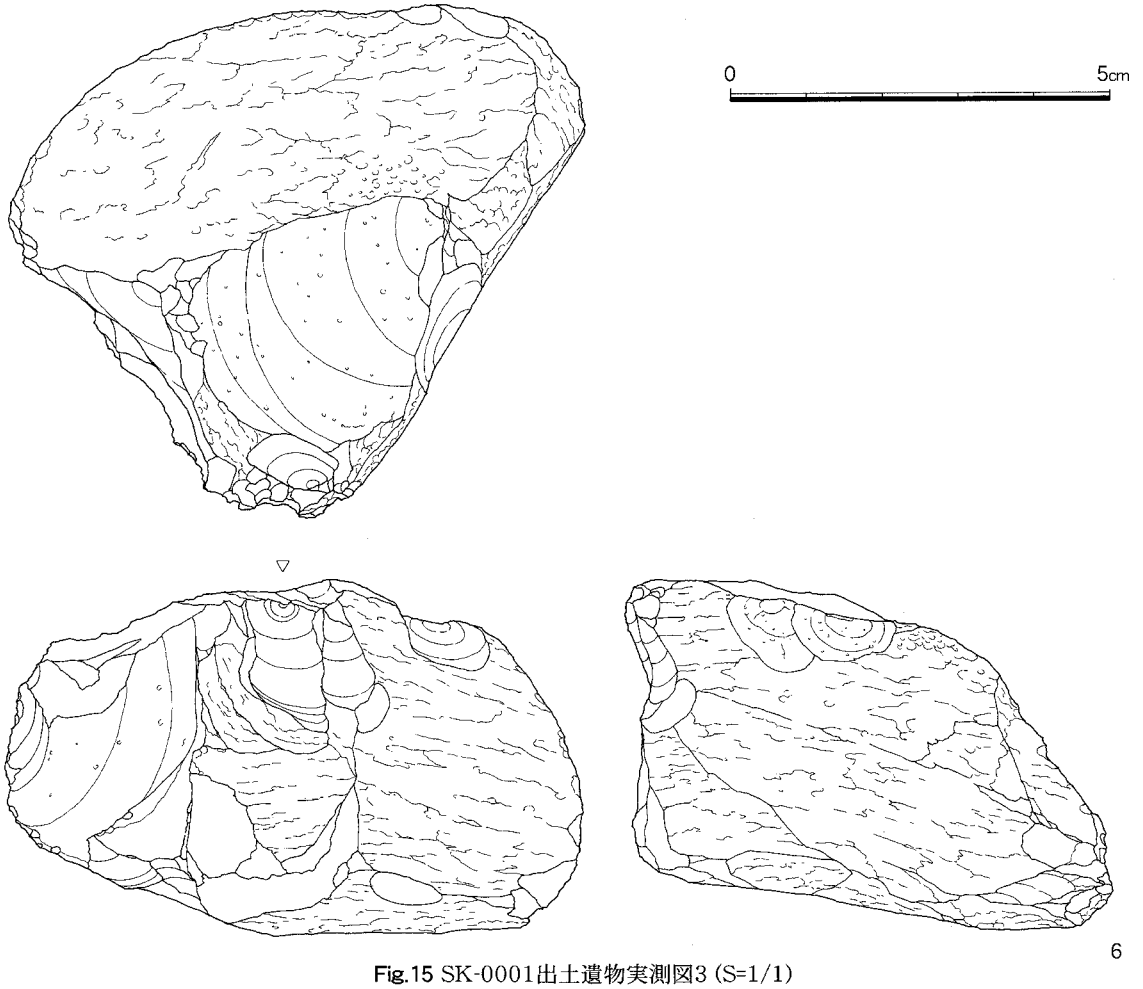


Fig.15 SK-0001出土遺物実測図3 (S=1/1)

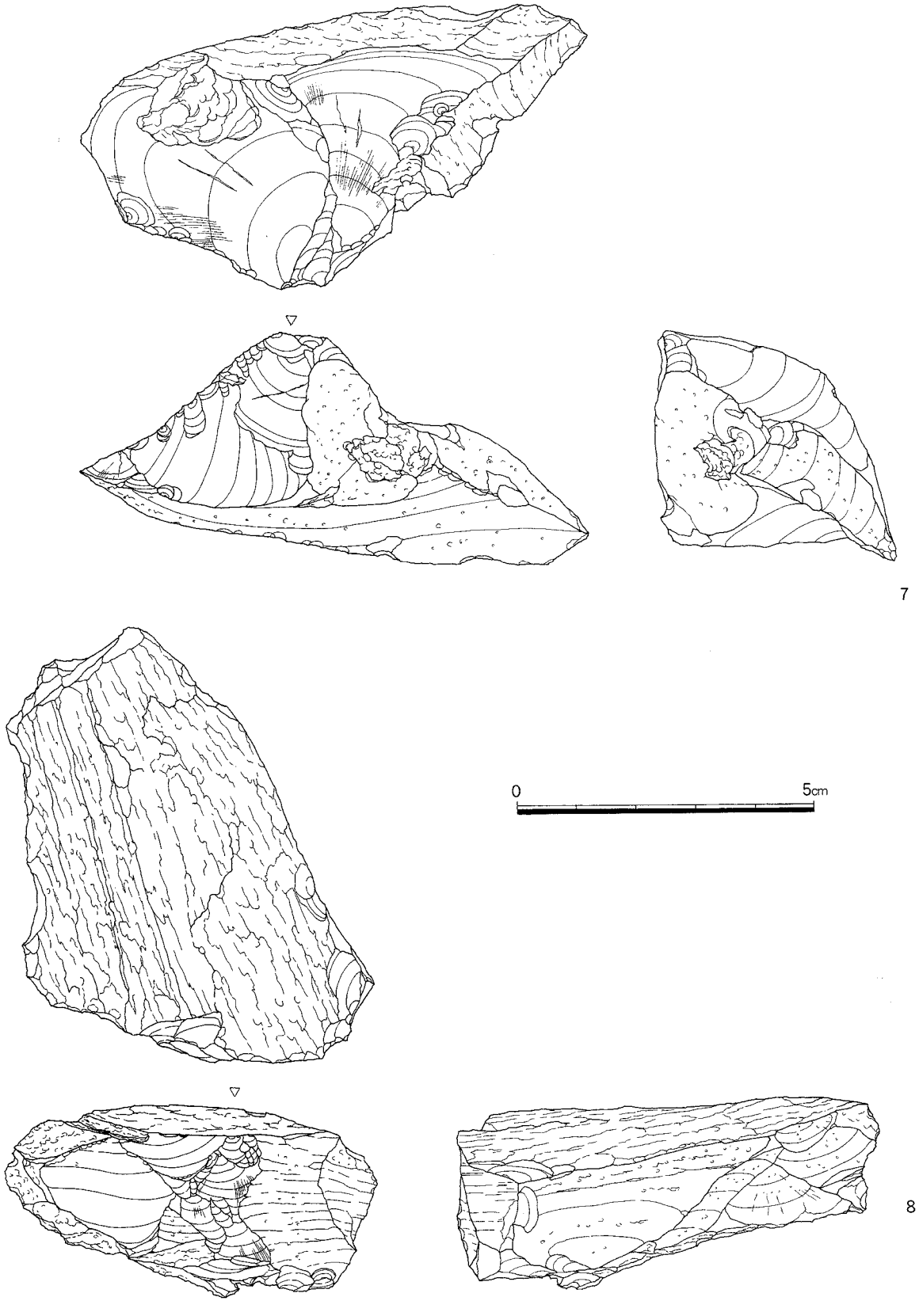


Fig.16 SK-0001 出土遺物実測図4（S=1/1）

（二）その他の出土遺物（Fig.17～25）

縄文時代に属する土器・石器などの遺物が弥生時代以後の遺構埋土より検出された。これらの遺物は、調査区南東側から東側にかけての丘陵裾部低位面付近に存在する遺構から集中して出土するが、丘陵上方からの流れ込みの結果と考えられ、縄文時代の遺構の分布については判然としない点が多く残る。第２・３次調査では調査区南側に縄文時代の遺物が集中して出土することが報告されている。

Fig.17-１は磨消縄文系に属する三万田式土器の深鉢頸部片である。文様帯部には沈線が施され、X字文につながる。沈線上下には刺突列点文が施され、列点文上と沈線間にはヘラ磨きが観察できる。

Fig.18-２は十字形石器である。一部が欠損しており、残存長9.3cm、残存幅9.0cm、残存厚1.4cm、重量72.6ｇを測る。Fig.19-１は水晶製の石器である。六角柱状の原石に打撃を加え刃部を造り出す。

２は瑪瑙製の石核石器である。縄文時代の遺物として報告したが、同様の瑪瑙製石器（Fig.8-12）が旧石器時代の遺物として出土しており、同じく旧石器時代に属する可能性が考えられる。

３・４は黒曜石製の石核である。共に礫面を残すが、打面調整が行われている。

以下の遺物の法量・重量などの詳細については観察表を参照されたい。

Fig.20･21－１～９はスクレイパーである。Fig.22－１～53は石鏃である。縄文時代前期の鍬形鏃や剥片鏃などが出土している。石材には主に黒曜石・安山岩・砂岩などが使用されているが、Fig.23-42の石鏃は石英製である。Fig.25－１・２は黒曜石製の石錐である。３は先端部を欠損する石槍である。黒曜石製である。４は石核石器である。５・６・７は剥片石器である。８・９はつまみ形石器である。この他にも阿高式系土器などの土器や蛤刃石斧、石匙、削器、掻器など前期から後晩期にかけての石器が出土している。

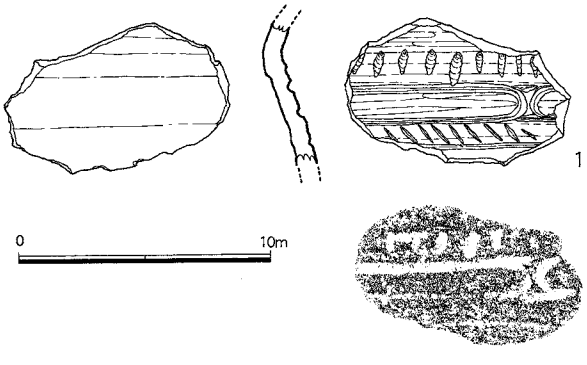


Fig.17 その他の出土遺物・縄文時代1 (S=2/3)

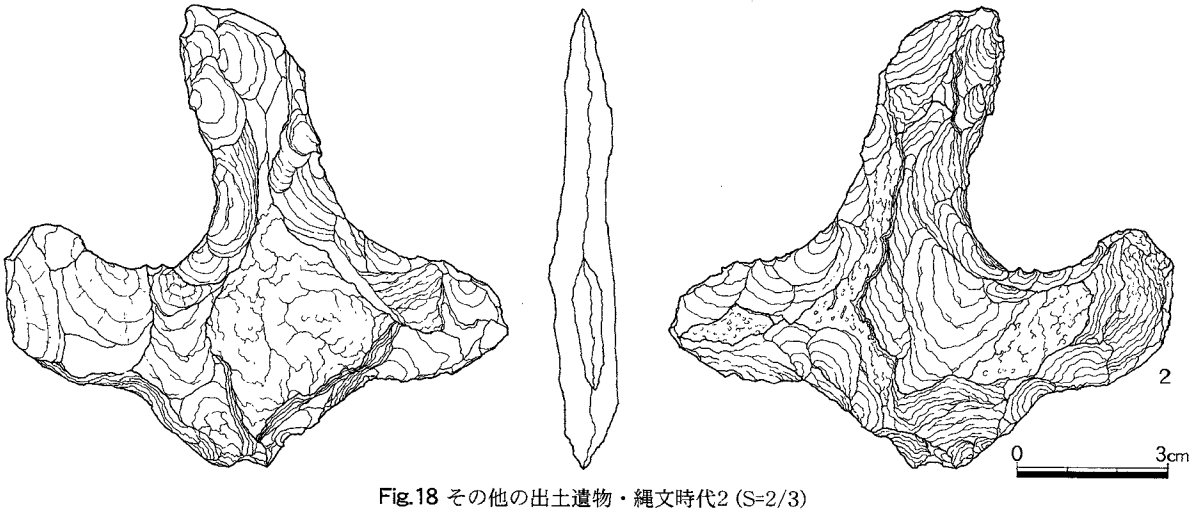


Fig.18 その他の出土遺物・縄文時代2 (S=2/3)

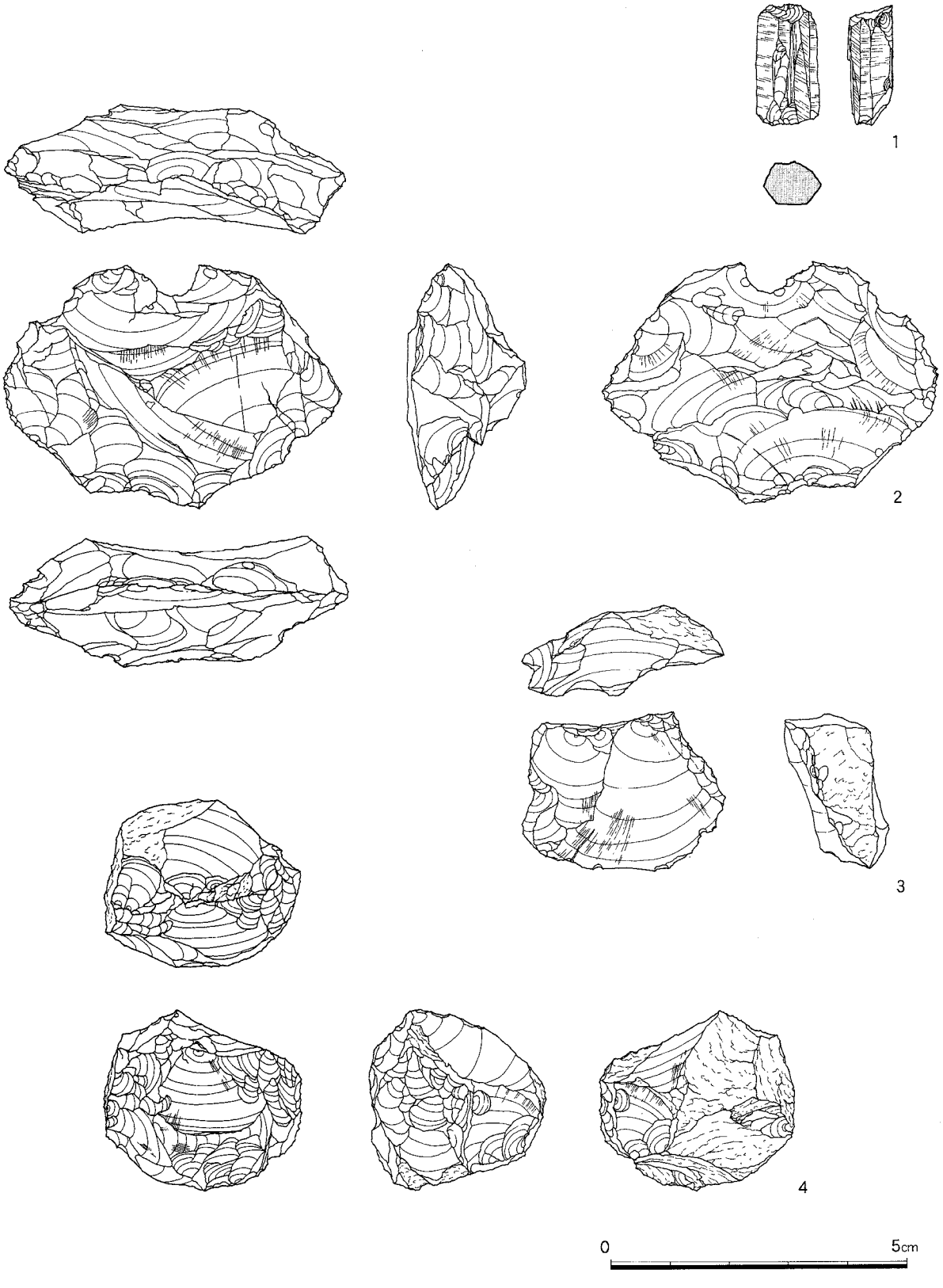


Fig.19 その他の出土遺物・縄文時代3 (S=1/1)

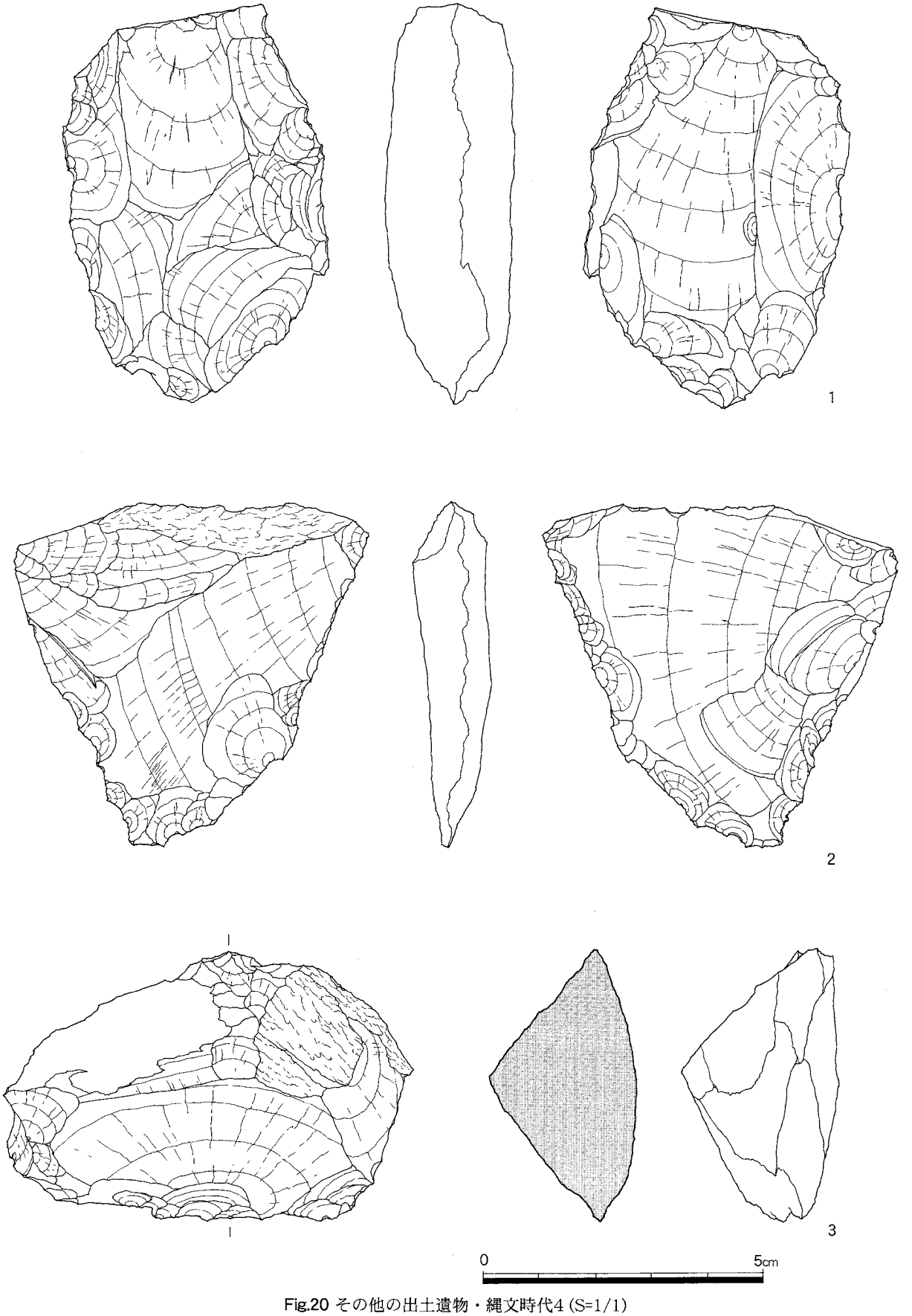


Fig.20 その他の出土遺物・縄文時代4 (S=1/1)

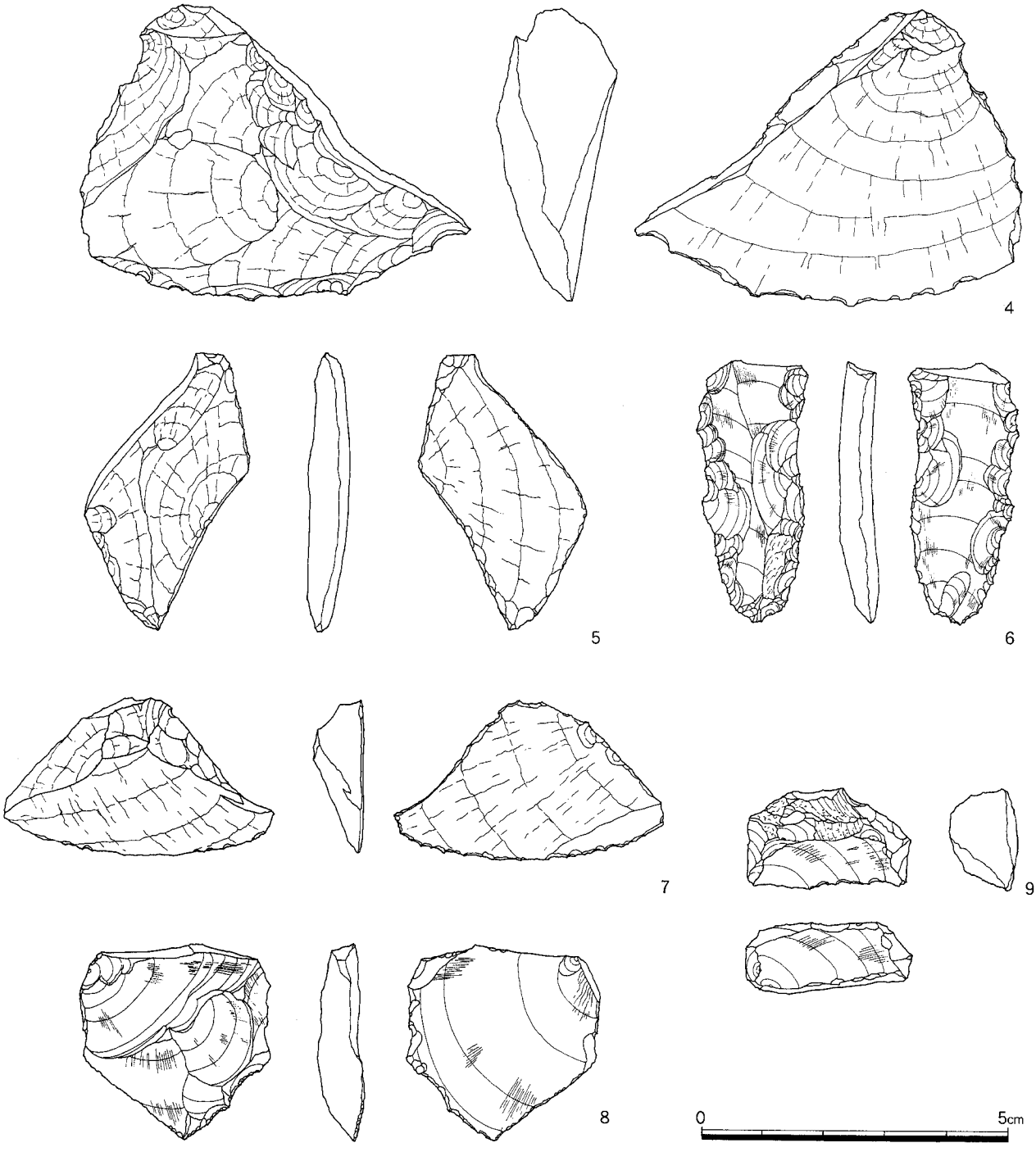


Fig.21 その他の出土遺物・縄文時代5 (S=1/1)

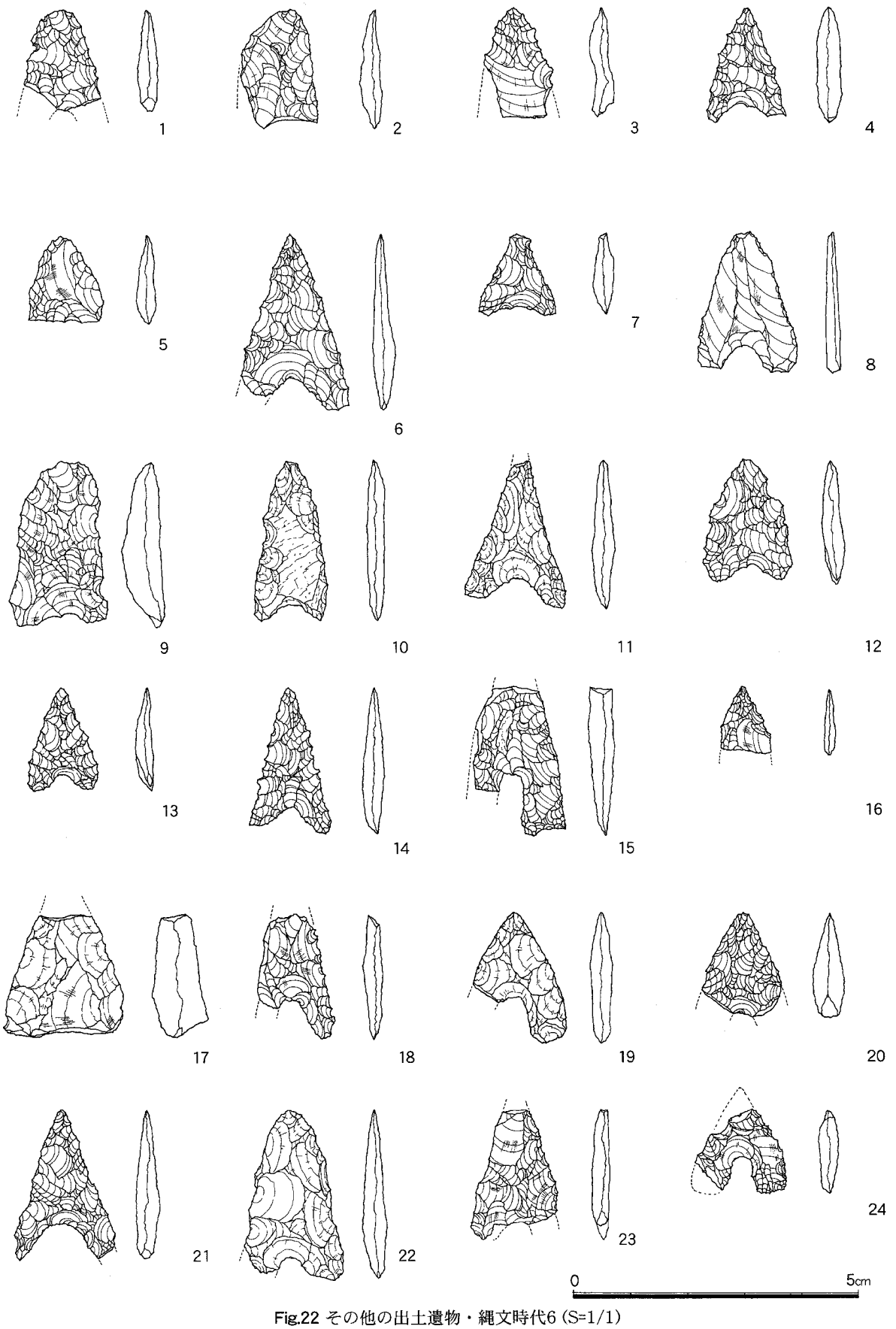


Fig.22 その他の出土遺物・縄文時代6 (S=1/1)

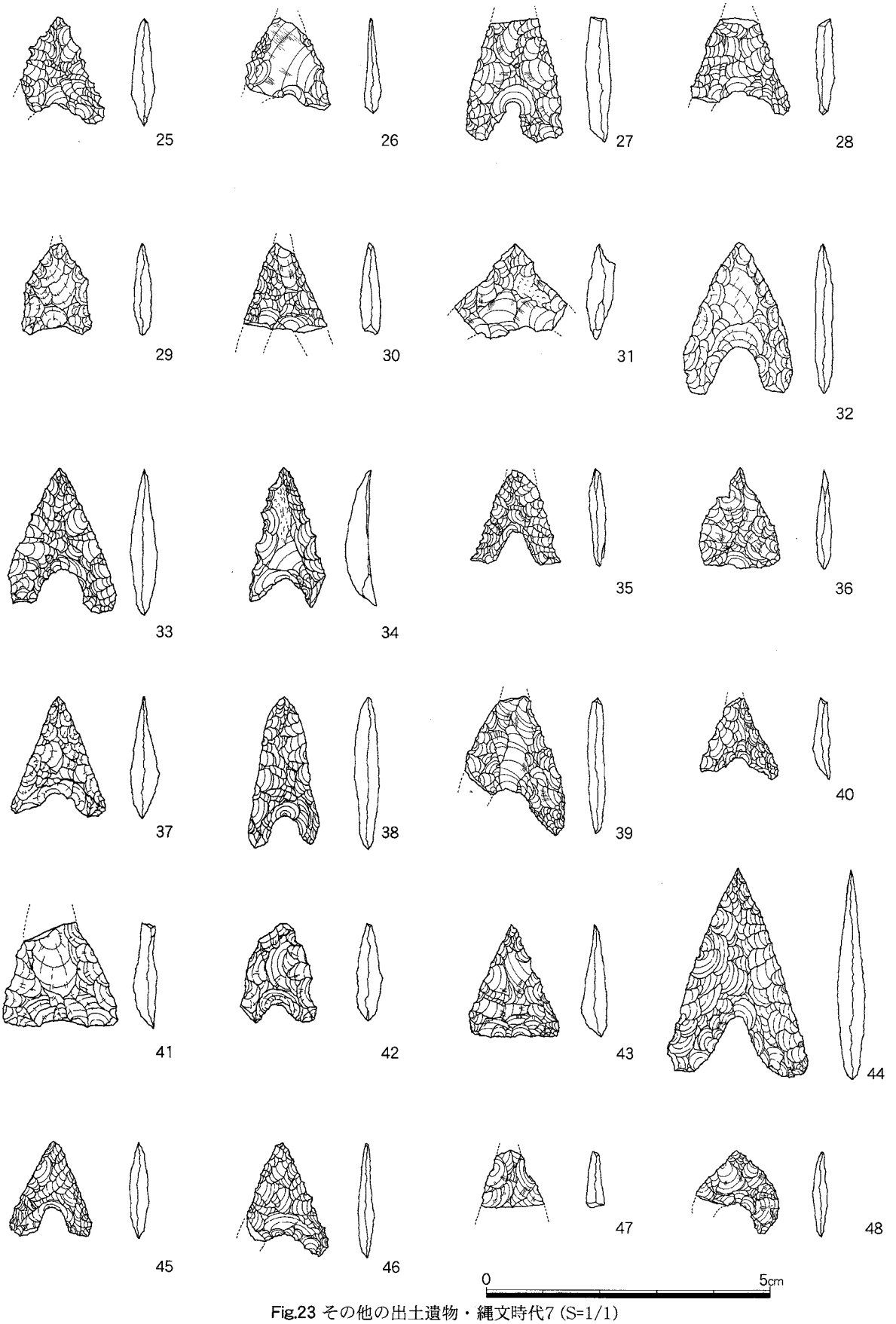


Fig.23 その他の出土遺物・縄文時代7 (S=1/1)

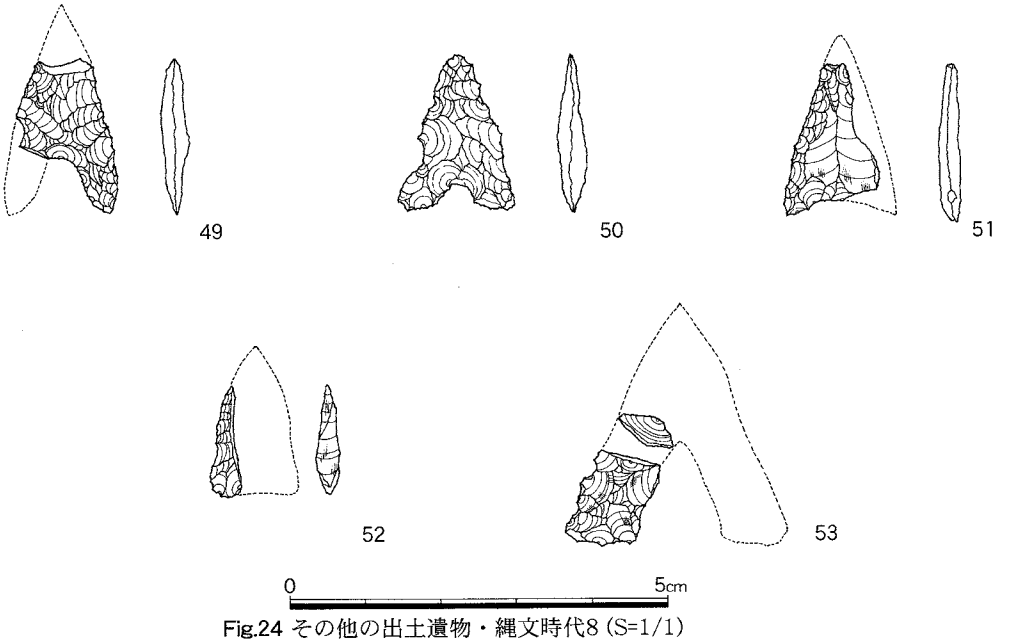


Fig.24 その他の出土遺物・縄文時代8 (S=1/1)

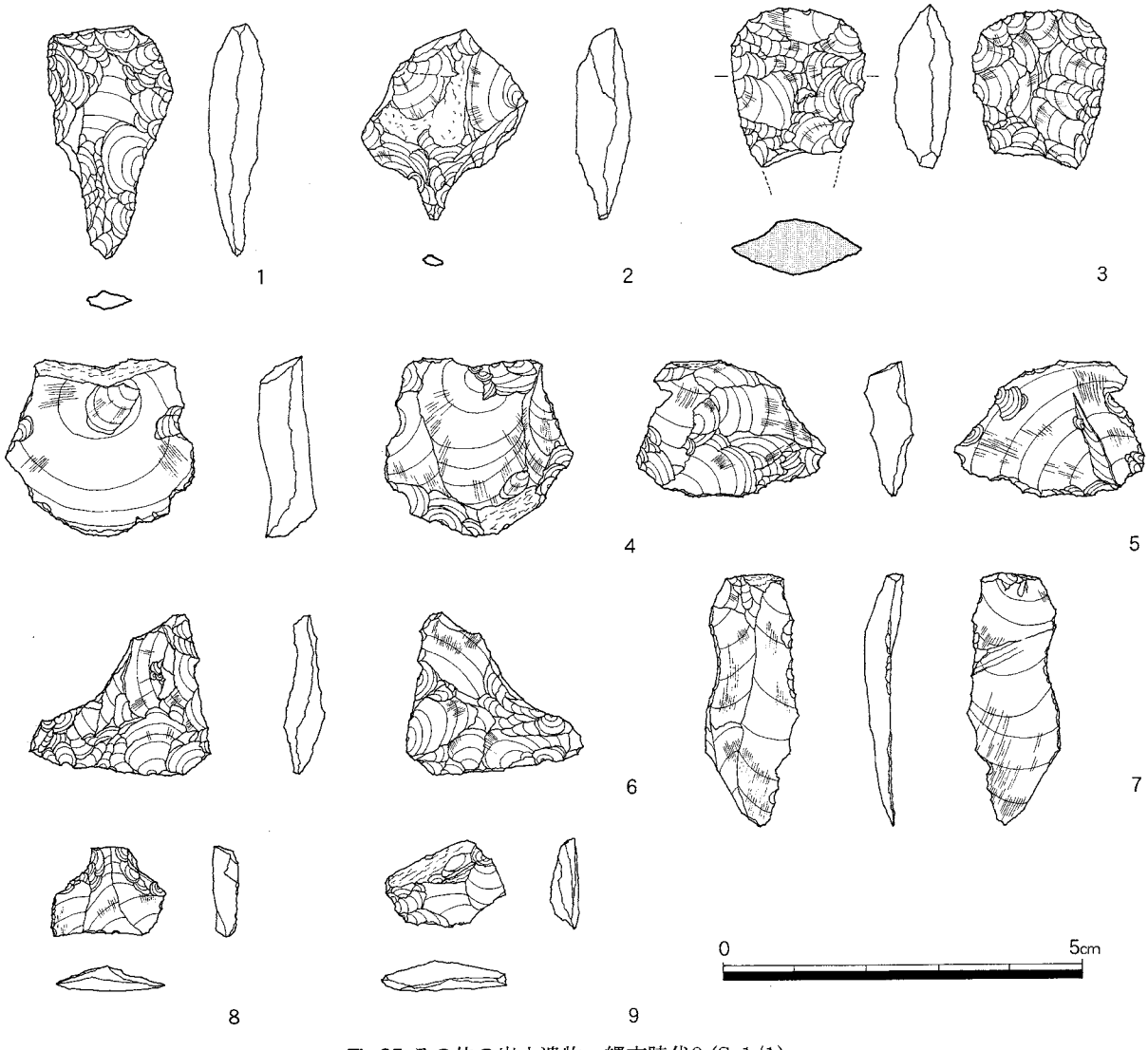


Fig.25 その他の出土遺物・縄文時代9 (S=1/1)

A区出土縄文時代石器計測表

図番号	出土遺構	器種	法量（cm単位）	重量（g）	石材	備考
Fig.19-1	遺構検出	石器	2.0×1.0×0.7	2.32	水晶	
Fig.19-2	SD-1000付近包含層	石核石器	4.0×5.6×1.9	40.36	瑪瑙	旧石器時代か
Fig.19-3	SC-0398・0399	石核	2.1×3.25×1.4	9.28	黒曜石	
Fig.19-4	SX-1302	石核	2.9×3.2×2.8	31.34	黒曜石	
Fig.20-1	遺構検出	スクレイパー	6.9×7.5×2.2	77.27	安山岩	
Fig.20-2	遺構検出	スクレイパー	6.05×6.2×1.3	41.76	安山岩	
Fig.20-3	SC-0891	スクレイパー	4.7×7.05×2.5	87.44	安山岩	
Fig.21-4	SC-0871	スクレイパー	4.7×6.3×1.75	33.94	古銅輝石安山岩	
Fig.21-5	SD-1066	スクレイパー	3.5×2.3×1.2	5.74	安山岩	
Fig.21-6	SC-0369	スクレイパー	4.1×1.6×0.6	4.44	黒曜石	
Fig.21-7	SC-0894	スクレイパー	2.5×4.4×0.7	7.00	安山岩	
Fig.21-8	SC-0891	スクレイパー	3.1×3.05×0.7	5.03	黒曜石	
Fig.21-9	SD-1272	スクレイパー	1.55×2.7×1.1	5.12	黒曜石	
Fig.22-1	SC-0049	石鏃	1.8×1.15×0.3	0.74	黒曜石	脚部欠損
Fig.22-2	SP-0079	石鏃	1.9×1.2×0.3	0.91	黒曜石	
Fig.22-3	SP-0327	石鏃	1.9×1.1×0.3	0.60	黒曜石	脚部欠損
Fig.22-4	SC-0395	石鏃	1.9×1.4×0.4	0.96	黒曜石	
Fig.22-5	SC-0396	石鏃	1.5×1.1×0.3	0.52	黒曜石	
Fig.22-6	SC-0397	石鏃	2.4×1.7×0.35	1.42	黒曜石	
Fig.22-7	SC-0388	石鏃	1.3×1.3×0.3	0.51	黒曜石	
Fig.22-8	SC-0399	石鏃	2.3×1.7×0.25	0.86	黒曜石	剥片鏃
Fig.22-9	SC-0401	石鏃	2.7×1.6×0.6	2.91	黒曜石	未製品
Fig.22-10	SC-0401	石鏃	2.75×1.2×0.3	1.40	安山岩	
Fig.22-11	SP-0692	石鏃	2.3×1.7×0.4	1.14	安山岩	
Fig.22-12	SC-0866	石鏃	2.1×1.5×0.3	1.06	黒曜石	
Fig.22-13	SC-0871	石鏃	1.8×1.1×0.3	0.44	黒曜石	
Fig.22-14	SC-0876	石鏃	2.4×1.4×0.3	0.73	黒曜石	
Fig.22-15	SC-0898	石鏃	2.5×1.5×0.4	1.47	黒曜石	鍬形鏃
Fig.22-16	SC-0921	石鏃	1.1×0.8×0.2	0.17	黒曜石	
Fig.22-17	SC-0921	石鏃	2.0×2.0×0.85	3.88	黒曜石	先端部欠損
Fig.22-18	SC-0921	石鏃	1.8×1.15×0.3	0.82	安山岩	先端部欠損
Fig.22-19	SC-0924	石鏃	1.8×1.45×0.35	0.97	安山岩	脚部欠損
Fig.22-20	SK-1106	石鏃	1.7×1.75×0.55	1.01	黒曜石	脚部欠損
Fig.22-21	遺構検出	石鏃	2.6×1.7×0.4	1.05	黒曜石	
Fig.22-22	遺構検出	石鏃	2.8×1.65×0.3	1.82	安山岩	
Fig.22-23	遺構検出	石鏃	1.95×1.35×0.3	0.96	黒曜石	脚部欠損
Fig.22-24	北側谷部	石鏃	1.45×1.5×0.3	0.56	黒曜石	
Fig.23-25	SD-1000付近包含層	石鏃	1.5×1.2×0.35	0.38	黒曜石	
Fig.23-26	SD-1025	石鏃	1.4×1.5×0.3	0.25	黒曜石	
Fig.23-27	SD-1025	石鏃	2.15×1.65×0.4	0.81	黒曜石	先端部欠損
Fig.23-28	SD-1025	石鏃	1.5×1.7×0.3	0.41	黒曜石	先端部欠損
Fig.23-29	SK-1229	石鏃	1.5×1.15×0.3	0.59	安山岩	
Fig.23-30	SD-1247	石鏃	1.5×1.4×0.3	0.68	黒曜石	脚部欠損
Fig.23-31	SC-1257・1258・1259	石鏃	1.5×1.9×0.45	1.00	黒曜石	未製品
Fig.23-32	SC-1252	石鏃	2.15×1.85×0.3	1.51	安山岩	
Fig.23-33	SC-1257・1258・1259	石鏃	2.3×1.7×0.45	0.70	黒曜石	
Fig.23-34	SD-1260	石鏃	2.4×1.25×0.35	0.63	黒曜石	
Fig.23-35	SP-1278	石鏃	2.1×1.5×0.25	0.25	黒曜石	先端部欠損
Fig.23-36	SP-1280	石鏃	1.75×1.35×0.25	0.25	黒曜石	
Fig.23-37	SX-1302	石鏃	2.05×1.65×0.5	0.52	安山岩	
Fig.23-38	遺構検出	石鏃	2.6×1.2×0.4	0.97	黒曜石	乳白色黒曜石
Fig.23-39	遺構検出 N-6	石鏃	1.8×1.6×0.25	1.05	黒曜石	先端部欠損
Fig.23-40	遺構検出	石鏃	1.25×1.3×0.25	0.38	黒曜石	先端部欠損
Fig.23-41	北側谷部包含層	石鏃	1.7×1.9×0.35	1.52	安山岩	先端部欠損
Fig.23-42	北側谷部包含層	石鏃	1.7×1.2×0.5	0.97	石英	
Fig.23-43	遺構検出 I-13	石鏃	1.9×1.5×0.4	1.16	黒曜石	
Fig.23-44	SC-0924	石鏃	3.5×3.9×0.45	2.69	サヌカイト	
Fig.23-45	北側谷部包含層	石鏃	1.7×1.35×0.3	0.48	黒曜石	
Fig.23-46	表採	石鏃	1.5×1.2×0.3	0.61	頁岩チャート	脚部欠損
Fig.23-47	表土面	石鏃	0.95×1.2×0.25	0.28	黒曜石	先端部欠損
Fig.23-48	遺構検出	石鏃	1.1×1.45×0.25	0.31	黒曜石	円脚鏃・脚部欠損
Fig.24-49	遺構検出	石鏃	1.4×1.1×0.3	0.70	黒曜石	先端部欠損
Fig.24-50	遺構検出	石鏃	2.05×1.5×0.35	0.83	黒曜石	
Fig.24-51	遺構検出	石鏃	1.8×1.1×0.25	0.49	黒曜石	
Fig.24-52	SP-0816	石鏃	1.4×0.35×0.25	0.19	黒曜石	側縁部のみ検出
Fig.24-53	攪乱	石鏃	1.65×0.95	0.55	黒曜石	脚部のみ検出
Fig.25-1	SP-1224	石錐	3.2×1.6×0.7	1.43	黒曜石	姫島産黒曜石
Fig.25-2	SD-1025北側包含層	石錐	2.5×2.15×0.8	1.88	黒曜石	
Fig.25-3	北側谷部包含層	石槍	2.15×1.75×0.75	1.43	黒曜石	先端部欠損
Fig.25-4	神社表採	石核石器	2.3×2.55×0.65	2.47	黒曜石	Usedフレーク
Fig.25-5	北側谷部包含層	剥片石器	1.8×2.5×0.5	1.98	黒曜石	未製品
Fig.25-6	遺構検出	剥片石器	2.2×2.45×0.55	1.88	黒曜石	石鏃か
Fig.25-7	SP-0780	剥片石器	3.5×1.3×0.4	1.10	黒曜石	
Fig.25-8	SC-0894	摘み形石器	1.2×1.5×0.3	0.55	黒曜石	
Fig.25-9	遺構検出	摘み形石器	1.1×1.7×0.4	0.62	黒曜石	剥片石器

c．弥生時代の調査

第５次調査地点Ａ区では弥生時代に属する遺構が少数ではあるが検出された。隣接する第２・３次調査地点や三苫京塚古墳群の調査においては、弥生時代中期後半に属する円形住居が検出され、周辺に集落が展開していることが推測されていた。本調査地点では該期の遺構のまとまった検出はなく、以後の遺構の掘削や畑地開墾による削平により、多くの遺構が消滅してしまったものと考えられる。

Ａ区西側のＣ区東端部では弥生時代中期後半の時期と考えられる貯水遺構が検出されている。丘陵東側斜面を大きく削り込んで造営される貯水遺構で、南北長29m、東西長30m前後の台形状の平面形が復元される。掘削は標高11.0m付近から６mほどの深さで行われており、集団による大規模な作業が想定される。貯水遺構は雨水・涌水を集約し、Ａ区北側にある谷部に存在していたと推測される水田に配水していたものと考えられ、周提・井堰など灌漑施設の存在も予想されたが、農水池の周提造成工事により消滅してしまっている。この貯水遺構は出土遺物・堆積状況より比較的、短期間の存続期間が考えられる。水田経営に不適合な地理条件であったのか短期間だけ使用され廃棄されている。貯水遺構・水田を造営・管理した集団の居住する集落は、古墳時代の集落と同様にＡ区丘陵東側緩斜面上に展開していたものと考えられるが、古墳時代以後の住居などによって消滅しており、土坑などの遺構が検出されただけである。

弥生土器・石器などの遺物は、調査区内のほぼ全域の遺構埋土から出土する。特に調査区東側のＣ・Ｄ・Ｅ－12・13区としたグリットでは古墳時代の住居埋土からは多くの弥生土器が出土しており、消滅してしまった住居などの存在が推測される。この他にはM-7区で検出されるSX-1302とした溝状遺構周辺からも集中して弥生土器が出土した。

(一) 検出遺構

SK-0002（Ph.51）

K-1区で検出した遺構である。土坑内に甕が正位の状態で埋置されていた。土坑上部は開墾により削平されており、甕も底部のみが検出される。残存状況より周辺は50cm以上削平を受けていることが考えられる。小児甕棺などの可能性も考えられたが、残存する部分からでは判断できなかった。

出土遺物をFig.26に示した。

１は弥生土器甕部片である。底径8.8cm、残存高11.5cmを測る。底部は平底で、外器面には縦方向の刷毛目調整が施される。内器面は遺存状態が悪く器面調整はほぼ消滅する。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。中期後半から後期初頭の時期が考えられる。

Ph.51 SK-0002遺物出土状況（北西から）

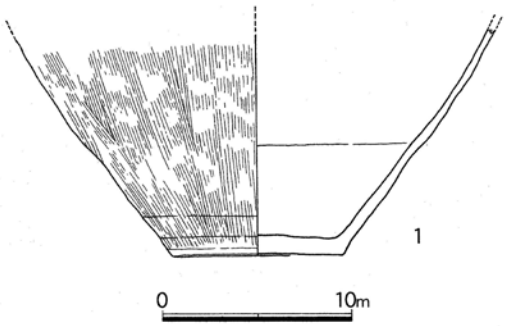


Fig26 SK-0002出土遺物実測図（S=1/4）

SK-0012 (Fig.27)

J-3区で検出した不定形の土坑である。遺構の南側５m地点では縄文時代後期の黒曜石デポ遺構であるSK-0001・SK-0003等が検出されている。東側は畑地開墾時に段造成され２m程度削平を受け、遺構東側半分以上が消滅する。現状での平面形は方形土坑が重複するような形状の土坑であり、検出時には住居の切り合いとも考えられた。遺構内の上層には炭化物を多く含む暗灰褐色砂質土が堆積しており、下層には暗褐色粘質土が堆積する。土坑内には溝・ピットなどの遺構が検出される。溝は住居壁溝状に土坑壁際に掘削されるものと、土坑内を東西方向に仕切るものとが検出される。いずれも幅20cm前後を測り、土坑底面から10cm前後の深さで掘削される。ピットは土坑底面にて検出されるが、土坑との関連性は不明である。土坑中央部で検出されるピットは直径30cm前後の円形を呈し、ピット内には焼土・炭化物が堆積していた。SK-0012が住居であるとすると、中央ピットは炉の可能性が考えられる。土坑底面より30cm前後の深さを測る。不明な点が多く用途・性格は判然としないが、住居の可能性も十分に考えられる。

土坑の埋土からは弥生時代の土器・石器などが出土する。埋土下層上面からは弥生土器の甕が南側に倒れ四散した状態で検出された（Ph.53）。埋没段階に投棄されたものと考えられる。また土坑底面上からは磨製石斧が出土した（Ph.52）。土坑の西側には重複して掘削されるピットが検出され、ピット内からは黒曜石の剥片・チップ等が少量出土した。

出土遺物をFig.28に示した。

１は弥生土器甕である。復元口径30.0cm、底径7.6cm、器高31.2cmを測る。外器面は縦方向の刷毛目調整が施され、内器面はナデ調整される。２は局部磨製石斧である。全長15.1cm、全幅5.1cm、全厚3.4cm、重量330.1ｇを測る。これらの出土遺物よりこの住居状の土坑の年代は弥生時代後期初頭の時期が考えられる。

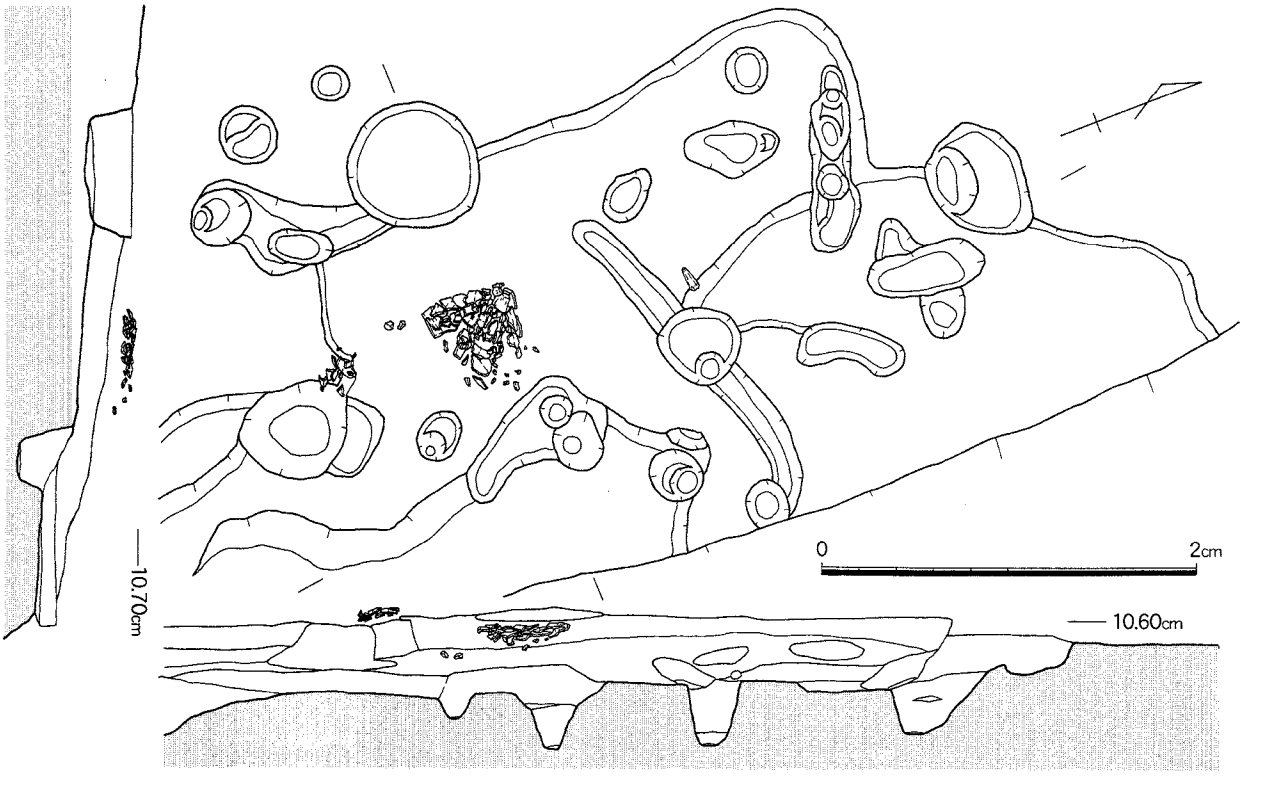


Fig.27 SK-0012遺構実測図 (S=1/40)

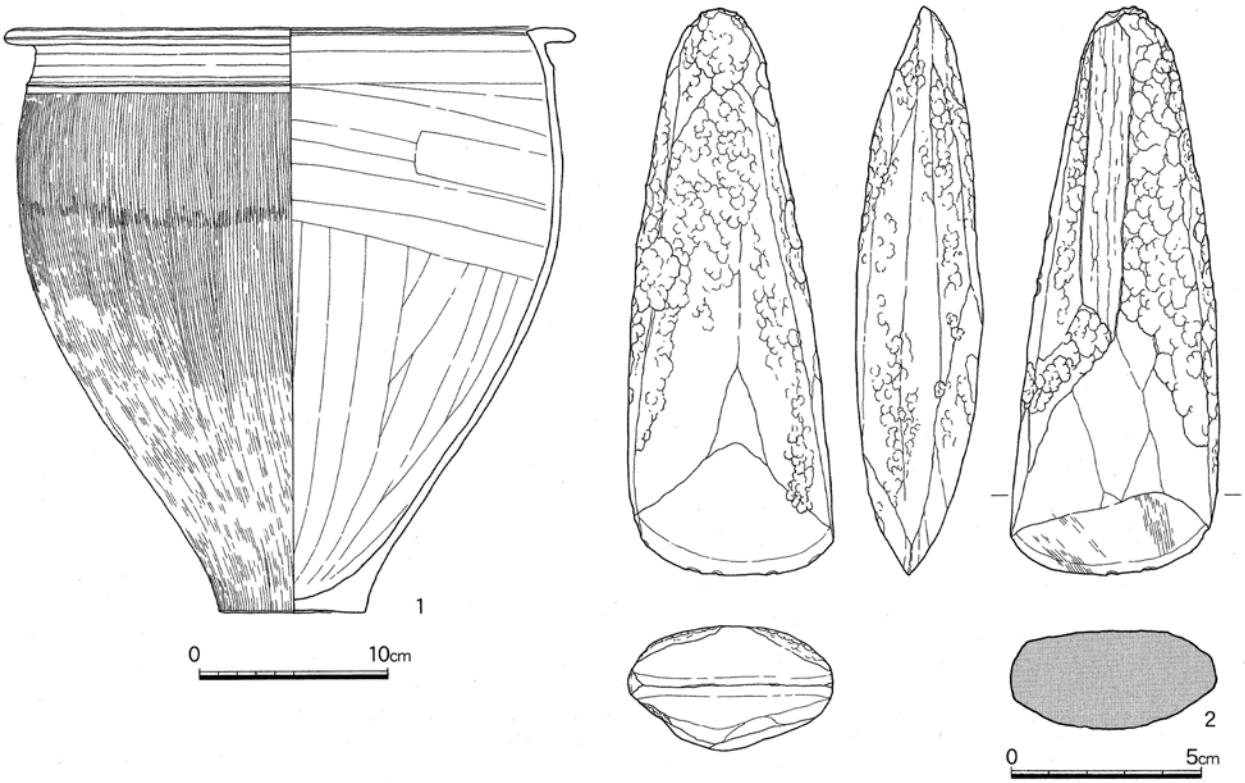
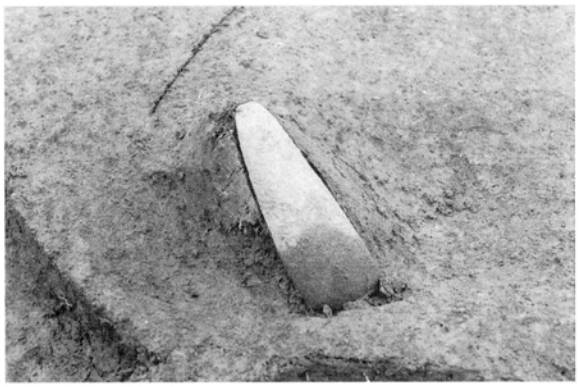
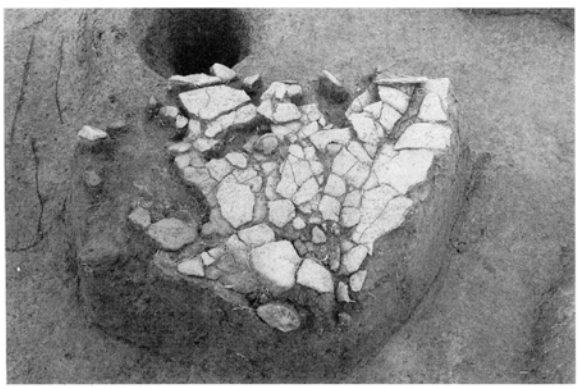


Fig. 28 SK-0012出土遺物実測図 (S=1/2・1/4)



Ph. 52 SK-0012遺物出土状況（南東から）



Ph.53 SK-0012遺物出土状況（北西から）

SK-0242（Fig.29）

C-10区で検出した土坑である。長径3.6m×短径2.4mを測る平面形が楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は6.60m前後を測り、検出面から土坑底面までは30cm前後の深さを測る。土坑内には上層に暗褐色砂質土が堆積し、下層には炭化物を含む暗褐色粘質土が堆積する。土坑南側には段を有し、土坑底面は平坦となる。この土坑が検出されたC-10区は中世以降の段造成や畑地開墾によって大幅に削平されており、掘削深度の浅い土坑などの遺構は消滅しているものと考えられる。土層埋土下層上面からは弥生土器の甕や壺などが多量に出土した。検出された土器の中には完存するものはなく、破損品・欠損品が廃棄された土坑と考えられる。

出土遺物をFig.30に示した。

1は弥生土器高坏坏部である。坏部のみの出土で、復元口径23.6cm、残存高8.3cmを測る。外器面

上半部には横方向のヘラ磨きが施される。下半部は摩滅のため器面調整は観察されない。内器面も摩滅を受け器面調整はほぼ失われている。 2～4は弥生土器の甕である。2は復元口径26.4cm、残存高11.7cmを測る。外器面には縦方向の刷毛目調整がわずかに残り、内器面には指ナデ調整が施される。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈する。 3は復元口径26.4cm、残存高9.2cmを測る。胴部上半はわずかFig.29に丸味を帯び、口縁部は頸部より外反する。摩滅により内外器面の器面調整痕は失われる。 4は復元口径32.0cm、残存高7.0cmを測る。口縁部から頸部にかけて横ナデ調整を施し、それ以下には縦方向の刷毛目調整を施している。内器面は横ナデ調整が施されている。体部には外器面方向から行われた穿孔が観察される。孔径6㎜前後を測り、工具先端部で打撃を加え穿孔する。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

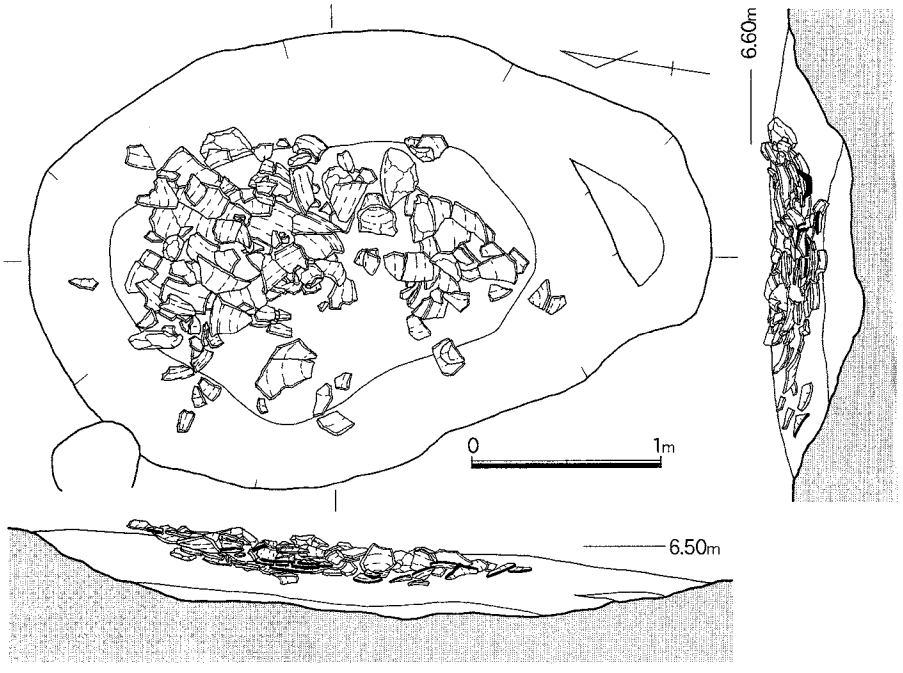


Fig.29 SK-0242遺構実測図 (S=1/40)

5は弥生土器の壺胴部片である。胴部最大径29.6cm、残存高11.7cm、頸部径16.6cmを測る。摩滅により器面調整の大半は失われるが、胴部最大径付近には横方向のヘラ磨きが施される。内器面には指頭圧痕が残る。 6は弥生土器の壺底部片である。底径7.6cm、残存高4.0cmを測る。内底部付近には指頭圧痕が残る。底部は平底で色調は褐色を呈する。

7は器台である。底径10.4cm、残存高6.0cmを測る。外器面は摩滅により器面調整は観察されないが、内器面には指ナデ痕が残る。

8～10は弥生土器の甕底部片である。いずれも底部はわずかに上げ底にある。8は底径6.4cm、残存高11.2cmを測る。外底部付近には刷毛目調整が残る。内器面には指頭圧痕と指ナデ痕が残る。 9は底径6.8cm、残存高5.7cmを測る。外器面には刷毛目調整が施される。内器面には上方へ施される指ナデ痕が観察される。10は底径7.2cm、残存高8.2cmを測る。外器面には刷毛目調整、内器面には指頭圧痕、指ナデ痕が残る。

11・12は滑石製臼玉未製品である。11は残存長7.5㎜、残存幅5.0㎜、残存厚3.1㎜を測る。12は残存長7.6㎜、残存幅6.8㎜、残存厚1.8㎜を測る。埋没時の混入品と考えられる。

13は礫石錘である。長軸両端部を打ち欠き紐掛け部を造り出す。長軸15.4cm、短軸12.6cm、器厚4.1cm、重量334.8ｇを測る。

これらの出土遺物より土坑の年代は弥生時代後期前半の時期が考えられる。

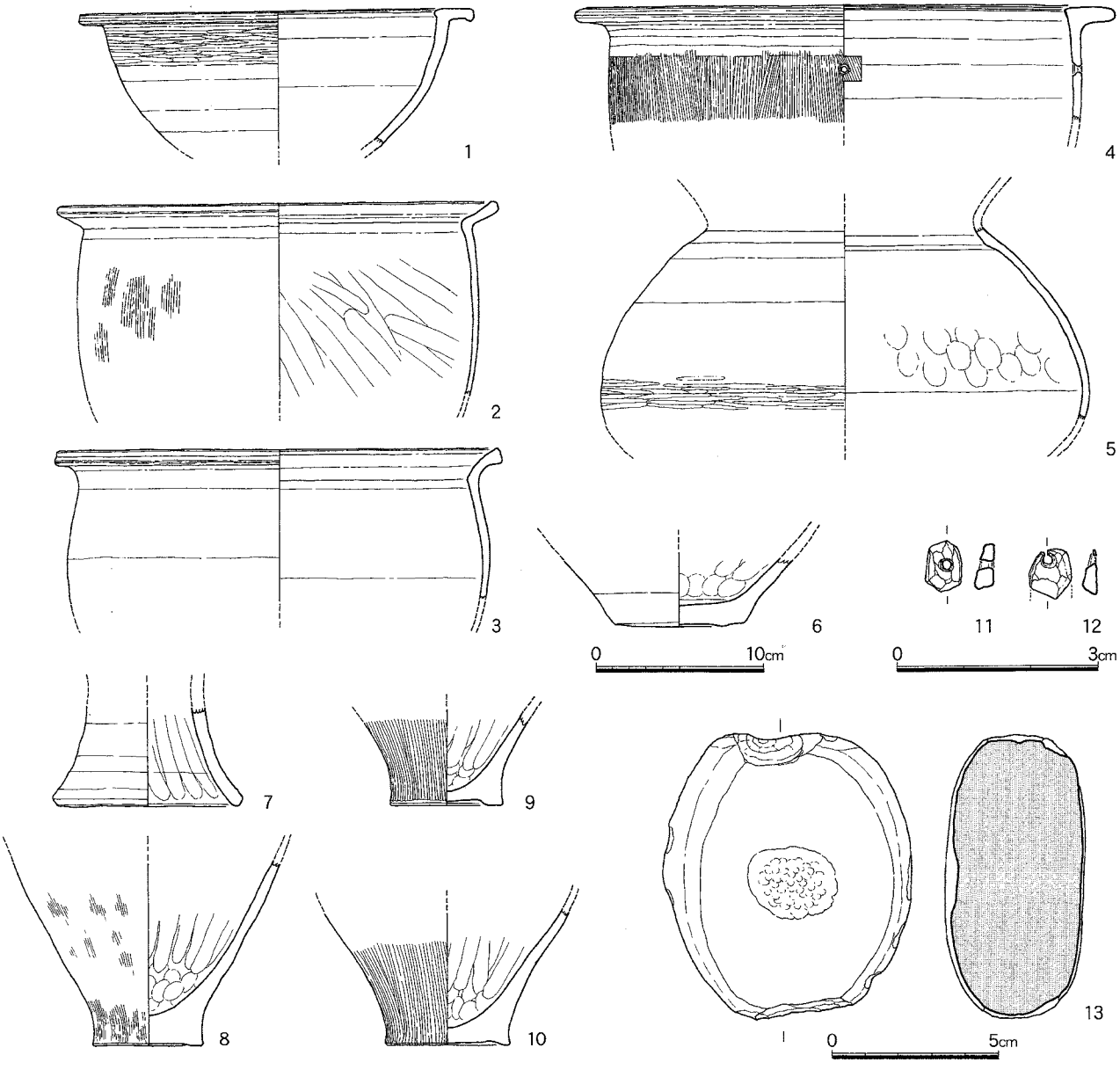


Fig.30 SK-0242出土遺物実測図 (S=1/1・1/2・1/4)

SC-0385 (Fig.31)

D-12・13で検出された住居である。住居の形態より古墳時代の住居と考えられるが、住居内からは弥生土器のみが出土しただけで、他時期の遺物が出土しなかったため遺物と共にこの項において報告を行う。住居は北西側隅部と東側の壁の一部が検出されただけである。検出された部分より一辺3.9m前後の方形住居が復元される。住居は農水路やSC-0384などの住居によって切られており、床面は東側でわずかに検出されるだけである。検出面の標高は6.20m前後を測り、壁溝は5cm前後の深さで残存する。壁溝の埋土は暗褐色粘質土であり、土器の細片が出土する。住居北側は6世紀前半頃の住居の南側隅部によって切られる。主柱穴は四本柱であり、柱穴の直径は25cm前後を測り、検出面から柱穴底面までは10～40cm前後の深さを測る。柱穴からは弥生土器の甕底部片などが出土した。他の住居との切り合い関係より、住居の年代は5世紀代の時期が考えられる。

出土遺物をFig.32に示した。図示した遺物は住居埋土・柱穴埋土より出土したものであるが、住居に伴う遺物ではなく、住居掘削以前に存在していた弥生時代の遺構に伴うものである。

1～3は弥生土器の甕口縁部片である。1は復元口径23.4cm、残存高3.0cm を測る。摩滅により内外器面の調整は失われている。色調は暗褐色を呈する。2は復元口径25.6cm、残存高2.0cmを測る。3は復元口径36.0cm、残存高2.0cm を測る。いずれも摩滅により器面調整は失われる。4・5は弥生土器甕の底部片である。4は底径6.0cm、残存高4.0cmを測る。5は底径7.6cm、残存高6.2cmを測る。底部は上げ底で、外器面には刷毛目調整が施される。色調は暗褐色を呈する。

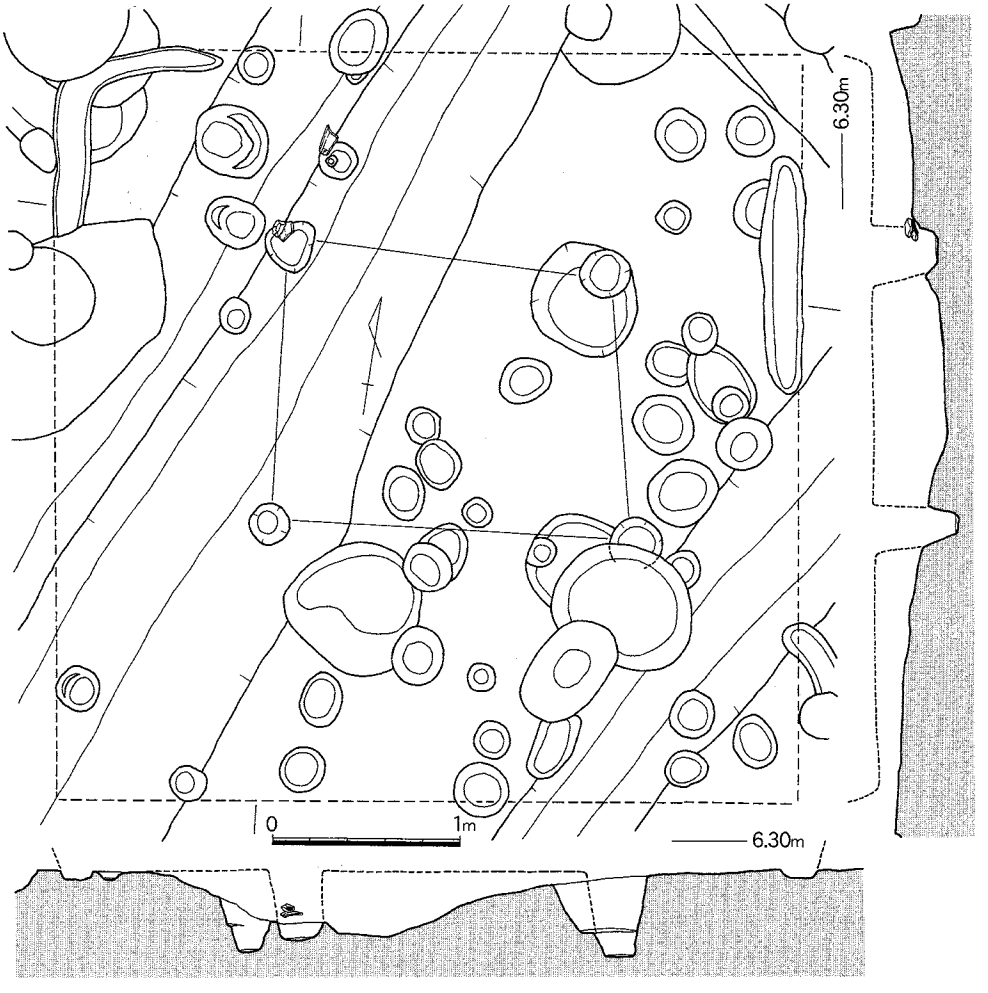


Fig. 31 SC-0385遺構実測図 (S=1/40)

このSC-0385とした古墳時代住居に検出される古墳時代の住居埋土からも弥生時代の遺物が検出される。SC-0384・SC-0399等の住居があげられ、付近に床面以下まで削平された住居や土坑が存在していたものと推測される。

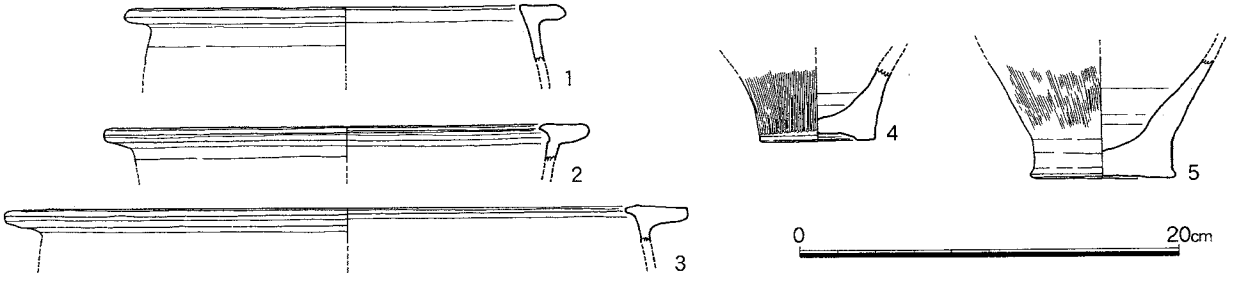


Fig.32 SC-0385出土遺物実測図 (S=1/4)

(二) その他の出土遺物 (Fig.33～35)

古墳時代以後の遺構埋土より弥生時代に属する土器・石器などの遺物が出土している。弥生時代の遺物が出土する遺構は標高4.00～6.50m前後の緩斜面上付近に集中しているが、それ以上の地点では他の時期の遺構と共に削平され消滅しているだけであり、弥生時代の遺構が丘陵裾部の低位面に集中していたわけではない。

1～3・6・7弥生土器の器台である。1は底部を欠損するもので、復元口径7.9cm、残存高7.6cmを測る。2は残存高5.2cmを測り、内外器面にナデ調整が施される。色調は褐色を呈する。3は底径8.4cm、残存高5.2cmを測る。6は底径7.4cm、残存高5.8cmを測る。直立する体部を持ち、外器面に縦方向の刷毛目調整痕がわずかに残る。内器面には指ナデ痕が観察される。7は底径10.4cm、残存高7.5cmを測る。摩滅により器面調整は失われる。色調は淡橙色を呈する。

4は蓋である。摘部径5.2cm、残存高5.2cmを測る。外器面には刷毛目調整が施され、色調は橙色を呈する。5は無頸壺口縁部片である。復元口径9.6cm、残存高2.0cmを測る。色調は褐色を呈する。

8・9・11は高坏口縁部片である。10・23は甕口縁部片である。23は大型の甕と考えられる。12・13は弥生土器壺の胴部突帯片である。いずれも内器面には刷毛目調整が施され、断面が台形を呈する突帯にはヘラ状工具突端部による刺突文で刻み目が施される。

14～17・24～28・29～35・37は弥生土器甕の口縁部片である。14は復元口径24.0cm、残存高2.7cmを測る。15は復元口径21.0cm、残存高3.0cmを測る。16は復元口径25.8cm、残存高2.5cmを測る。17は復元口径31.8cm、残存高3.5cmを測る。24は復元口径29.0cm、残存高1.8cmを測る。25は復元口径27.6cm、残存高3.0cmを測る。26は復元口径30.0cm、残存高3.5cmを測る。27は復元口径23.6cm、残存高5.2cmを測る。28は復元口径27.4cm、残存高8.7cmを測る。29は復元口径24.0cm、残存高2.5cmを測る。30は復元口径29.8cm、残存高4.9cmを測る。31は復元口径27.4cm、残存高6.0cmを測る。32は復元口径32.2cm、残存高5.6cmを測る。33は復元口径21.8cm、残存高2.1cmを測る。34は復元口径31.2cm、残存高5.0cmを測る。35は復元口径31.0cm、残存高5.5cmを測る。37は復元口径41.4cm、残存高3.0cmを測る。30・32・34・35は口縁部下の頸部付近に突帯が造り出される。これらの甕は摩滅により器面調整はほぼ失われている。32の口縁部端部にはヘラ状工具突端部による刻み目が施される。色調は褐色から橙色を呈する。

18～22は弥生土器高坏坏部片である。18は復元口径34.4cm、残存高9.5cmを測る高坏坏部片で、口縁端部と坏部屈曲部にヘラ状工具突端部で刻み目を施す。内器面には横方向の刷毛目調整が施されている。焼成は良好であり、色調は褐色を呈する。

36は弥生土器壺口縁部片である。復元口径31.8cm、残存高4.3cmを測る。器面調整は摩滅により失われる。色調は褐色を呈する。

38～51は弥生土器甕底部片である。38より順に底径が7.4cm、6.6cm、6.0cm、5.0cm、7.4cm、9.4cm、6.8cm、6.8cm、7.0cm、7.6cm、7.0cm、6.6cm、6.9cm、7.0cmを測る。平底になるものとわずかに上げ底になるものがある。外器面には縦方向の刷毛目調整が施し、内器面には指ナデ痕が観察されるものが多くみられる。色調は褐色から橙色を呈する。

52・53は弥生土器壺底部片である。52は底径5.2cm、残存高4.7cmを測る。外器面には刷毛目調整がわずかに残るが、内器面の調整痕は失われている。53は底径8.6cm、残存高4.7cmを測る。器面調整は摩滅のため失われる。

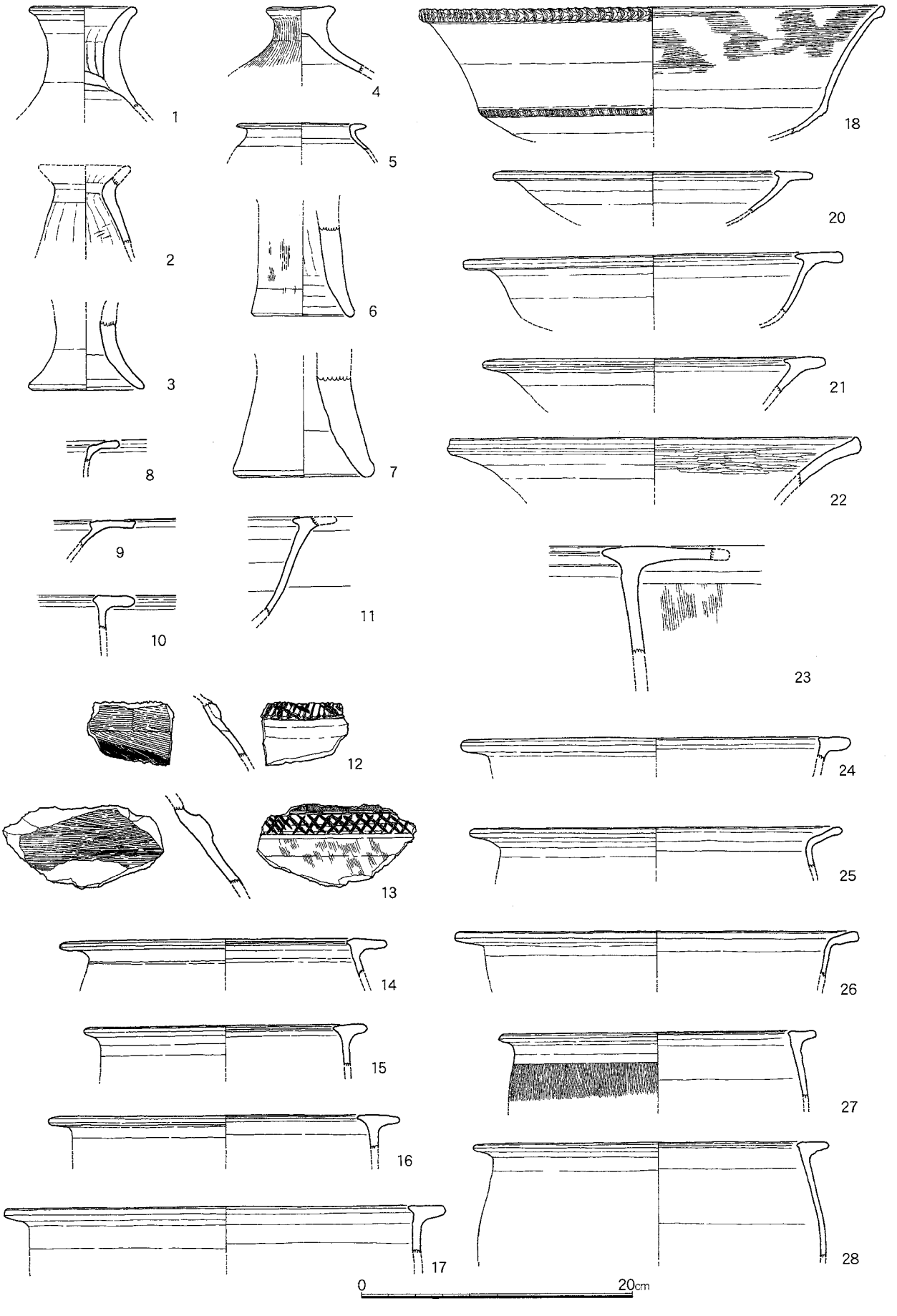


Fig.33 その他の出土遺物・弥生時代１（S=1/4）

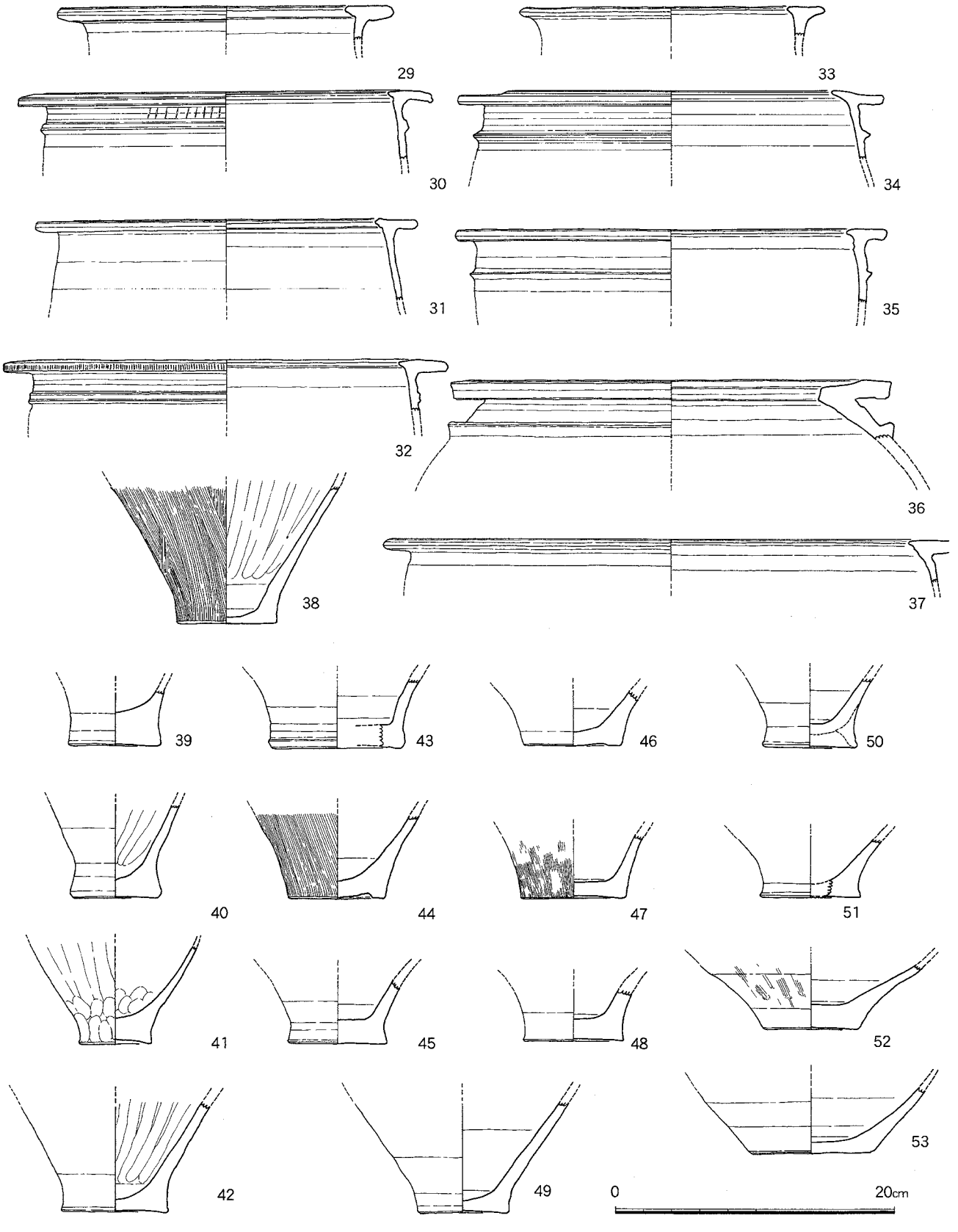


Fig.34 その他の出土遺物・弥生時代２（S=1/4）

Fig.35-54～56は磨製石斧である。54はSK-0941より出土した磨製石斧で、基部は欠損し刃部のみが出土した。残存長7.2cm、全幅4.8cm、全厚2.4cm、重量115.6ｇを測る。刃部は両面に明瞭な研磨痕が残る。55も基部が欠損する磨製石斧である。器面全体は風化により表面が剥落しており、一部に研磨痕が観察できるのみである。残存長11.4cm、全幅5.7cm、器厚3.6cm、重量412.5ｇを測る。56は磨製石斧の基部である。刃部は欠損しており、残存長6.8cm、全幅4.9cm、全厚1.9cm、重量99.25ｇを測る。器面の一部と側面部に研磨痕が観察される。

57～59は石包丁である。57は残存長4.9cm、残存幅2.75cm、器厚0.5cmを測る。器面は風化により摩滅され、研磨痕は器面の一部で観察されるだけである。58は残存長6.1cm、残存幅4.2cm、器厚0.8cmを測る。欠損が著しく全体の形状は不明確である。59は残存長5.35cm、残存幅3.5cm、器厚0.6cmを測る。刃部を中心に研磨痕が良好に残る。

60は砥石または磨石である。全長4.9cm、全幅2.1cm、器厚0.9cmを測る。先端部は丸く摩耗する。この他には弥生時代前期の石鏃、削器などの石器も出土している。弥生時代前期より後期にかけての土器・石器などの遺物が検出されるが、出土する土器の多くは弥生時代中期末から後期前半のものが多く、集落が形成されるのは中期後半以後の時期と考えられる。

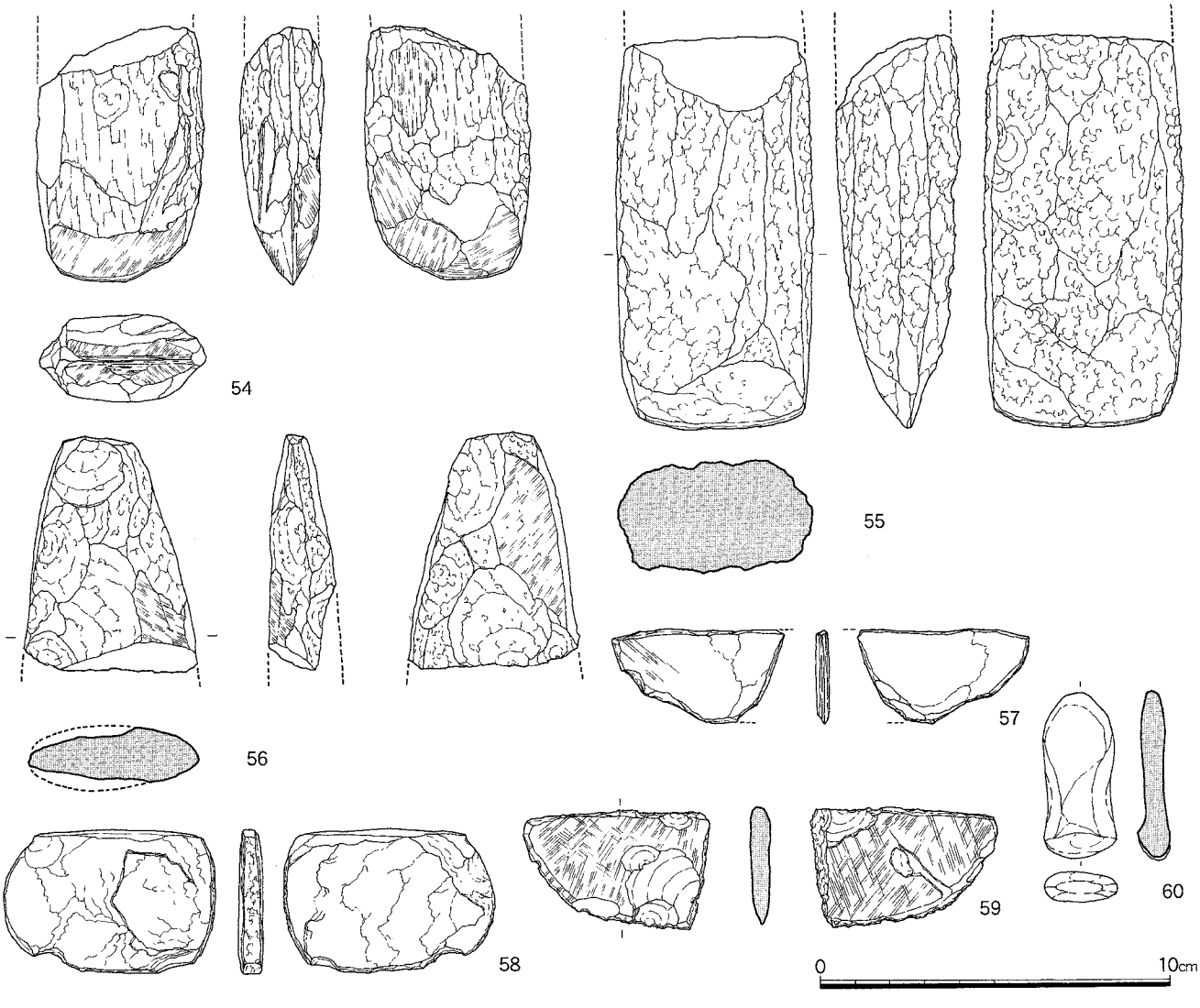


Fig.35 その他の出土遺物・弥生時代３（S=1/2）

d．古墳時代の調査

Ａ区における古墳時代の調査では、調査区東側に接して隣接する第２・３次調査地点で検出された住居等の遺構群から構成される集落跡とほぼ同時期の集落跡を検出した。両地点で検出された集落は同一集団によって営まれたもので、第２・３次調査の成果と今回の調査の成果を合わせ、一つの集落全域についての調査が行われたことになる。第２・３次調査地点では４世紀末～７世紀初頭にかけての方形竪穴住居36軒・掘立柱建物10棟・土坑・溝などの遺構が検出されており、本調査においてもほぼ同時期の竪穴住居群・土坑・溝などの遺構群が検出された。第５次調査Ａ区は丘陵端部付近の東側に緩やかに傾斜する緩斜面上に位置しており、表土掘削後に検出した遺構面の標高は４～12m前後を測る。前述したように対象地は調査着手以前には耕作地として使用され、それ以後は低木の生い茂る荒地となっていた。開墾により調査区全体が段々畑状に削平・造成され、畑間には農水路として幅１m前後の溝が掘削されている状況であった。

今回の調査において検出された竪穴住居などの遺構は、調査区北東側の標高４～８m前後の低位部分に集中して検出されている。調査区南西側の丘陵頂部付近は過去の削平によって遺構の大部分が消滅しており、農水路として使用された溝以外の遺構は検出されなった。検出された遺構群の遺存状況より南西側頂部付近は１～２m程度の削平を受けたものと推測され、これにより相当数の遺構が消滅したものと考えられる。

Fig.36に図示したように、住居などの遺構群は丘陵東側緩斜面上（丘陵背面）に集中して検出されているため、一見して集落が緩斜面上の丘陵東側低位部分のみに展開していたようにも捉えられるが、遺構の削平の度合いを考慮すると東側斜面上の丘陵尾根の頂部付近（標高12m前後）まで集落は展開していたものと推測される。調査区の占地する丘陵の西側は海岸部に連接し、年間を通して強風に晒される地域である。Ａ区や第２次・第３次調査地点を含めた丘陵東側斜面上はその背面となり、丘陵西側に比べ比較的穏やかな様相を呈しており、集落が展開・存続するには良好な条件を有していたものと考えられる。

Ａ区の北西側にはＣ区とした調査区が位置しており、数時期に分けられる古墳群が検出されている。検出された古墳群は丘陵西側斜面上から東側に分岐した尾根線の頂部付近にかけて展開しており、同一丘陵上に存在するＡ区とＣ区は本来この尾根線頂部沿いで連接していたものと考えられる。この頂部付近には墓域（古墳群）と集落を繋ぐ通路が存在していたものと考えられるが、既に宅地として開発されており、今回の調査では明確な墓道の痕跡は検出されなかった。

調査地点付近から海岸へ移動するためには周囲の地形を考慮すると、西側に直線的に移動したものと考えられる。第５次調査地点の西側一帯は30～80m程で海岸部となるが、高さ10～20m前後の断崖であり接岸にはやや不適な地形を呈している。この周辺水域は水深５～10m前後で、海底は砂地となる遠浅な海域であり貝類・水蛸などの良好な漁場となっている。現在、Ａ区西端より西側30m地点付近には綿津見神社があり、神社背面の浸食岸の高さは７m前後となりその前面には砂浜が形成されている。岩礁が存在している付近の海岸に比べ、容易に海岸に到達できる箇所でもあり現在も海水浴場として利用されている。古墳時代の住居群からは蛸壺や土錘・石錘など漁猟に関連する遺物が多量に出土しており、該期には漁業を生活基盤の一つとして活動していたことが推測される。また、こうした活動には海岸に接した地点での作業形態も想定され、海岸部には集落内では検出されなかった集団での作業に伴う簡単な施設が存在していたものと推測されるが、検証には発掘調査などの考古学的な調査が必要であろう。

Fig.36 主要遺構配置図（S=1/400）

調査では４世紀末から７世紀初頭にかけての方形竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝などの遺構を検出した。検出された遺構の多くが畑地開墾により上部を削平され、残存が浅いものも少なくない。

竪穴住居は61軒以上が検出された。壁溝・柱穴が検出され、住居として認定できたものを住居として報告するが、この他にも住居の主柱穴として復元できなかった柱穴群が検出されており、実際はこれ以上の住居が連綿と営まれていたと考えられる。

住居は一辺2.8m前後の小型住居・一辺3.5～4.2m前後の中型住居・一辺５m以上の大型住居の三種類に大別される。同時期に規模の異なる住居が営まれており、住居の性格・用途が異なっていた可能性が考えられる。また、５世紀代に入りカマドが導入され、カマドを持つ住居が多数検出された。カマドの多くは住居廃絶時に破壊されているものが多く、完存しているものは検出されなかった。住居の北西側壁中央部に付設されるものが多く、南東側を入り口とする住居が多かったことが分かる。検出されたカマドには支脚が残されるものが多く、支脚は円柱状の礫を使用するものと、土師器高坏を転用するものの二種類に大別される。調査時には時期的な差とも考えられたが、同時期に存続する住居群で二種類の支脚が併用されており、時期差以外の使い分けが行われていたことが考えられた。住居壁溝は丘陵側方向である西側壁部分を中心として掘削されたものが多く検出される。また壁溝から住居外に延びる排水溝を持つ住居も少数ではあるが確認された。

第２・３次調査では滑石工房としての性格を持つ住居が検出され、西側に位置する丘陵高所部にも滑石工房が存在する可能性が指摘されていたが、第５次調査でも同様の性格を持つ住居が検出された。住居内に作業用土坑を持ち、滑石製臼玉・滑石製臼玉未製品・滑石屑が多量に出土する。

掘立柱建物は６世紀代の住居を切るように建てられるものが多く、７世紀初頭以後の時期に造営されたものが多く検出される。調査では、９棟の掘立柱建物が検出されるが、建物としてまとめきれなかった柱穴列などが多数検出されており、本来はこれ以上の掘立柱建物が造営されていたものと考えられる。

土坑も多数検出された。土器を埋納するものや作業用土坑と考えられるものがあり、平面形は円形・楕円形・不定形と様々な形状を採る。住居に付設して掘削されるものも検出された。

調査では土師器・須恵器・陶質土器・臼玉などの滑石製品・叩き石、礫石錘などの石器等の遺物が多数出土した。土師器・須恵器は完存するも多く出土する。滑石臼玉は500点以上が出土した。欠損品・未製品も合わせると1000点以上が検出されている。また、滑石原石や臼玉製作過程で出る滑石屑なども多量に出土している。この他の滑石製品には、子持勾玉・勾玉・紡錘車・有孔円盤・不明製品などがある。滑石製子持勾玉は完存するもの１点と破損するもの２点の、計３点が出土している。福岡市内における調査でも、これまで14点の子持勾玉が出土している。福岡市博多区に所在する立花寺Ｂ遺跡からは５点の子持勾玉が出土するが、それに次ぐ出土数となる。

第５次調査地点では海岸部に位置する集落の調査であったため、漁労に関連する遺物の出土が多かった。礫石錘・蛸壺・土錘などの遺物が出土する。Ａ区では釣針の出土はなかったが、当時の生活形態が漁労に比重を置いていたことが伺えよう。礫石錘は100点以上のものが出土している。

これより、竪穴住居、掘立柱建物、土坑とその出土遺物についての報告を行う。今回の報告では住居内から出土する作業台として使用された台石・叩き石などの遺物については紙面の制約により割愛したことをお断りしておく。

(一) 竪穴住居

A区では古墳時代の竪穴住居が61軒検出された。これは調査時に柱穴・壁溝などの住居付設遺構が確認され住居と認定できたものを数えたもので、実際には柱穴から住居として復元できなかったもの、削平により既に消滅してしまった住居の存在も考慮すると相当数の住居が営まれていたことが推測される。以下に検出された住居と出土遺物についての説明を行う。

SC-0047 (Fig.37)

J-5区で検出した方形竪穴住居である。現状での平面形は方形で440cm×439cm、検出面から床面までの深さは10～35cmを測り、検出面の標高は8.30m前後を測る。近世以降の開墾によって東側が大きく削平されている。住居の主軸はN－65°－E方向を採り、北西側には白色粘土で形成された

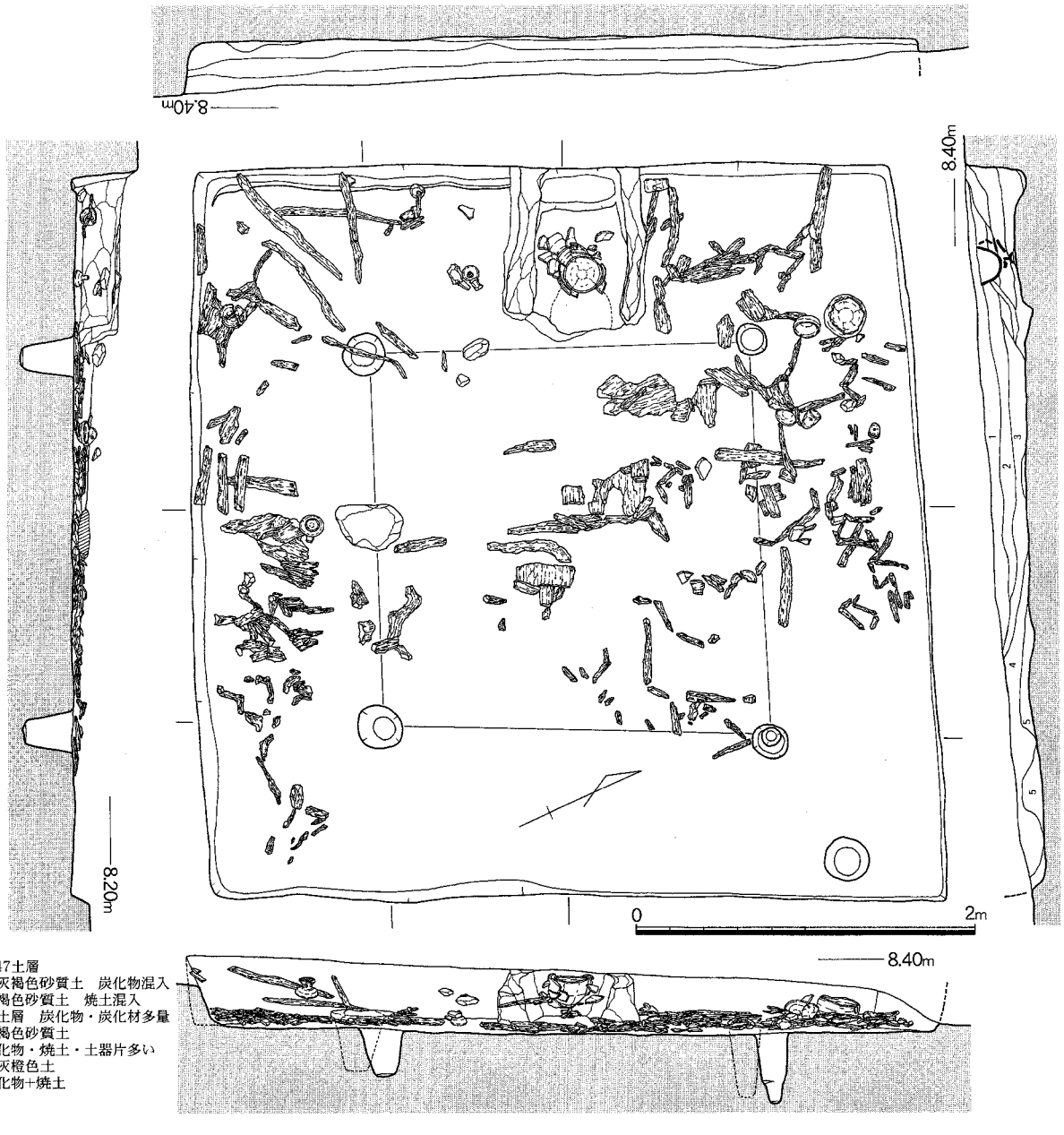


Fig.37 SC-0047遺構実測図 (S=1/40)

カマドが付設され、壁溝は山側である西側壁部分のみ掘削される。四本柱で各柱穴は30～40cm前後の深さを測る。床面には全長10cm～80cm程度の炭化材が散乱し、埋土最下層には焼土と炭化物の混合層が堆積していることから、焼失住居と考えられる。カマド前面に焼土が集中して検出されるが、出火の原因は火の不始末による事故か廃絶による人為的なものかは判別できなかった。炭化材は住居中央方向に向かって倒壊した状況で検出されるものと住居主軸と平行方向に焼け落ちた状況で検出されるものの二種類が検出される。前者は屋根または壁体の構造材と考えられ、後者は梁材または桁材と考えられる。住居埋土の堆積方向は焼土・炭化物層などを除き、西側方向（丘陵頂部方向）からの堆積であり雨水などよって堆積した埋没層である。

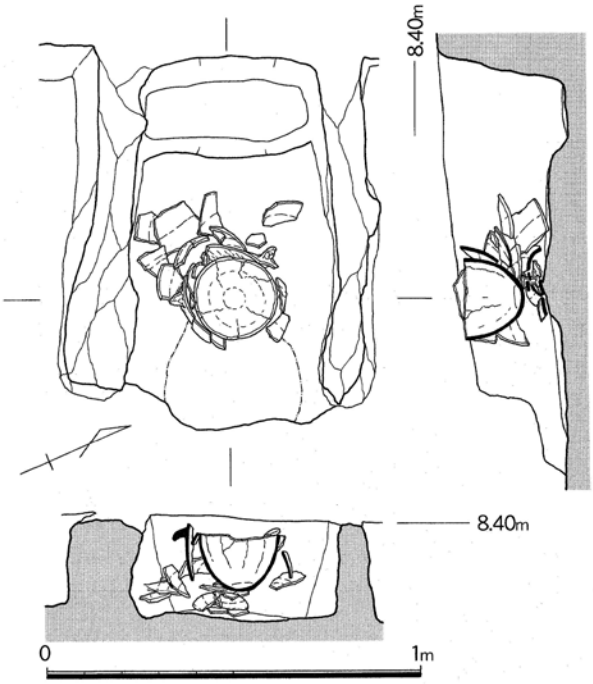
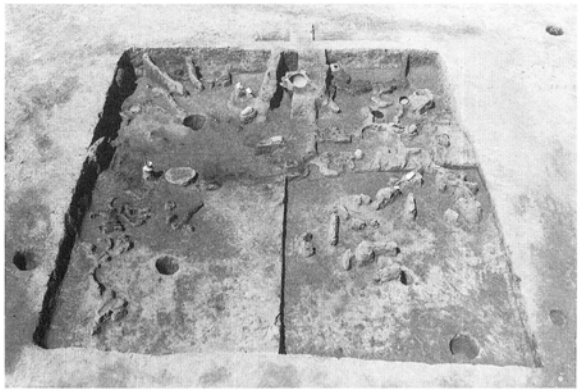
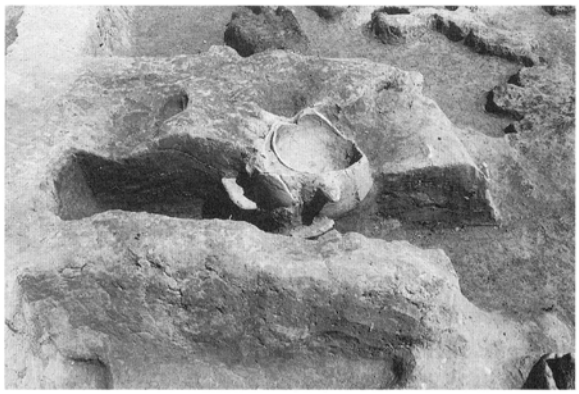


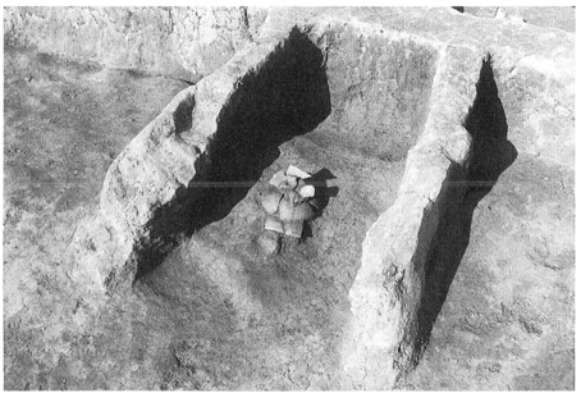
Fig.38 SC-0047カマド実測図（S=1/20）

カマドは上部が耕作によって削平され、両袖部と甕類などの遺物のみが残存する状況で検出された。カマド底面には支脚として逆位の高坏が転用され、その上部に甕と甑が載せられた状態で検出される。甕は上半部が削平によって欠損しており、甑は割れた状態で甕を取り巻くように検出されるが逆位の状態であった。カマド祭祀を行ったものかは焼失住居であることを考慮して判然としない。カマド内には焼土・灰・炭化物層が交互に堆積する


Ph.54 SC-0047調査状況（南東から）


Ph.55 SC-0047カマド半裁状況（南西から）

Ph.56 SC-0047カマド半裁状況（南東から）


Ph.57 SC-0047カマド調査状況（北東から）

が、前面には使用時に掻き出したものか灰と焼土が厚く堆積する。カマド最奥部には掘り込みがあるがカマド壁体下で壁溝に連接していた。煙道部などは既に削平されていたためか検出されなかった。(Fig.38)

住居床面上からは炭化材に混じって、土師器埦・甕・高坏・蛸壺や石皿・石錘などの遺物が出土した。また、床面より10cm程度の高さの暗褐色砂質土層中から須恵器の高坏が、逆位の状態で出土したが、埋没過程で投入されたものと考えられる。

Fig.39に出土遺物を示した。

Fig.39-1は土師器の手捏土器である。復元口径3.1cm、器高は1.4cmを測る。2は須恵器の高坏である。復元口径10.2cm、底径7.6cm、器高9.2cmを測る。脚部は短く、台形を呈する透し孔が三カ所に施される。この須恵器は住居に伴う遺物でなく、埋没過程時に投棄されたものである。C区で検出される古墳群に副葬するために持ち込まれた土器か。3・4は土師器埦である。3は口径12.8cm、器高5.9cmを測る。焼成は良好で、僅かに内反する体部を持ち底部は丸味を帯びるが、ほぼ平坦に成形される。外器面は刷毛目調整の後にナデ調整が施され、内器面には放射状のナデ調整が加えられる。4は口径14.0cm、器高6.0cmを測り、直線的立ち上がる体部を持つ。底部は指押さえ調整痕を残し体部のみナデ調整が施される。内器面はナデ調整が施される。

5・6・11は土師器高坏である。5は坏部口径14.0cm、脚部径9.8cm、器高11.1cmを測る。坏部外器面はナデ調整され、内器面にはナデ調整を加えた後に内底部より口縁部方向へ放射状に広がるヘラ磨き調整が施される。6は口径14.2cm、脚部径10.6cm、器高10.5cmを測る。坏部外器面は口縁部付近がナデ調整され、体部には横位のヘラ磨きが施される。内器面には内底部中央部から口縁部下にまで延びる放射状のヘラ磨きが施される。11は口径13.6cm、残存高6.3cmを測る。脚部は欠損し、坏部も摩滅を受ける。脚部との接合部付近には刷毛目調整が施される。5・6と同様に内器面には放射状のヘラ磨きが施される。

7・8は蛸壺である。7は口径5.0～5.2cm、器高7.9cmを測る。ナデ調整で成形され、穿孔は外部方向より行われている。8は口径7.6～7.8cm、器高10.0cmを測る。内器面にはヘラ状工具突端部による条線が観察できる。9は土師器の埦である。口径13.2cm、器高8.9cmを測る。身は深く口縁部下に頸部状に段が造り出される。口縁部は外反し、外器面には縦位のヘラ磨きが施され、内器面花で調整が施される。

10・12・13は土師器の甕である。10は胴部下半部より欠損する甕で復元口径は14.2cm、残存高は6.5cmを測る。摩滅を受けているが、外器面には刷毛目調整が観察できる。12は頸部から口縁部を欠損する甕で残存高は22.5cmを測る。やや尖り気味の底部を持ち、底部付近は板ナデ調整が施され、胴部上半部は縦位の刷毛目調整が施される。内器面は指ナデ調整で成形される。13はカマド内より検出された甕胴部片で、残存高は19.4cmを測る。底部には平坦面があり、外器面は刷毛目調整が施される。内器面では底部付近で指押さえ痕が観察でき、それに重複するように指ナデ調整が施される。

14・15は土師器の甑である。14は口径23.0cm、底孔径5.0cm、器高27.5cmを測る。体部より口縁部にかけてやや内傾する器形であり、把手は胴部にナデ調整で貼り付けられる。内外器面共にナデ調整で成形される。15はカマド内より出土したもので口縁部が開く器形である。口径29.8cm、底孔径8.0cm、器高26.3cmを測る。外器面は底部より胴部中位までがナデ調整され、それより上位では縦位のヘラ磨きが施される。内器面はヘラ削り調整が施され、口縁部付近は横ナデ調整される。把手は胴部中位付近にナデ調整で貼り付けられる。

出土遺物より6世紀前半代の時期が考えられる。

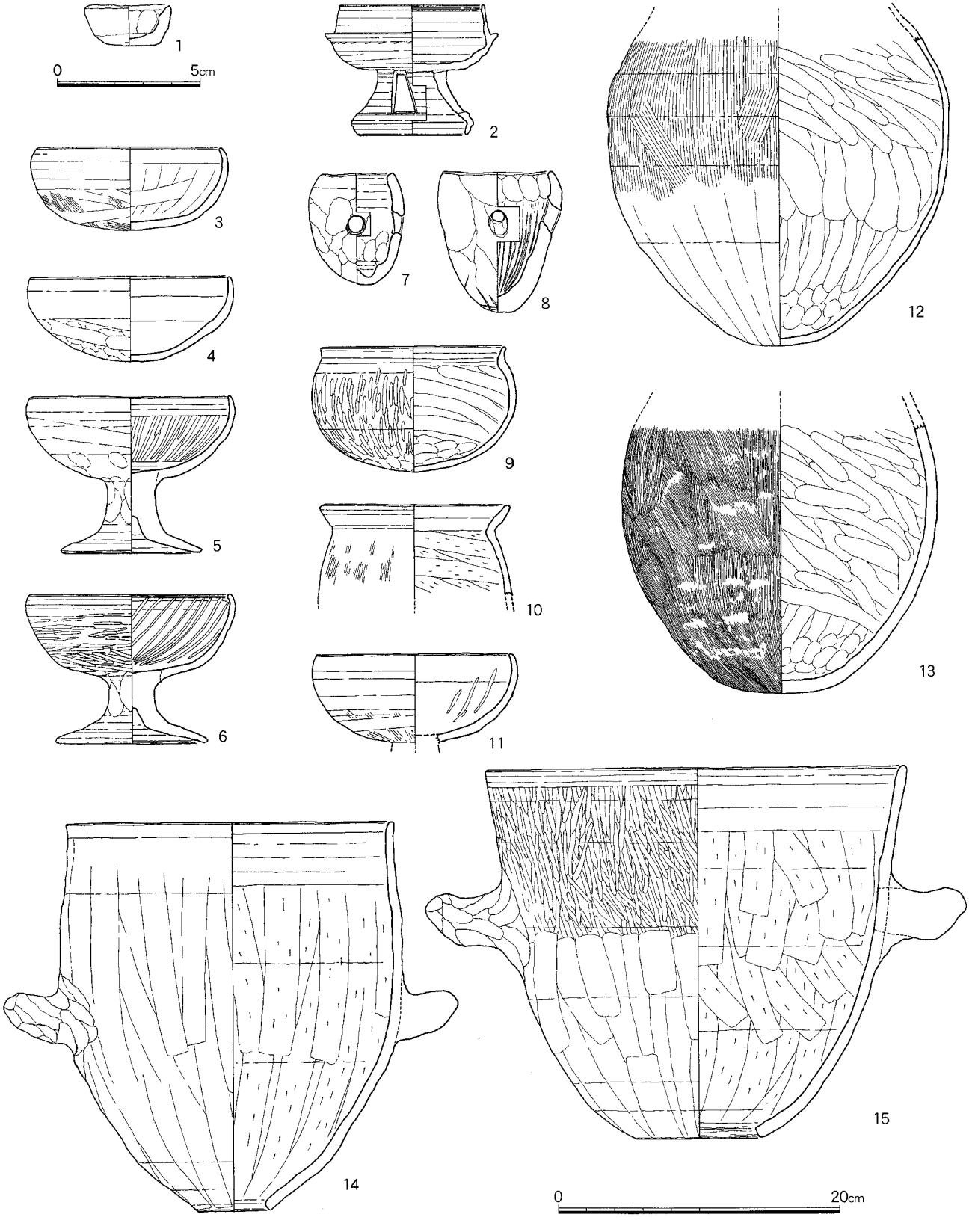


Fig.39 SC-0047出土遺物実測図 (S=1/2・1/4)

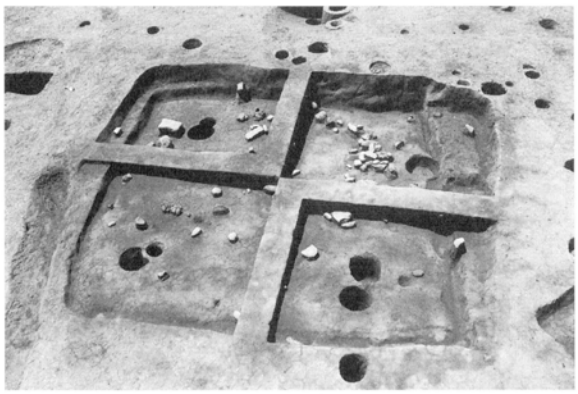
SC-0048（Fig.40）

I・J-5・6区で検出した方形竪穴住居である。SC-0049に切られているため、住居東側の壁は消滅する。また住居南東隅部も後世の溝によって消滅する。現状での平面形はやや南北方向に伸びる長方形で480cm×360cm、検出面から底面までの深さは20cm前後を測り、検出面の標高は8.30m前後を測る。SC-0047と同様に近世以降の開墾によって東側が大きく削平されている。住居床面全体がSC-0049掘削時に掘り抜かれており、カマドなどは消滅しているため検出されなかった。残存する西側隅部において壁溝の一部が検出される。主柱は四本柱で各柱穴は30cm前後の深さを測る。

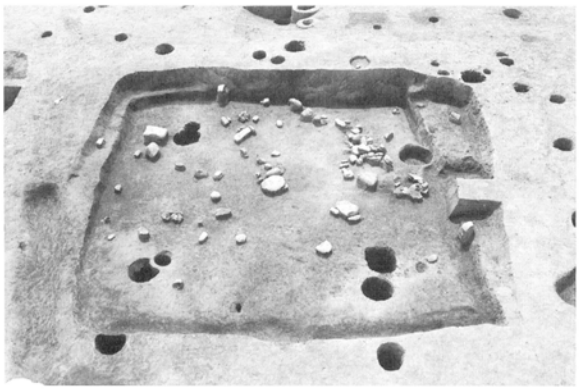
SC-0049（Fig.40）

I・J-5・6区で検出した方形竪穴住居である。SC-0048廃絶後に構築された住居で、平面形は方形を呈し405cm×370cm、検出面から床面までの深さは40cm前後を測る。住居の主軸はN－28°－W方向を採り、北西側にカマドの支脚に使用した逆位の高坏が検出される。高坏周辺の床面は被熱のため赤化し硬化する。カマドの壁体は検出されず、廃絶時に破壊したものと推測される。壁溝は住居全周に掘削される。四本柱で各柱穴は30～40cm前後の深さを測る。床面には20cm前後の扁平な石材が散乱する。床面掘り下げ時には弧を描くように検出されたため、オンドルに伴う遺構の可能性も考えられたが、使用されている石材の多くが扁平な面を上面に据えられており、砥石・作業台として使用された痕跡があることから工房などの作業場をかねた住居と判断した。住居埋土から滑石製臼玉が8点出土し、滑石製品の工房としての性格が考えられたため、埋土を洗浄して滑石屑・未製品の検出を試みたが、数点が出土したのみで滑石製品工房としての性格は認められなかった。第２次調査ではSC0001は滑石製品製作工房として報告されている。

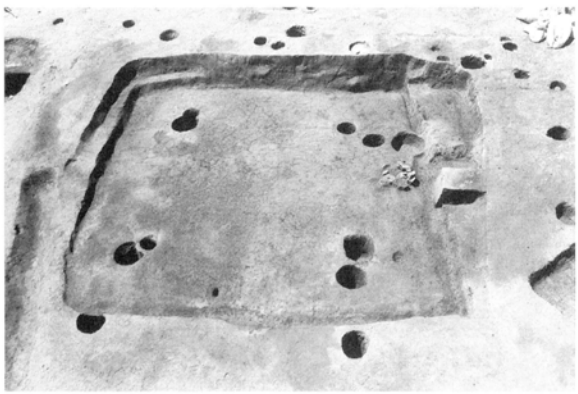
Fig.41に出土遺物を示した。１はSC-0048出土遺物で、２～21はSC-0049からの出土遺物である。



Ph.58 SC-0048・0049調査状況（北から）



Ph.59 SC-0048・0049調査状況（北から）



Ph.60 SC-0048・0049完掘状況（北から）

Ph.61 SC-0048カマド検出状況（南東から）

1はSC-0048より出土した土師器の甕である。復元口径14.2cm、残存高7.0cmを測る。2～6は土師器の高坏である。2は口径14.0cm、底径10.4cm、器高11.0cmを測る。3はカマド支脚に転用されたもので、脚部端部は欠損する。復元口径14.2cm、残存高7.0cmを測る。2・3ともに坏部は内外器面共に横位のヘラ磨き調整が施され、口縁部は端部で僅かに外反する。4～6は高坏脚部片でいずれも坏部を欠損する。脚部径はそれぞれ9.8cm、9.2cm、10.6cmを測る。

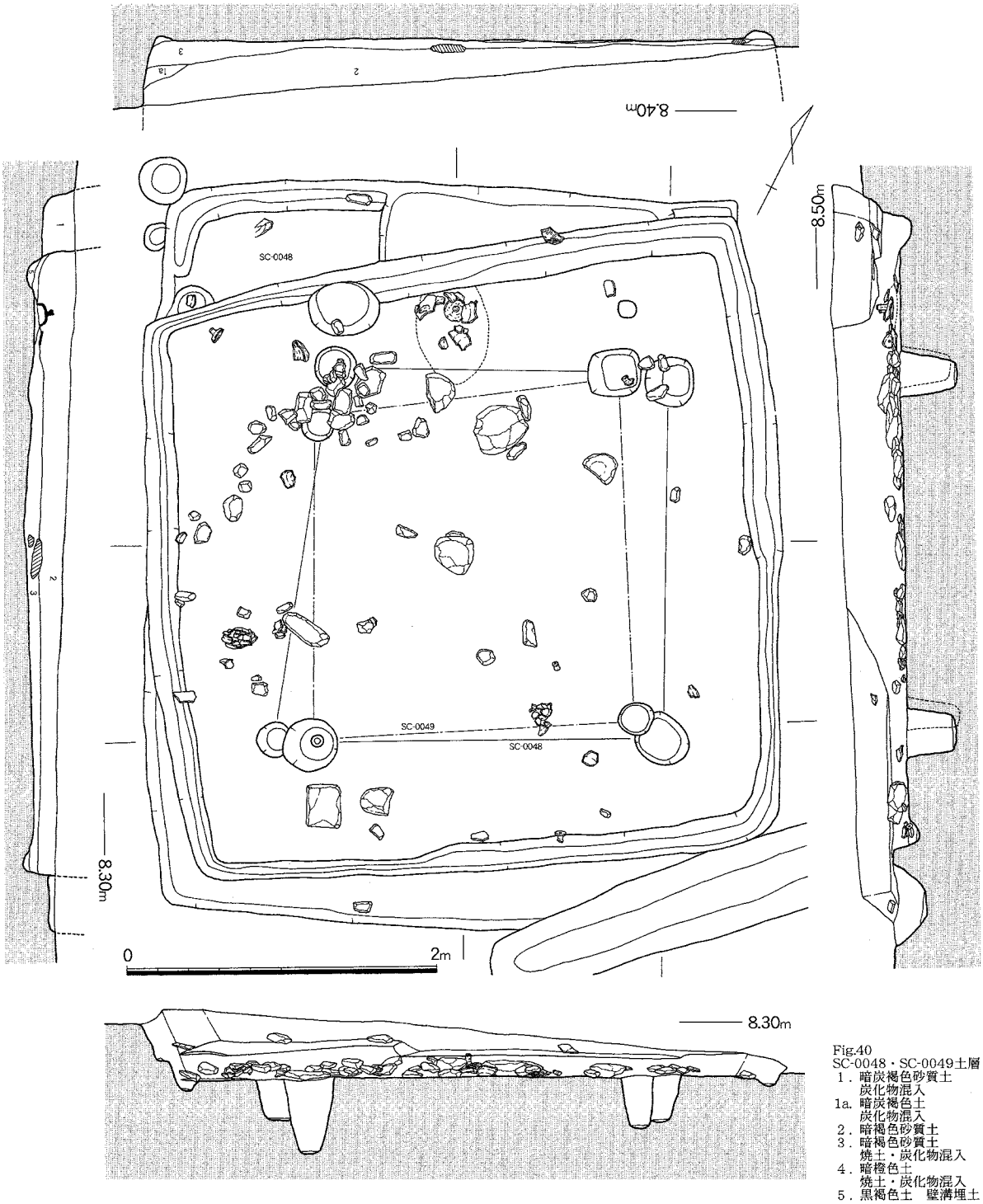


Fig.40
SC-0048・SC-0049土層
1．暗炭褐色砂質土
炭化物混入
1a. 暗炭褐色土
炭化物混入
2．暗褐色砂質土
3．暗褐色砂質土
焼土・炭化物混入
4．暗橙色土
焼土・炭化物混入
5．黒褐色土　壁溝埋土

Fig.40 SC-0048・SC-0049遺構実測図 (S=1/40)

7は須恵器の甕胴部片である。外器面にはカキメが施された後に行われた平行叩きの痕跡が全面に見られ、内器面には同心円状の当て具痕が残る。8は須恵器坏蓋である。復元口径14.6cm、器高4.0cmを測る。天井部はヘラ削りされる。9は須恵器坏である。復元口径は10.8cmを測る。10は陶質土器の甕胴部片である。胎土は淡橙色を呈し、外器面には平行叩き痕が残る。11は土師器壺である。口径12.8cmを測る。外器面は刷毛目調整、内器面はヘラ削り調整が施される。12は土師器甑である。SC-0049カマド付近からの出土で、口縁部を欠損する。底孔径10.6cmを測る。13は敲打器であるが、全体的に被熱しておりSC-0048のカマドの支脚石として使用された可能性も考えられる。14～21は滑石製臼玉である。直径の平均値は5.2㎜前後で、器厚は完存するもので2.5～5.1㎜を測る。

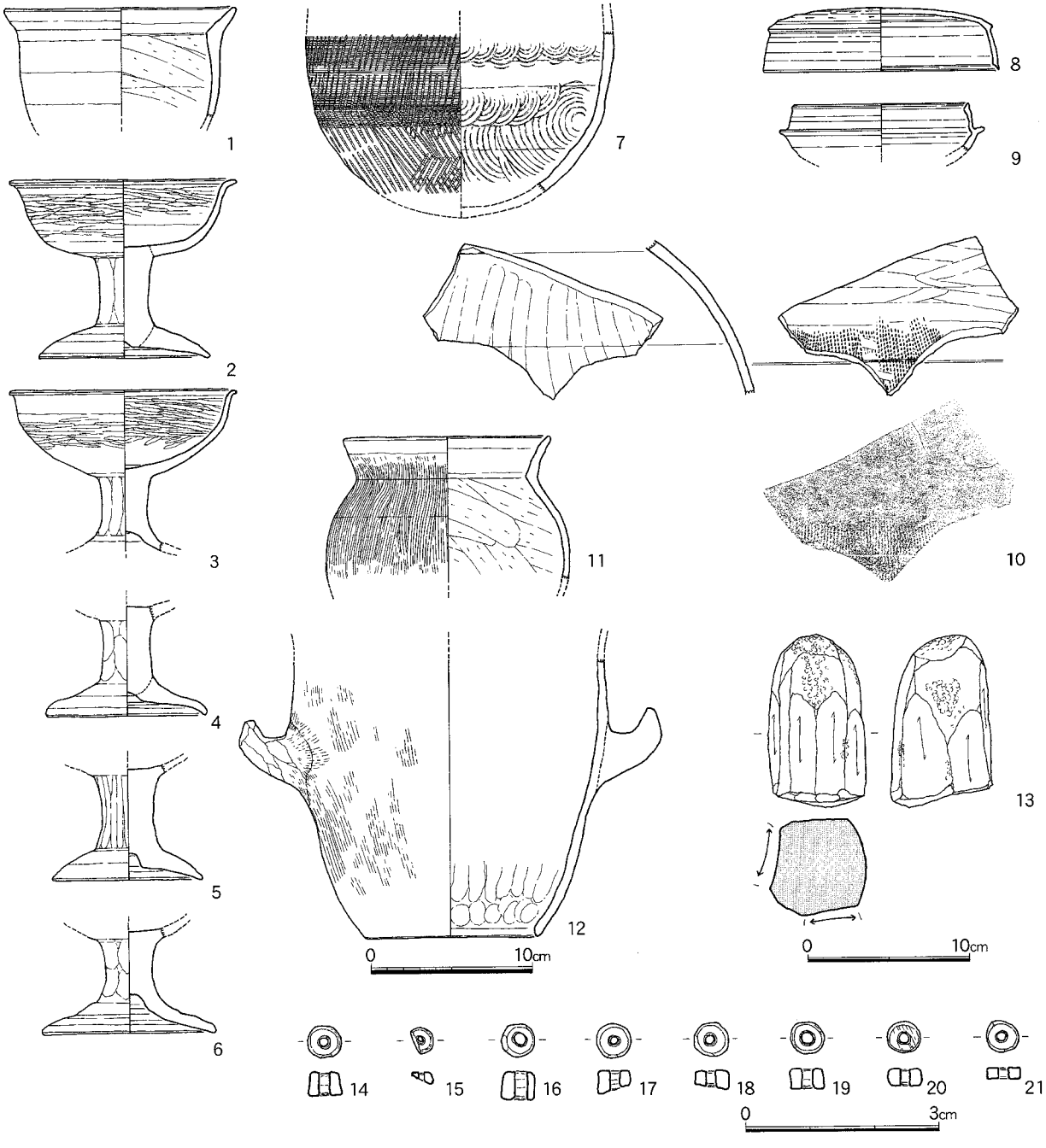


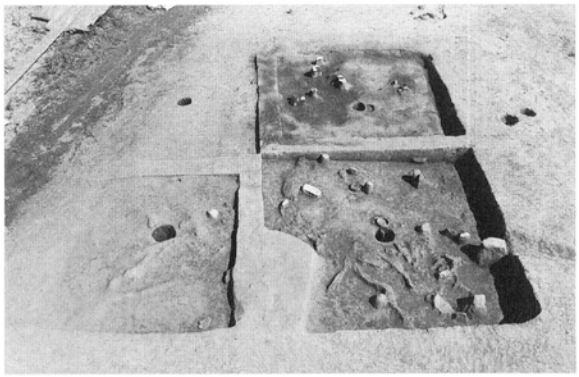
Fig.41 SC-0048・SC-0049出土遺物実測図 (S=1/1・1/4)

SC-0050（Fig.42）

I･J-6･7区で検出した方形竪穴住居である。耕作地開墾によって全体的に削平を受けるが特に東側が大きく削平されており、住居東側は完全に消滅している。推定される平面形は方形となり、長軸545cm×短軸505cm、検出面から床面までの深さは５～25cm前後を測る。検出面の標高は7.40m前後を測る。住居の主軸はN－55°－W方向を採り、住居北西側には粘土で形成されたカマドが付設される。壁溝は西側方向が山側（丘陵頂部方向）に位置するため、住居西側半分のみに掘削されており谷側（丘陵裾部方向）に当たる東側残存部では検出されない。検出された主柱は四本柱で各柱穴は直径20～30cm前後を測り、住居床面から柱穴底面までは30～40cm前後の深さを測る。SC-0047と同様に床面直上において住居中央方向を向く直径10～15cm前後、長さ50cm前後の炭化材が検出される。炭化材の検出はSC-0047に比べ少量ではあるが、床面直上にはSC-0047と同様に炭化物を大量に含む焼土が堆積しており、SC-0050についても焼失住居である可能性が考えられる。炭化材の小片も同様に住居中央方向を向いた状態のものが多く、焼け落ちた屋根材の一部または壁材の可能性が考えられる。

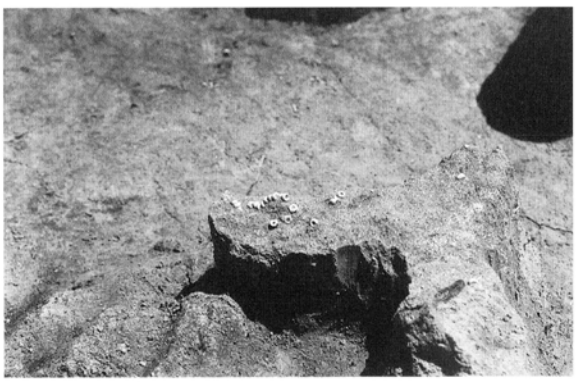
削平により住居の残存は浅く、埋土の大半も削平されていた。上層には炭化物と焼土ブロックを含む暗灰褐色砂質土が堆積しており、床面直上の下層には炭化材・炭化物・焼土・土器などを多量に含む暗褐色土が堆積する。埋土上層に堆積する暗灰褐色砂質土層は、丘陵頂部方向の西側部分に厚く堆積しており、雨水などにより乖離した砂質を多く含む自然堆積層であることが分かる。乾燥すると非常に硬く締まる堆積層で、他の住居埋土上層にも共通して観察できる土層である。

住居南東側中央には不定形の掘り込みが検出される。カマドと正対する位置に掘削された土坑であり、住居出入り口の可能性が考えられる。床面より50cmほど掘り下げられており、階段状に段を有する。削平が著しく住居壁とどのような位置関係を持つのかは現状では不明である。



Ph.62 SC-0050調査状況（西から）

Ph.63 SC-0050遺物出土状況（北東から）



Ph.64 SC-0050遺物出土状況・滑石臼玉（西から）

Ph.65 SC-0050遺物出土状況・滑石臼玉（東から）

住居床面上からは炭化材の他に土師器高坏・土師器甑・須恵器瑳・砥石などの石材などの遺物が検出された。この他に滑石製臼玉が三カ所に集中して検出された。いずれも住居西側壁付近での検出である。北側よりP1・P2・P3として取り上げを行った。P1では20点以上の滑石製臼玉が検出されたが（Ph.64）、これらの臼玉は有機物の紐などで連結されていた状態で検出された。紐などの痕跡は検出されなかった。P2では30点以上の臼玉が出土しているが、連結された状態ではなく床面より10cmほどの高さに散乱した状況で検出される（Ph.65）。住居埋没途中に投棄された可能性が考えられる。P3とした臼玉群では90点以上の滑石製臼玉が出土した。床面直上に10cm×20cmの範囲に密集した状態で検出されたが、P1のように連結された状況ではなく散乱している状況であった。

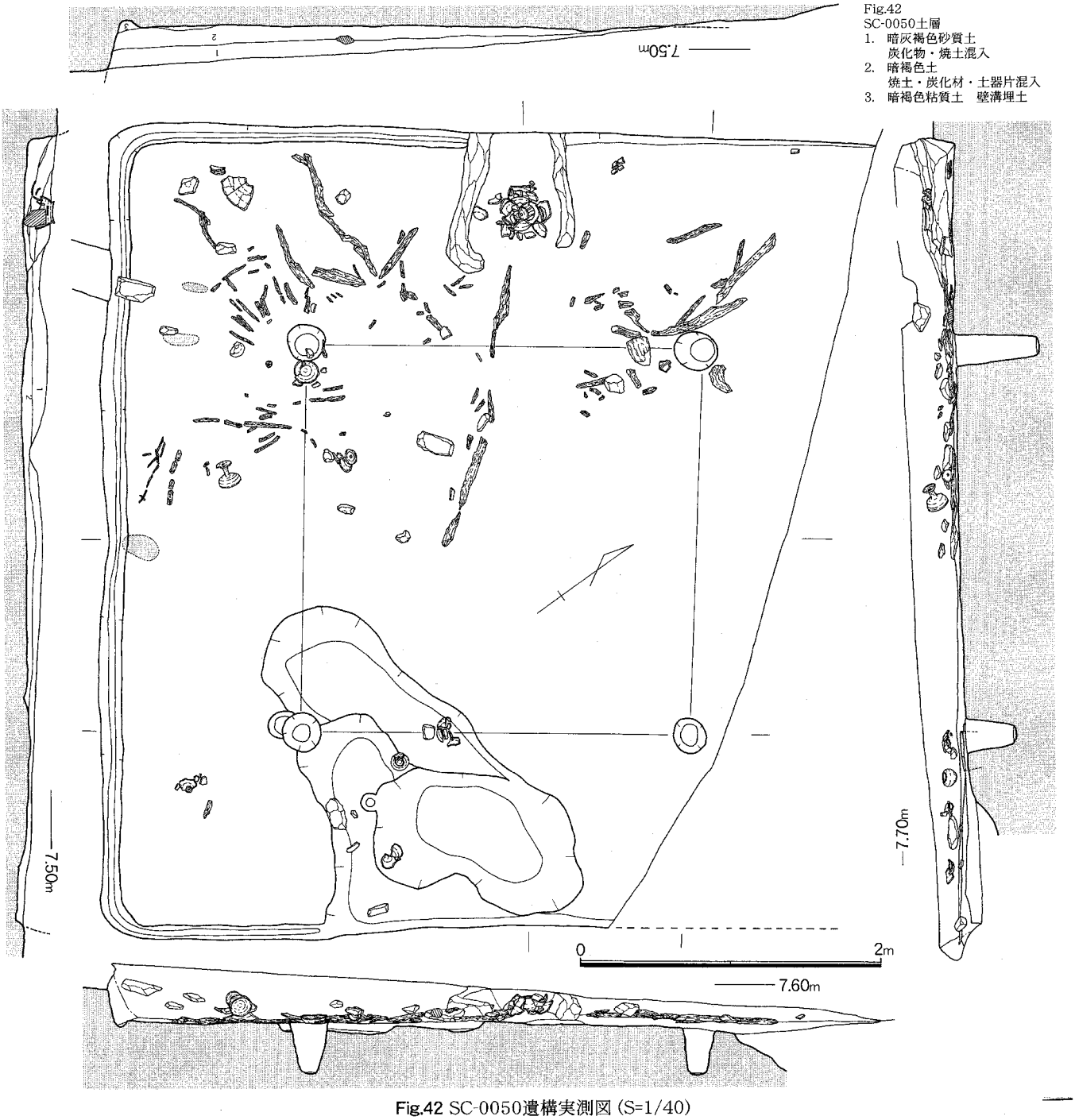


Fig.42 SC-0050遺構実測図（S=1/40）

カマドは住居北西側壁中央部付近で検出された。上部は削平によって既に失われていたが、20cmほどの高さで両袖部が残存していた。煙道などの施設は削平により消滅しており検出されなかった。カマド壁体は白色粘土ではなく、橙色～赤褐色の粘土を用いた構築されており、カマド内部の土層は三層に分けられ、上層から住居埋土上層と同一の暗灰褐色砂質土層が堆積し、中層には炭化物を含む暗褐色土が堆積する。下層には灰・炭化物と焼土ブロックを多量に含む暗黄褐色土が堆積する。これらの埋土は土層毎にサンプリングし水洗を行ったが、穀物などの遺存体は検出できなかった。カマド内部には、支脚として使用したと考えられる角柱状の石材が中央部に据えられており、これに胴部中位から底部を打ち欠いた土師器の壺上半部を覆い被せていた。打ち欠いた壺の底部の破片は支脚石を取り囲むように据えられた状態で検出され、壺の上半部内からは土師器高坏脚部片が支脚石に載せられた状態で検出された。この他には土師器埦・土師器高坏がカマド内から出土した。この遺物群は住居を廃絶する際に行われたカマド祭祀の痕跡と考えられる。前述のSC-0047とは異なりSC-0050は廃絶した後に何らかの原因で焼失したものか、人為的に焼失させられたものであることを考えることができる。

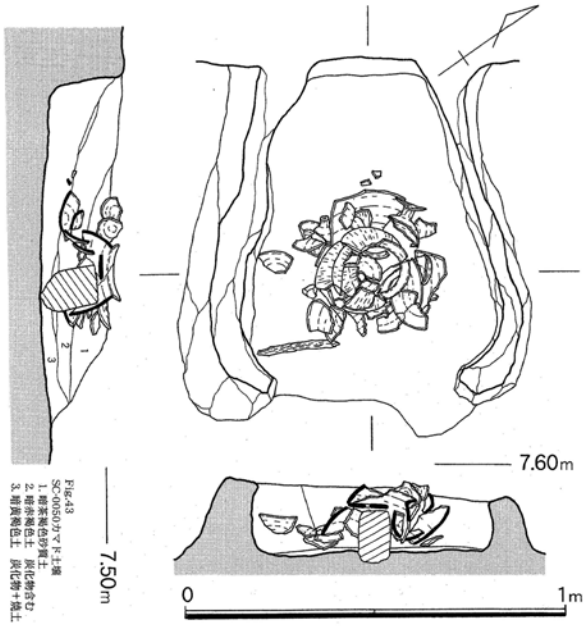
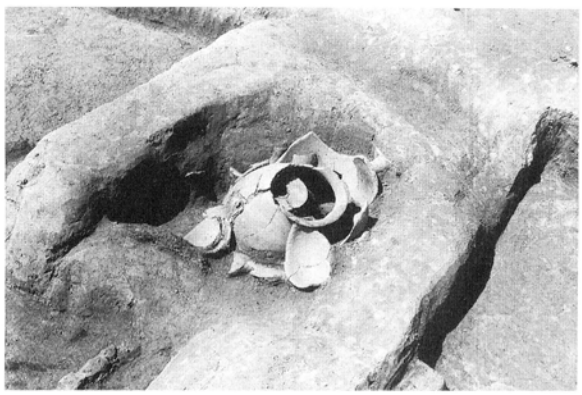
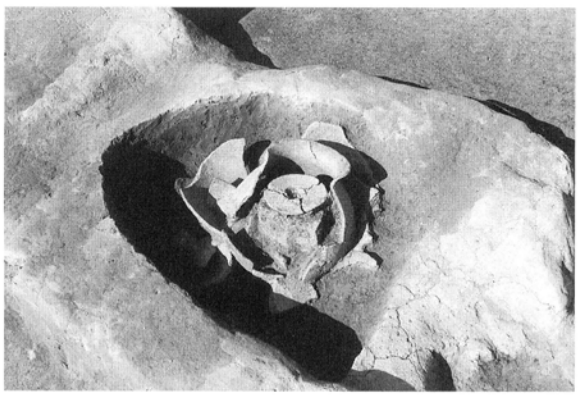
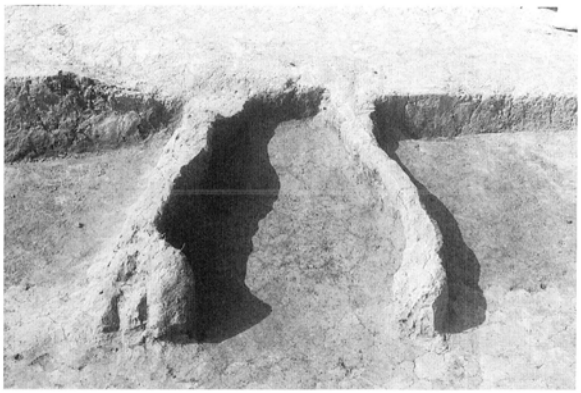


Fig.43 SC-0050カマド実測図（S=1/20）


Ph.66 SC-0050カマド検出状況（北東から）


Ph.67 SC-0050カマド検出状況（南から）


Ph.68 SC-0050カマド完掘状況（南東から）

Ph.69 SC-0050カマド検出状況（北から）

Fig.44.45.46に出土遺物を示した。

1は滑石製紡錘車である。直径5.0cm、器厚1.5cm、孔径0.8cm前後を測る。側面には横方向の研磨を施した後に縦方向の研磨を加えている。また、側面には金属器などによって「舟」を表現したものと考えられる線刻を施す。また下面にも研磨を施した後に線刻を加えてあるが、何を表現したものかは判断できない。2は石錘である。石材の長軸両端を打ち欠いて紐掛け部を造り出す。重量は80.4gである。

3は須恵器瓶である。頸部より上を欠損する。残存高は7.0cmを測る。底部は叩きで成形され、胴部中位には突帯を二条造り出し、その中に櫛状工具突端部による刺突文を巡らす。4は土師器の埦である。口径14.0cm、器高5.8cmを測り、体部中程より内反する口縁部を持つ。5～12は土師器の高坏である。5は復元口径13.2cmを測る。口縁部はわずかに内反する。6・7は脚部を接合部より欠損する。口縁部下から外反する体部を持つ。口径は共に13.8cmを測る。7は外器面にヘラ磨きの痕跡が観察できる。9は坏部との接合部より底部に向かって直線的に開く脚部を持つ。10は口径12.2cm、底径10.0cm、器高11.1cmを測る。11は口径13.2cm、底径10.4cm、器高11.0cmを測る。10・11は内反する口縁部を持つ。12は外反する口縁部を持ち、口径14.2cm、底径10.2cm、器高9.9cmを測る。　13・14は土師器の壺である。13は口径24.2cm、残存高5.3cmを測る。14はカマド内に据えられていた壺で、口径16.2cm、器高30.4cmを測る。長胴で、底部はほぼ球形を呈する。外器面は底部付近が摩滅のため調整痕が観察できないが、胴部には縦位の刷毛目調整が施される。頸部より口縁部付近はナデ調整が施される。内器面には底部付近で内底部より反時計回り方向のヘラ削りが施され、口縁部付近はナデ調整が施される。

15は土師器甑の胴部片である。底孔径は7.0cmを測り、残存高は13.5cmを測る。外底部付近は摩滅のため調整痕は消滅し、胴部には縦位の刷毛目調整が施される。内器面には底部付近に指ナデ調整の痕跡が見られ、その上位にはヘラ削りが施される。

16～262は滑石製臼玉である。Fig.45-16～107は色調が黒褐色を呈する滑石を原材料として製作されたもの

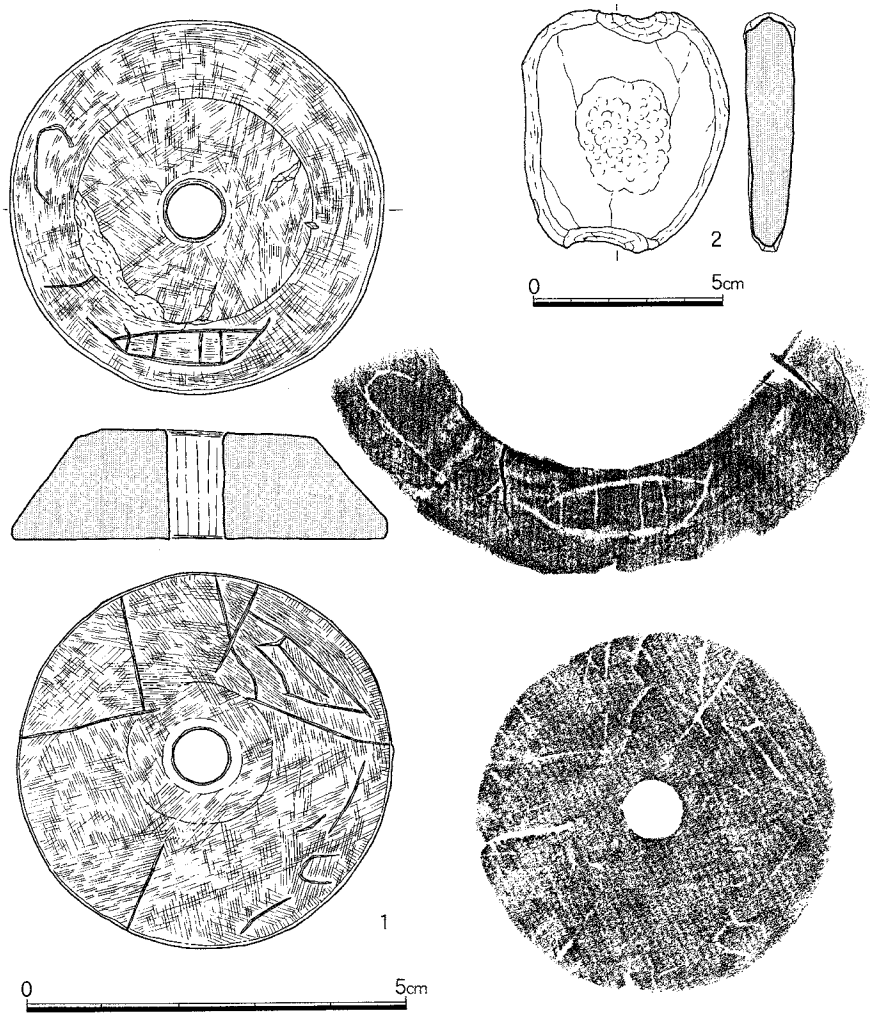


Fig.44 SC-0050出土遺物実測図1（S=1/1・1/2）

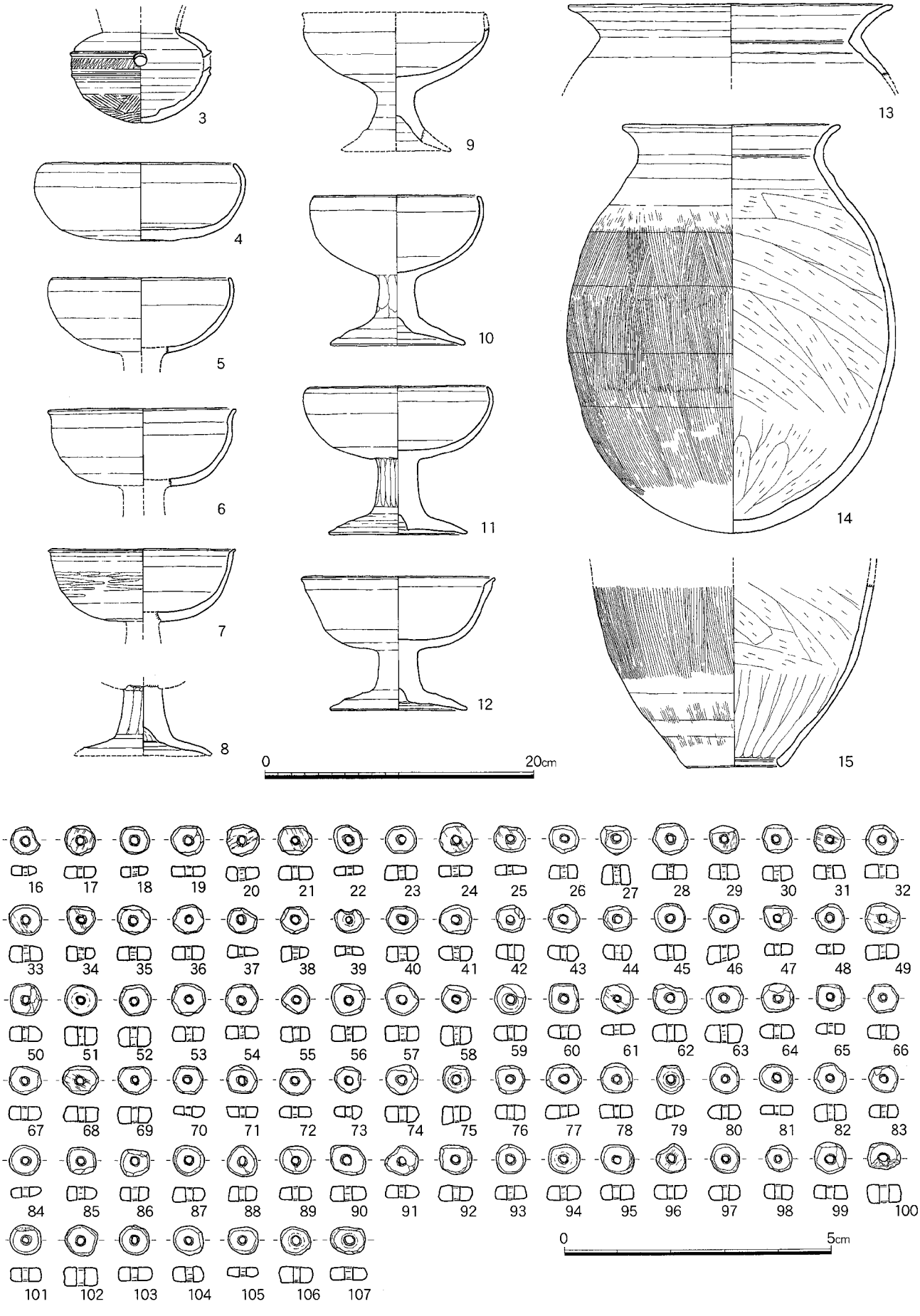


Fig.45 SC-0050出土遺物実測図２（S=1/1・1/4）

で今回の調査ではSC-0050のみで検出された滑石である。

Fig.46-108～262は周辺で検出される通有の滑石を原材料として製作された臼玉である。各臼玉の法量・重量は表２に示した。16～107までの臼玉をＡ群とし、108～262の臼玉をＢ群とし各々の計測値の平均を見ると、Ａ群の臼玉の方が直径で１㎜ほど大きいことが分かる。器厚は完存品だけでの平均値を採ってみると両群とも大差なく４㎜前後を測る。前述の通りＡ群とした黒褐色の臼玉はSC-0050からのみの出土であり、遺跡外から持ち込まれたものである可能性も考えられる。

SC-0050とした住居からは図示したものを含めて300点以上の滑石製臼玉が出土しているが、未製品・滑石屑の出土はほとんどなく、製品として完成したものだけが出土する点に注目される。床面直上から検出される臼玉群は、住居廃絶に伴う祭祀の段階に人為的に投棄された可能性も考えられる。

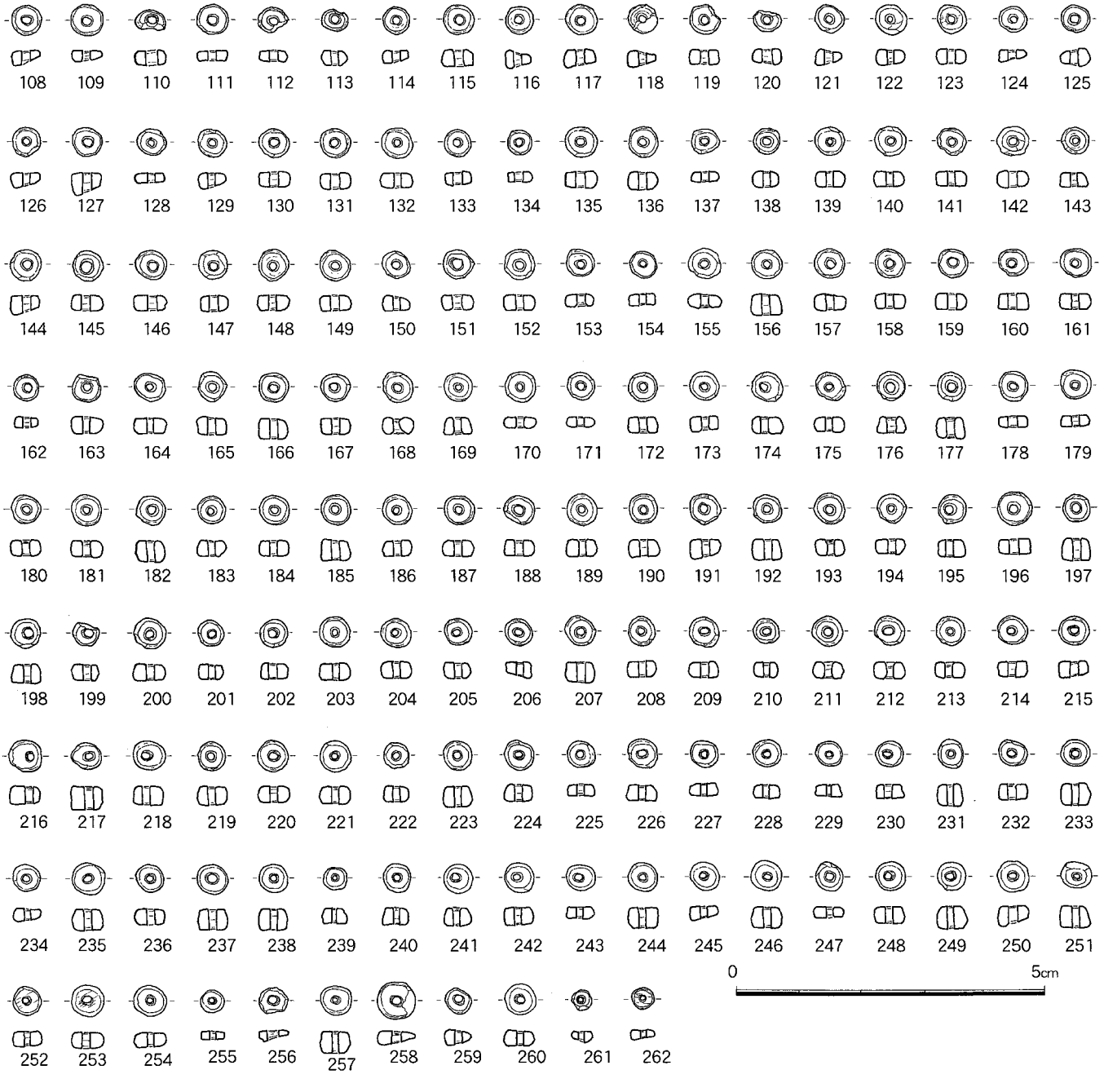


Fig.46 SC-0050出土遺物実測図３（S=1/1）

SC-0050出土滑石製臼玉計測表

図面番号	法量(mm)	重量(g)	石材	図面番号	法量(mm)	重量(g)	石材	図面番号	法量(mm)	重量(g)	石材
Fig.45-16	5.8×5.5×1.0	0.07	黒褐色滑石	Fig.46-108	4.5×4.48×2.5	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-200	4.7×4.7×2.69	0.10	緑灰色滑石
Fig.45-17	1.1×5.9×1.8	0.07	黒褐色滑石	Fig.46-109	5.1×5.0×1.9	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-201	4.2×4.2×2.7	0.08	緑灰色滑石
Fig.45-18	5.9×5.8×1.9	0.07	黒褐色滑石	Fig.46-110	5.0×3.3×2.3	0.04	緑灰色滑石	Fig.46-202	4.4×4.3×2.7	0.06	緑灰色滑石
Fig.45-19	6.2×6.0×1.8	0.09	黒褐色滑石	Fig.46-111	4.8×4.7×1.8	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-203	4.91×4.9×2.85	0.08	緑灰色滑石
Fig.45-20	6.2×6.0×2.15	0.13	黒褐色滑石	Fig.46-112	4.52×3.7×1.65	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-204	4.9×4.8×2.7	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-21	6.2×5.6×2.2	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-113	4.7×3.8×2.4	0.04	緑灰色滑石	Fig.46-205	4.8×4.7×2.4	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-22	5.9×5.9×1.32	0.05	黒褐色滑石	Fig.46-114	4.28×4.2×2.1	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-206	4.9×4.7×2.2	0.06	緑灰色滑石
Fig.45-23	6.0×5.9×2.3	0.17	黒褐色滑石	Fig.46-115	5.05×5.0×2.7	0.11	緑灰色滑石	Fig.46-207	4.8×4.7×3.1	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-24	6.1×6.1×1.9	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-116	4.3×4.2×2.95	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-208	4.9×4.8×2.3	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-25	6.05×5.7×1.7	0.13	黒褐色滑石	Fig.46-117	5.15×5.0×2.9	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-209	4.95×4.95×2.62	0.10	緑灰色滑石
Fig.45-26	5.7×5.3×2.48	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-118	4.45×4.4×2.9	0.08	緑灰色滑石	Fig.46-210	4.2×4.08×2.5	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-27	6.0×5.5×3.5	0.19	黒褐色滑石	Fig.46-119	5.1×4.65×2.1	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-211	4.75×4.75×2.41	0.08	緑灰色滑石
Fig.45-28	6.3×6.0×2.5	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-120	4.35×3.6×2.5	0.06	緑灰色滑石	Fig.46-212	5.1×4.7×2.7	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-29	5.9×5.7×2.7	0.17	黒褐色滑石	Fig.46-121	4.4×4.2×2.4	0.04	緑灰色滑石	Fig.46-213	5.0×4.9×2.3	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-30	6.0×5.8×2.8	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-122	4.9×4.5×2.4	0.09	緑灰色滑石	Fig.46-214	4.7×4.7×2.35	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-31	6.1×5.8×2.4	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-123	4.5×4.5×2.02	0.08	緑灰色滑石	Fig.46-215	4.5×4.4×2.3	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-32	6.1×5.7×2.45	0.17	黒褐色滑石	Fig.46-124	4.12×4.05×1.79	0.08	緑灰色滑石	Fig.46-216	5.9×5.6×2.8	0.16	緑灰色滑石
Fig.45-33	6.1×6.1×2.1	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-125	4.5×4.38×2.8	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-217	5.12×4.5×3.8	0.15	緑灰色滑石
Fig.45-34	5.6×5.5×2.45	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-126	5.1×5.0×2.0	0.06	緑灰色滑石	Fig.46-218	4.75×4.7×2.99	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-35	6.1×5.8×2.58	0.18	黒褐色滑石	Fig.46-127	4.5×4.42×3.3	0.12	緑灰色滑石	Fig.46-219	4.8×4.65×3.0	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-36	6.05×5.9×2.3	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-128	4.3×4.18×1.75	0.06	緑灰色滑石	Fig.46-220	4.9×4.85×2.8	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-37	6.1×5.2×1.9	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-129	4.3×4.2×2.7	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-221	5.0×5.0×2.8	0.12	緑灰色滑石
Fig.45-38	5.95×5.8×2.85	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-130	4.8×4.6×2.08	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-222	4.5×4.0×2.7	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-39	5.9×5.1×1.9	0.09	黒褐色滑石	Fig.46-131	4.7×4.6×2.39	0.06	緑灰色滑石	Fig.46-223	4.5×4.4×3.18	0.10	緑灰色滑石
Fig.45-40	6.0×5.75×2.7	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-132	4.52×4.5×2.09	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-224	5.05×4.9×2.68	0.10	緑灰色滑石
Fig.45-41	6.0×5.6×2.7	0.16	黒褐色滑石	Fig.46-133	4.3×4.2×1.9	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-225	4.3×4.3×1.95	0.06	緑灰色滑石
Fig.45-42	6.2×6.0×2.6	0.17	黒褐色滑石	Fig.46-134	4.18×4.08×1.6	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-226	4.9×4.8×2.5	0.10	緑灰色滑石
Fig.45-43	6.0×5.35×2.7	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-135	5.1×4.7×2.7	0.11	緑灰色滑石	Fig.46-227	4.3×4.3×1.99	0.05	緑灰色滑石
Fig.45-44	5.8×5.7×2.5	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-136	4.88×4.8×2.8	0.08	緑灰色滑石	Fig.46-228	4.6×4.6×2.2	0.05	緑灰色滑石
Fig.45-45	6.0×5.95×2.82	0.17	黒褐色滑石	Fig.46-137	4.45×4.1×1.98	0.06	緑灰色滑石	Fig.46-229	4.3×4.2×1.8	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-46	6.1×5.5×3.4	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-138	4.42×4.42×2.48	0.08	緑灰色滑石	Fig.46-230	4.6×4.6×2.4	0.08	緑灰色滑石
Fig.45-47	5.9×5.45×1.9	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-139	4.8×4.72×2.58	0.10	緑灰色滑石	Fig.46-231	4.7×4.58×3.4	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-48	5.9×5.5×1.8	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-140	4.8×4.7×2.3	0.09	緑灰色滑石	Fig.46-232	4.8×4.42×2.7	0.08	緑灰色滑石
Fig.45-49	6.7×5.95×2.9	0.19	黒褐色滑石	Fig.46-141	4.8×4.72×2.4	0.08	緑灰色滑石	Fig.46-233	4.4×4.3×3.5	0.09	緑灰色滑石
Fig.45-50	6.05×5.95×2.6	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-142	5.2×4.75×2.55	0.10	緑灰色滑石	Fig.46-234	4.5×4.5×2.0	0.05	緑灰色滑石
Fig.45-51	6.0×5.9×3.5	0.21	黒褐色滑石	Fig.46-143	4.2×4.12×1.75	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-235	5.8×5.7×3.5	0.19	緑灰色滑石
Fig.45-52	6.0×5.5×3.5	0.20	黒褐色滑石	Fig.46-144	4.55×4.52×3.0	0.10	緑灰色滑石	Fig.46-236	4.8×4.65×2.35	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-53	6.3×6.0×2.6	0.18	黒褐色滑石	Fig.46-145	4.7×4.7×2.28	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-237	4.9×4.75×3.7	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-54	6.2×6.0×2.0	0.13	黒褐色滑石	Fig.46-146	4.8×4.78×2.15	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-238	5.1×5.1×3.5	0.18	緑灰色滑石
Fig.45-55	5.65×5.65×2.5	0.12	黒褐色滑石	Fig.46-147	4.7×4.58×2.2	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-239	4.5×3.7×3.0	0.06	緑灰色滑石
Fig.45-56	6.2×6.15×2.75	0.20	黒褐色滑石	Fig.46-148	5.1×5.08×2.62	0.10	緑灰色滑石	Fig.46-240	4.7×4.7×2.9	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-57	6.1×6.0×2.9	0.16	黒褐色滑石	Fig.46-149	4.9×4.75×2.55	0.10	緑灰色滑石	Fig.46-241	5.08×4.8×2.9	0.13	緑灰色滑石
Fig.45-58	5.9×5.7×3.1	0.18	黒褐色滑石	Fig.46-150	4.8×4.3×2.89	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-242	4.9×4.9×2.8	0.12	緑灰色滑石
Fig.45-59	6.0×6.0×2.4	0.13	黒褐色滑石	Fig.46-151	5.02×4.8×2.38	0.04	緑灰色滑石	Fig.46-243	4.7×4.7×1.9	0.05	緑灰色滑石
Fig.45-60	5.9×5.9×2.28	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-152	4.7×4.55×2.1	0.06	緑灰色滑石	Fig.46-244	4.7×4.5×3.22	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-61	6.2×5.9×1.2	0.06	黒褐色滑石	Fig.46-153	4.5×4.5×1.9	0.04	緑灰色滑石	Fig.46-245	4.6×4.6×2.3	0.06	緑灰色滑石
Fig.45-62	6.2×5.6×2.9	0.17	黒褐色滑石	Fig.46-154	4.2×4.1×1.82	0.06	緑灰色滑石	Fig.46-246	4.9×4.8×3.1	0.12	緑灰色滑石
Fig.45-63	6.3×5.7×2.9	0.19	黒褐色滑石	Fig.46-155	5.09×5.09×2.0	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-247	4.3×4.1×1.5	0.05	緑灰色滑石
Fig.45-64	6.2×5.6×2.7	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-156	4.5×4.4×3.4	0.14	緑灰色滑石	Fig.46-248	4.95×4.8×2.3	0.10	緑灰色滑石
Fig.45-65	5.7×5.5×1.9	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-157	4. 8×4.5×2.2	0.06	緑灰色滑石	Fig.46-249	4.5×4.5×3.5	0.12	緑灰色滑石
Fig.45-66	5.9×5.9×2.3	0.12	黒褐色滑石	Fig.46-158	4.9×4.88×2.19	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-250	5.7×5.7×3.08	0.14	緑灰色滑石
Fig.45-67	6.0×5.5×2.5	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-159	4.7×4.3×2.58	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-251	5.32×4.8×3.2	0.13	緑灰色滑石
Fig.45-68	6.25×5.7×2.8	0.18	黒褐色滑石	Fig.46-160	4.8×4.65×2.8	0.09	緑灰色滑石	Fig.46-252	4.9×4.9×2.25	0.07	緑灰色滑石
Fig.45-69	6.15×5.75×2.9	0.18	黒褐色滑石	Fig.46-161	4.8×4.5×2.38	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-253	5.0×4.7×2.5	0.10	緑灰色滑石
Fig.45-70	6.0×5.7×2.3	0.09	黒褐色滑石	Fig.46-162	4.4×4.2×1.5	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-254	5.5×5.45×2.7	0.12	緑灰色滑石
Fig.45-71	5.8×5.7×1.85	0.07	黒褐色滑石	Fig.46-163	4.9×4.1×2.2	0.04	緑灰色滑石	Fig.46-255	4.0×3.9×1.3	0.01	緑灰色滑石
Fig.45-72	6.0×5.2×2.0	0.10	黒褐色滑石	Fig.46-164	4.85×4.3×2.1	0.05	緑灰色滑石	Fig.46-256	4.92×4.2×1.0	0.03	緑灰色滑石
Fig.45-73	5.85×5.4×2.2	0.08	黒褐色滑石	Fig.46-165	4.7×4.48×2.65	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-257	5.4×5.4×3.1	0.18	緑灰色滑石
Fig.45-74	6.2×5.9×2.7	0.17	黒褐色滑石	Fig.46-166	4.59×4.59×3.15	0.09	緑灰色滑石	Fig.46-258	6.15×6.0×2.0	0.11	緑灰色滑石
Fig.45-75	5.7×5.6×3.42	0.18	黒褐色滑石	Fig.46-167	4.98×4.35×2.8	0.07	緑灰色滑石	Fig.46-259	4.5×2.9×2.4	0.03	緑灰色滑石
Fig.45-76	5.85×5.55×2.5	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-168	4.95×4.9×2.5	0.09	緑灰色滑石	Fig.46-260	5.7×5.5×2.49	0.13	緑灰色滑石
Fig.45-77	6.2×5.9×2.9	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-169	4.5×4.5×2.9	0.10	緑灰色滑石	Fig.46-261	3.7×3.5×1.45	0.02	緑灰色滑石
Fig.45-78	6.2×6.0×2.15	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-170	4.85×4.8×1.91	0.06	緑灰色滑石	Fig.46-262	4.08×4.08×1.0	0.03	緑灰色滑石
Fig.45-79	5.9×5.7×2.9	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-171	4.8×4.65×1.75	0.07	緑灰色滑石				
Fig.45-80	6.0×6.0×2.8	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-172	4.51×4.51×2.19	0.09	緑灰色滑石				
Fig.45-81	6.2×5.75×1.75	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-173	4.6×4.6×2.18	0.04	緑灰色滑石				
Fig.45-82	6.2×5.8×2.9	0.20	黒褐色滑石	Fig.46-174	5.1×4.7×2.7	0.11	緑灰色滑石				
Fig.45-83	6.05×5.2×2.4	0.10	黒褐色滑石	Fig.46-175	4.8×4.8×2.38	0.07	緑灰色滑石				
Fig.45-84	6.0×6.0×2.0	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-176	4.6×4.4×2.49	0.07	緑灰色滑石				
Fig.45-85	5.9×5.6×2.1	0.10	黒褐色滑石	Fig.46-177	4.8×4.8×3.1	0.14	緑灰色滑石				
Fig.45-86	5.65×5.0×2.7	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-178	4.41×4.41×1.81	0.07	緑灰色滑石				
Fig.45-87	6.02×5.8×2.92	0.17	黒褐色滑石	Fig.46-179	5.1×4.8×1.92	0.06	緑灰色滑石				
Fig.45-88	6.2×5.92×2.8	0.17	黒褐色滑石	Fig.46-180	4.92×4.92×2.48	0.10	緑灰色滑石				
Fig.45-89	6.0×5.92×2.1	0.11	黒褐色滑石	Fig.46-181	5.1×5.08×2.7	0.11	緑灰色滑石				
Fig.45-90	6.7×6.25×2.4	0.16	黒褐色滑石	Fig.46-182	4.7×4.5×3.4	0.10	緑灰色滑石				
Fig.45-91	6.25×5.75×2.0	0.13	黒褐色滑石	Fig.46-183	4.65×4.6×2.52	0.07	緑灰色滑石				
Fig.45-92	6.0×5.7×2.5	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-184	5.0×4.98×2.11	0.07	緑灰色滑石				
Fig.45-93	5.95×5.8×2.4	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-185	4.7×4.69×3.1	0.11	緑灰色滑石				
Fig.45-94	6.1×5.7×2.75	0.16	黒褐色滑石	Fig.46-186	4.7×4.7×2.2	0.07	緑灰色滑石				
Fig.45-95	6.2×5.8×2.5	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-187	4.8×4.8×2.6	0.09	緑灰色滑石				
Fig.45-96	6.1×5.7×2.1	0.12	黒褐色滑石	Fig.46-188	4.75×4.7×2.15	0.09	緑灰色滑石				
Fig.45-97	5.95×5.7×2.58	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-189	4.82×4.82×2.8	0.12	緑灰色滑石				
Fig.45-98	5.6×5.3×2.8	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-190	4.8×4.7×2.6	0.07	緑灰色滑石				
Fig.45-99	6.4×6.1×2.2	0.14	黒褐色滑石	Fig.46-191	4.69×4.5×3.05	0.08	緑灰色滑石				
Fig.45-100	6.2×5.15×3.1	0.10	黒褐色滑石	Fig.46-192	4.6×4.5×3.2	0.11	緑灰色滑石				
Fig.45-101	5.9×5.7×2.5	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-193	4.9×4.9×2.6	0.09	緑灰色滑石				
Fig.45-102	6.0×5.7×3.3	0.19	黒褐色滑石	Fig.46-194	4.9×4.9×2.49	0.09	緑灰色滑石				
Fig.45-103	6.0×5.78×2.4	0.16	黒褐色滑石	Fig.46-195	4.65×4.6×2.85	0.10	緑灰色滑石				
Fig.45-104	6.1×5.8×2.5	0.15	黒褐色滑石	Fig.46-196	5.7×5.6×2.4	0.13	緑灰色滑石				
Fig.45-105	5.98×5.1×1.8	0.08	黒褐色滑石	Fig.46-197	4.4×4.2×3.3	0.08	緑灰色滑石				
Fig.45-106	5.8×5.6×3.0	0.16	黒褐色滑石	Fig.46-198	4.95×4.5×2.45	0.08	緑灰色滑石				
Fig.45-107	6.5×5.6×2.3	0.12	黒褐色滑石	Fig.49-199	4.45×3.95×2.85	0.05	緑灰色滑石				

SC-0384（Fig.47）

D-12区で検出した方形竪穴住居である。畑に伴う農水路の掘削によって北西側半分を残して削平され消滅する。残存した部分から復元できる平面形は方形で、残存する北西側では一辺345cm、検出面から床面までの深さは10cmを測る。検出された遺構面の標高は6.20m前後を測り、住居の床面の標高は6.10m前後を測る。壁溝は残存部分が狭く、現状では検出されなかった。主柱は農水路の底面・側面にて検出された。四本柱で各柱穴は床面から50cm前後の深さを測る。住居内には中世の土坑であるSK-0472などの他の遺構が掘削され、カマドなどは検出されなかった。また、住居埋土からの遺物の出土は細片資料ばかりで時期を比定のできる遺物の出土はほとんどなかった。住居埋土は削平により最下層の暗褐色土層のみが観察することができた。検出された部分と各柱穴の位置関係から計測できた住居の主軸はN－28°－W方向を採る。

Fig.50に出土遺物を示した。

1は土師器の壺口縁部片である。復元口径21.8cm、残存高5.0cmを測る。口縁部にナデ調整によって平坦面を造り出す。摩滅を受けており、器面調整の大部分が失われている。4は滑石製石錘である。全長9.4cm、全幅3.5cm、器厚1.4cmを測る。上端部には紐を掛ける抉り部を削りだし、下端部は研磨して面取する。背面はほぼ平坦面となる。

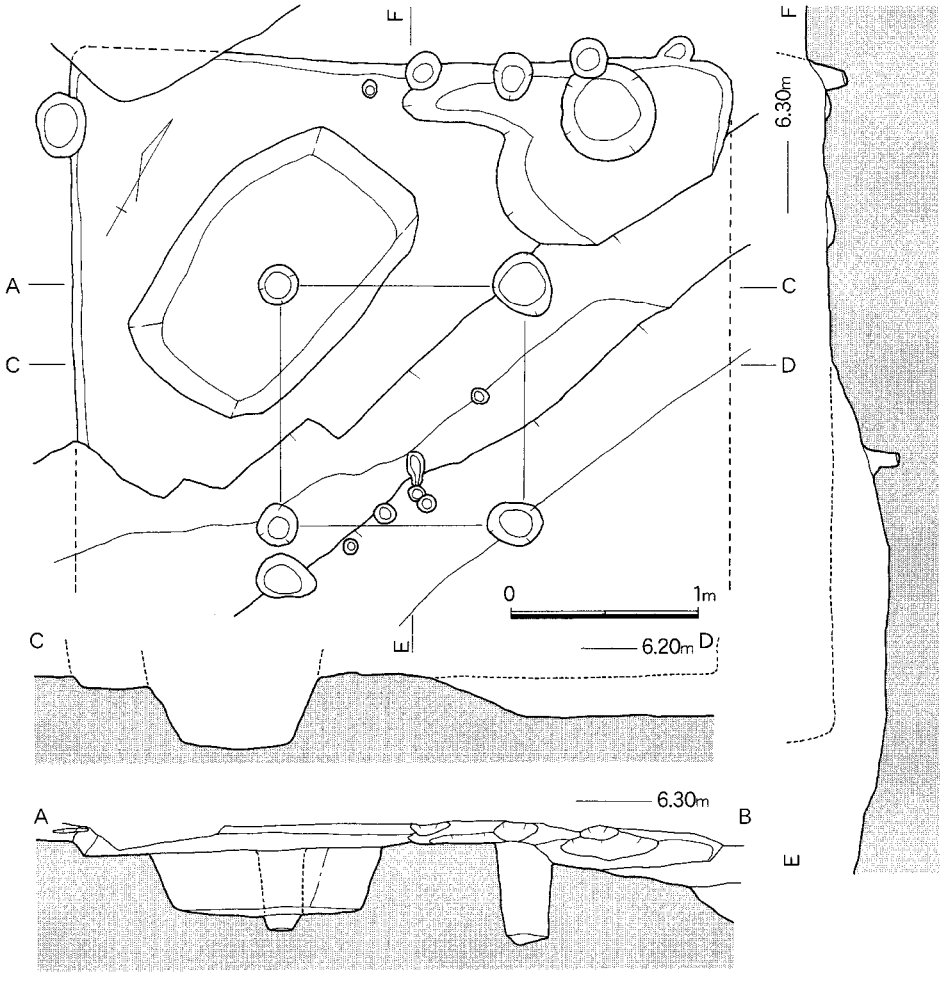


Fig.47 SC-0384遺構実測図（S=1/40）

SC-0386（Fig.48）

D-11区で検出した方形竪穴住居である。丘陵頂部より西側に位置する竪穴住居で、住居北東側部分は中世の溝遺構と農水路によって削平され住居西側が残存する。残存する部分での平面形は方形で長辺450cm×短辺400cmを測る。検出面から床面までの深さは3cm前後を測り、住居を検出した遺構面の標高は6.50m前後を測る。住居の主軸はおおよそN－36°－W前後の方向を採る。全体的に深く削平を受けているために残存は非常に浅く、カマドなどは検出されなかった。住居埋土も下層のみが残存している状態であった。埋土は暗褐色土層で、遺物を極少量含む。住居床面上では主柱が二本検出された。主柱穴は住居中央に並んで検出され、各主柱穴の直径は20～40cmを測り、床面から柱穴底面までの深さは40cm前後を測る。

Fig.50に出土遺物を示した。

2は土師器の甕口縁部片である。復元口径26.2cm、残存高6.2cmを測る。3は土師器小壺口縁部片もしくは高坏脚部片である。わずかに内反する体部を持つ。復元口径15.6cm、残存高3.2cmを測る。5は滑石製勾玉である。全長1.8cm、器厚0.6cm、孔径0.2cmを測る。

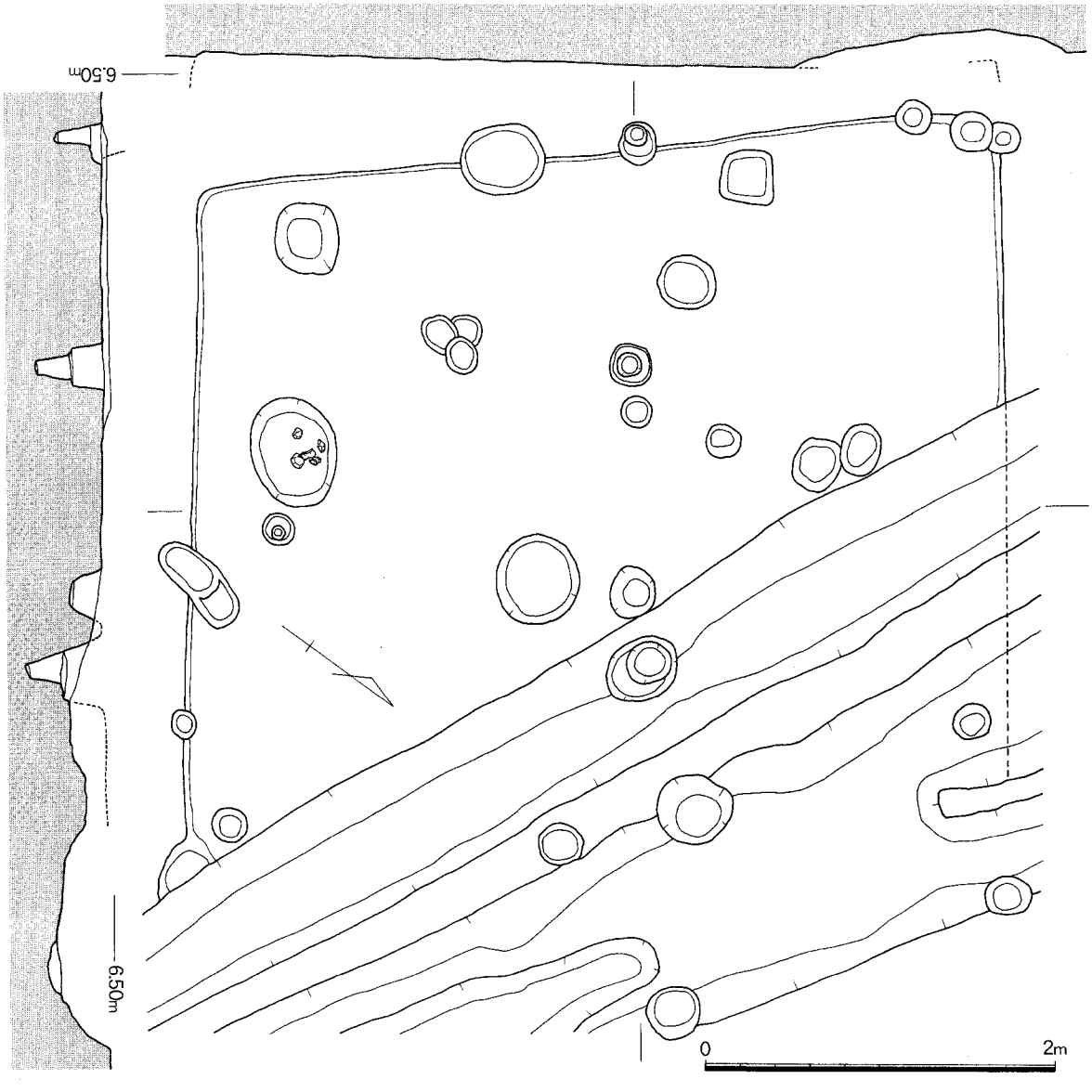


Fig.48 SC-0386遺構実測図（S=1/40）

SC-0387（Fig.49）

E-11区で検出した方形竪穴住居である。住居埋没後にSB-0555が建てられる。現状での平面形は方形で370cm×370cm、検出面から床面までの深さは10～15cm前後を測る。検出を行った遺構面の標高は6.80m前後を測る。本住居を検出したE-11区は本来は丘陵頂部付近の西側斜面であった地点であるため、後世の削平が著しく住居の残存は浅い。他の遺構の残存度合いを考慮して古墳時代からは1m前後の削平が行われているものと考えられる。住居の主軸はN－17°－E方向を採り、住居北西側壁の中央部より東側地点に白色粘土で形成されたカマドが付設される。カマドは破壊されており、白色粘土塊と焼土が集中して検出されるのみである。壁溝は北東隅部のみで検出された。住居の埋土は二層に分層され、上層に暗灰褐色土層が堆積し、下層には暗褐色砂質土が堆積する。下層の暗褐色砂質土層にはA区全体の基盤層である黄褐色粘質土がブロック状に混入する。住居西側には貼床面が見られ10～20cm程の基盤層由来の暗黄白褐色粘質土を貼って床面を整える。

カマドは廃絶時に破壊されたものと考えられ、カマド前面には白色粘土塊が検出される。白色粘土下には焼土と灰が混じった硬化面が観察される。カマド内には全長15cm前後の石材が据えられており、支脚として使用されていたものと考えられる（Ph.71）。

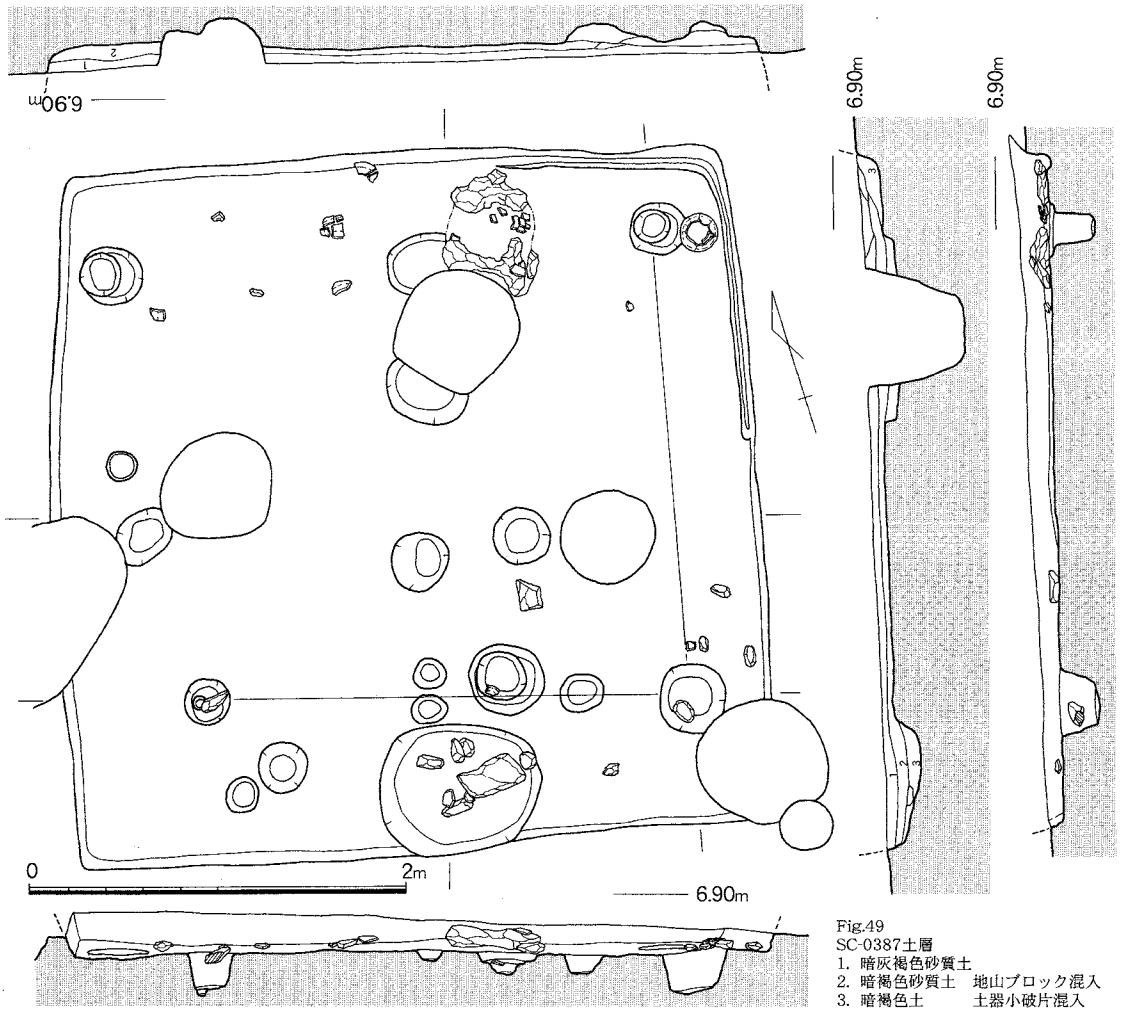
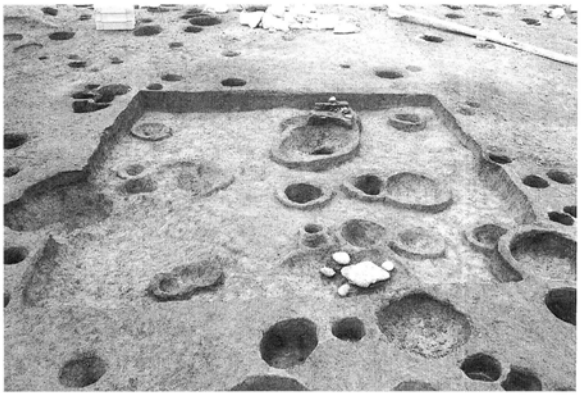


Fig.49 SC-0387遺構実測図（S=1/40）



Ph.70 SC-0387調査状況（南から）

Ph.71 SC-0387カマド検出状況（西から）

カマドと正対する住居南側壁中央部には土坑が検出された。土坑は長径90cm×短径70cm前後の楕円形の平面形を持ち、床面から底面までの深さは15cm前後を測る。土坑内には住居埋土上層と同様の暗灰褐色砂質土が堆積していた。土坑内東側には全長30cm前後の扁平な石材と握り拳大の礫が数点投棄されていた。作業用の台石と叩き石として使用されたものと考えられる。

主柱は住居内側縁部において検出した。四本柱であるが平面形では台形上に配置されている。各柱穴の直径は20cm～30cm前後を測り、床面から柱穴底面までの深さは20～25cm前後を測る。

遺物は土師器・敲打器などの石器類が出土したが、土師器の多くが摩滅のため遺存不良の状態であり図化できなかった。

Fig.50に出土遺物を示した。

6は土師器壺口縁部片である。口径19.6cm、残存高5.9cmを測る。住居北東隅部で口縁部を下にした状態で検出された。住居検出時に既に確認できていたため、削平により頸部より下が欠損したものと考えられる。口縁部は僅かに丸味を帯びて内湾しており、玉縁状を呈する。外器面は摩滅のため横位のナデ調整痕がわずかに観察できるのみである。内器面は反時計回り方向の刷毛目調整が口縁部方向に向かって施される。

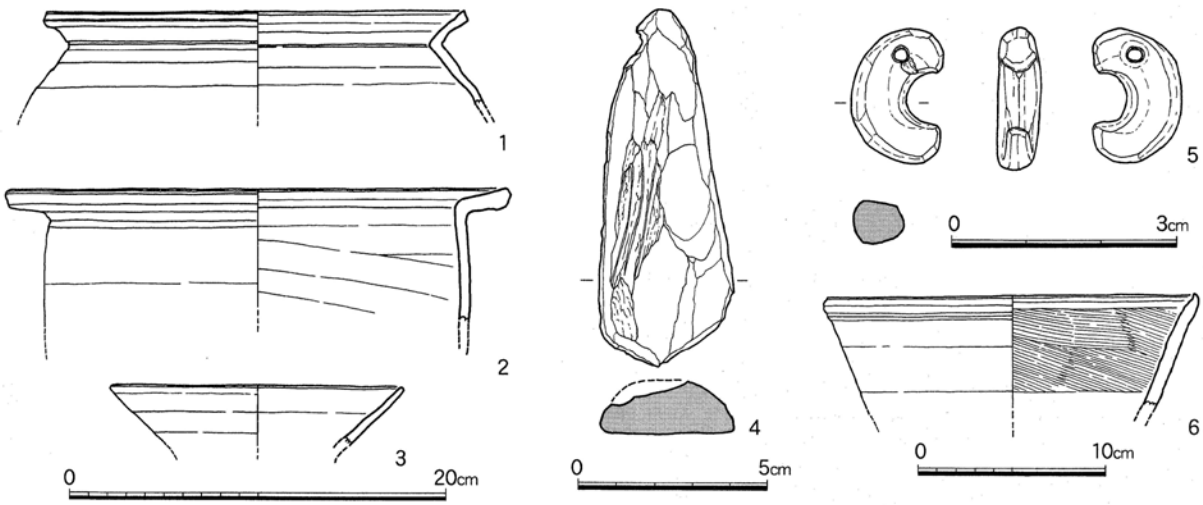


Fig.50 出土遺物実測図（S=1/1・1/2・1/4）

SC-0388（Fig.51）

E-10区で検出した方形竪穴住居である。丘陵南東側に延びる尾根線上に位置しており、開墾によって激しく削平される箇所で検出された住居であり、南東側半分は床面以下まで削平によって失われている。住居全体も削平を受けており、10cm程しか残存していない。住居内埋土は上下二層に分層され、上層には暗灰褐色砂質土層、下層には暗褐色砂質土が堆積する。検出された部分から推測できる平面形は方形で一辺320cmを測る。検出面から床面までの深さは５～10cm前後を測り、検出時の上面の標高は7.20m前後であった。検出された主柱は四本柱であり、各柱穴の直径は20～40cm前後を測り、住居床面から柱穴底面までの深さは20cm前後を測る。 残存する住居壁と主柱穴から計測される住居の主軸はN－67°－W方向を採る。住居北西側壁の北側部分にカマドの痕跡が検出される。廃絶時に破壊されたものと考えられ、白色粘土塊が焼土や土器片と共に、被熱により硬化した床面の上に散乱した状況で検出される。壁溝は検出されなかった。住居中央部付近には直径1.2m前後の円形土坑が検出される。土坑内には暗褐色土が堆積し、土師器壺などの遺物が出土した。

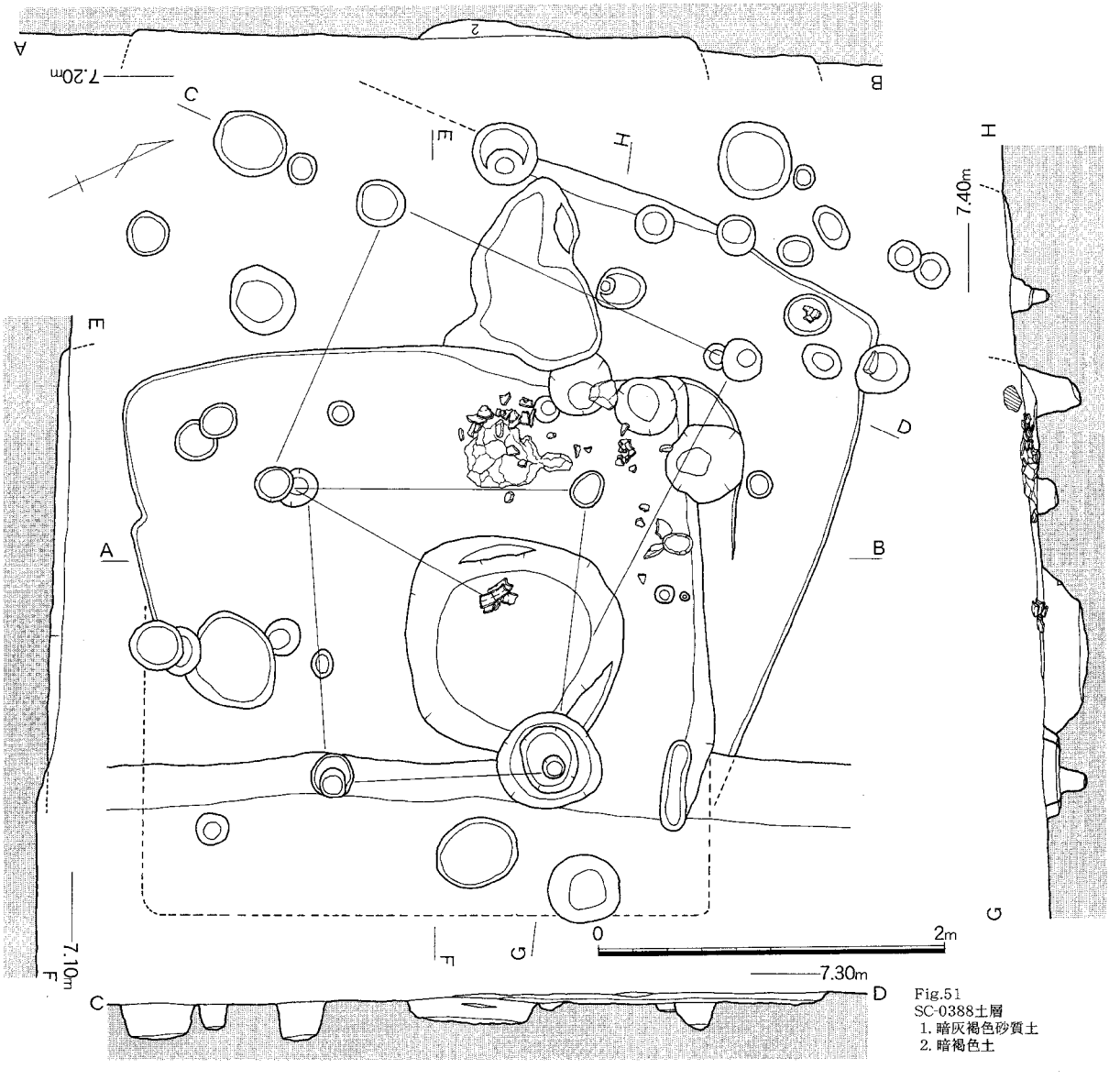
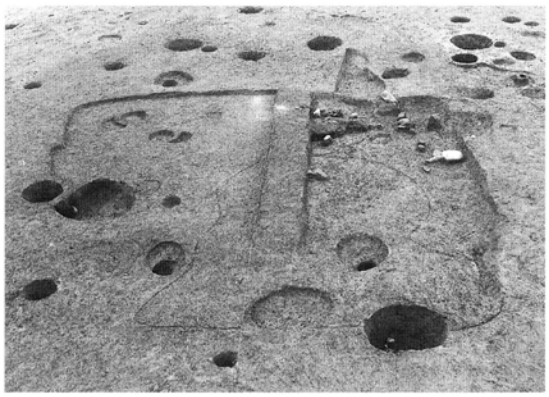


Fig.51 SC-0388・SC-0389遺構実測図（S=1/40）

Fig.52に出土遺物を示した。

１・２は土師器埦である。１は復元口径14.4cm、器高6.5cmを測り、胴部上位より内湾する口縁部を持つ。摩滅を受けており、器面調整の大部分が消失している。２は復元口径13.0cm、残存高4.0cmを測る。器厚はやや厚く、口縁部付近でも１cm前後を測る。口縁部はほぼ直線的に立ち上がるが、口唇部は僅かに内傾する。３は土師器の壺である。底部付近は欠損するが、口径15.0cm、残存高17.4cmを測る。外反する口縁部 を持ち、胴部最大径は中位付近に位置する。やや摩滅を受けているが、内外器面共に器面調整が観察される。外器面には縦位の刷毛目調整が施され、内器面には口縁部から頸部までが横位のナデ調整が施され、頸部下は連続する指押さえ調整が加えられる。胴部上位には時計回り方向にヘラ削り調整が施され、底部付近は指押さえ調整で形成され中位付近までナデ調整が施される。４は土師器の甑である。復元口径22.4cm、残存高9.5cmを測る。胴部上半部のみの出土であり、把手・底部は欠損する。



Ph.72 SC-0388・0389調査状況（南東から）

これらの出土遺物よりこの住居の年代は５世紀後半代の時期を考えることができる。

SC-0389（Fig.51）

E-10区で検出した方形竪穴住居であり、SC-0388に切られる。重複と削平によって住居南側は消滅する。現状では一辺2.8m前後を測るが、残存する部分から推測して一辺4.0m前後規模が考えられる。検出面から床面までの深さは５cm前後を測り、検出面の標高は7.10m前後を測る。住居床面上で主柱が三本検出されるが、東側の主柱穴はSC-0388の中央土坑によって消滅するものと考えられ四本柱とした。各柱穴の間隔は2.0～2.2mを測り、床面から柱穴底面までの深さは20cm前後を測る。残存する住居壁と検出された柱穴から計測できた住居の主軸はN－35°－W方向を採る。住居内からはカマド・壁溝などの検出はなかった。埋土は暗灰褐色砂質土層の一層のみが観察される。出土遺物はいずれも土師器の細片資料ばかりであり、図化できなかったが土師器埦や土師器壺口縁部片などが出土した。このSC-0389とした住居の時期については、SC-0388掘削以前の住居であることから５世紀代中頃を下限として考えることができる。

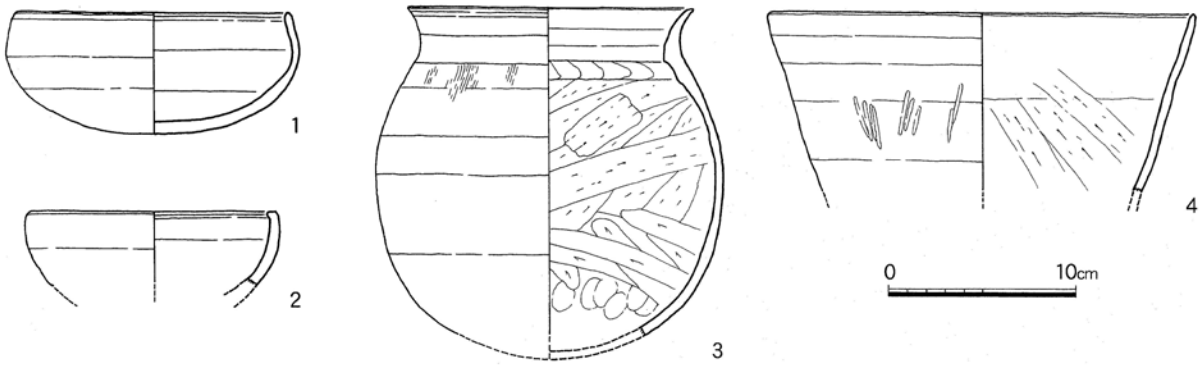


Fig.52 SC-0388出土遺物実測図（S=1/4）

SC-0390（Fig.53）

F-９区で検出した方形竪穴住居である。現状での平面形は方形を呈しており、400cm×400cmを測り、検出面から床面までの深さは５cm程度の残存状況である。検出面の標高は7.50m前後を測る。本住居が検出されたF-9区地点は第２・３次調査地点へと延びる丘陵の尾根線付近であり、調査区内の遺構が検出される箇所の中では最も激しく削平されている場所の一つである。壁溝は住居東側半分を巡るように掘削されており、埋土は暗褐色土で住居床面より底面までは５cm前後の深さを測る。住居の主軸はＮ－30°－Ｅ前後の方向を採る。住居内からはカマドの検出はなかったが、南側壁際に長軸2.0m×短軸1.2m前後の楕円形の土坑が検出された。この土坑は深さ20～30cm前後を測り、埋土は暗褐色土の単層で炭化材・土器片・石器・礫などの遺物が多量に出土した（Fig.54）。検出された遺物は土師器埦・土師器壺・須恵器壺・蛸壺などがあるが、完形の遺物は蛸壺のみで他の土器類は全て破損・欠損していた。床面直上まで削平されていたため、住居とこの土坑の関連性は判然としない部分があるが、住居南側壁に接して掘削されているため住居付随遺構として考えた。

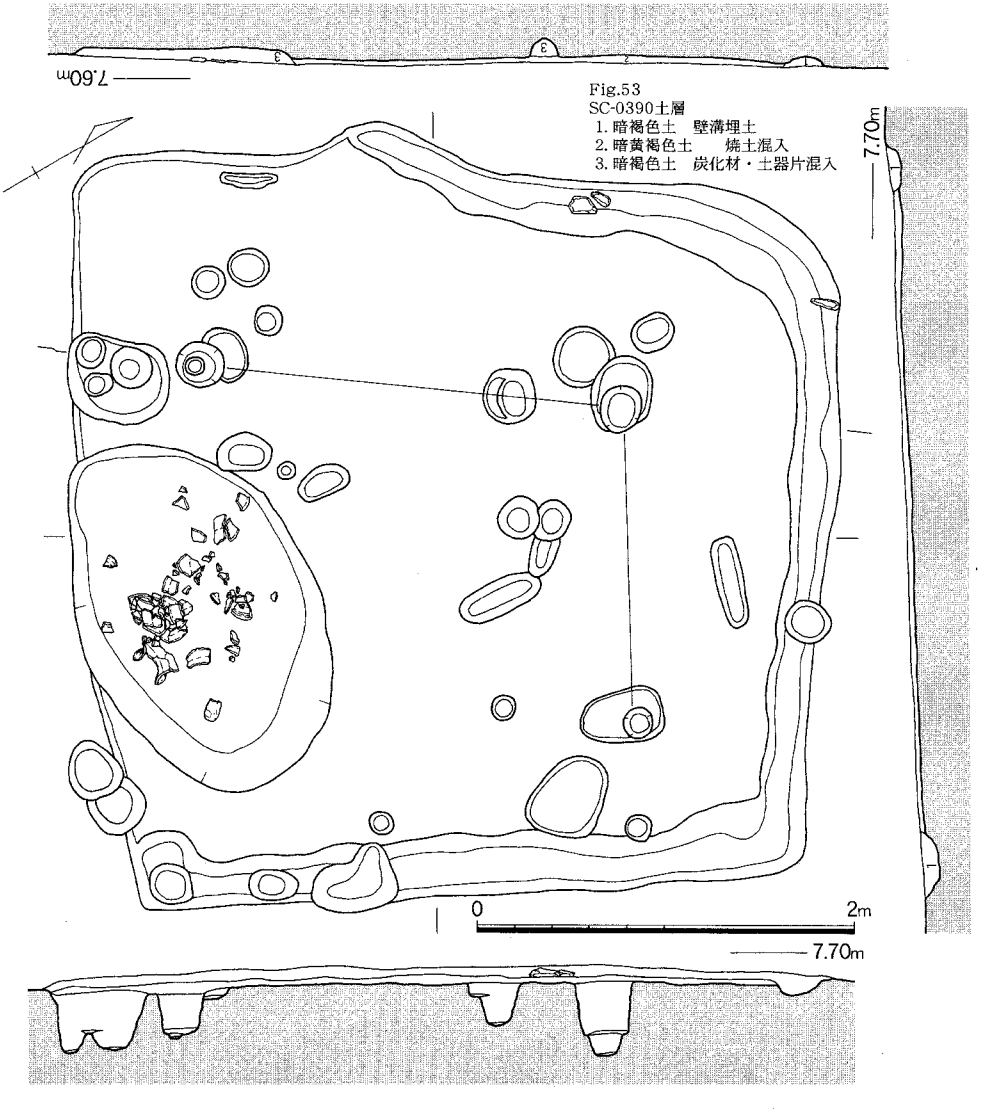


Fig.53 SC-0390遺構実測図（S=1/40）

住居床面で検出された主柱は四本で、各柱穴の直径は30～40cm前後を測り床面から柱穴底面までの深さは30～40cm前後を測る。主柱穴は住居に対してやや南側隅部方向にずれた位置で検出されており、住居は南側に広がる可能性も考えられる。

住居東側隅部の壁溝付近では、壁溝につながる状態で溝が検出された。この溝状遺構も削平により遺存状態は悪く３cm程しか遺存しておらず、住居より50cmほどの地点で消滅してしまう。住居壁溝からの排水用溝の機能が可能性として考えられる。本調査ではこのような溝遺構を伴う住居が他にも検出されており、隣接する第２・３次調査においても数軒の住居に同様の溝遺構が認められ、排水溝として報告されている。

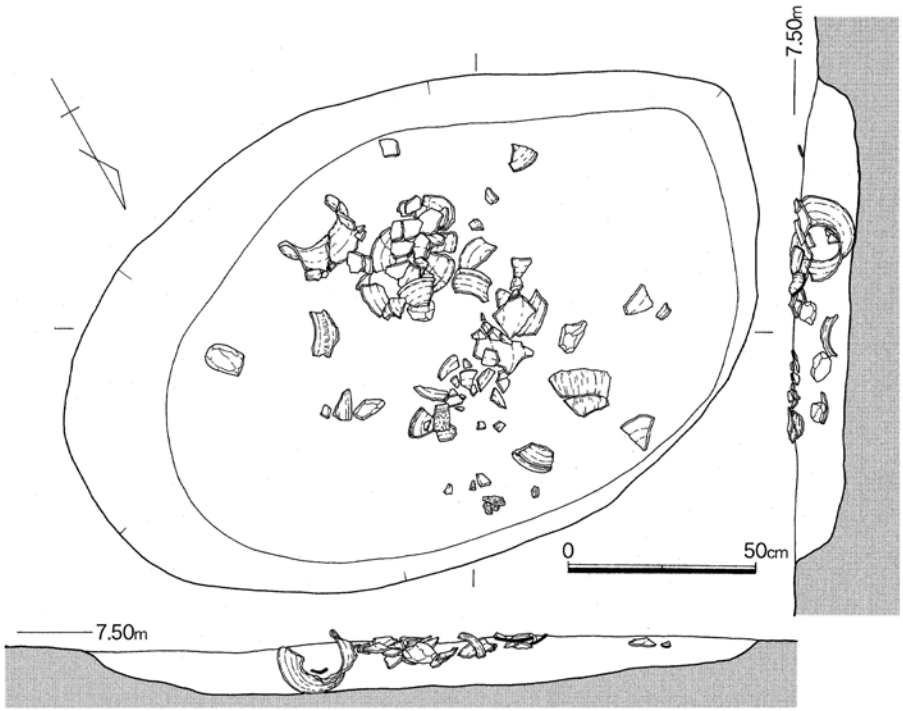
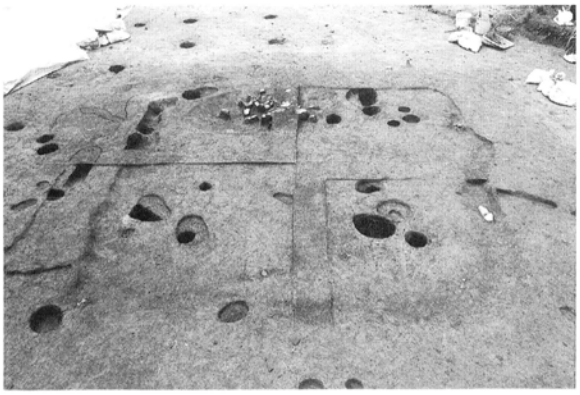


Fig.54 SC-0390内土坑実測図（S=1/20）

Fig.55に出土遺物を示した。

１・２は須恵器坏蓋である。口径13.2cm、器高4.4cmを測る。天井部はヘラ削りで調整され、体部中程に屈曲部を持つ。口縁部はほぼ直線的に伸びる。２は復元口径13.8cm、器高3.5cmを測る。天井部はヘラ削りで調整され、体部は緩やかに屈曲し口縁部につながり口唇部はわずかに外反する。３～５は須恵器坏である。３は復元口径13.4cm、残存高2.7cmを測る。４は口径11.6cm、器高4.1cmを測る。底部は丸味を帯び、ヘラ削り調整される。５は復元口径12.8cm、器高3.4cmを測る。底部はヘラ削り調整が施されており、体部はナデ調整が施される。いずれも焼成は良好であり、色調は濃灰色を呈する。６は須恵器壺口縁部片である。復元口径22.0cm、残存高は3.7cmを測る。口縁部下には波状紋を施し、その一部をナデ消している。頸部中程に突帯を造り出し、その直下にも波状紋を施す。


Ph.73 SC-0390調査状況（北から）

Ph.74 SC-0390内土坑遺物検出状況（北東から）

7は須恵器甕の口縁部片である。頸部中程より上部の口縁部片のみの出土であり、他の部位は欠損する。復元口径14.2cm、残存高2.2cmを測る。ラッパ状に開く口縁部を呈し、口唇部下に串状工具による刺突紋を全周に施す。8は土師器壺である。口径15.0cm、器高17.2cmを測る。外器面頸部にはナデ調整により段を造り出す。外器面は摩滅を受けており器面調整のほとんどが失われている。内器面には調整痕が明瞭に観察される。底部付近には指押さえの痕跡が残り、それに重複するように上位方向へのナデ調整が加えられる。胴部中位付近では接合痕をナデ消すために反時計回り方向に指ナデ調整を施し、頸部付近には上位方向へのナデ調整を加える。焼成は良好で、色調は淡暗褐色を呈する。9は蛸壺である。口径は6.3～6.5cm、器高は10.9cmを測る。ナデ調整によって成形される。穿孔は外側方向から行われており、鋭利な工具により粘土を切り取ってナデ調整を加え整形する。内器面には指ナデ痕跡が明瞭に残る。10・11は土師器壺口縁部片である。10は口径18.2cm、残存高9.5cmを測る。器形・調整共に須恵器を模倣するもので肩がわずかに張り、頸部の屈曲はなだらかな器形である。頸部付近には串状工具突端部による刺突紋を全周に施す。口縁部は玉縁状に成形されており、口唇部で僅かに内傾する。内器面には叩きの当て具痕が観察される。11は復元口径18.6cm、残存高15.0cmを測る。外器面は摩滅のため器面調整は観察できないが、内器面には上位方向に施された指ナデ痕が明瞭に残る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。12は須恵器壺口縁部片である。口径26.0cm、残存高6.3cmを測る。口縁部は強く外反して広がる。頸部の屈曲はほぼ直角に近く、胴部上位には縦位の刷毛目調整がみられ、頸部中程には「へ」の字状のヘラ記号が施される。内器面では頸部より上が横ナデ調整され、体部には同心円文の当て具痕が残る。焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。

これらの出土遺物より住居の年代は6世紀後半から6世紀末頃の時期が考えられる。

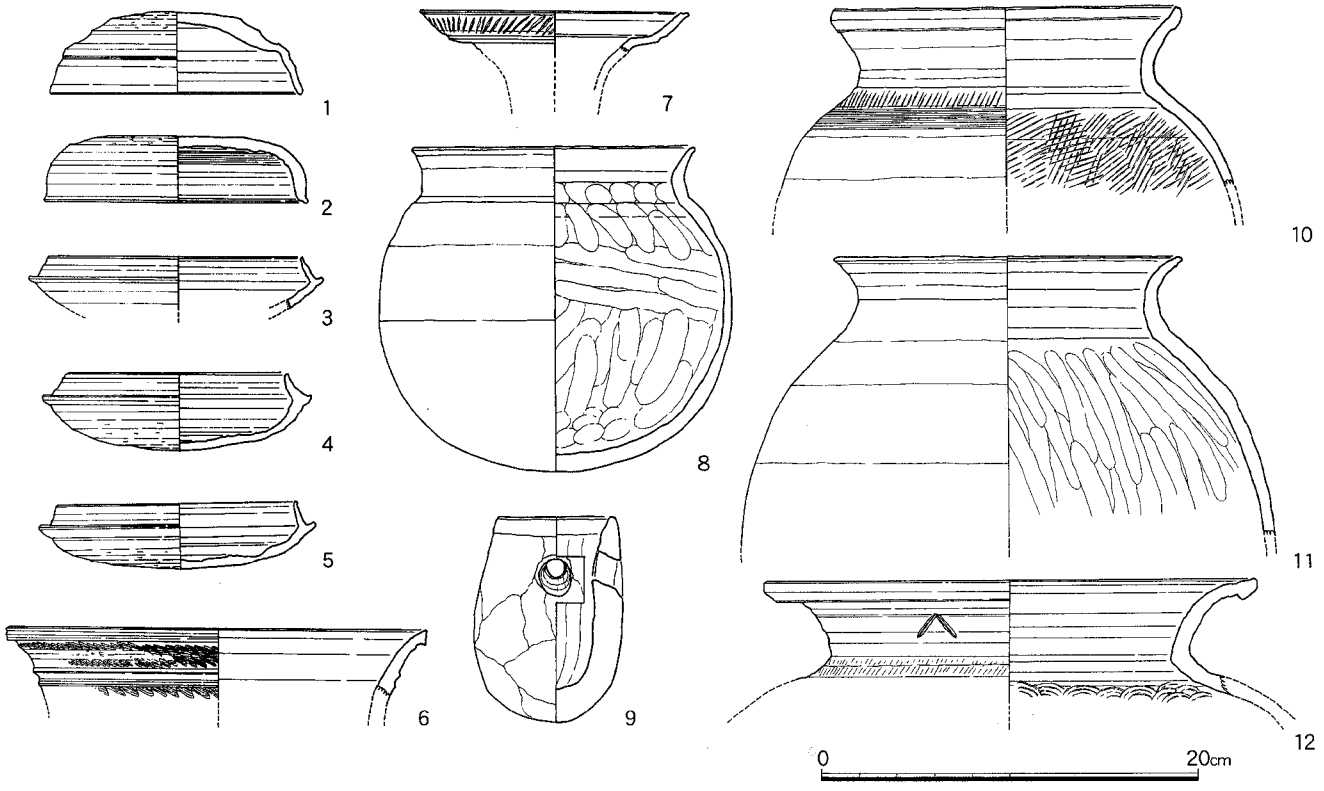


Fig.55 SC-0390出土遺物実測図 (S=1/4)

SC-0391 (Fig.56)

F-9区で検出した方形竪穴住居である。SC-0390の北東側近接して検出された住居で、SC-0390と同様に著しく削平を受けているため、遺存状況は不良である。西側の壁溝の一部と主柱穴が検出されるのみでカマド・焼土などの検出はなかった。残存部より推測される平面形は方形で一辺350cm前後を測る。検出面の標高は7.50m前後を測り、住居東側では床面以下まで削平を受けているため床面・壁溝は消滅している。検出された壁溝・主柱穴より計測される住居の主軸はN－41°－W方向を採る。住居内から検出される主柱穴は四本柱で、各柱穴の直径は20cm前後を測り、検出面から柱穴底面までの深さは20～40cm前後を測る。耕作土直下で検出されたもので、埋土は壁溝に堆積する暗褐色土層のみが観察された。

Fig.58に出土遺物を示した。

1は土師器高坏坏部片である。復元口径15.0cm、残存高5.3cmを測る。直線的な体部から口縁部にかけてゆるやかに内反する。脚部は接合部より欠損する。内外器面共に摩滅を受けており、調整痕はあまり観察できない。2は須恵器坏蓋である。復元口径14.9cm、残存高2.9cmを測る。天井部は欠損する。体部屈曲部から口縁部にかけては直線的であるが、口唇部ではわずかに外反する。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。3は石錘である。扁平な石材の長軸両端に打撃を加え緊縛部を造り出す。重量は124.34gを測る。

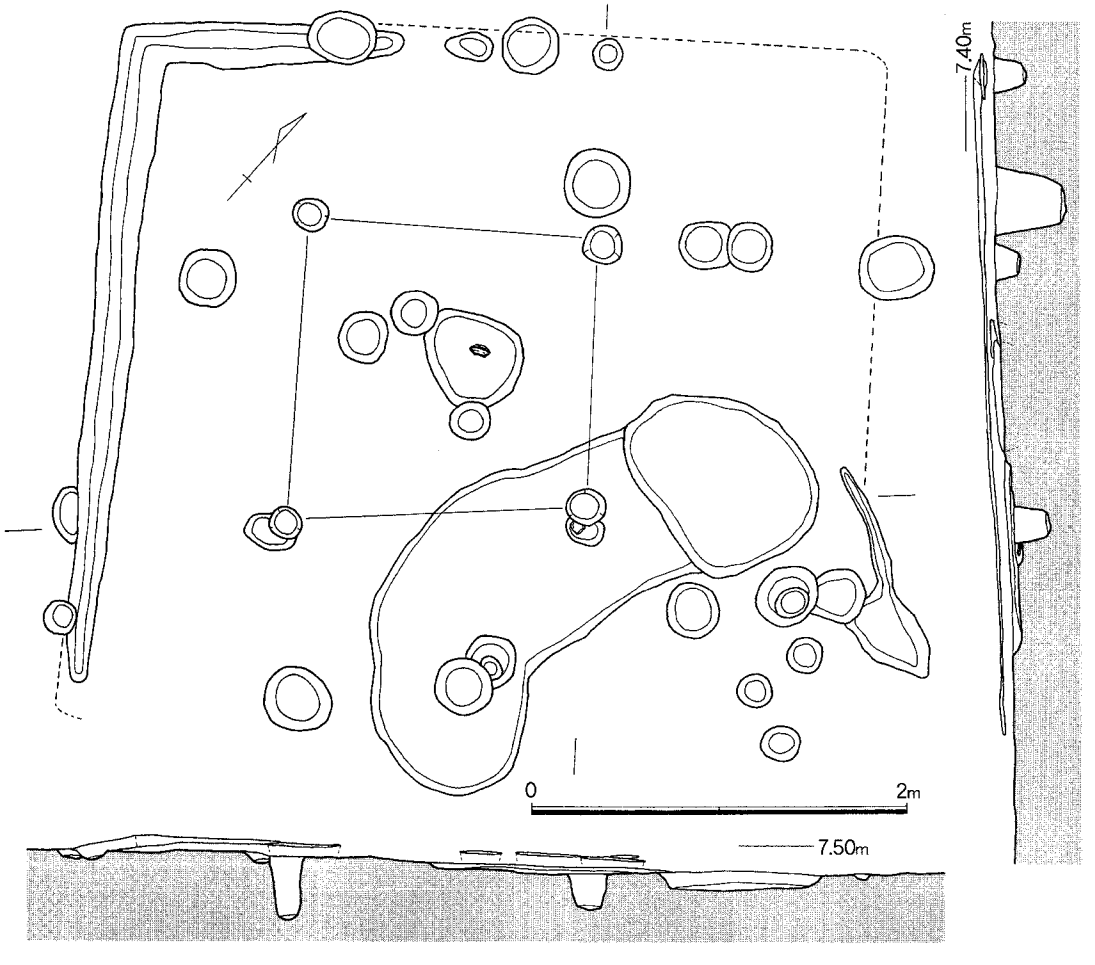


Fig.56 SC-0391遺構実測図 (S=1/40)

SC-0392・SC-0393（Fig.57）

F-9・10区で検出した重複する方形竪穴住居である。SC-0393はSC-0392に切られる。両住居共に東側は床面以下まで削平されており、西側半分のみ壁溝が検出された。現状ではSC-0392が300cm

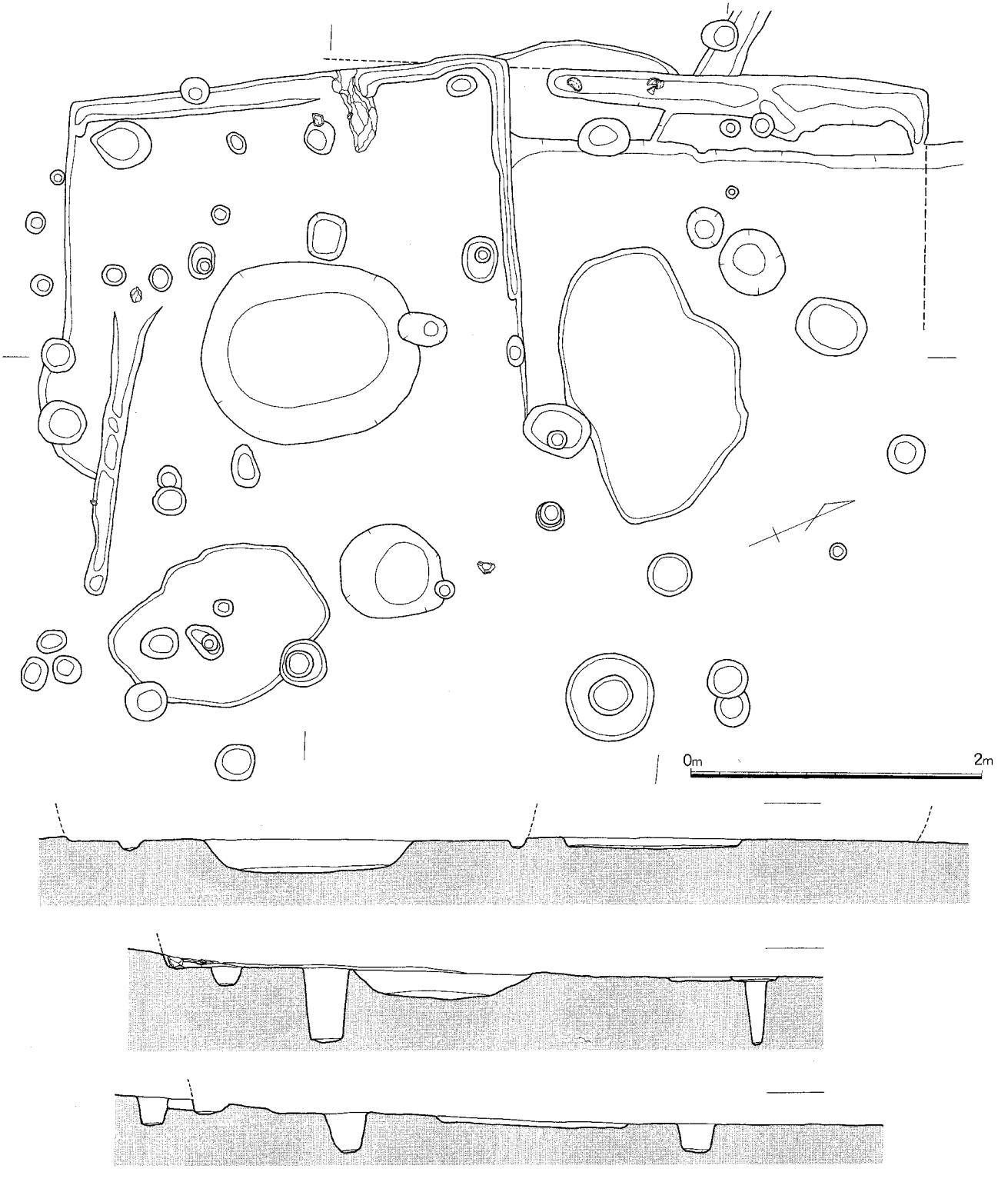


Fig.57 SC-0392・SC-0393遺構実測図（S=1/40）

×240cm、SC-0393は260cm×40cmを測る。壁溝は深さ５～10cmほどの残存で、SC-0392は住居西側にカマドの痕跡が検出される。北側の袖部とカマド基底部の掘り込みが検出され、支脚として使用されたと考えられる石材が据えられていた。両住居の主軸はそれぞれN－66°－W、N－64°－W方向とほぼ同方向を採る。

Fig.58に出土遺物を示した。４～９・14の遺物はSC-0392からの出土遺物で、10～13・15～20はSC-0393からの出土遺物である。

４は土師器高坏坏部片である。復元口径14.4cmを測る。５は土師器壺の口縁部片である。復元口径14.8cmを測る。６は須恵器壺口縁部片である。復元口径17.6cmを測る。頸部には突帯を挟んで波状紋が施され、突帯部より口縁部は外反する。７は土師器壺口縁部片である。復元口径は23.0cmを測る。８は混入した弥生土器の甕口縁部片である。復元口径27.6cmを測る。摩滅を受けており、調整痕は観察できない。９は滑石製未製品である。臼玉製作工程の一段階を示す遺物である。全長2.6cm、全幅1.5cm、全高0.6cmを測り、全面に研磨痕が認められる。これより８個前後の臼玉が製作可能であるが何らかの事情で廃棄されたものか。14は土師器の甑底部片である。底孔径は18.0cmを測る。

10は須恵器の坏蓋である。復元口径12.8cm、器高4.2cmを測る天井部はヘラ削り調整され、直線的な体部を持つ。11は土師器壺口縁部片である。復元口径14.4cm、残存高4.5cmを測る。12は土師器壺の口縁部片である。復元口径14.6cm、残存高3.0cmを測る。13は土師器壺口縁部片である。復元口径27.8cm、残存高5.3cmを測る。15～20は滑石製臼玉である。SC-0393壁溝埋土より出土した。直径の平均値は5.1㎜で、孔径の平均値は1.2㎜前後、器厚は2.5～5.1㎜を測る。

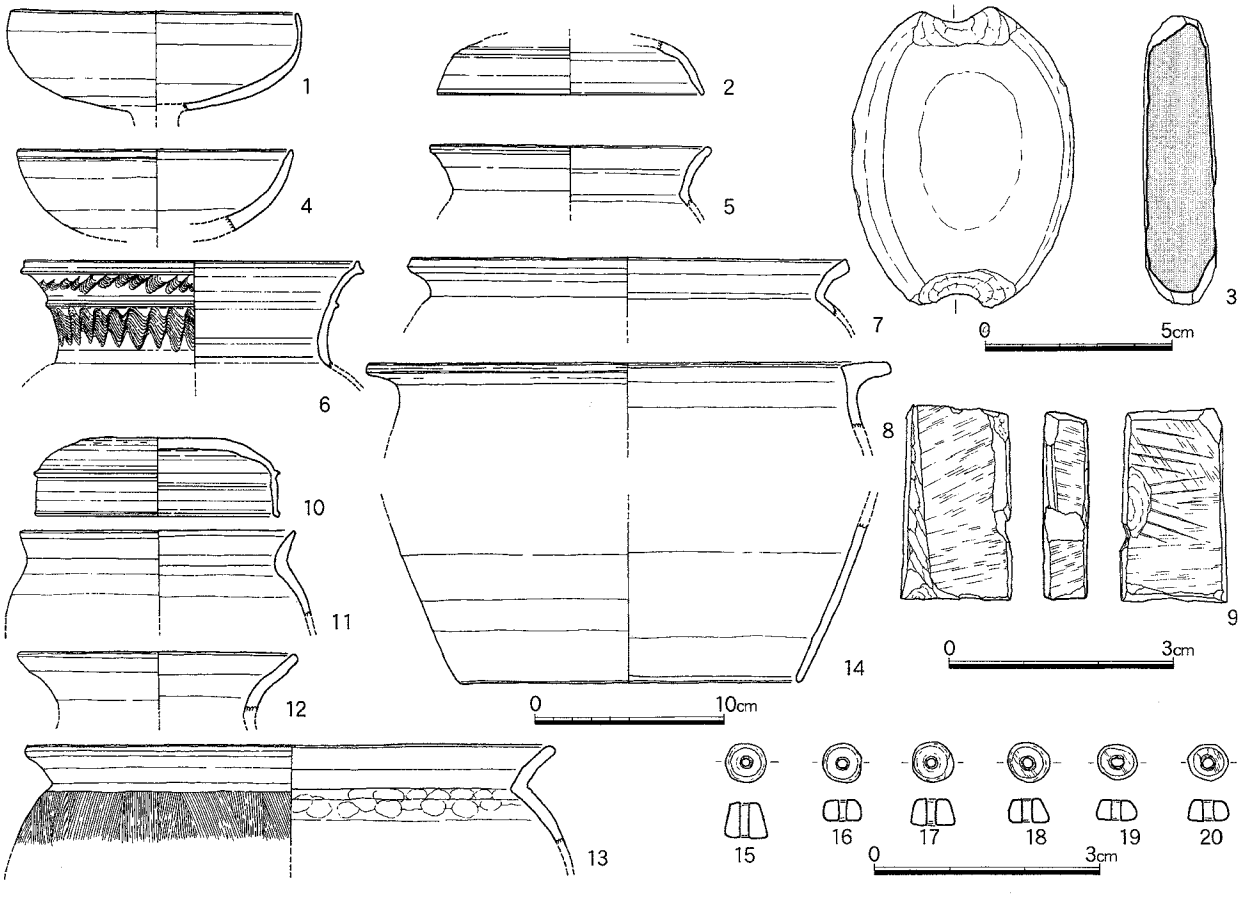


Fig.58 出土遺物実測図（S=1/1・1/2・1/4）

SC-0394（Fig.59）

F-10区で検出した方形竪穴住居である。耕作によって住居東側半分は床面以下まで削平され、住居南側はSC-0393によって切られる。住居中央部を南北方向に畑の段が走るため、10～15cm程高く残る西側部分で、住居の西側を巡る壁溝と主柱穴のみが検出される。

残存する住居西側隅部と主柱穴の位置関係より一辺220cm前後の住居が復元でき、住居の主軸はN－31°－W方向が想定できる。住居は標高7.20m前後で検出されたが、検出時にはカマドなどは消滅しており、焼土・被熱による硬化面なども検出されなかった。検出された主柱穴は四本柱となり、各柱穴の直径は40cm前後を測り、検出面から柱穴底面までは20～40cm前後の深さを測る。柱穴底面には柱痕跡が圧痕として残っていた。これにより柱材の直径は20～25cm前後のものが使用されていたことが推定でき、各主柱間は２m前後の間隔をとって住居が構築されたことが分かる。

壁溝・主柱穴には暗褐色土が堆積していたが、遺物の出土はなく時期の比定はできなかった。他の住居との切り合い関係より、SC-0394→SC-0393→SC-0392の順番が考えられる。SC-0393・SC-0392の出土遺物よりSC-0393・SC-0392両住居はおおよそ５世紀末から６世紀代前半の時期が考えられるため、SC-0394については５世紀後半以前に構築されたものであることわかる。

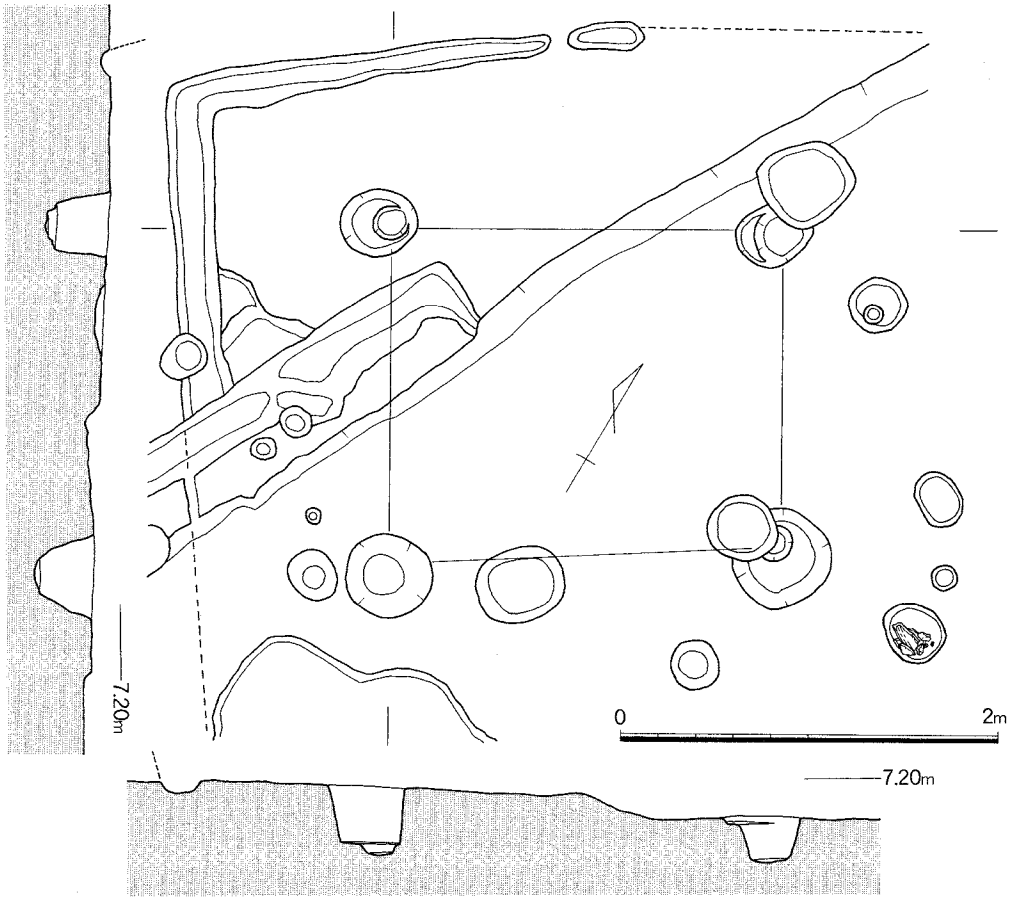


Fig.59 SC-0394遺構実測図（S=1/40）

SC-0395 (Fig.60)

F-11区で検出した方形竪穴住居である。現状での平面形は方形で395cm×370cm、検出面から床面までの深さは15cm前後を測り、検出面の標高は6.80m前後を測る。住居の主軸はN－30°－W方向を採り、住居北西側壁中央部には白色粘土で形成されたカマドが付設される。カマドは住居廃絶時に破壊されており、基底部を残すのみである。壁溝は住居を全周するように掘削される。住居内で検出された主柱は四本柱で、各柱穴は直径40cm前後を測り、住居床面から柱穴底面までは30～40cm前後の深さを測る。カマド前面と周囲には白色粘土が40cm×60～80cmの範囲で、厚さ５cm程堆積している状況が検出された。廃絶時に破壊され、脇によけられたカマド壁体の残骸と考えられる。残存する基底部よりカマドは全長80cm×全幅60cm前後の規模を有していたと推測できる。カマド基底部中央には18cm×10cm、厚さ５cmの扁平な石材が据えられていた。支脚として使用されたものか。白色粘土を除去すると炭化物を多く含んだ厚さ２～３cm前後の暗赤褐色を呈する焼土面が検出され、その下の床面上には被熱による硬化面が検出される。住居中央部の主柱穴で囲まれた範囲には浅い掘り込みがあり、暗褐色粘質土が堆積する。住居埋土は大別して二層に分層され、上層には暗灰褐色砂質土、下層には暗褐色砂質土が堆積する。上層の暗灰褐色砂質土層には長さ５～10cm程度の炭化材・焼土・土器片が多く含まれ、下層の暗褐色砂質土層には炭化物が多量に含まれている。

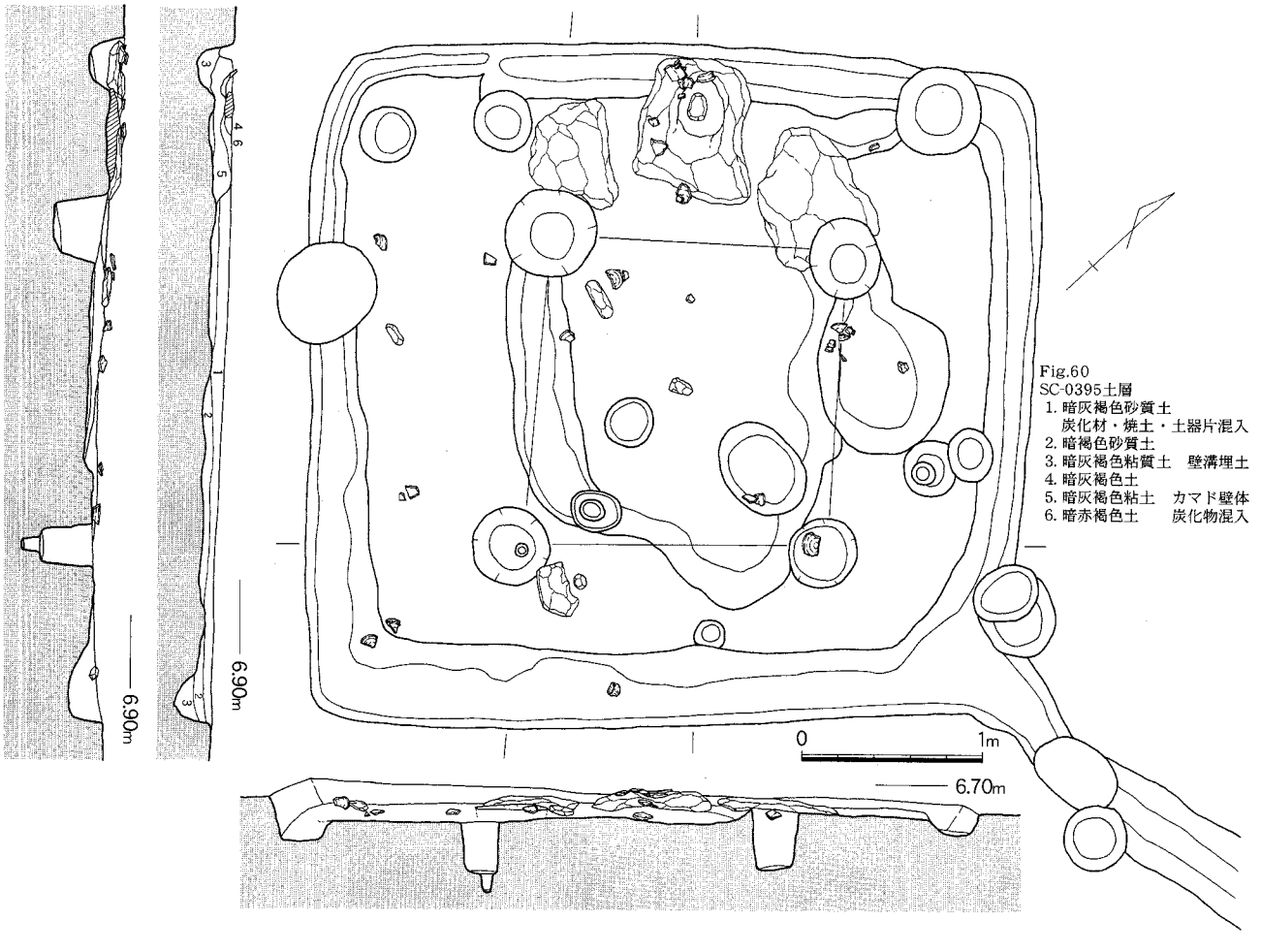
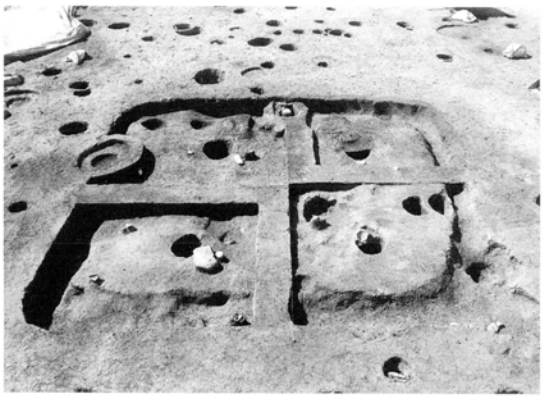


Fig.60 SC-0395遺構実測図 (S=1/40)



Ph.75 SC-0395調査状況（南東から）

住居東側隅部には壁溝に連結する溝が検出される。幅30～40cm前後を測り、検出面から底面までの深さは10～15cm前後を測る。住居が検出されたF-11区付近は東側にゆるやかに下る斜面上であり、溝底面も東側方向へ傾斜をつけて掘削される。住居排水用の溝と考えられる。この溝は４ｍほどの長さが検出され、SC-0401とする住居を切る。溝の埋土は、住居壁溝に堆積する暗灰褐色砂質土と同一層であるが、遺物の出土はなかった。住居内からは、土師器埦・土師器壺、須恵器坏、作業台として使用されたと考えられる石器、滑石製品などの遺物がコンテナケースで１箱分出土した。

Fig.61に出土遺物を示した。

１は土師器高坏坏部片である。１は復元口径13.0cm、残存高3.5cmを測る。体部中程に屈曲部を持ち、口縁部は直線的に立ち上がる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。摩滅のため器面調整はほぼ失われている。２は土師器埦である。復元口径は15.0cm、残存高は4.7cmを測る。ナデ調整によって成形される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。３・５は須恵器坏蓋である。３は口径14.4cm、器高は4.2cmを測る。天井部はヘラ削り調整が施され、体部はナデ調整される。焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。５は口径13.6cm、器高4.2cmを測る。天井部と胴部の境界には一段深くナデ調整が施され、段を造り出す。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。４・６は須恵器坏である。４は復元口径13.6cm、残存高4.7cmを測る。口縁の立ち上がりは1.2cm程度と浅く、わずかではあるが内傾する。内外器面共にナデ調整される。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。６は口径11.6cm、残存高3.6cmを測る。口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。７は土師器甑把手である。手捏ねで成形され胴部器面にナデ調整で貼り付けられる。接合部にはナデ調整痕が明瞭に残る。８は土師器壺である。復元口径19.2cm、残存高は9.6cmを測る。外器面は摩滅のために器面調整はほぼ失われる。内器面には胴部から頸部方向へのナデ調整痕が観察できる。口縁部付近は横方向にナデ調整が施される。

９は滑石製臼玉である。半分が欠損する。復元で直径6.1㎜を測る。この他には滑石屑が少量出土した。これらの出土遺物より、SC-0395の時期は６世紀代中頃から後半が考えられる。

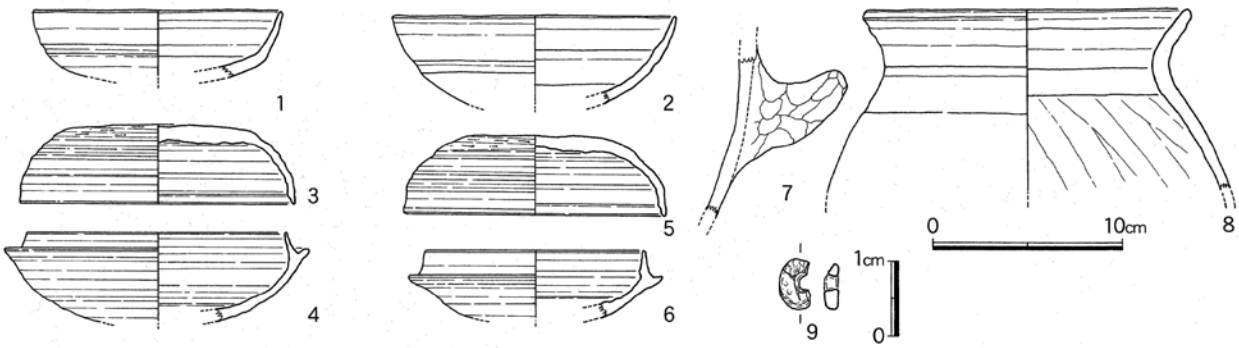


Fig.61 出土遺物実測図（S=1/1・1/4）

SC-0396（Fig.62）

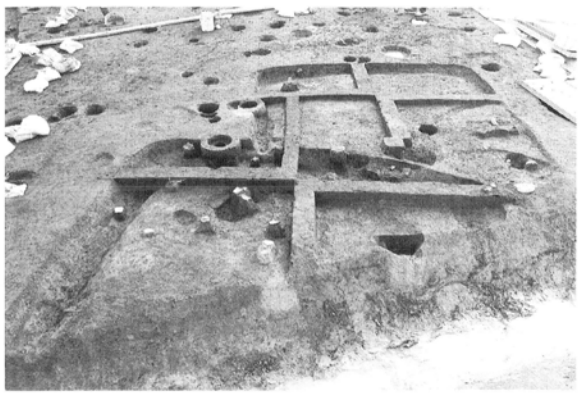
F-12区で検出した方形竪穴住居で、SC-0397に切られる。検出できた部分での平面形は方形を呈し、345cm×345cmを測る。検出面から床面までの深さは５～８cm前後を測り、遺構検出面の標高は6.80m前後を測る。近世以降の開墾によって住居全体が大きく削平されている。主軸はN－41°－E方向を採り、北東側壁中央部付近に白色粘土で形成されたカマドが付設される。カマドは基底部を残して破壊されており、５cm前後の白色粘土が60cm×40cmの範囲で検出される。白色粘土下の床面は被熱により硬化し、赤変化していた。カマド中央部には17cm程度の長さの石材が横たえられた状態で検出される。支脚石として使用されたものと考えられる。壁溝はカマドを避けるように掘削されており、住居をほぼ全周する。住居埋土は二層に分層され、上層には暗褐色砂質土が堆積し、下層には暗灰褐色砂質土が堆積する。壁溝には暗褐色土が堆積し、少量の遺物が出土する。住居床面内では柱穴は検出されなかった。住居東側隅部には直径１m前後の土坑が掘削され、30cmほどの大きさの扁平な石材が据えられた状態で検出された。作業台として使用されたものか。

Fig.63・64に出土遺物を示した。

１・２は土師器埦である。１は復元口径14.6cm、器高4.1cmを測る。２は口径14.4cm、器高5.7cmを測る。底部には刷毛目調整が施され、内器面にはヘラ磨きが施される。３は土師器高坏坏部片である。復元口径14.0cm、残存高5.1cmを測る。４・５は須恵器坏蓋である。４は復元口径は16.0cm、残存高3.2cmを測る。５は口径14.6cm、器高4.2cmを測る。６～８は須恵器坏である。６は復元口径12.4cm、残存高2.9cmを測る。７は口径12.0cm、器高4.5cmを測る。８は口径14.2cm、器高4.8cmを測る。10は土師器壺である。口径13.4cm、器高9.2cmを測る。口縁部は外反し、底部は丸味を帯びた平底となる。Fig.64-19・20は滑石製臼玉である。直径は6.7～7.1mmを測る。

SC-0397（Fig.62）

SC-0396と同様にE-12区で検出した方形竪穴住居である。住居東側は農水路によって削平され消滅する。残存する部分での平面形は方形で400cm×310cmを測る。検出面から床面までの深さは10～25cmを測り、住居上面の標高は6.70m前後を測る。他の住居と同様に住居東側の削平が深い。住居の主軸はN－34°－W方向を採り、北西側壁の北よりの部分にカマドの痕跡が検出される。廃絶時に破壊されており、白色粘土と焼土が検出されただけである。壁溝は検出されるが、住居壁に接しておらず、住居内に周溝状に掘削される。残存する部分で全周している。住居埋土は三層に大別され、上層には暗褐色土が堆積する。中層には暗灰褐色砂質土が堆積しており、土器などの遺物が少量含まれる。下層には暗褐色土が堆積する。上層の暗褐色土より粘性は高く、炭化物・焼土塊を多量に含む。



Ph.76 SC-0396・0397調査状況（南東から）

Ph.77 SC-0396・0397調査状況（北西から）

壁溝（周溝）には暗褐色粘質土が堆積し、土師器・須恵器などの遺物が出土する。住居床面上で検出された主柱穴は二本であるが、東側の柱穴は農水路によって柱穴底面部分まで削平され、消滅しており、本来は四本柱である。柱穴は直径40cm前後を測り、床面から柱穴底面までは30cm前後の深さを測る。

Fig.63・64に出土遺物を示した。

9は須恵器壺口縁部片である。復元口径15.6cmを測り、口縁部下に波状紋を施す。11・17は土師器壺口縁部片である。11は口径13.4cmを測る。胴部には刷毛目調整が施され、内器面は胴部にヘラ

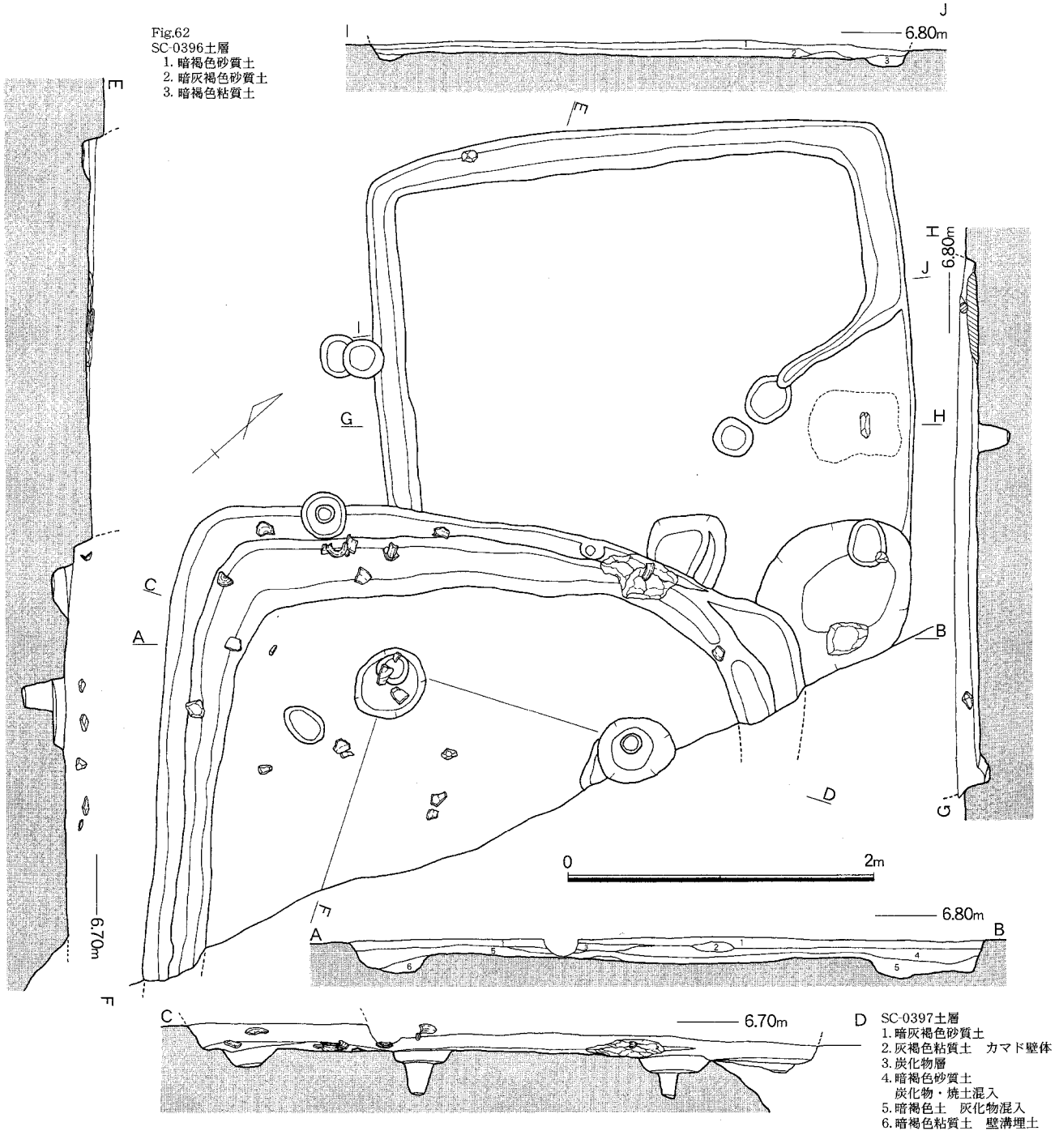


Fig.62 SC-0396・SC-0397遺構実測図（S=1/40）

削りが施され、頸部にはヘラ磨きが施される。17の土師器壺は復元口径17.8cmを測る。外器面は摩滅を受け、調整痕は消失する。12は土師器高坏坏部片である。復元口径25.0cmを測る大型の高坏である。体部屈曲部付近にヘラ状工具突端部による沈線が三条巡らされる。13は蛸壺である。復元口径6.8cm、残存高は5.8cmを測る。14・15は須恵器坏蓋である。14は復元口径14.2cmを測る。口縁

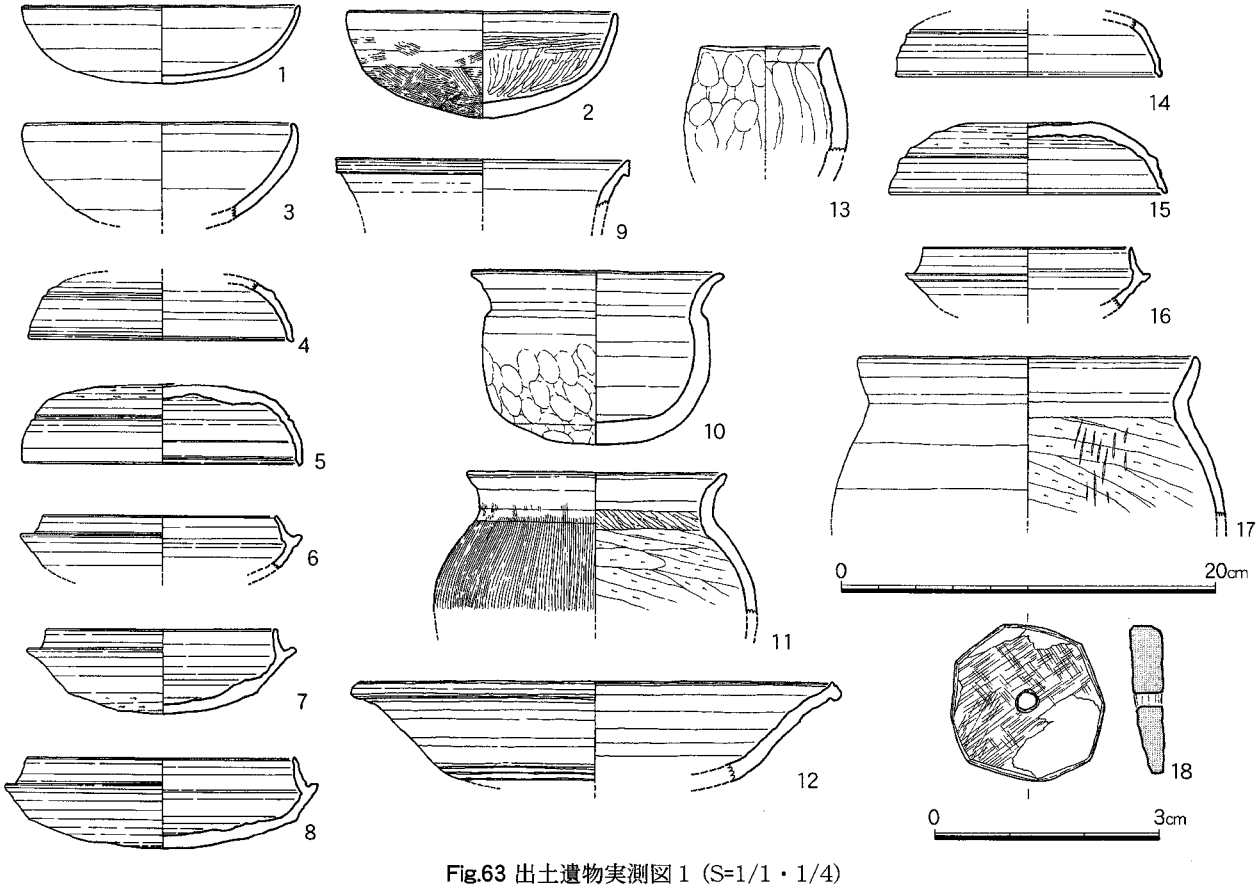


Fig.63 出土遺物実測図１（S=1/1・1/4）

部でわずかに内傾する。15は口径14.8cm、器高3.7cmを測る。口縁部は外反する。16は須恵器坏である。復元口径15.6cm、残存高は2.4cmを測る。口縁部は直線的な立ち上がりをみせる。

18は滑石製有孔円盤である。長径2.0cm、短径2.0cm、器厚0.4cm、重量2.98ｇを測る。側面は研磨によって八角形状に成形される。孔径は1.8㎜を測る。21～35は滑石製臼玉である。21はやや直径が大きく、８㎜前後を測る。22～35は一回り直径が小さいもので、5.6～6.3mmを測る。器厚は完存しているのもので4.1～5.3mmを測る。36～38は滑石製の臼玉未製品である。36は方形チップであるが、穿孔位置が側面に片寄る。37・38は穿孔中に破損したため廃棄されたものか。

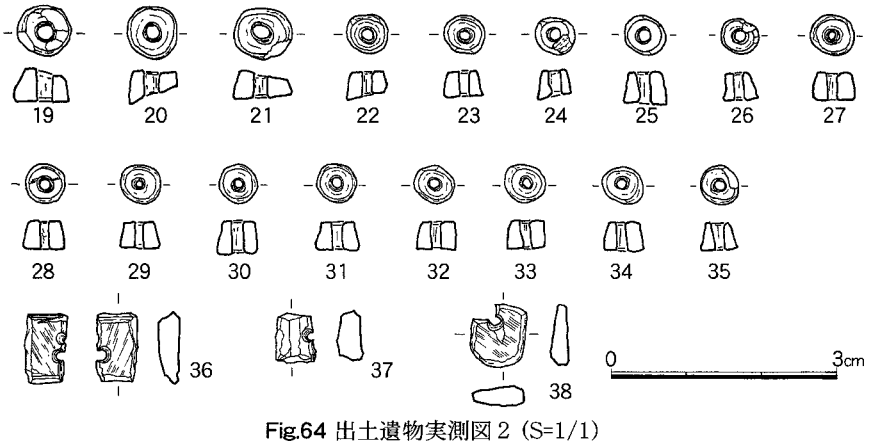


Fig.64 出土遺物実測図２（S=1/1）

SC-0398（Fig.65）

D・E-12区で検出した方形竪穴住居である。検出された箇所は丘陵の西側斜面に位置し、第２次調査地点から５ｍほどの地点である。南東側をSC-0399に、住居中央部を南北方向に延びる農水路によって削平され、さらに南西側は中世の溝によって切られる。残存する部分での平面形は方形を呈し445cm×445cmを測る。検出面から床面までの深さは10～20cmを測り、検出面の標高は6.40m前後を測る。住居の主軸はN－49°－W方向を採り、住居北西側壁中央部に白色粘土で形成されたカマドが付設される。カマドは住居廃絶時に破壊されており、90cm×80cm程度の掘り込み内に白色粘土と焼土が残存する。白色粘土の直下には赤変化した硬化面が認められ、これを除去すると灰混じりの暗灰褐色土が検出される。カマド中央部には全高20cm程度の石材が直立状態で据えられる。支脚石として使用された石材であるが、下部は打ち欠かれ平坦面を作る。壁溝は住居北側隅部のみで検出された。主柱穴は四本柱で、2.3m間隔で掘削される。各柱穴の直径は20～25cm前後を測り、検出面から柱穴底面までの深さは20～40cm前後を測る。住居東側隅部には床面より20cmほど掘り下げられた土坑状の窪みが検出された。遺物は削平が激しく遺存状態が不良であったため、数点の小破片

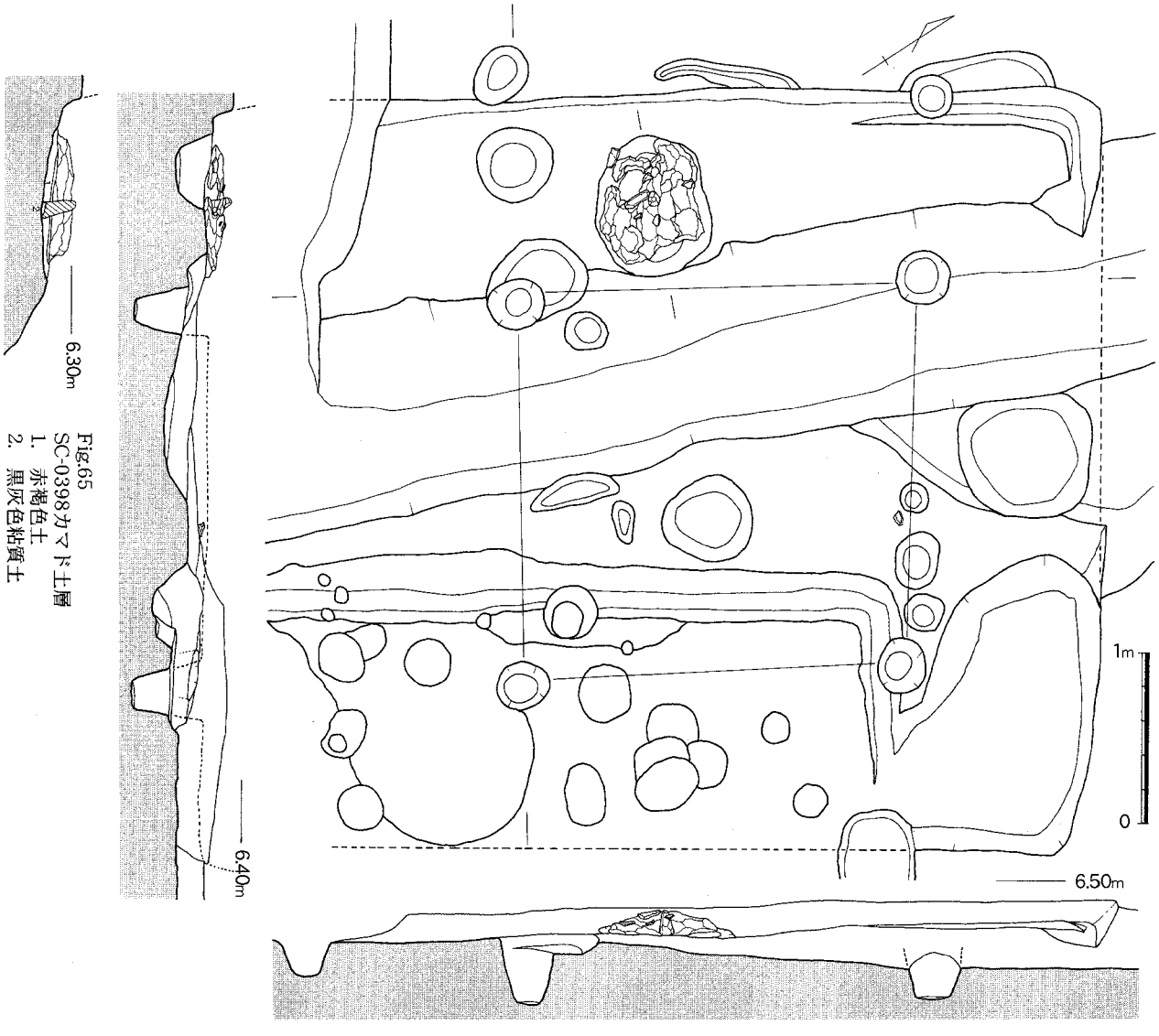
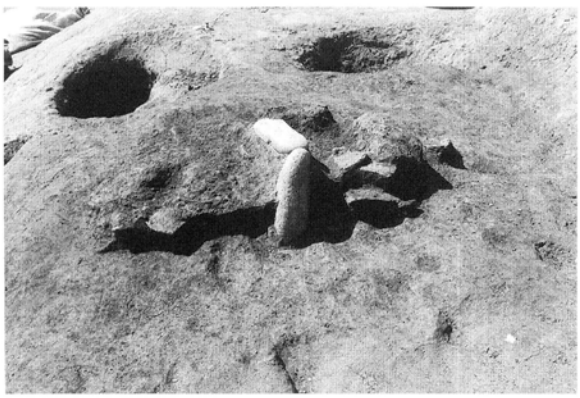
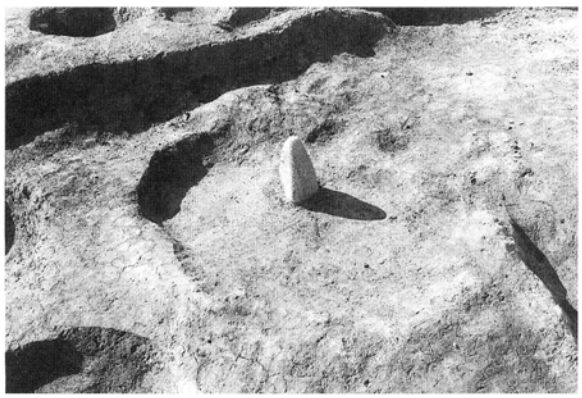


Fig.65 SC-0398遺構実測図（S=1/40）



Ph.78 SC-0398カマド支脚石検出状況（北東から）



Ph.79 SC-0398カマド完掘状況（南東から）

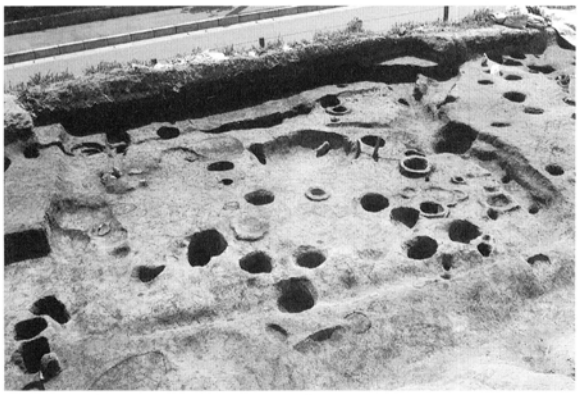
が出土したのみである。

Fig.70に出土遺物を示した。

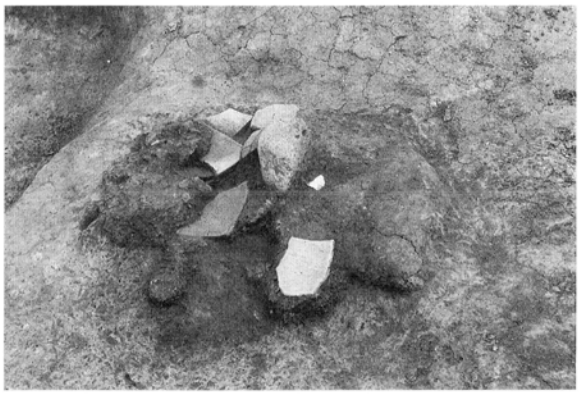
19は手捏土器である。カマド内埋土より出土した。口縁部は欠損する。残存高は2.3cmを測る。内外器面に指押さえ痕が残る。20は土師器高坏坏部片である。復元口径16.2cm、残存高は3.5cmを測る。口縁部はわずかに外反し、外器面にはヘラ磨きが施される。

SC-0399（Fig.66）

D-13区で検出した方形竪穴住居である。住居東側隅部は調査区外に延びる。検出された部分での平面形は方形で490cm×490cmを測る。検出面から住居床面までの深さは10～20cmを測り、検出面の標高は6.30m前後を測る。住居の主軸はN－35°－E方向を採り、住居北東側壁中央部付近にカマドの痕跡が検出される。カマドは住居廃絶に伴い破壊されており、袖部などの痕跡は検出されない。カマド付近の床面は20cm×30cmの範囲で被熱により赤変化している。その上に灰混じりの焼土が3cmほど堆積し、カマド壁体の残骸である白色粘土が散乱する。カマド中央部には全高15cm前後の石材が直立した状態で据えられる。カマドの支脚として使用されたものである。支脚石は全体が被熱により赤変化する。壁溝はカマドの付設される北東側壁を除いて掘削されており、壁溝底面には60～70cm間隔で直径10cm前後のピットが検出される。住居主柱は四本柱で、各柱穴は直径20cm前後を測り、床面から柱穴底面までは40～50cm前後の深さを測る。住居内には東側・西側・南側・北側・中央部に土坑が検出される。中央部の土坑は直径1.3～1.4m前後を測り、床面から40cm前後の深さを測る。土坑内には暗褐色粘質土が堆積し、土坑底面西側からは土師器甑・壺などの土器が一括した状態で出土する（Fig.67下段・Ph.82）。南側土坑はカマドと正対する位置からの検出であり、



Ph.80 SC-0399完掘状況（北西から）



Ph.81 SC-0399カマド検出状況（南西から）

住居入り口部と考えられる。住居西・東側土坑は作業用の土坑であろうか。住居東側土坑は半分が調査区外に位置するため完掘できなかったが、床面からの深さは30cm前後を測り、中央土坑と同じく暗褐色粘質土が堆積していた。住居北側土坑は住居北東側壁に接して掘削されており、60cm×40cmの楕円形を呈する。土坑は深さ10cm前後の浅いもので、土坑内から土師器壺が出土した。本来は完形品であったものと考えられるが、上方からの圧力により胴部は四散する。この土坑に接した位置からは土師器小壺・須恵器坏が出土した（Fig.67上段）。住居南側では壁溝に接して掘削される幅10～20cm程度の溝が検出された。溝に重複する位置に農水散布用のパイプが付設されていたため、住居との関連性は判然としないが、溝底面は壁溝底面とほぼ同じ高さに掘削されているため、住居排水溝としての性格を考えることができよう。

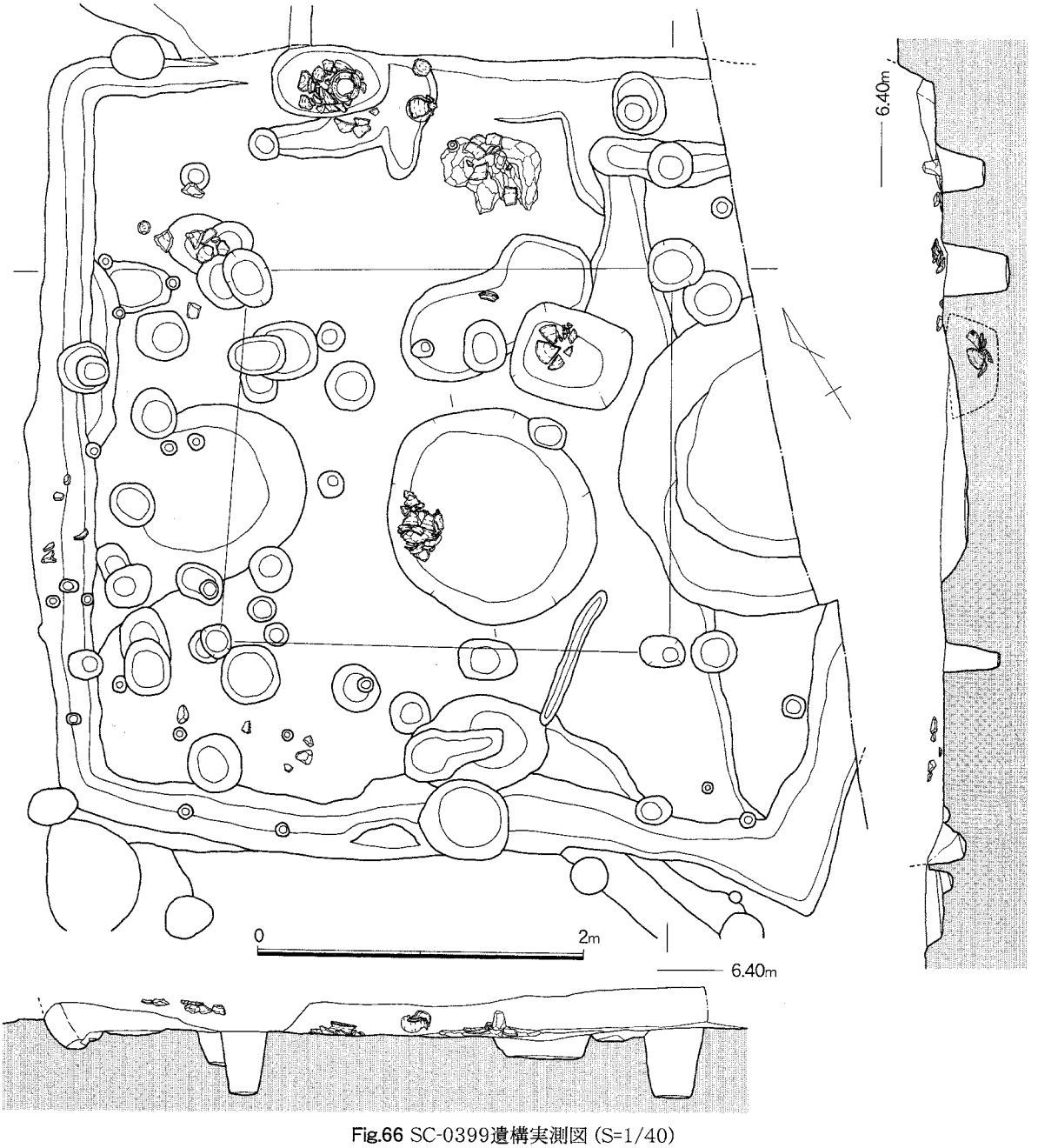


Fig.66 SC-0399遺構実測図（S=1/40）

Fig.68・69・70に出土遺物を示した。

1・2は須恵器坏である。2は復元口径14.4cm残存高3.2cmを測る。6は弥生土器の甕である。 復元口径24.2cmを測る。SC-0398・SC-0399付近のピットからは弥生時代の遺物の出土が多く、住居などの遺構の存在が考えられる。弥生時代の遺構は削平により消滅しており、この甕はこの遺構からの混入品と考えられる。3～5・8は土師器壺口縁部片である。3は復元口径15.2cm、残存高4.2cmを測る。4は復元口径15.4cm、残存高は5.7cmを測る。5は復元口径18.6cm、残存高4.0cを測る。8は復元口径18.0cm、残存高4.0cmを測る。3・4・8の土師器壺は中央土坑から出土した遺物で被熱のために赤変化し、器面は粗れている。7は土師器高坏脚部片である。復元底径27.6cmを測り、底部は外反する。9は土師器高坏である。脚部は基部より欠損する高坏で、坏部口径は22.4cmを測る。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。10は中央土坑から出土した土師器壺である。口径14.8cm、器高は22.0cmを測る。体部は球形を呈し、ナデ調整が施される。内器面は頸部下までがヘラ削りで調整され、頸部付近には刷毛目調整が施される。11は中央土坑から出土した土師器甑である。口径18.8cm、器高20.5cmを測る。底孔は多孔式で、底部中央に直径3cm前後の幸を穿つ。その周囲に楕円形の孔を5ヶ所ほぼ等間隔で穿つ。外器面は刷毛目調整が施され、内器面はヘラ削りが施される。把手は先端部がやや太くなるもので、胴部に差し込み式で貼り付けられる。二次的被熱により一部が赤変化する。12～17は石錘である。12～16は両端部を打ち欠き紐を掛ける緊縛部を作る。重量はそれぞれ100.5g、105.1g、79.2g、114.9g、25.2gを測る。17は全周する紐かけの痕跡が観察できる。

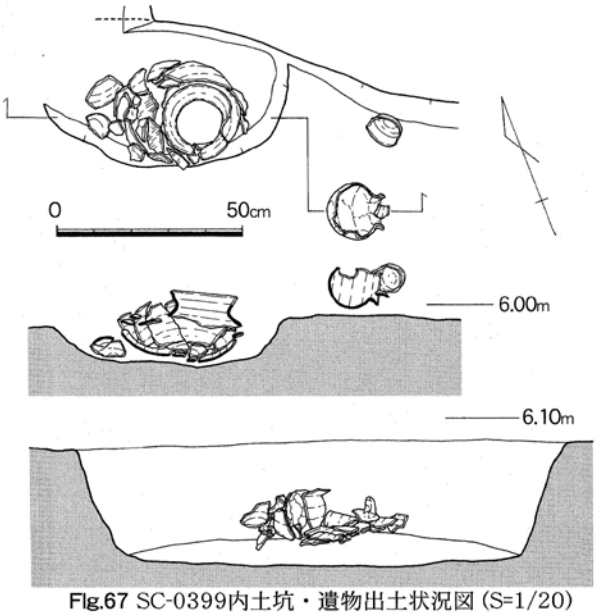
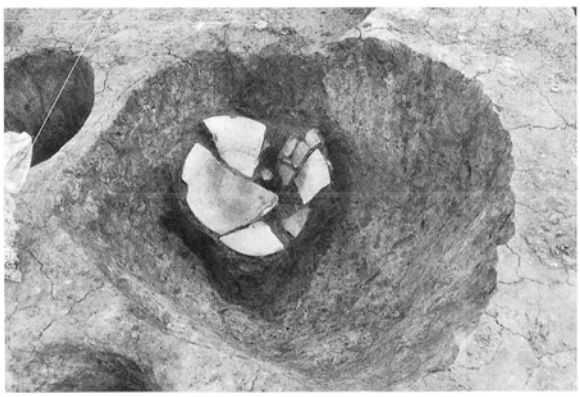
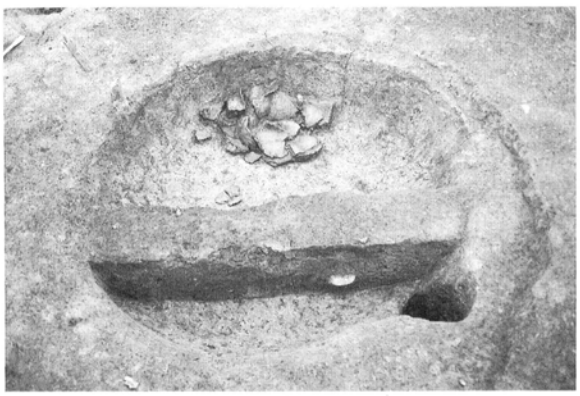


Fig.67 SC-0399内土坑・遺物出土状況図（S=1/20）

Ph.82 SC-0399遺物検出状況（西から）


Ph.83 SC-0399遺物検出状況（南西から）


Ph.84 SC-0399遺物検出状況（東から）

全長2.5cm、全幅1.8cm、全厚1.4cmを測る。

Fig.69-18は滑石製の石鑿である。両端部を磨いて刃部を形成する。全長8.1cm、最大幅2.3cm、全厚1.0cmを測る。刃部は特に丁寧に研磨されており、全体にも成形時の研磨痕が残る。

Fig.70-21・22は土師器壺口縁部片である。21は復元口径10.8cm、残存高は3.8cmを測る。22は復元口径13.2cm、残存高5.0cmを測る。23～25・29・30は土師器埦である。23は復元口径11.6cm、器高5.8cmを測り、直線的に開く口縁部を持つ。24は復元口径14.4cm、器高5.3cmを測り、体部中程より口縁部にかけて内反する。ナデ調整が施される。25は口径16.0cm、器高6.1cmを測る。口縁部は体部中程で内傾し直線的に立ち上がる。29は口径13.6cm、器高6.2cmを測り、体部は口縁部に

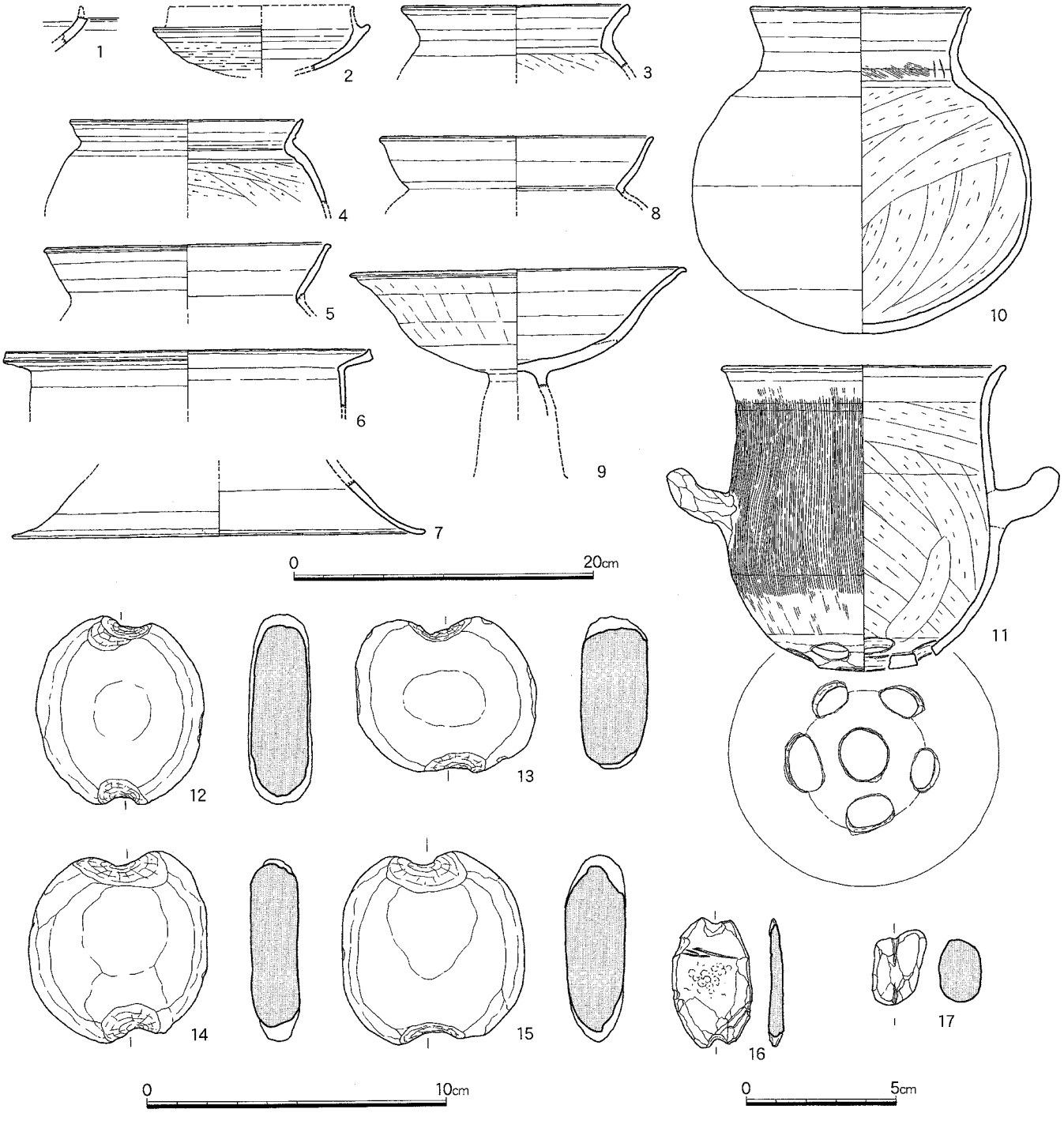


Fig.68 出土遺物実測図1(S=1/2・1/4)

向けて直線的に立ち上がりを持つ。外器面には横位の刷毛目調整が施され、内器面はナデ調整が施される。30は口径14.2cm、器高6.6cmを測り、体部上位より外反する口縁部を持つ。

26・27・28は土師器高坏坏部片である。26は復元口径14.0cm、残存高4.5cmを測る。脚部は接合部より欠損する。体部は口縁部にかけて直線的に開く。27は復元口径14.4cm、残存高4.0cmを測る。体部下半部より欠損する。口縁部は「く」の字状に折れ曲がる。28は復元口径18.0cm、残存高6.3cmを測る。口縁部下より外反する。31は土師器小壺である。底部は欠損する。復元口径7.6cm、残存高6.0cmを測る。内外器面に指押さえの痕跡が残る。

32～34・36～39は土師器壺である。32は北側土坑に接した地点で検出された土師器壺で、口径10.6cm、器高14.1cmを測る。胴部は短胴形で、底部は丸味を帯びた平坦面を作る。外器面はナデ調整が施され、内器面にはヘラ削りが施される。33は復元口径13.4cm、残存高4.0cmを測る。34は復元口径14.8cm、残存高11.0cmを測る。外器面は口縁部下まで刷毛目調整が施されており、口唇部はナデ調整される。内器面はヘラ削りが施され、ヘラ状工具突端部による二条一組の線刻が数カ所に施される。36は復元口径15.6cm、残存高11.0cmを測る。37は復元口径22.0cm、残存高7.7cmを測る。頸部より下には刷毛目調整が施され、それ以上はナデ調整される。38は復元口径19.0cm、残存高は8.5cmを測る。頸部下で肩が張り、短い口縁部かつく。外器面は摩滅のため器面調整がほぼ失われているが、内器面には指ナデ痕・指押さえ痕が明瞭に残る。39は北側土坑から出土した土師器壺である。口径18.0cm、器高27.7cmを測る。胴部はほぼ球形を呈している。外器面は底部付近が摩滅のため器面調整が失われているが、ほぼ全面に縦位の刷毛目調整が施されている。口縁部から頸部にかけてはナデ調整される。毎期面には縦位のヘラ削りの後、横位のヘラ削りが施される。胴部最大径付近には直径1.6cmほどの孔が穿孔される。外器面方向からの打撃を受ける。

35は土師器の甑である。カマド周辺に散乱する状況で検出された。口径18.8cm、底孔径7.6cm、器高20.3cmを測る。把手は欠損する。外器面は縦位の板ナデ調整が施され、内器面には下位より指ナデ調整・ナデ調整・横ナデ調整の順で器面調整が施される。

40～43は須恵器坏蓋である。40は口径12.6cm、器高4.5cmを測る。天井部にはヘラ削りが施され、やや丸味を残す。体部屈曲部にはヘラ状工具突端部による沈線が加えられる。41 は復元口径13.4cm、器高4.3cmを測る。42 は復元口径12.8cm、器高4.4cmを測る。いずも焼成は良好で色調は濃灰色～灰褐色を呈する

44・45は須恵器坏である。44は復元口径11.2cm、残存高4.6cmを測る。45は口径12.6cm 、器高4.1cmを測る。46は須恵器壺口縁部片である。復元口径22.6cm、残存高5.6cmを測る。口唇部には段を有し、口縁部は玉縁状となる。口縁部下には波状紋を施す。

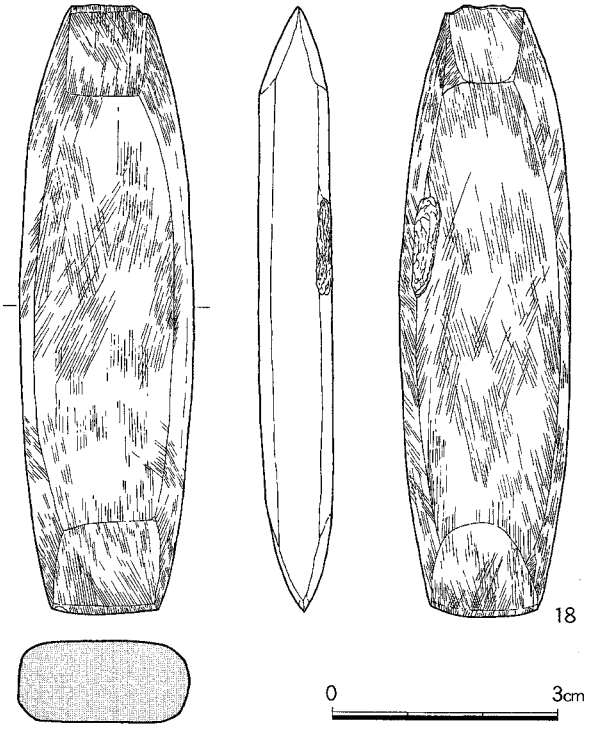


Fig.69 出土遺物実測図２(S=1/1)

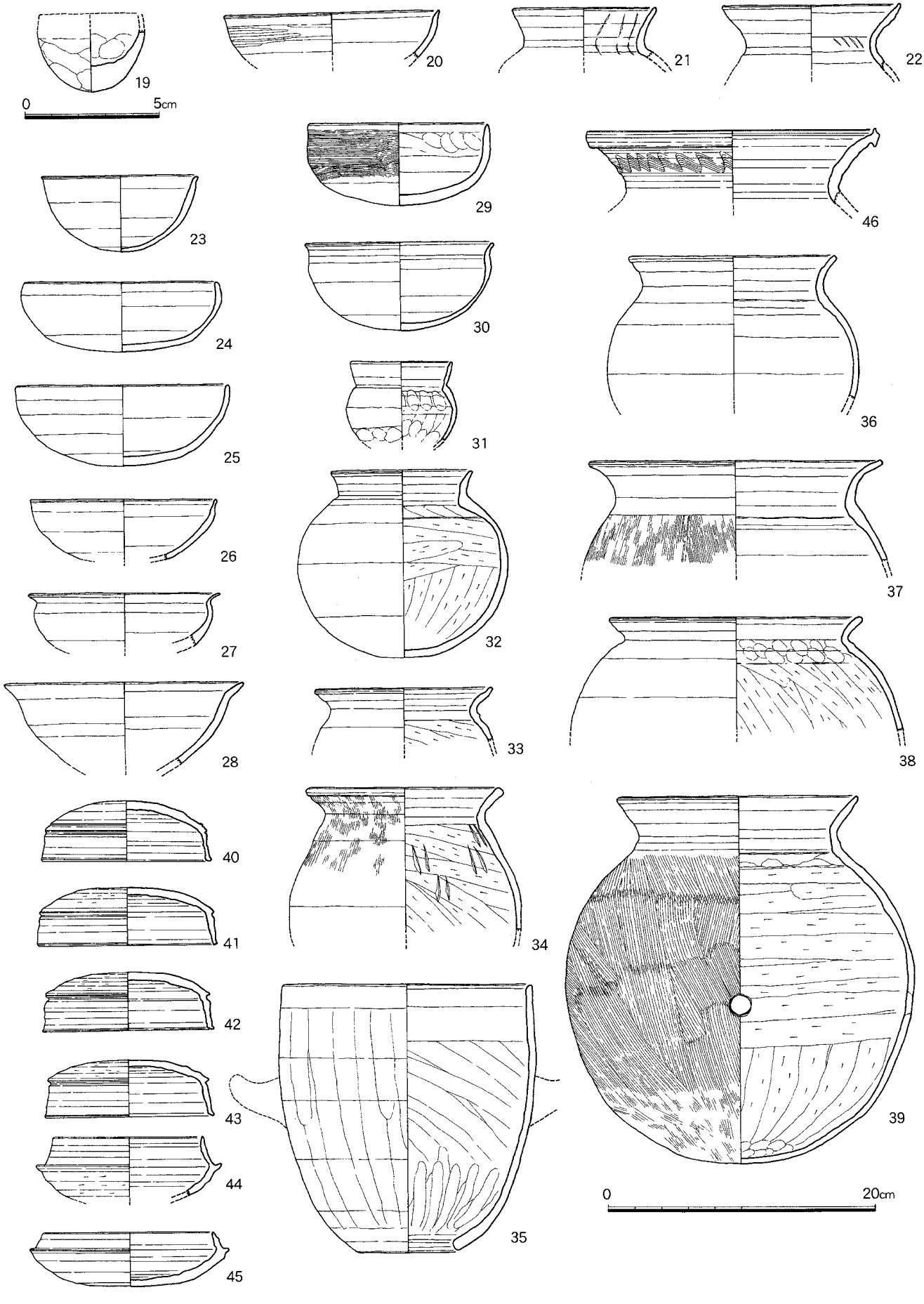


Fig.70 出土遺物実測図 3 (S=1/2・1/4)

SC-0400（Fig.71）

F-13区とした調査区際で検出した方形竪穴住居である。丘陵が南東側に最も延びる地点であり、削平も深い。住居西側隅部を含む約1/3の部分が調査区内で検出されたが、残りは調査区外になる。検出された現状での平面形は方形を呈すると考えられ、検出部分で470cm×400cmを測る。検出面から床面までの深さは５～15cmを測り、検出面の標高は6.40m前後を測る。残存する部分も農水路によって削平を受けており、西側隅部の残存は５cm程度と遺存状態はかなり悪い。

住居の主軸はN－29°－W方向を採り、住居北西側壁中央部付近にはカマドの痕跡が検出される。床面上に60cm×40cmの範囲で焼土が堆積し、白色粘土が散乱する。土器・石器などの支脚は残存していなかった。壁溝は調査できた部分の中では検出されなかった。住居床面上で検出された主柱穴は一本のみで、他の柱穴は調査範囲外に位置しているものと考えられる。検出された柱穴の直径は40cm前後を測り、住居床面から柱穴底面までの深さは50cm前後を測る。

住居埋土は残存が浅いため、一層が観察できるだけである。暗灰褐色土が堆積し、炭化物・焼土などが混入する。住居床面の一部には厚さ５～10cm前後の貼床面が検出され、暗黄褐色粘質土で床面が貼られていた。柱穴の埋土は暗褐色粘質土で基盤層の黄褐色粘質土をブロック状に含んでいる。

著しく削平を受けているため、床面付近しか残存しておらず、遺物の出土は少量であった。出土した遺物は土師器埦・滑石製勾玉・滑石製臼玉・未製品などがある。

Fig.72に出土遺物を示した。

１・２は土師器埦である。１は復元口径15.0cm、残存高は4.0cmを測る。緩やかに内反する口縁が直線的な体部へとつながる。焼成は良好で色調は褐色を呈する。内外器面共に摩滅を受けるが、わずかにナデ調整の痕跡が観察できる。２は復元口径13.6cm、残存高5.2cmを測る。体部中程より内

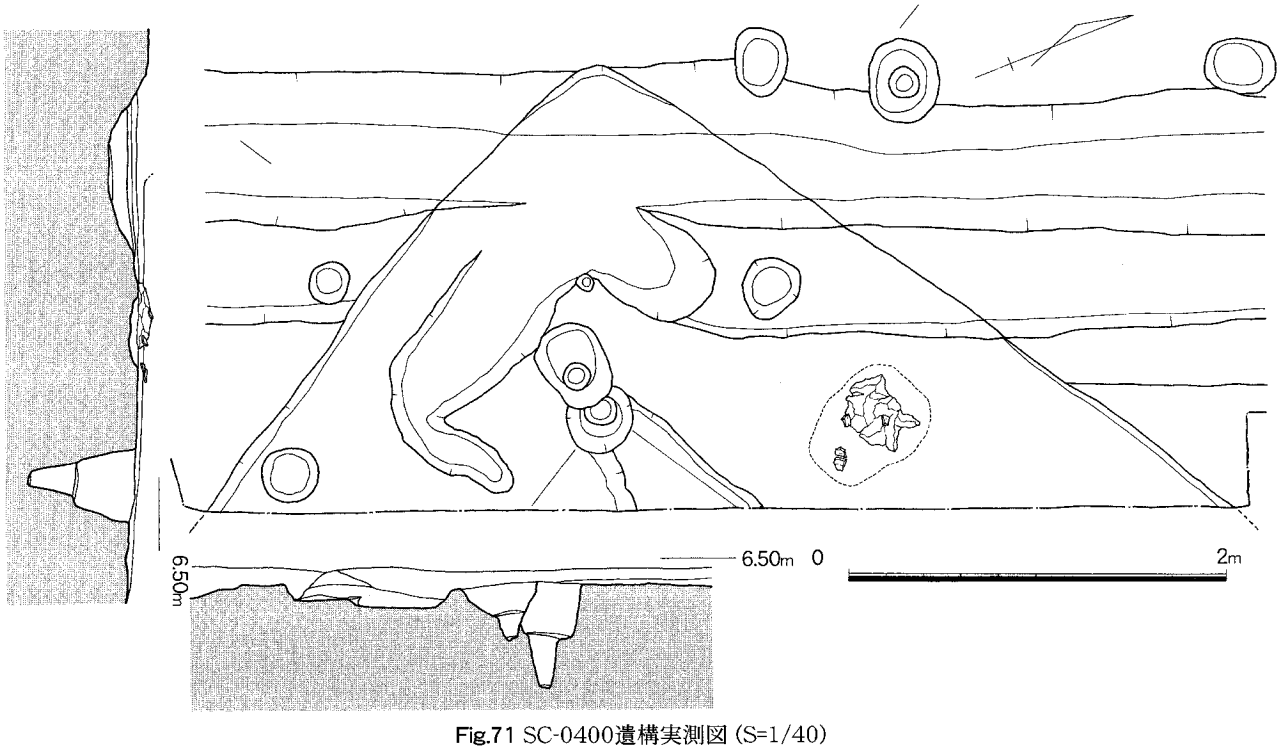


Fig.71 SC-0400遺構実測図（S=1/40）

反する口縁部を持ち、体部も丸味を帯びる。

3～10は滑石製品・未製品である。3は滑石製の勾玉である。残存長1.7cm、残存幅1.0cm、残存厚0.4cmを測る。縦方向に半裁されており、穿孔はされていない。作業中に破損したものと考えられる。4・5は滑石製臼玉である。直径4.2㎜～5.3mmを測る。6～9は滑石製臼玉未製品である。いずれも方形状のチップである。6は穿孔中に何らかの原因で作業を中止しているものである。側面は折られた状態のままであるが、上下両面は共に研磨され、厚さは3㎜前後を測る。7～9はいずれも穿孔中石材が破損したため廃棄されたものである。10は滑石製の勾玉の欠損品である。両端部が折れて欠損する。

SC-0400とした住居は一部分のみの調査しか行えなかったため、住居の性格については判然としないが、滑石製品の破損品・未製品の出土の割合が高いことから滑石製品工房の可能性が考えられる。これらの出土遺物よりこの住居の年代は6世紀代の時期が考えられる。

Ph.85 SC-0400完掘状況（西から）

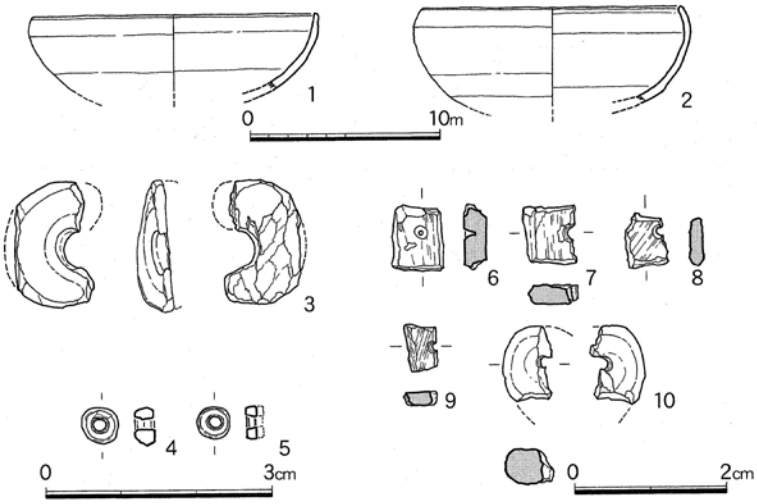
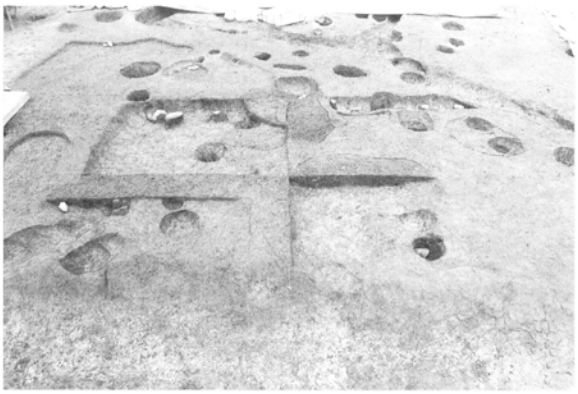


Fig.72 SC-0400出土遺物実測図（S=1/1・1/4）

SC-0401（Fig.73）

F-12区で検出した方形竪穴住居である。住居東側は農水路によって削平され消滅する。西側両隅部は検出され、これより一辺485cmの規模の方形住居が復元できる。検出面から住居床面までの深さは10cm前後を測るが、北西側は開墾によって床面以下まで削平されている。検出を行った遺構面の標高は6.60m前後を測る。住居の主軸はN－67°－W方向を採り、住居北西側壁中央部付近にはカ



Ph.86 SC-0401調査状況（南東から）

Ph.87 SC-0401完掘状況（南東から）

マドが付設された痕跡が検出される。壁体などは削平により消滅するが、50cm×30cmほどの楕円形の浅い土坑があり、炭化物と焼土が堆積する。土坑底面は被熱により赤変化する。

壁溝は検出できた部分では全周し、壁溝内には暗褐色粘質土が堆積する。住居南側では壁溝に取り付く溝が検出され、南側方向へと延びる。壁溝と同じ暗褐色粘質土が堆積し、切り合い関係が見られないため、住居排水溝と考えた。溝は幅40cm前後を測り、深さは10cm前後を測る。

住居埋土は残存が浅いため、暗灰褐色土の一層のみが観察できただけである。住居中央部には土坑が検出される。土坑の埋土は暗褐色土で、滑石屑が数点出土した。主柱穴は二本が残存しており、他の二本は農水路によって底面まで完全に削平されていた。各柱穴の直径は30cm前後を測り、床面から柱穴底面までの深さは40cm前後を測る。

遺物は住居埋土より土師器・滑石製品・作業台として使用された扁平な石材などが数点出土した。住居には直接伴うものではないが、住居の南側に検出されるピット内から旧石器時代に属する瑪瑙製の石器（Fig.8-12）が一点出土した。

Fig.74に出土遺物を示した。

１は土師器の椀である。復元口径14.0cm、残存高6.3cmを測る。口縁部はわずかに内反する。焼成は良好で色調は橙色を呈する。２は須恵器の坏である。復元口径12.0cm、残存高2.3cmを測る。３は土師器の壺口縁部片である。復元口径17.0cm、残存高9.1cmを測る。外器面には口縁部直下まで刷毛目調整が施され、胴部内器面はナデ調整が施される。

４は滑石製有孔円盤である。穿孔部より半分が欠損する。残存長2.6cm、残存幅1.3cm、全厚0.4cm

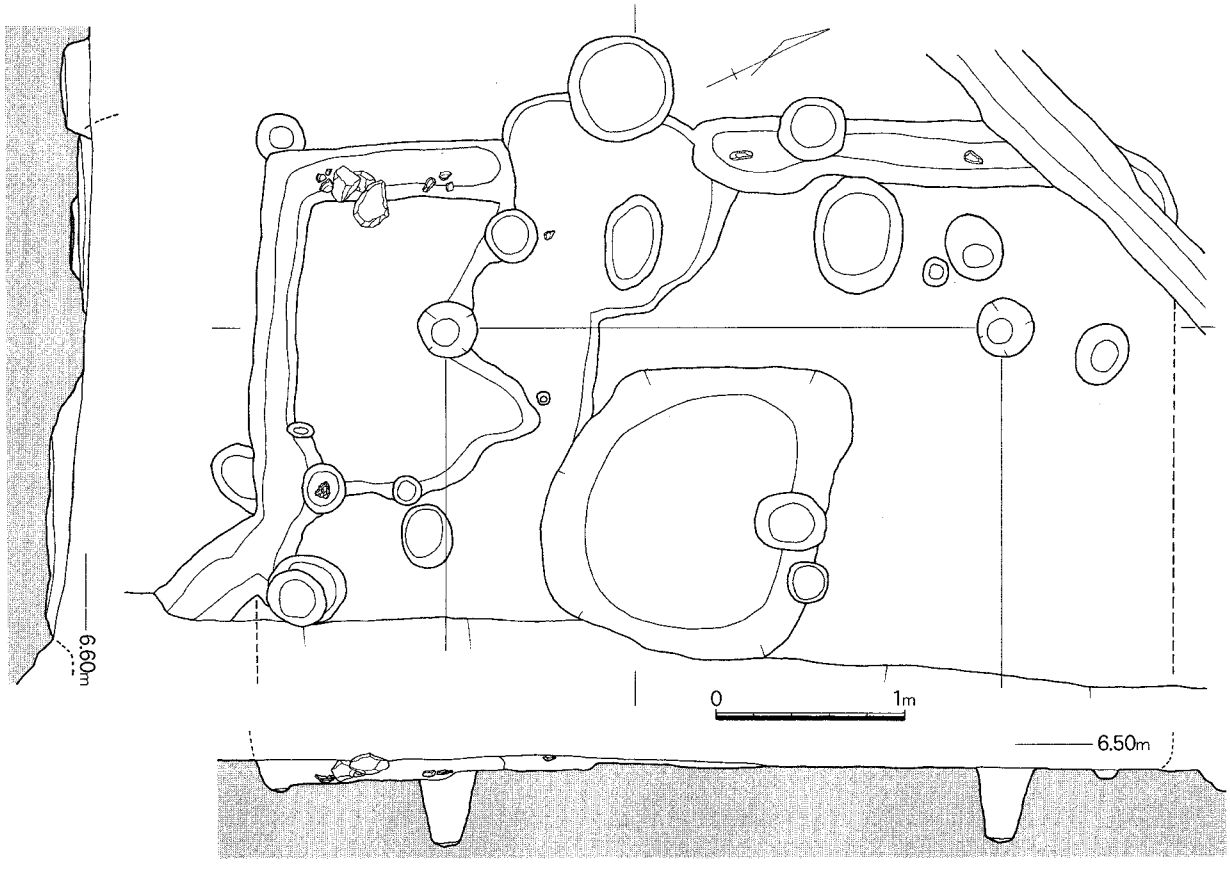


Fig.73 SC-0401遺構実測図（S=1/40）

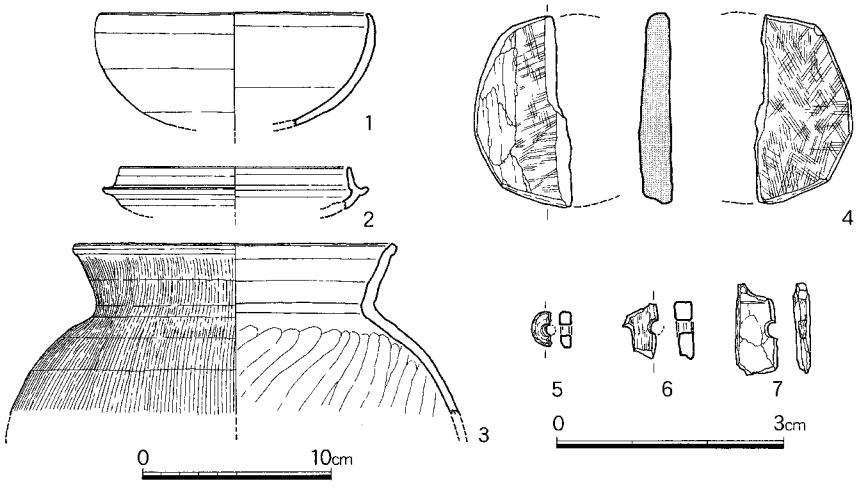


Fig.74 SC-0401出土遺物実測図 (S=1/1・1/4)

を測り、重量は2.22ｇを測る。側面には研磨痕が明瞭に残り、八角形を意図して研磨されたことが分かる。

５は滑石製臼玉である。半分に破損したもので、残存する部分での直径は4.5㎜前後を測る。６・７は滑石製の臼玉未製品である。穿孔作業中に破損したもと考えられる。

これらの出土遺物より住居の年代は６世紀中頃から後半の時期が考えられる。

SC-0402（Fig.75）

G-11区で検出した方形竪穴住居である。住居中央部より北側部分は、過去の開墾により床面以下の高さまで削平を受けており、床面・壁溝ともに消滅している。また、住居を横断するように農水路が掘削されるなど、残存する部分も床面まで削平を受けており遺存状態はきわめてわるい。

住居西側隅部と西側壁が検出され、これより復元できる平面形は方形である。現状では350cm×170cmを測り、検出面の標高は6.40m前後を測る。住居の主軸はN－45°－W方向をとることが推測される。壁溝埋土は暗褐色粘質土であり、土師器・須恵器などの遺物が出土する。

住居南西側壁中央部付近には被熱により赤変化した箇所が検出された。カマド基底部の痕跡と考えられるが、白色粘土などの壁体は検出されなかった。住居主柱穴は四本柱であり、1.2～1.4m間隔で掘削されている。各柱穴は直径15～35cmを測り、検出面から柱穴底面までは40～50cm前後の深さを測る。柱穴底面には柱材の圧痕が５cm程度残り、この圧痕より使用された柱材の直径は15cm前後のものが復元できる。

住居南東側壁付近には浅い掘り込みが検出される。本来は住居東側壁に接して掘削されたものか。長軸1.4m、短軸1.2m、検出面から底面までの深さ10cm前後を測る不定形の土坑であり、埋土は焼土・炭化物を少量含む暗褐色土が堆積しており土師器などの遺物を少量含んでいた。

また住居北東側にも浅い掘り込みを持つ土坑が検出された。削平により住居との関連性は判然としないが、住居に伴うものと考えられる。土坑は北側を農水路によって削平されており北側半分が消失するが、長軸２m以上、検出面から底面までの深さ10～20cm前後を測る。土坑内からは土師器などの遺物ともに拳大の礫が数点が出土した。住居に伴う作業用土坑であるか。

Fig.76に出土遺物を示した。

１は土師器埦である。口径12.6cm、器高5.7cmを測る。口縁部は体部中程より内反するもので内外器面にはナデ調整が施される。２は土師器高坏坏部片である。坏部との接合部より脚部は欠損する。復元口径15.0cm、残存高4.6cmを測る。口縁部は強く外反するものである。焼成は良好で色調は褐色を呈する。３は土師器の蓋である。復元口径14.2cm、残存高3.7cmを測る。色調は橙色を呈し、

焼成は良好であるが、摩滅を受け器面調整はほぼ失われる。４は陶質土器の壺胴部片である。色調は橙色を呈し、胎土は精緻である。外器面には浅い沈線が観察でき、内器面にはナデ調整が施される。５は土師器高坏脚部片である。底径10.8cm、残存高6.6cmを測る。円柱状の脚部であり、縦方向にナデ調整が施される。内底面には放射状にナデ調整が施される。焼成は良好で色調は橙色を呈する。６は土師器鉢である。復元口径17.2cm、残存高8.8cmを測る。摩滅により器面調整は観察できない。

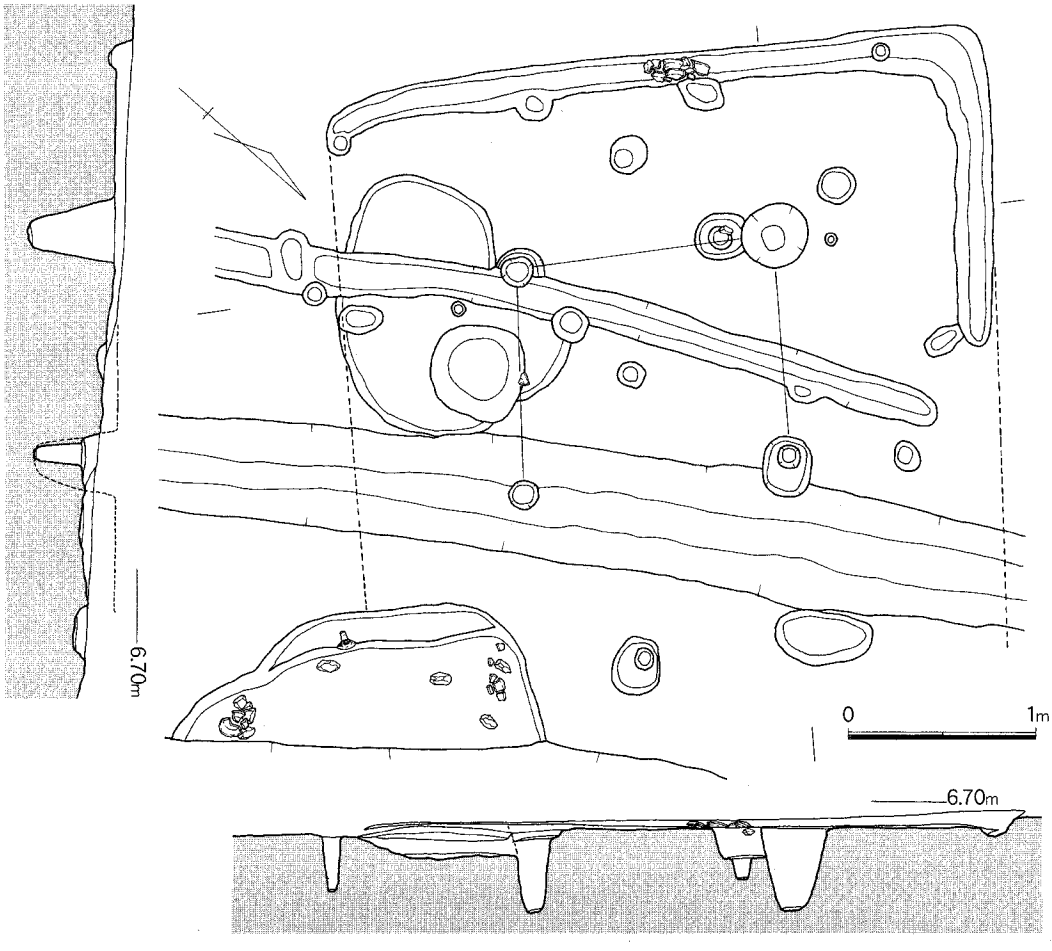


Fig.75 SC-0402遺構実測図 (S=1/40)

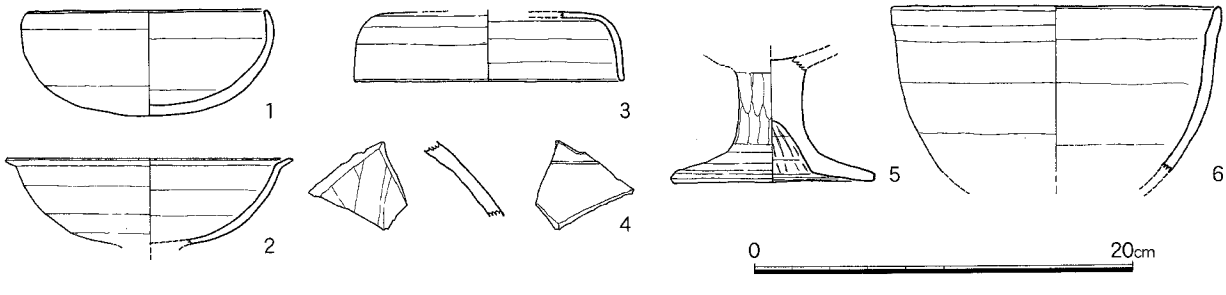


Fig.76 SC-0402出土遺物実測図(S=1/4)

SC-0865（Fig.77）

I-12区で検出した方形竪穴住居である。検出された現状での平面形は方形を呈する。長辺385cm×短辺360cmを測り、検出面から住居床面までの深さは10cm前後を測る。検出面の標高は5.80m前後を測るが、近世以降の開墾によって住居全体が大きく削平されており、東側部分では5cmほどしか残存していない。住居の主軸はN－170°－E方向を採り、住居南側壁中央部にはカマドの痕跡が検出される。カマドは基底部を残して破壊されており、周囲に白色粘土・焼土・炭化材が散乱した状態で検出される。カマド基底部には80cm×50cm、深さ10cmほどの土坑が掘り込まれ、土坑内からは焼土・灰・炭化物に混じって、全長20cm前後の石材が3点ほど検出された。いずれも被熱しているが、土坑際から出土した石材は全長17cm前後を測る柱状のもので、カマドの支脚石として使用されたものと考えられるが、本来据えられていた原位置を保っておらず破壊された際にカマド内に投棄されたものと考えられる。

埋土は住居自体の遺存が浅いため三層のみが観察できただけである。上層は暗褐色砂質土層が堆積し、中層には少量の炭化物と焼土を含む暗灰褐色土が堆積する。下層である黄褐色粘質土をブロック状に含む暗褐色土は住居全体には検出されず、中央部付近にのみ堆積する。

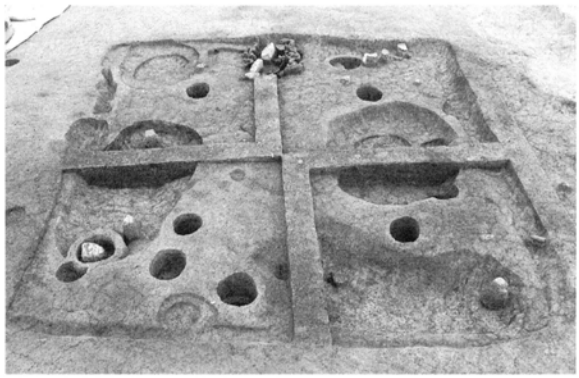
壁溝は住居北西側隅部を除いてほぼ全周する。壁溝内には暗褐色粘質土が堆積しており、土錘などの遺物が出土する。住居内で検出される主柱穴は四本柱で、各柱穴は直径20～30cm前後を測り、住居床面から柱穴底面までは30～40cm前後の深さを測る。

住居東西壁際には長軸1.4～1.7m前後、短軸0.8～1m前後の楕円形を呈する土坑が並んだ状態で検出される。両土坑は深さ20cm前後を測り、暗黄褐色粘質土をブロック状に含む暗灰褐色砂質土などが堆積する。滑石臼玉や未製品、滑石屑が少量出土した。作業用土坑としての用途が考えられる。この他にも住居南東側隅部や北側壁際にて楕円形の土坑が検出された。同様の性格を持つ土坑と考えられる。住居内からは土師器・石器・滑石製臼玉・未製品などの遺物が出土した。

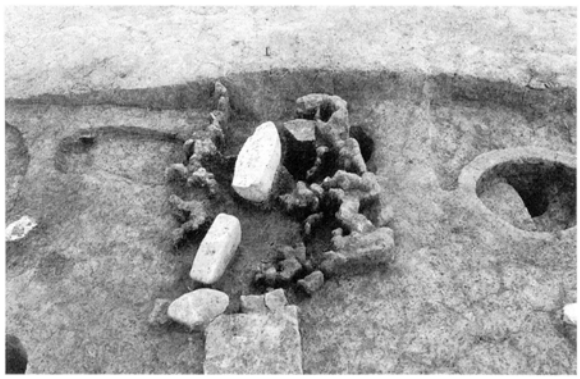
Fig.79に出土遺物を示した。

1は土師器の埦である。口径12.4cm、器高6.2cmを測り、口縁部は内反する。外器面には丁寧なヘラ磨きが施されており、内器面はナデ調整で仕上げられる。ヘラ磨きは底部付近は不定方向に施されるが、体部では横位に施される。焼成は良好であり、色調は橙色を呈する。

2・3は土師器高坏坏部片である。2は復元口径16.8cm、残存高7.7cmを測り、口縁部は「く」の字状に外反する。3は復元口径15.2cm、残存高は5.9cmを測る。2同様に「く」の字状の口縁部を持つ。



Ph.88 SC-0865調査状況（北から）



Ph.89 SC-0865カマド検出状況（北から）

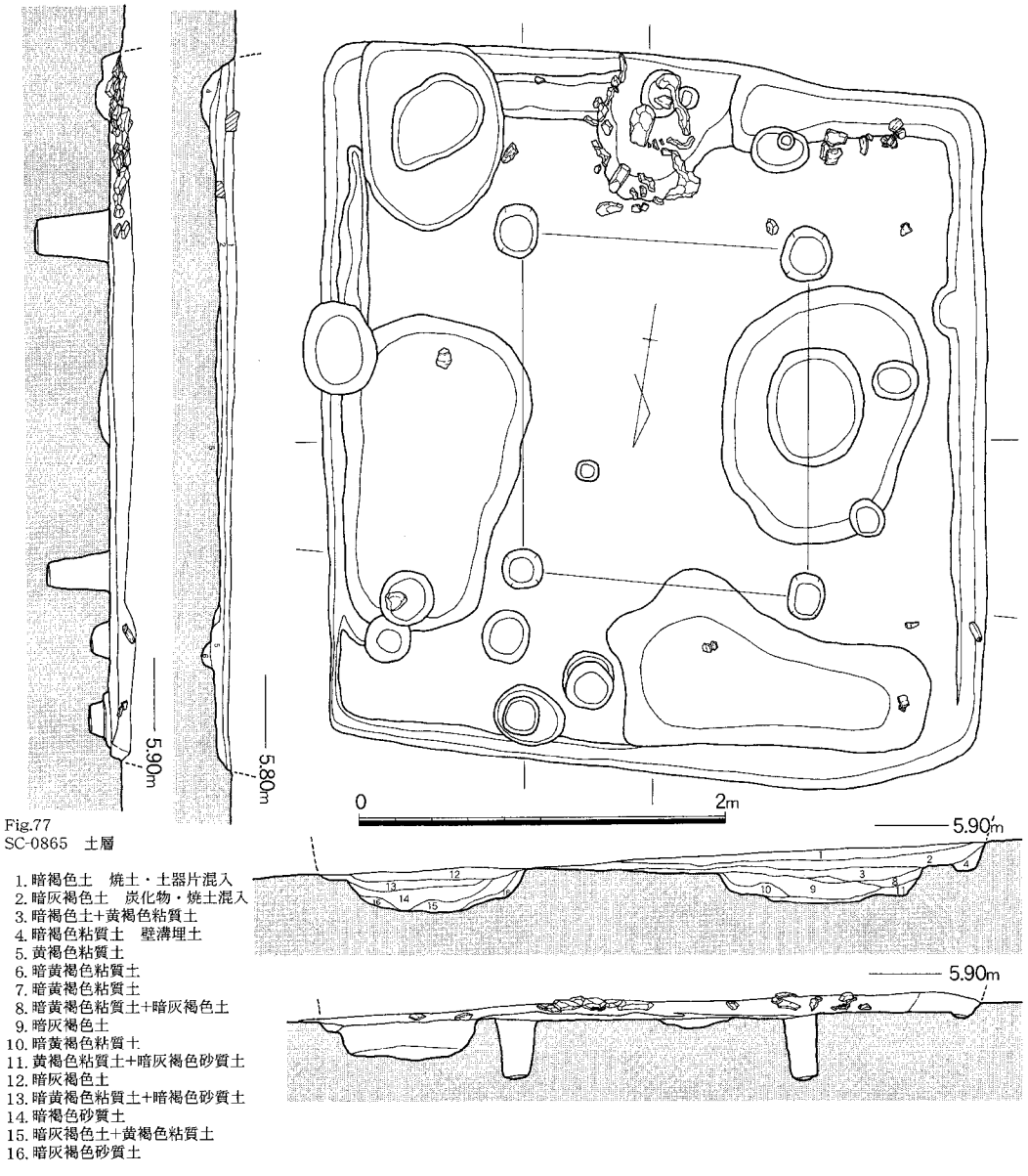


Fig.77 SC-0865遺構実測図 (S=1/40)

4・5は土師器壺口縁部片である。4は復元口径13.9cmを測る。口縁は外反する。5は復元口径16.4cm、残存高5.5cmを測る。ほぼ直立する口縁部を持つ。外器面は摩滅のため調整痕は観察されないが、内器面にはヘラ削り痕が残る。

9は壁溝内より出土した土錘である。全長11.7cm、直径3.3cm、孔径1.3cmを測る。全体に指押さえの痕跡が残る。棒に粘土を巻き付けて成形する。焼成は良好で色調は橙色を呈する。

11は滑石製臼玉である。直径4.1～4.2mm、孔径1.8㎜、器厚は2.5mmを測る。重量は0.1ｇを測る。12～14は滑石製臼玉未製品である。12は側面研磨中に破損し廃棄されたものか。14は方形チップの側面を研磨して円形にする工程段階の遺物である。

出土遺物より6世紀中頃から後半頃の時期が考えられる。

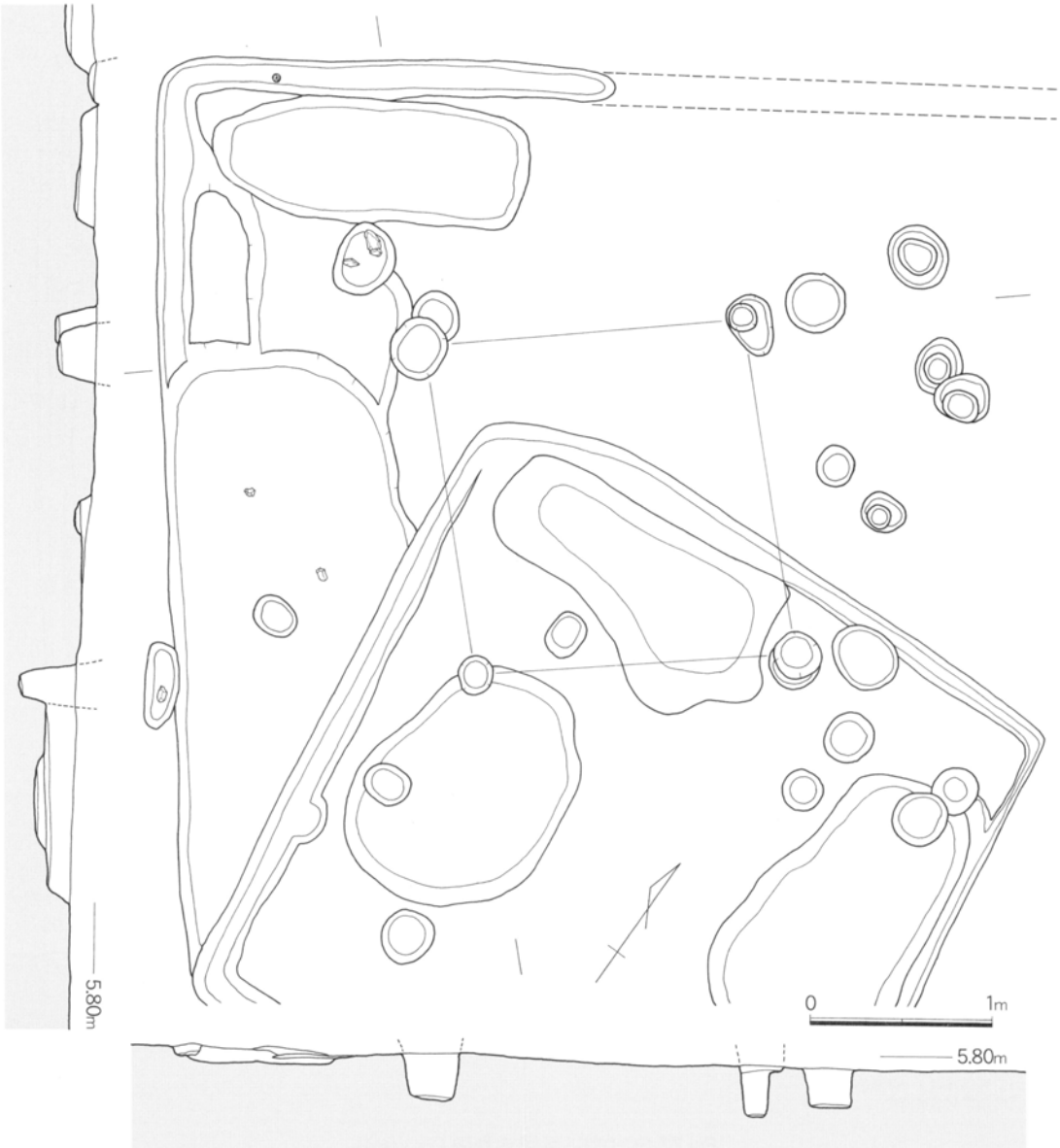


Fig.78 SC-0866遺構実測図(S=1/40)

Ph.90 SC-0865・0866検出状況（北から）

Ph.91 SC-0866遺物出土状況（東から）

SC-0866（Fig.78）

I-11・12区で検出した方形竪穴住居である。SC-0865に切られる。床面以下までの削平を受けており、壁溝も２～３cmほどの深さでしか残存していない。住居西側壁部分と北西側隅部が検出されただけであり、住居の正確な規模は判然としないが、壁溝と主柱穴の位置関係より一辺５m前後の規模が推定できる。住居を検出した遺構面の標高は5.70m前後を測る。住居の主軸は、検出された住居壁と柱穴から推測してN－45°－W方向を採るものと考えられる。カマドの痕跡などの検出はなかった。住居内で検出される主柱穴は四本柱で、各柱穴は直径20～30cm前後を測り、検出面から柱穴底面までは20～25cm前後の深さを測る。

壁溝は住居北側と西側の一部で検出される。壁溝内には暗褐色粘質土が堆積し、滑石製紡錘車などの遺物が出土する（Ph.91）。住居西側には浅い土坑が検出される。土坑内には黄褐色粘質土をブロック状に含む暗褐色土が堆積し、土師器などの遺物が出土する。

Fig.79に出土遺物を示した。

６は土師器高坏の坏部片である。脚部は接合部付近より欠損する。復元口径13.2cm、残存高3.2cmを測る。口縁部はゆるく外反する。内外器面共にナデ調整が施される。７は土師器高坏脚部片である。底径9.4cm、残存高5.8cmを測る。坏部との接合部より坏部は欠損する。脚柱部はナデ調整が施されており、脚底部は横ナデ調整される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

８は土師器甕口縁部片である。復元口径14.0cm、残存高3.5cmを測る。器面調整は内外器面共に摩滅のため失われる。口縁部は頸部よりゆるく外反し、口唇部はナデ調整によって整えられる。

10は滑石製の紡錘車である。一部が欠けているが完存品であり、壁溝内からの出土遺物である。直径は3.1～4.4cmを測る。器厚は1.1cmを測り、孔径0.7cmを測る。全面に研磨痕が明瞭に残り、孔内には縦方向の研磨痕が観察できる。

SC-0865との切り合い関係と出土遺物より６世紀前半頃の時期が考えられる。

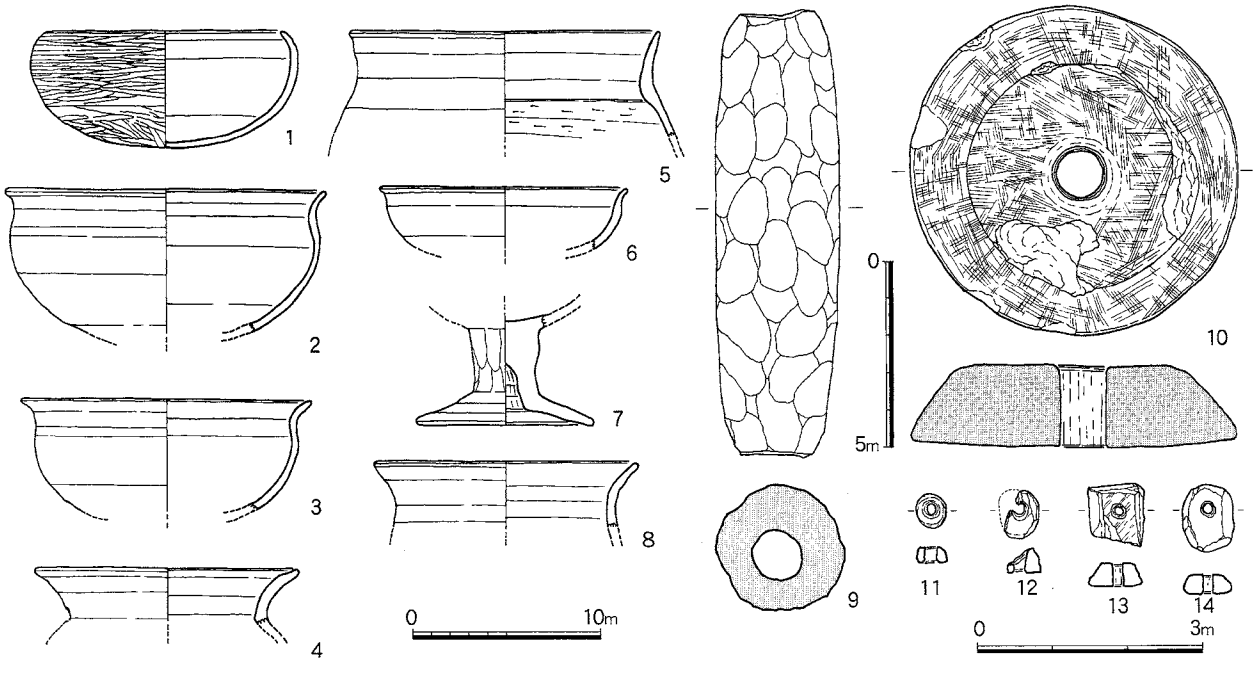


Fig.79 出土遺物実測図（S=1/1・1/2・1/4）

SC-0871（Fig.80）

K-7・8区で検出した方形竪穴住居である。農水路の掘削により住居北東側約1/3の部分を床面以下まで削平され、また残存する部分もSC-0874によって切られる。検出された南側半分から復元できる平面形は方形であり、一辺410cm前後の規模の住居が復元できる。検出面から住居床面までの深さは５～30cm前後を測り、検出面の標高は6.40m前後を測る。検出されたK-7・8区は標高6.25～6.50m前後を測る北東側へと下る緩斜面上である。住居の主軸はN－39°－W方向を採る。

住居北西側壁中央部付近にはカマド基底部が検出される。カマドは住居廃絶時に破壊されており、さらに中世の土壙墓であるSK-0873によって切られる。カマド壁体を構成して白色粘土は検出されず、焼土・灰が堆積する浅い土坑のみが検出された。土坑は90cm×80cm前後の規模が復元でき、床面から底面までは15cm前後の深さを測る。土坑底面は被熱により赤変化していた。

住居埋土は大きく二層に分層される。上層は暗灰褐色砂質土層が堆積する。砂質が多く含まれており、土器片・焼土・炭化物などが含まれる。下層には暗褐色土が５cm前後の厚さで堆積する。また、床面上の一部分には暗黄褐色粘質土と暗褐色土の混合層が厚さ３cm前後で堆積していた。壁溝内・間仕切り溝内には暗褐色粘質土が堆積する。

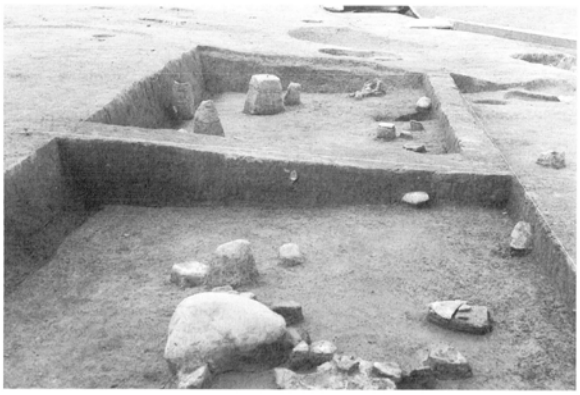
壁溝は山側である南西側壁部分から南東側隅部付近から検出される。また住居床面上には住居内間仕切り用の溝も検出された。これらの溝は壁溝につながった状態で検出される。

主柱穴は四本柱で、南西側の柱穴は住居内で検出されるが、北西側の柱穴は農水路底面にて検出された。各柱穴は直径25～30cm前後を測り、検出面から柱穴底面までの深さは５～50cm前後の深さを測る。

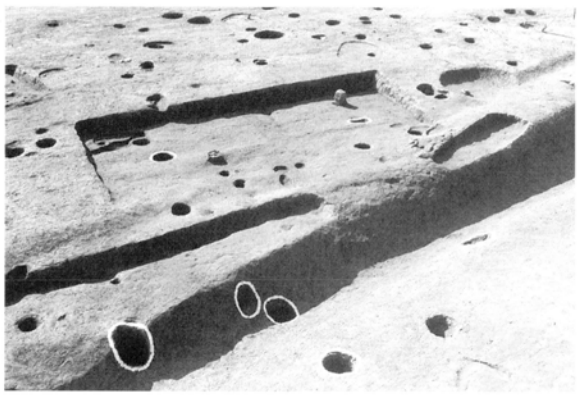
住居床面上には土師器埦、壺、叩き石などの石器が散乱した状況で検出され、住居埋土中からは滑石製臼玉、黒曜石剥片などの遺物が出土した。

Fig.81・82に出土遺物を示した。

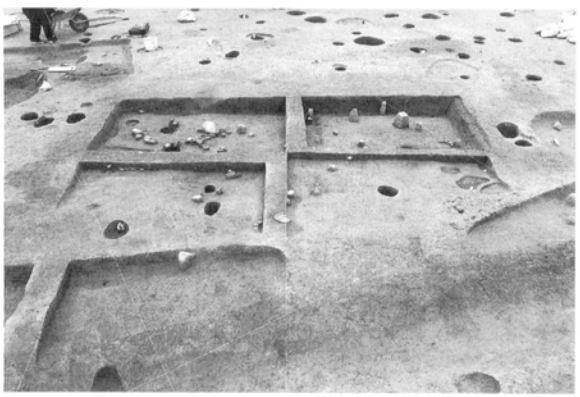
１～３・５・６は土師器埦である。１は復元口径15.0cm、残存高3.5cmを測る。口縁部はわずかに外反する。２は復元口径14.8cm、残存高4.7cmを測る。１と同様に口縁部は外反する。外器面はナデ調整、内器面は横方向のヘラ磨きが施される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。３は復元口径14.8cm、残存高6.0cmを測る。埦としたが高坏



Ph.92 SC-0871土層断面（南東から）



Ph.93 SC-0871完掘状況（北東から）



Ph.94 SC-0871調査状況（北から）

坏部片の可能性も考えられる。身は出土した他の椀に比べ深く、口唇部でわずかに外反するが、体部よりほぼ直立する口縁部を持つ。外器面には横方向のヘラ磨きが施され、内器面はナデ調整が施される。５は復元口径16.8cm、残存高4.7cmを測る。口縁部はわずかに外反する。摩滅によって器面調整はほぼ失われる。６は復元口径15.6cm、残存高5.3cmを測る。

４は土師器高坏坏部片である。接合部より脚部は欠損する。復元口径15.2cm、残存高6.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外器面は摩滅されるが、内器面にはナデ調整痕が観察できる。７は土師器高坏である。坏部口縁部と脚部端部を欠損する。残存高は7.2cmを測る。坏部と脚部との

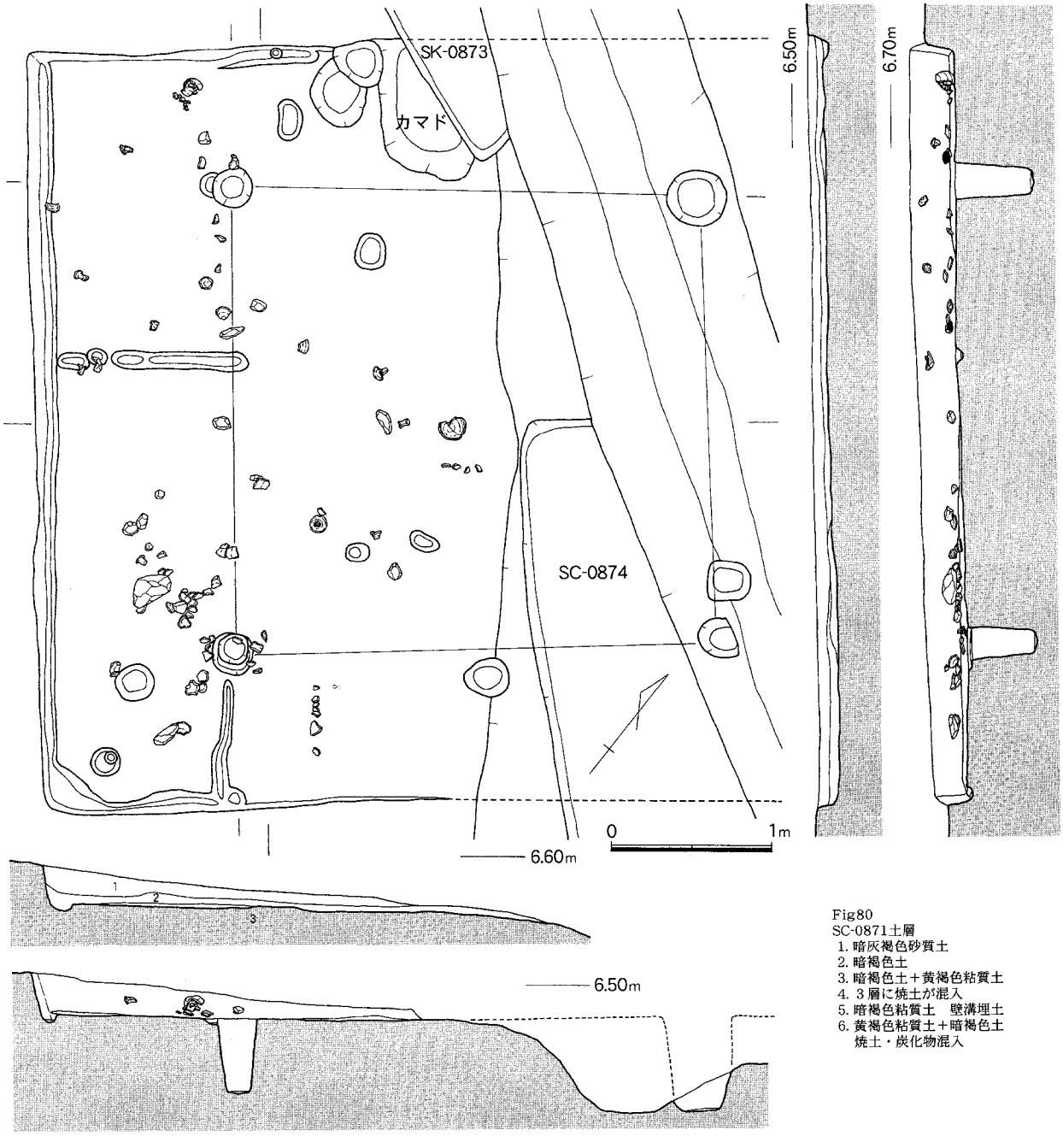


Fig.80 SC-0871遺構実測図 (S=1/40)

接合部には刷毛目調整が施される。脚底部は脚柱部に貼り付けられたものであるが、接合部より剥離して欠損する。８・９は土師器高坏脚部片である。８は底径9.6cm、残存高5.0cmを測る。９は底径9.6cm、残存高5.3cmを測る。脚柱部は円柱状を呈し、ナデ調整が施される。10は土師器の甑把手片である。把手は断面が円形を呈し、器面にナデ付けられる。

11・12は須恵器坏である。11は復元口径11.6cm、残存高3.2cmを測る。12は口縁部を欠損する坏である。底部はヘラ削りが施され、わずかに丸味を帯びる。13は土師器壺口縁部片である。復元口径14.8cm、残存高2.5cmを測る。14は土師器壺の胴部片である。

15～35は住居埋土より出土した滑石製臼玉である。各法量・重量は以下の表に示した。
法量は長径×短径×器厚の順に示し単位は㎜である。重量はｇで表した。

	法　　量	重量		法　　量	重量		法　　量	重量
15	5.0×4.9×3.59	0.10	22	5.0×4.4×2.8	0.07	29	4.6×4.55×2.6	0.06
16	4.5×4.5×2.79	0.09	23	6.0×5.9×4.3	0.20	30	4.6×4.5×2.5	0.07
17	4.5×4.5×4.0	0.13	24	5.7×5.7×3.4	0.12	31	5.58×5.2×4.3	0.14
18	5.0×4.9×3.9	0.08	25	4.95×4.8×2.5	0.07	32	5.05×5.0×2.0	0.08
19	4.98×4.7×2.5	0.08	26	4.6×4.4×2.2	0.06	33	5.18×5.1×2.2	0.11
20	4.48×4.4×2.5	0.06	27	4.9×4.6×2.9	0.08	34	4.5×4.5×2.9	0.08
21	4.5×4.5×2.2	0.07	28	4.9×4.71×3.2	0.13	35	4.9×4.4×2.72	0.08

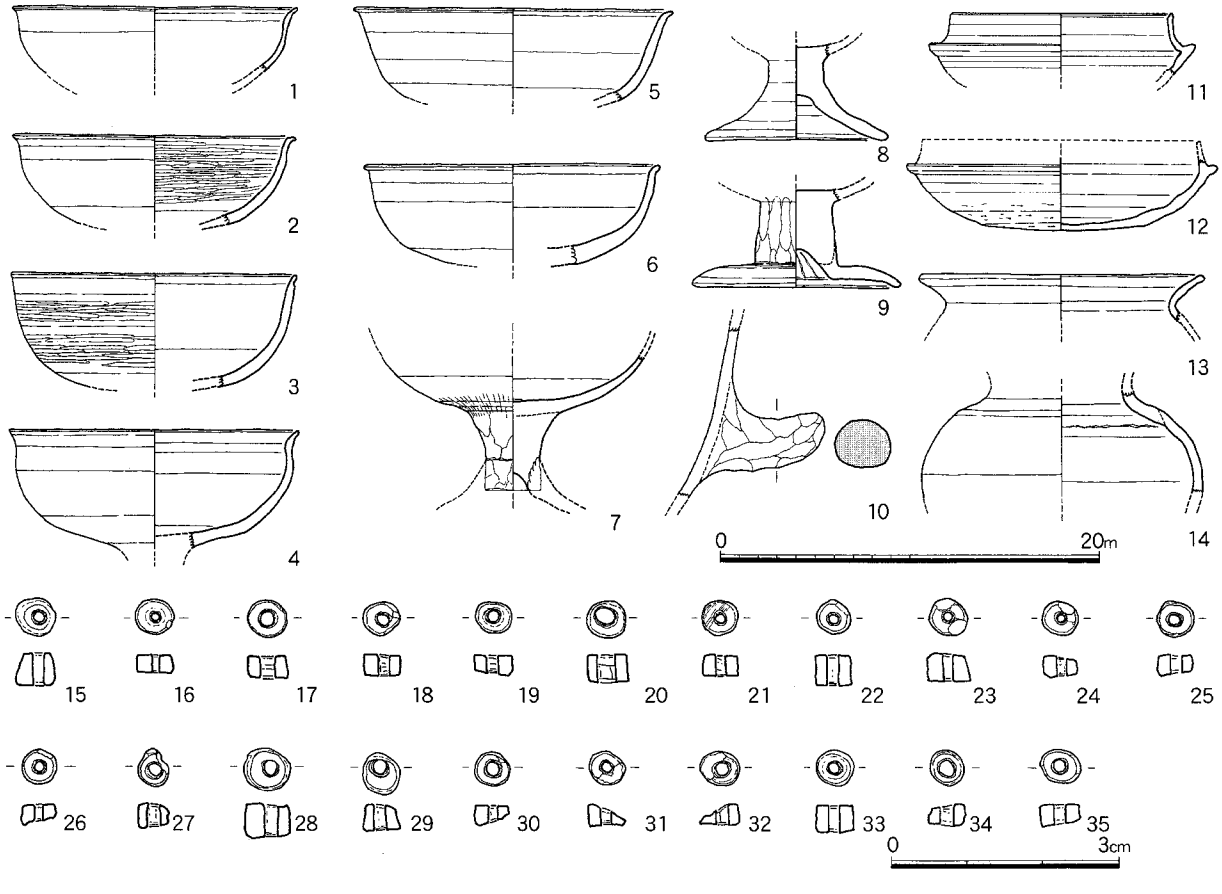


Fig.81 SC-0871出土遺物実測図1（S=1/1・1/4）

36は頁岩製の石鑿である。全長8.7cm、全幅1.3cm、全厚1.3cmを測り、重量は62.4ｇを測る。器面全面には研磨痕がわずかに観察できる。刃部は片刃で研磨痕が明瞭に残る。

37は滑石製の紡錘車である。全周の約1/4程度の縁辺部片である。完存していたならば直径は4.0cm前後に復元できる。底面には不定方向の研磨痕が観察できる。

これらの出土遺物より住居の年代は6 世紀前半頃の時期が考えられる。

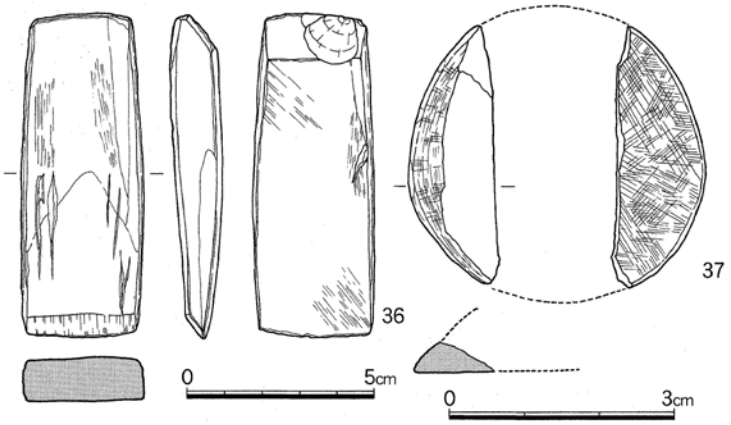


Fig.82 SC-0871出土遺物実測図２（S=1/1・1/2）

SC-0872（Fig.83）

J-8区で検出した方形竪穴住居である。SC-0871に住居北側隅部を切られる。開墾により住居全体が大きく削平を受けているため、北東側では床面は消滅する。比較的遺存している西側部分でも壁溝が３cm前後残るだけである。壁溝の一部と主柱穴の位置関係から復元できる平面形は方形であり、一辺410cm前後の規模の住居が復元できる。住居が検出された遺構面の標高は6.55m前後を測る。住居の主軸はN－51°－W方向を採り、住居北西側壁中央部付近にはカマドの痕跡が検出される。カマド壁体などは検出されず、カマド基底部である土坑が検出された。土坑は110cm×80cm前後を測る楕円形を呈し、検出面から土坑底面までは10cm前後の深さを測る。土坑内には焼土・炭化物が堆積し、底面中央部は被熱により赤変化していた。壁溝は山側である西側壁部分のみに検出される。床面以下まで削平されているため、住居埋土は観察できないが、壁溝内には暗褐色粘質土が堆積していた。検出された主柱穴は四本柱で、各柱穴は直径20～40cm前後を測り、検出面から柱穴底面までは30～60cm前後の深さを測る。

住居中央部付近と南側には土坑が検出される。中央部土坑は平面形は円形で、直径１m前後を測る。検出面から土坑底面までは15cm前後の深さを測り、暗褐色土の埋土が堆積する。南側土坑は長径1.1m、短径50cm前後を測る楕円形の土坑である。検出面から土坑底面までは20cm前後の深さを測り、土坑埋土は壁溝埋土と同様の暗褐色粘質土が堆積する。両土坑からは遺物の出土はほとんどなかったが、住居に伴う作業用土坑としての性格が考えられる。

Ph.95 SC-0872完掘状況（南東から）

Fig.85に出土遺物を示した。

１は土師器高坏坏部片である。復元口径13.0cm、残存高4.3cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。

２は土師器壺の口縁部片である。復元口径13.4cm、残存高は4.4cmを測る。３は須恵器壺口縁部片である。復元口径15.4cm、残存高は2.7cmを測る。頸部には波状紋が施される。

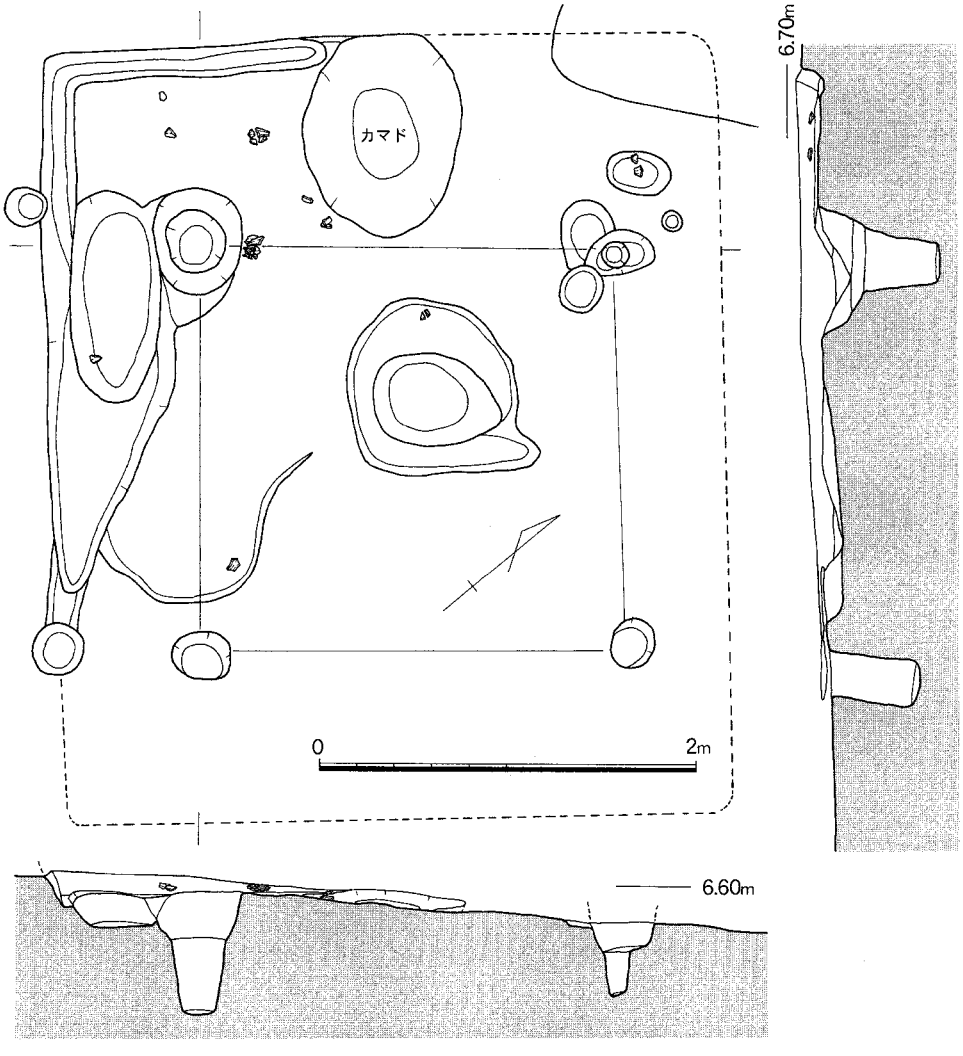


Fig.83 SC-0872遺構実測図(S=1/40)

SC-0874 (Fig.84)

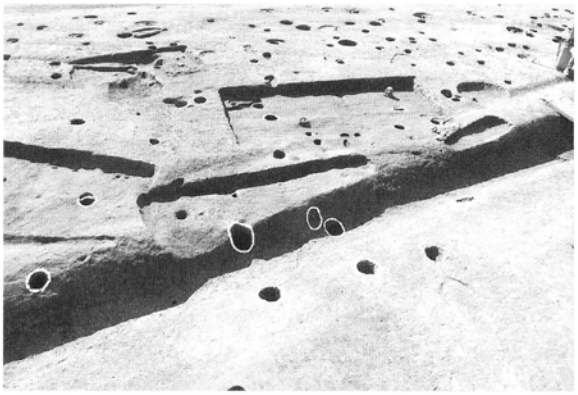
K-8区で検出した方形竪穴住居である。SC-0871を切るように掘削された住居である。住居北側から中央部付近にかけては農水路により削平され、住居床面は完全に消滅する。住居南側の約1/4程度の部分が残存している状況である。平面形は方形を呈し、残存する住居南側では一辺400cmを測る。検出面から住居床面までの深さは20cm前後を測り、検出面の標高は6.20m前後を測る。

住居の主軸方向は残存する部分と検出された主柱穴から復元してN－42°－W方向を採るものと考えられる。カマドは削平された部分に付設されていたためか、残存する住居床面上からは検出されなかった。主柱穴は削平された部分で検出された。農水路底面で検出された柱穴は20cmほどしか残存していなかったが、他の柱穴は検出面から柱穴底面まで40～60cm前後の深さを測る。主柱穴は四本柱で各柱穴は直径30～40cm前後を測る。

壁溝は住居南側壁部分のみに掘削されていた。その他の箇所については削平によって消滅している

ため判然としないが、他の住居の状況を考慮して南東側のみに掘削されたものと考えられる。

住居埋土は三層に分層された。現状で20cm程の残存であるため、本来の住居埋土の上部は既に消滅しているものと考えられる。土層観察では上層部分に暗黄褐色砂質土が堆積する。丘陵裾部方向である北東側方向に向かって厚く堆積する層で、丘陵上部からの自然堆積層である。雨水などの作用により乖離した黄褐色砂を多く含んでいる。床面上の下層には暗灰褐色砂質土が堆積する。炭化物の混入が少量認められ、住居周辺の基盤層である黄褐色粘質土が少量ではあるがブロック状に含まれる。壁溝内には暗灰褐色土と黄褐色粘質土との混合層が堆積する。



Ph.96 SC-0874完掘状況（北東から）

住居床面上からは土師器埦・土師器高坏・滑石製品などの遺物が出土した。

Fig.85に出土遺物を示した。

４は土師器埦である。復元口径13.8cm、残存高4.0cmを測る。口縁部はわずかに内反する。外器面にはやや幅の広いヘラ磨きが横方向に施される。内器面にはナデ調整が施される。

６は土師器高坏脚部片である。底径8.0cm、残存高6.2cmを測る。脚部は短く、接合部直下から底面に向かって開く。脚部は横方向のナデ調整によって成形される。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈

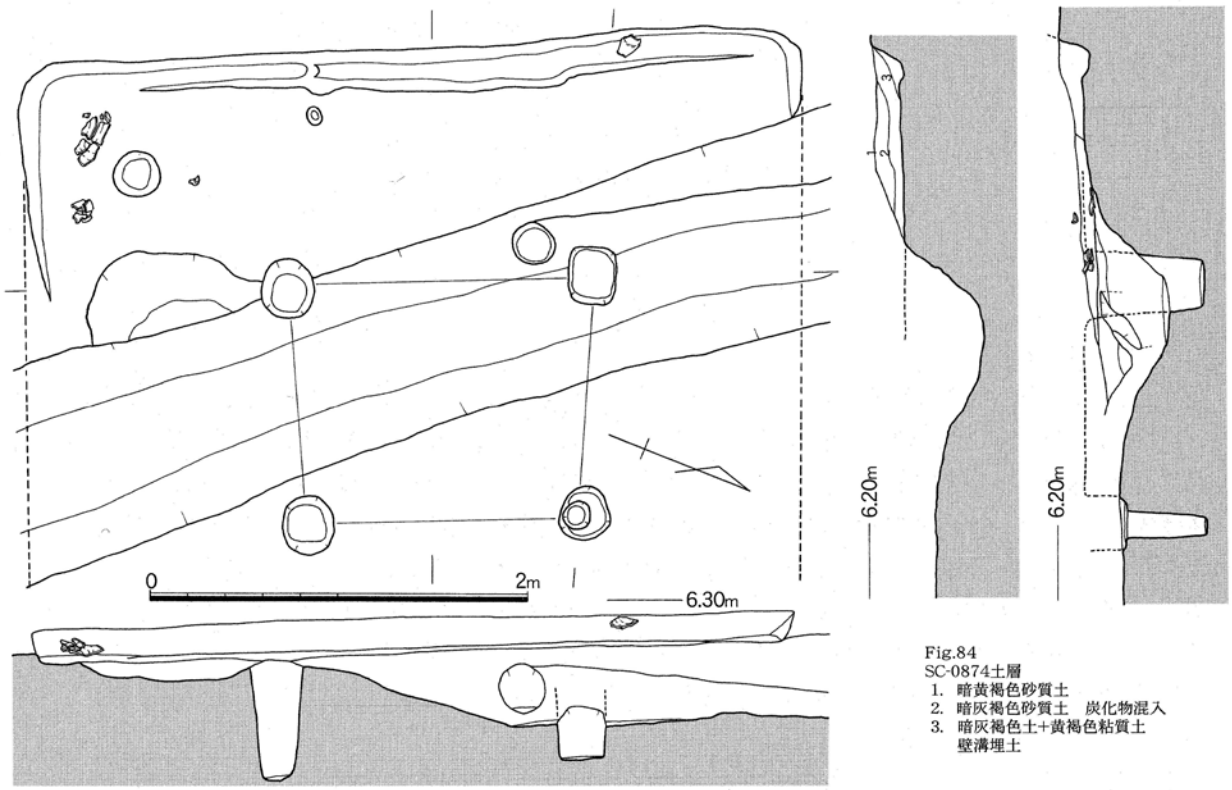
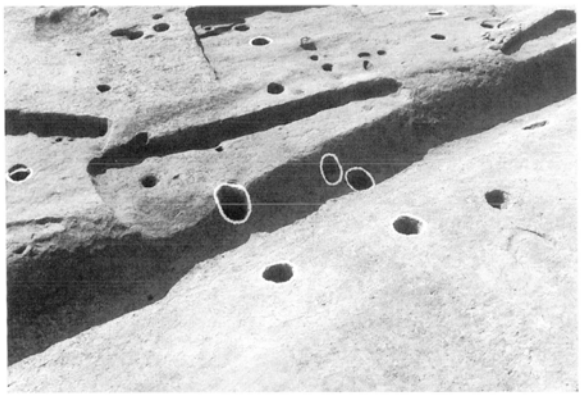
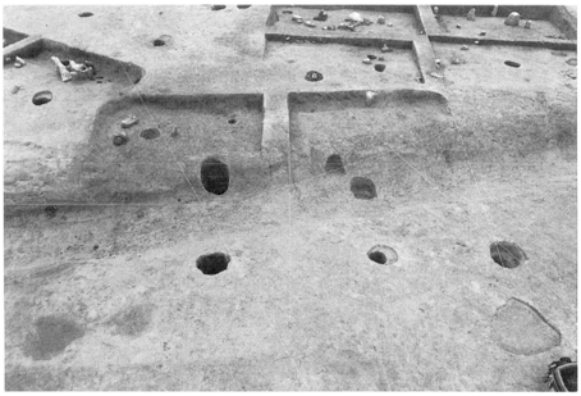


Fig.84
SC-0874土層
1. 暗黄褐色砂質土
2. 暗灰褐色砂質土　炭化物混入
3. 暗灰褐色土+黄褐色粘質土
壁溝埋土

Fig.84 SC-0874遺構実測図(S=1/40)



Ph.97 SC-0874完掘状況・近景（北東から）



Ph.98 SC-0874調査状況（北から）

する。５は土師器高坏坏部片である。坏部上半部分のみの出土である。復元口径13.8cm、残存高5.1cmを測る。摩滅により外器面の調整痕はほぼ失われるが、内器面にはナデ調整が施される。焼成は良好であり、色調は褐色を呈する。７・８は土師器壺口縁部片である。７は復元口径13.5cm、残存高4.8cmを測る。摩滅により器面調整はほぼ消滅する。器厚は薄手であり、胴部は長胴形のものが考えられる。８は復元口径15.6cm、残存高7.5cmを測る。摩滅により外器面の器面調整は失われている。内器面も摩滅されるが、ナデ調整の痕跡が観察できる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

９は滑石製紡錘車である。縁辺部の一部が欠損する。直径4.2cm、全高1.2～1.3cmを測る。孔径は0.6cmを測り、器面全面に研磨痕が残る。上面には研磨時に消しきれなかった段が残る。側面には回転させながら行った研磨痕が残る。

これらの出土遺物より６世紀中頃から後半頃の時期を考えることができる。また、SC-0874に切られるSC-0871とした住居については構築順序と出土遺物より６世紀前半の時期が考えられる。これらの住居が検出されたJ･K-8区ではSC-0871・SC-0872・SC-0874・SC-0875・SC-0876・SC-1263など６軒もの住居が検出され、Ａ区の中でも住居が最も切り合った状況で検出された箇所である。開墾以前は立地条件の良好な場所であったことが推測される。

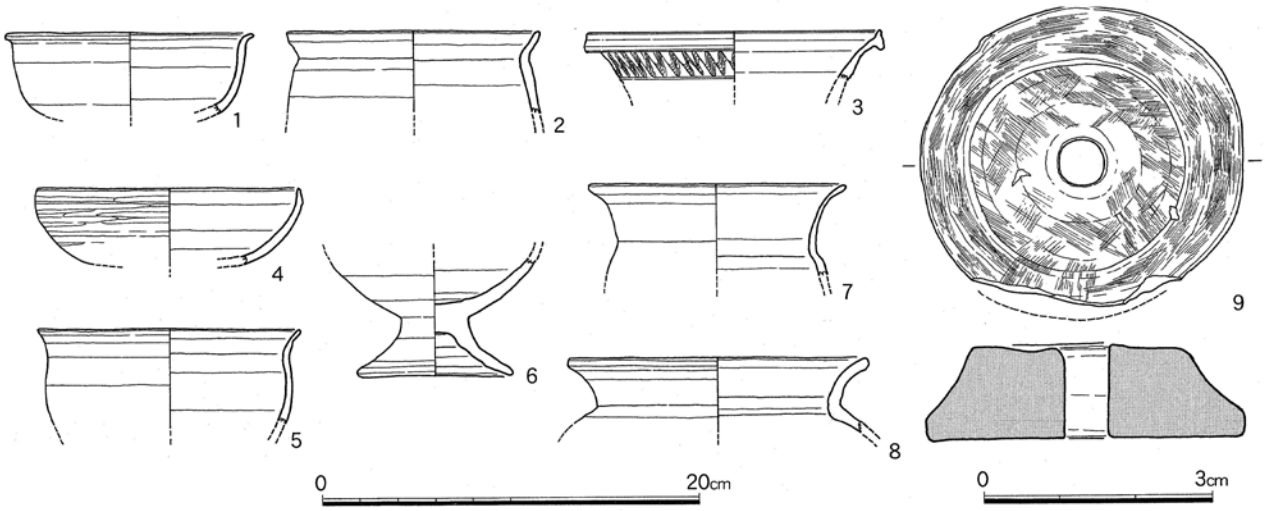
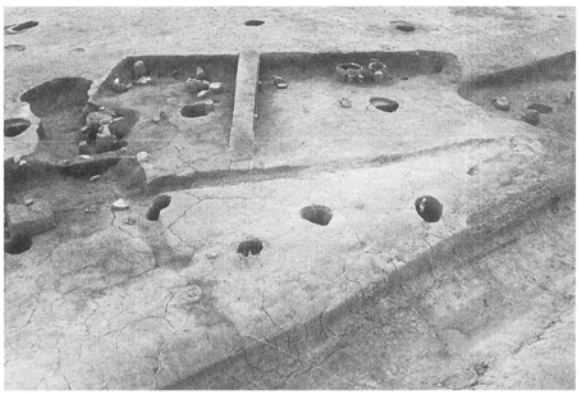


Fig.85 出土遺物実測図（S=1/1・1/4）

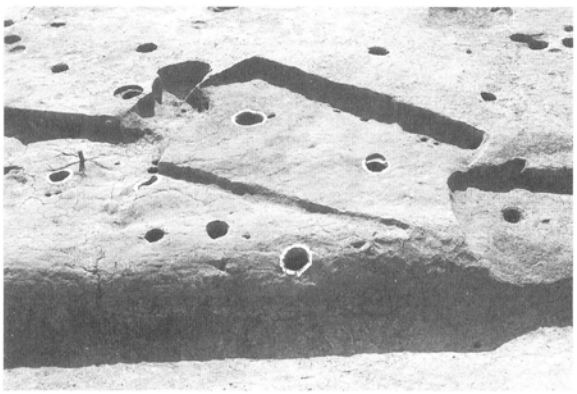
SC-0875（Fig.86）

K-8区で検出した方形竪穴住居である。住居東側は開墾により床面以下まで削平され、東側住居壁は消滅する。また、残存する部分もSC-0874・SC-0876によって切られる。検出できたのは住居西側部分だけである。現状での平面形は方形で、一辺340cmの住居が復元できる。検出面から住居床面までの深さは最も遺存する部分で15cm前後を測り、住居を検出した遺構面の標高は6.30m前後を測る。住居の主軸は、残存する西側壁と柱穴よりN－15°－W方向が推定できる。壁溝は丘陵側である西側壁部分と南側壁の一部に検出される。カマドは削平により基底部まで消滅しており、住居内のどの位置に付設されたかは判然としない。住居埋土は中央部より西側部分のみで観察できた。埋土は三層に分層され、上層には暗灰褐色土が堆積する。基盤層である黄褐色粘質土がブロック状に混入し、少量ではあるが炭化物も含まれる。床面上には下層とした暗褐色砂質土が堆積する。壁溝内には暗灰褐色砂質土が堆積していた。いずれの層も西側方向からの流入層で、雨水などによる自然堆積層である。住居床面上にて検出された主柱穴は四本柱で、各柱穴は直径15～30cm前後を測る。検出面から柱穴底面までは40～60cm前後の深さを測る。東側の柱穴は削平により上面部分が削られているが、柱穴底面の高さは西側の柱穴より深く掘削されている。丘陵裾部側である東側に上部構造の重量負担が大きく掛かっていた結果であろうか。

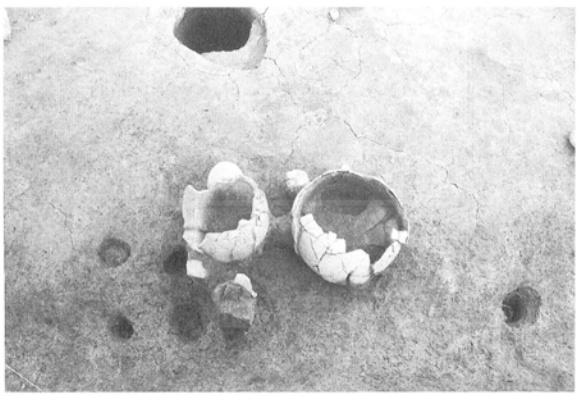
住居南側には壁溝に接して不定形の土坑が検出された。住居壁溝との切り合い関係を確認したが埋土に差は見られず、住居に伴う土坑として考え調査を行った。土坑は住居床面より20cm前後の深さで掘削されており、土師器埦・石器などの遺物が出土した。住居入り口部に伴う土坑の可能性が考えられた。また、住居東側部分においても直径１m前後の土坑が検出された。土坑は深さ15cm前後を測り、上面からは土師器壺口縁部が検出された。



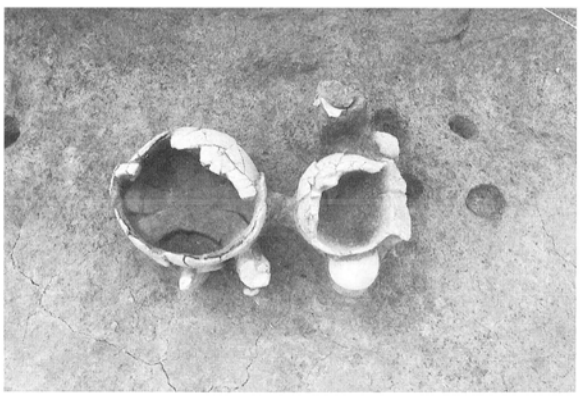
Ph.99 SC-0875調査状況（北西から）



Ph.100 SC-0875完掘状況（北から）



Ph.101 SC-0875遺物出土状況（南西から）



Ph.102 SC-0875遺物出土状況（北東から）

住居床面上からは土師器壺が逆位と横位の状態で二個体検出された（Ph101・Ph.102）。また、壁溝内からも土師器埦・叩き石などの石器が出土した。

Fig.87に出土遺物を示した。

１～４は土師器の埦である。１は口径13.2cm、器高5.3cmを測る。口縁部は体部中程より外反し、底部はやや尖り気味になる。外器面は縦方向の刷毛目調整が施された後に、体部中位部分に横方向の刷毛目調整が施される。内器面はナデ調整が施される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。２は復元口径12.8cm、器高6.2cmを測る。口縁部はほぼ直立するもので、内外器面共にナデ調整される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。３は復元口径14.8cm、器高6.0cmを測る。２と同様にほぼ直立する口縁部を持つ。４は復元口径13.4cm、残存高4.8cmを測る。焼成は良好で色調は褐色を呈する。５は土師器壺の口縁部片である。復元口径10.4cm、残存高4.2cmを測る。６・７は土師器壺である。住居床面上から出土した。６は口径14.8cm、器高15.9cmを測る。外器面は摩滅により調整痕は失われる。胴部内器面にはヘラ削り痕が観察できる。頸部より上位にはナデ調整が施される。

７は口縁部を欠損するが、残存高22.3cmを測り、胴部最大径は23.0cmを測る。６と同様に外器面は摩滅されるが、内器面にはヘラ削りが施され、頸部より上位にはナデ調整が施される。

これらの出土遺物よりSC-0875とした住居は６世紀初頭の時期が考えられる。

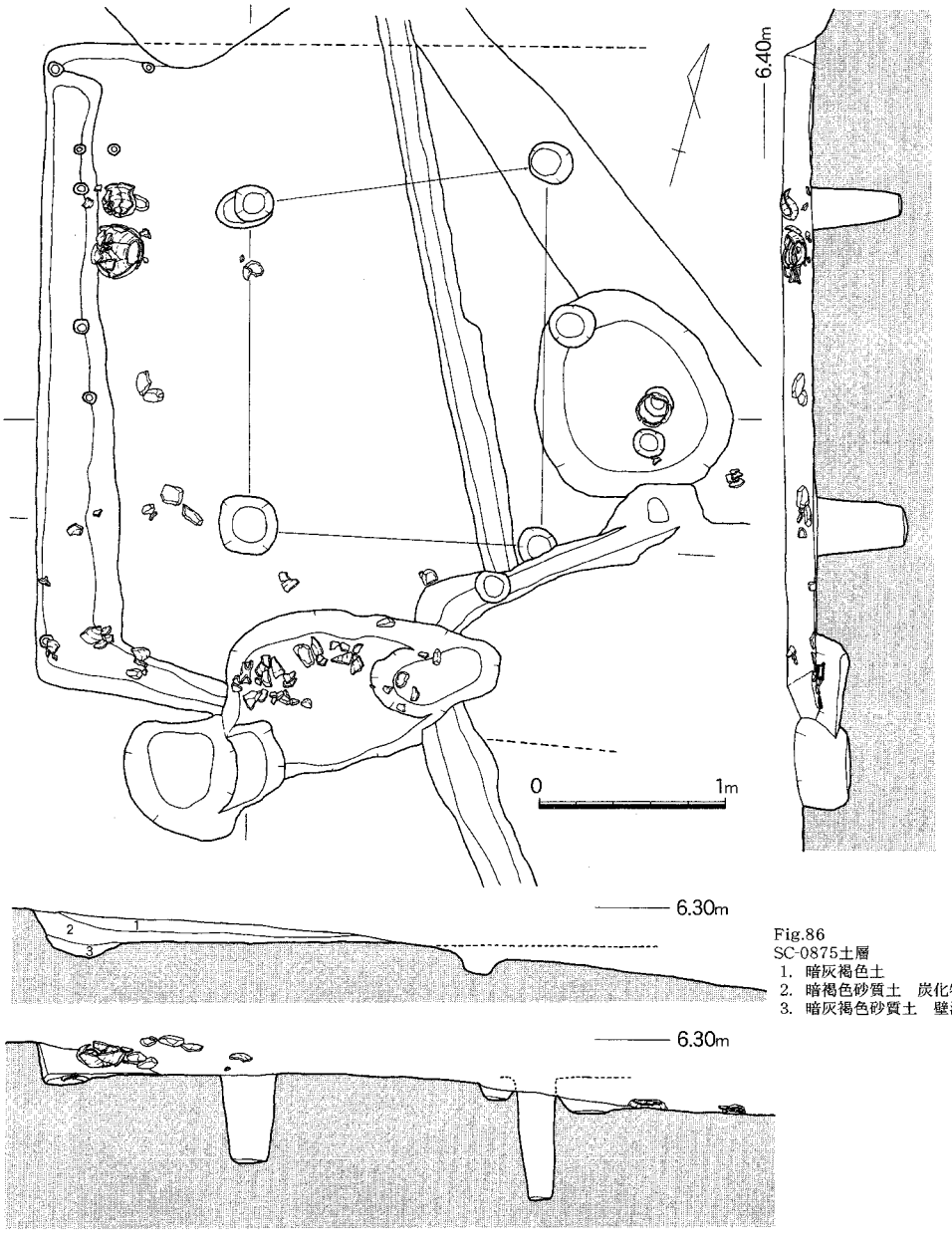


Fig.86
SC-0875土層
1. 暗灰褐色土
2. 暗褐色砂質土　炭化物混入
3. 暗灰褐色砂質土　壁溝埋土

Fig.86 SC-0875遺構実測図（S=1/40）

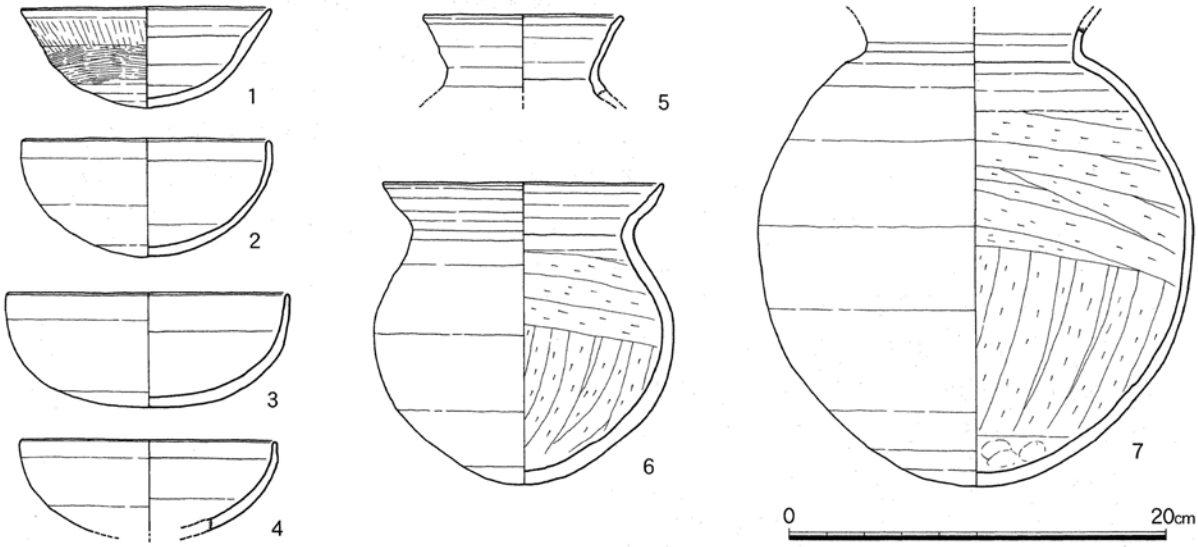
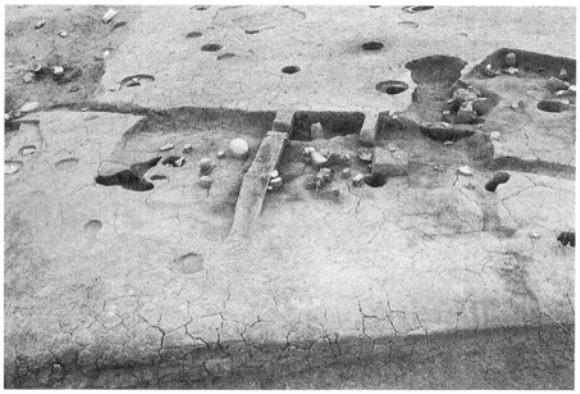


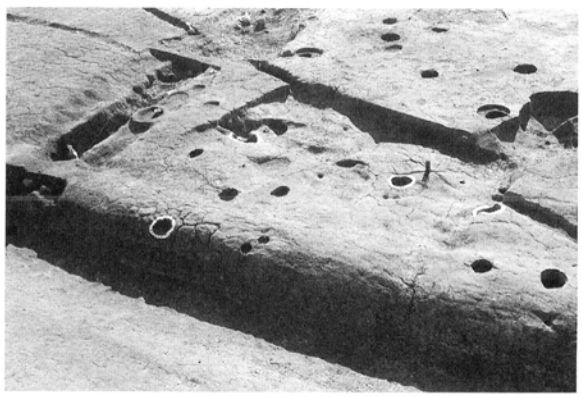
Fig.87 SC-0875出土遺物実測図（S=1/4）

SC-0876（Fig.88）

K-9区で検出した方形竪穴住居である。住居北東側は中央部付近より削平されており、床面は消滅する。住居南西側半分が検出された。平面形は方形を呈し、一辺355cmを測る住居が復元できる。最も残存する部分では検出面から住居床面まで25cm前後を測る。住居を検出した遺構面の標高は6.10m前後を測る。住居の主軸はN－36°－W方向を採る。壁溝は山側である南西側壁部分と北西側壁部分で検出された。カマドは削平によって失われており、土坑などの基底部の痕跡も検出されなかった。住居の埋土は四層に分層される。上層より１層とした暗褐色砂質土、２層の暗褐色土と黄褐色粘質土の混合層、３層の暗褐色土、４層の暗黄褐色粘質土の順に堆積する。３・４層は住居東側で検出される土坑の埋土であり、基本的には１・２層が住居埋土として考えられる。住居床面上東側で検出された土坑は平面が不定形を呈し、床面より10～20cm前後の深さで掘削される。土坑埋土からは滑石臼玉・未製品が少量出土した。また、土坑の際には30cm×15cm前後の扁平な石材が据えられた状態で検出された。台石として使用されたものと考えられ、土坑は作業用の性格が推測される。住居内で検出される主柱穴は四本柱で、各柱穴の直径は20cm前後を測る。検出面より柱穴底面までは20～40cm前後の深さを測る。



Ph.103 SC-0876調査状況（北東から）



Ph.104 SC-0876完掘状況（北西から）

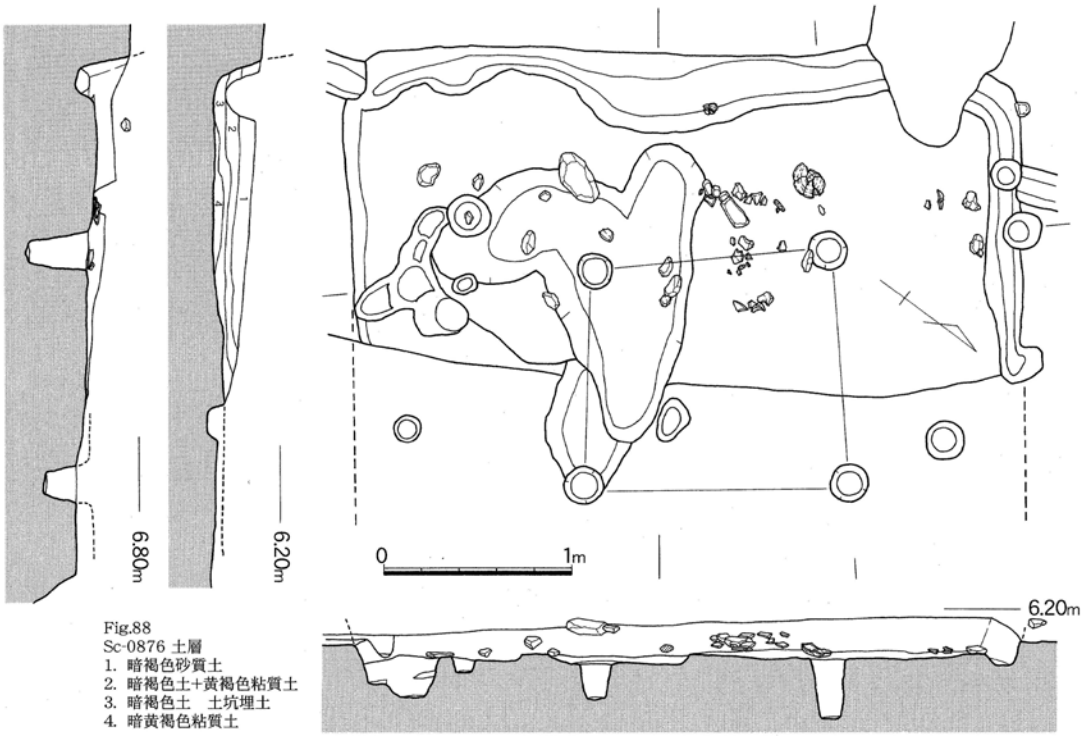


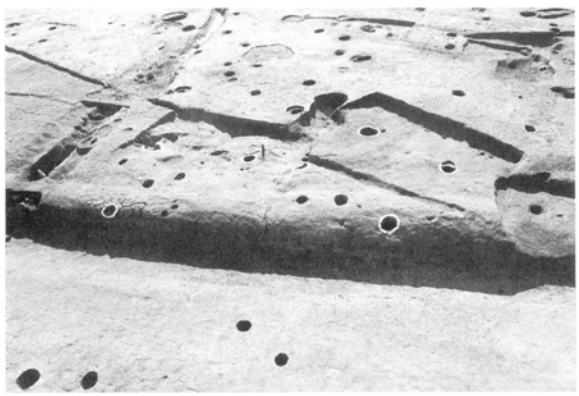
Fig.88 SC-0876遺構実測図（S=1/40）

住居床面上からは土師器埦・土師器壺口縁部片・叩き石等の遺物が出土した。Fig.89に出土遺物を示した。

１～３・５は土師器埦である。１は口径13.6cm、器高6.2cmを測る。最大器厚は口縁部下にあり、口縁部はわずかに内反する。焼成は良好で色調は橙色を呈する。２は口径13.6cm、器高6.6cmを測る。器厚は薄手で口縁部は内反する。器面調整は摩滅によって失われる。３は復元口径13.6cm、残存高3.8cmを測る。口縁部は端部付近でわずかに外反する。５は復元口径13.0cm、残存高4.4cmを測る。口縁部は体部よりほぼ直立する。摩滅によって器面調整はほぼ失われる。

４は土師器甑の把手片である。胴部中程に差し込み式で接合される。把手自体は短く、直線的で上方には湾曲せず、直線的に横方向に延びるものである。６・７は土師器壺口縁部片である。６は復元口径17.0cm、残存高3.5cmを測る。７は復元口径21.6cm、残存高5.3cmを測る。口縁部端部が玉縁状に厚くなる。８は滑石製臼玉である。直径は4.6～4.8mmを測り、器厚は2.5mmを測る。重量は0.25ｇであり、わずかに欠損する。９は滑石製臼玉未製品である。全長14㎜、全幅11㎜、全厚2.5mmをPh.105測る。穿孔は行われており、研磨痕も観察できる。円形への加工過程段階のものと考えられる。

これらの出土遺物より住居の年代は６世紀中頃の時期が考えられる。



Ph.105 SC-0875・0876完掘状況（北西から）

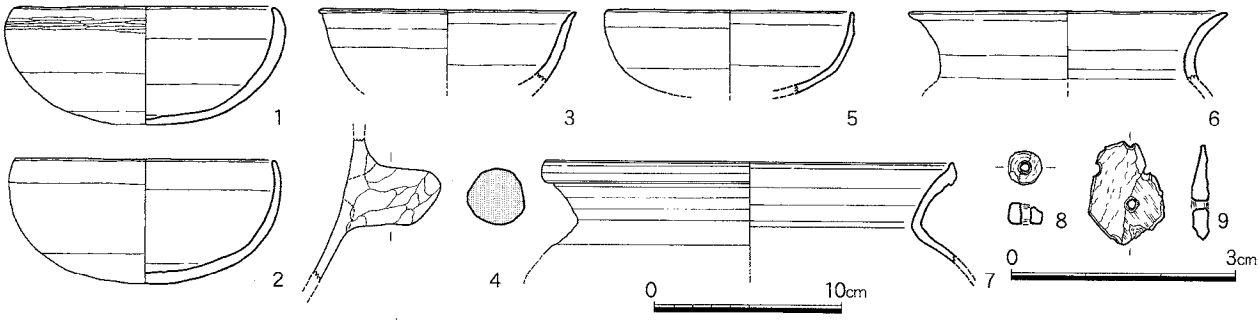


Fig.89 SC-0876出土遺物実測図 (S=1/1・1/4)

SC-0878 (Fig.90)

J-8区で検出した方形竪穴住居である。畑地開墾により住居全体が床面以下まで削平されており、住居西側隅部がわずかに検出されただけである。検出された部分より平面形は方形の住居が推測できる。現状では一辺330cm分が確認された。検出面の標高は6.35m前後を測る。

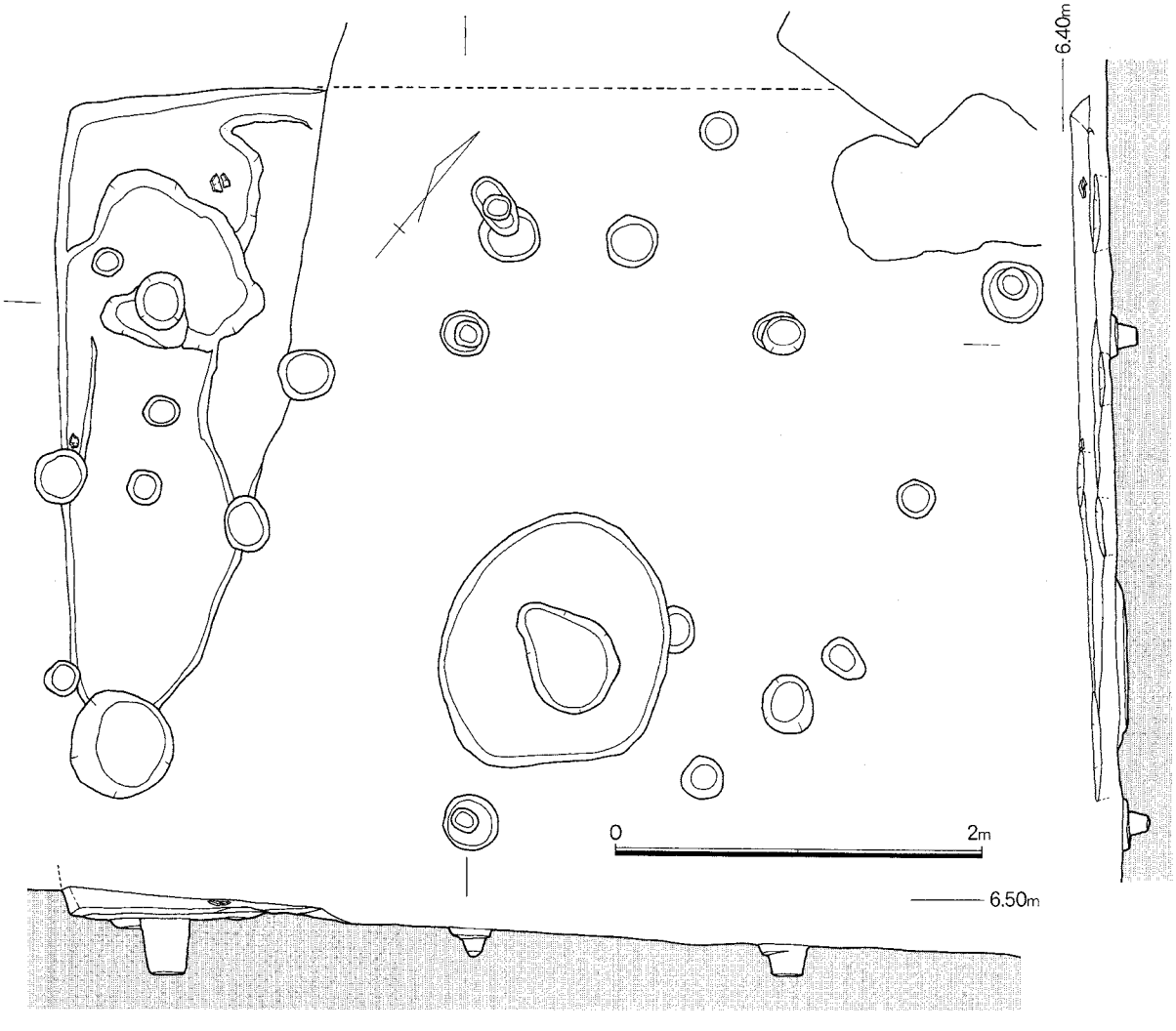


Fig.90 SC-0878遺構実測図 (S=1/40)

住居北東側はSC-0875・SC-0876よってに切られるものと考えられるが、削平はそれ以上にまで及んでおり、不明確である。住居の主軸はN－41°－W方向を採るものと推測されるが、住居壁の残存は部分的であり判然としない。カマドは床面以下まで削平を受けているため検出されず、焼土・炭化物などの痕跡も検出されなかった。付設されていない可能性も考えられる壁溝は丘陵側である西側壁部分の一部と北側部分で検出された。検出面からは深さ５cm前後の残存で、暗褐色粘質土が堆積する。住居西側壁に接して掘削される土坑を検出した。平面形は不定形で、埋土は暗黄褐色粘質土が堆積する。貼床の痕跡とも考えられるが、住居の検出が一部分であるため、判断できなかった。検出面より土坑底面までの深さは５～20cm前後を測る。主柱穴は四本柱と考えられるが全ての柱穴は検出されなかった。各柱穴は直径20～30cm前後を測り、検出面から柱穴底面までは10～30cm前後の深さを測る。柱穴と検出された部分より一辺５m以上の規模の住居が復元される。土坑・壁溝内からは土師器高坏・壺などの遺物が出土した。　Fig.91に出土遺物を示した。

１は土師器高坏坏部片である。底径9.0cm、残存高5.2cmを測る。脚柱部は短く脚裾部はナデ調整によって接合される。２は土師器壺の胴部片である。胴部最大径は10.0cm、残存高は5.6cmを測る。３・４は土師器壺の頸部片である。３は頸部径12.8cm、残存高2.8cmを測る。４は頸部径19.2cm、残存高7.4cmを測る。いずれも摩滅が著しく、器面調整はほぼ失われている。

これらの出土遺物よりこの住居の年代は４世紀後半から５世紀前半頃の時期が考えられる。

SC-0890（Fig.92）

L-5区で検出した方形竪穴住居である。住居南東側は農水路によって大きく削平され、住居中心線より北東側は住居壁・床面が消滅している。現状での平面形は方形で475cm×220cmの部分が検出された。検出面から住居床面までの深さは最も残存している箇所で45cm前後を測り、検出面の標高は7.10m前後を測る。住居周辺も北東側に傾斜した状態で削平されており、北東側に行くほど残存は浅い。住居の主軸はN－35°－W方向を採る。カマドは床面以下まで削平されており、痕跡も検出されなかった。付設されていなかった可能性も考えられる。壁溝は南西側壁の中央部付近部分のみ掘削される。住居埋土は丘陵側からの堆積層が多い。床面直上には暗黄褐色粘質土と暗褐色土の混合層が堆積しており、貼床の

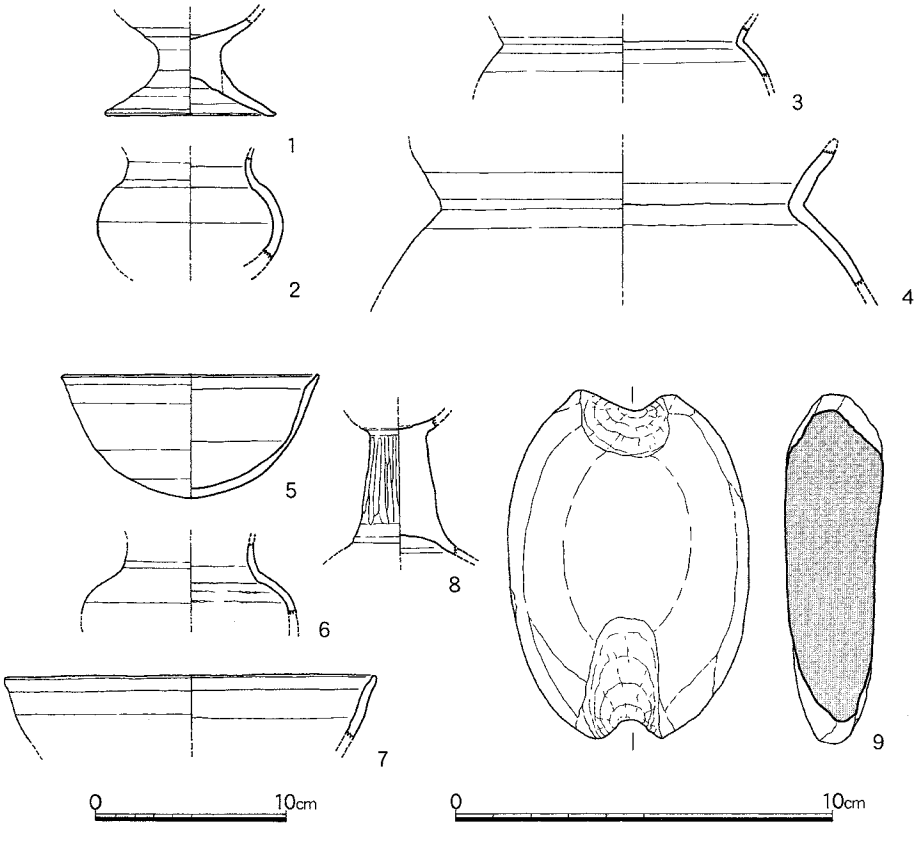


Fig.91 出土遺物実測図（S=1/2・1/4）

可能性も考えられたが、検出された部分からだけでは判断的なかった。住居内で検出される主柱穴は四本柱であり、農水路によって削平を受けていたが残存していた。各柱穴は直径30～40cm前後を測り、検出面から柱穴底面までは5～50cm前後の深さを測る。住居床面上からは土師器埦・土師器壺・礫石錘・炭化材などの遺物が出土した。Fig.91に出土遺物を示した。5は土師器の埦である。復元口径13.4cm、器高6.5cmを測る。口縁部は端部で外反する。内外器面共に摩滅を受けており、器面調整はほぼ失われている。色調は褐色を呈する。6は土師小型壺の胴部片である。頸部径は7.2cm、残存高3.9cmを測る。

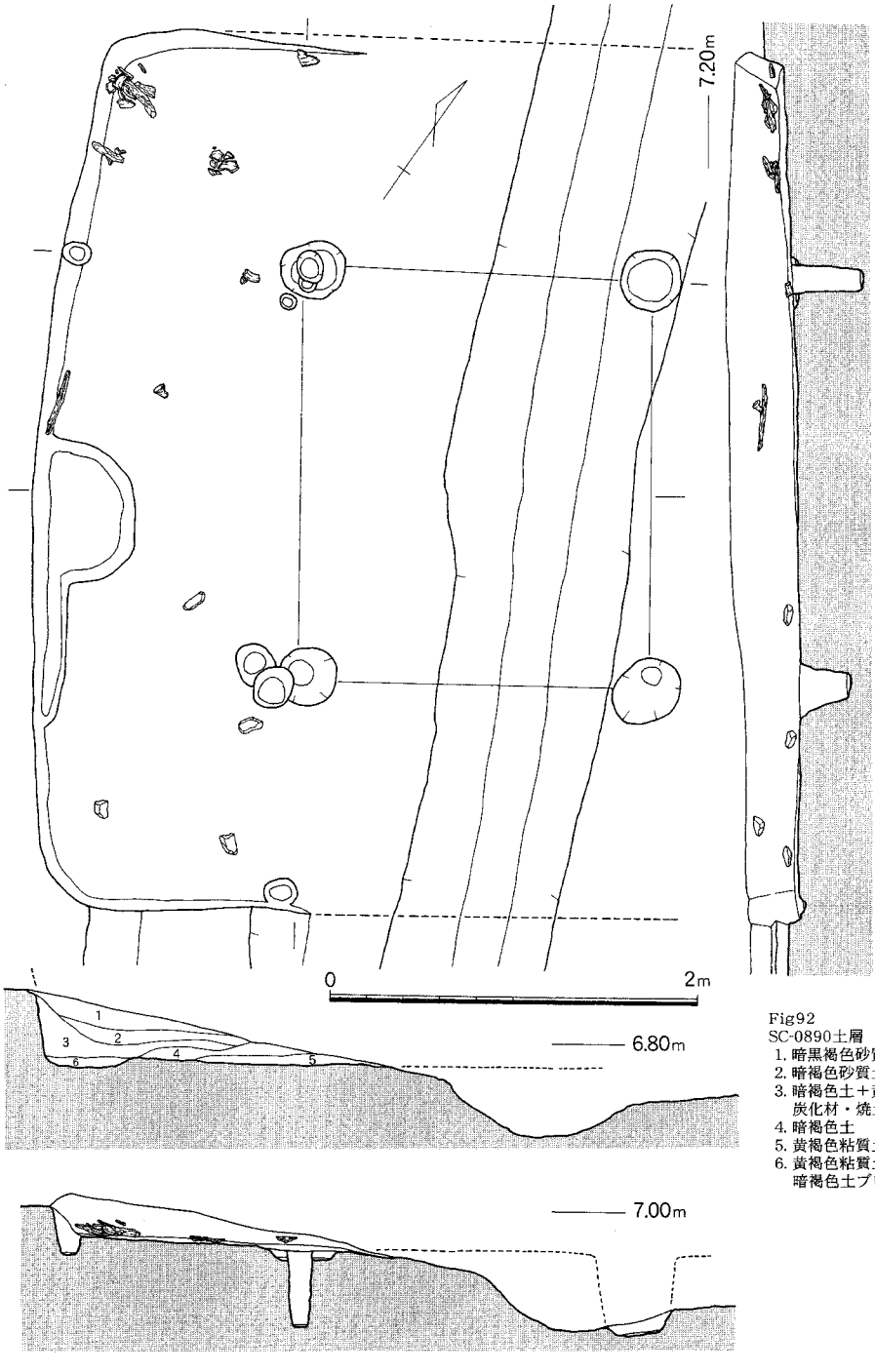


Fig92
SC-0890土層
1. 暗黒褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土　炭化材混入
3. 暗褐色土＋黄褐色粘質土
炭化材・焼土混入
4. 暗褐色土
5. 黄褐色粘質土＋暗褐色土
6. 黄褐色粘質土　土杭埋土
暗褐色土ブロック混入

Fig.92 SC-0890遺構実測図 (S=1/40)

7は土師器壺の口縁部片である。復元口径19.6cm、残存高3.5cmを測る。色調は褐色を呈する。8は土師器高坏の脚部片である。坏部と脚裾部は欠損しており、脚柱部には縦方向のヘラ磨きが施される。残存高は7.5cmを測り、色調は橙色を呈する。

9は礫石錘である。長軸両端部を打ち欠く。重量は216.98gを測る。

これらの出土遺物よりこの住居の年代は5世紀代前半頃の時期が考えられる。

SC-0891（Fig.93）

L-6区で検出した方形竪穴住居である。農水路際で検出された住居で、畑地開墾により大きく削平されており、検出面から住居床面までは15cm前後の深さである。住居南東側隅部が削平により消滅するが、現状での平面形は方形を呈し、360cm×355cmを測る。検出面の標高は6.40m前後を測る。住居の主軸はN－22°－W方向を採り、住居北側壁中央部付近には白色粘土で形成されたカマドが付設される。カマド上面は削平により失われており、両袖部が残存する。住居床面上には長さ20～80cm前後の炭化材・焼土などが散乱する。焼土は床面全体に３～10cm前後の厚さで堆積しており、住居が焼け落ちた状況を示している。壁溝は住居南東側隅部付近でのみ検出される。主柱穴は四本柱で、各柱穴は直径30cm前後を測り、住居床面から柱穴底面までは40～50cm前後の深さを測る。

住居埋土は五層に分層された。１層には暗褐色砂質土が堆積しており、炭化物・焼土が多量に含まれる。２層には暗褐色土が堆積する。この層にも炭化物が多量に含まれる。３層は住居床面直上に堆積する層であり、暗褐色土と黄褐色粘質土の混合層である。４層は住居西側中央部で検出される土坑の埋土で、暗褐色土と赤褐色を呈する焼土との混合層である。５層とした層は、２層と３層中に堆積する層であり、暗灰褐色砂質土層である。各層はほぼ水平に堆積する。

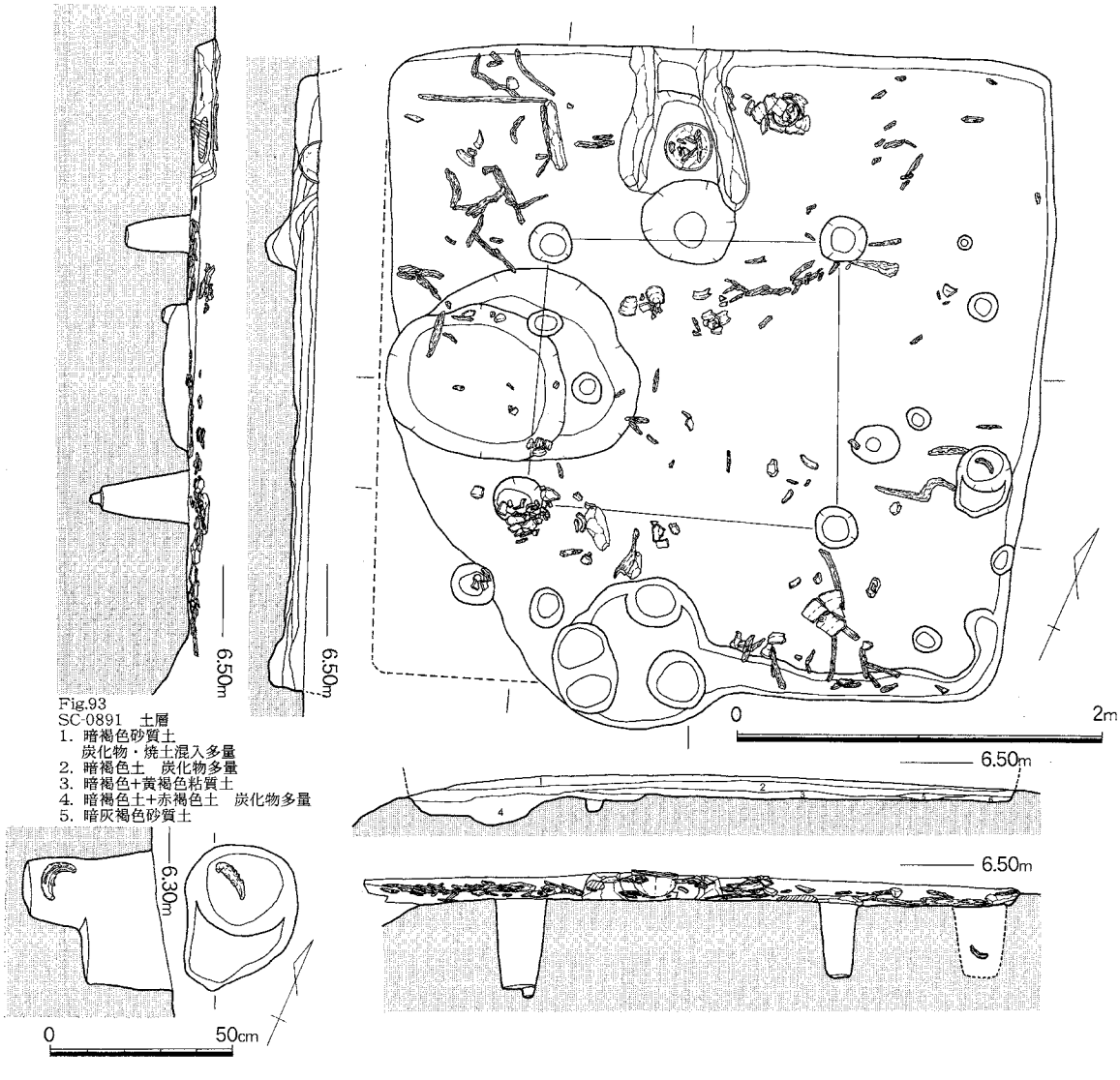


Fig.93 SC-0891遺構実測図・遺物出土状況図（S=1/20・1/40）

住居床面上では西側と南側、東側に土坑が検出される。西側土坑は長径1.4m×短径1.0m前後を測る楕円形の土坑で、土坑内には焼土・炭化材が充填された状況で検出される。土坑は床面より20cm程度の深さを測り、土坑底面には直径15cm前後のピットが複数検出される。南側土坑は直径80cm前後の円形土坑で、検出面から土坑底面までは10cm前後の深さを測る。土坑底面には直径20cm前後、深さ5～10cm前後の浅いピットが検出される。西側土坑は作業用土坑、カマドと正対する位置にある南側土坑については入り口部の可能性が考えられる。

Ph.106 SC-0891調査状況（南東から）

東側土坑は長径40cm×短径30cm前後の楕円形の平面形を持ち、深さ25cm前後の南側部分に半月形の段を有する。土坑は段より北側が15cmほど深くなり底面となる。土坑北側の底面付近から滑石製子持勾玉が出土した（Ph.107・108）。子持勾玉は底面より5cmほどの浮いた状態で腹面を上方に向けた状態で埋置されていた。埋納されたものか。

カマドは前述のように上部が削平され、袖部のみが残存した状況で検出された。カマド内には上半部を削平により欠損した土師器甕が据えられていた（Fig.94）。カマド前面には長径50cm×短径35cm前後の楕円形の土坑が掘削されており、土坑内には灰・炭化物・焼土が堆積する。カマド奥部は一段高くなり煙道に続くものと考えられる。煙道などは削平のため消滅しており、検出されなかった。カマド内から支脚は検出されなかったが、甕底部下は基盤層である黄褐色粘質土層が5cmほどの高さで瘤状に掘り残されていた。支脚を設置しないカマド構造をとるものと考えられる。

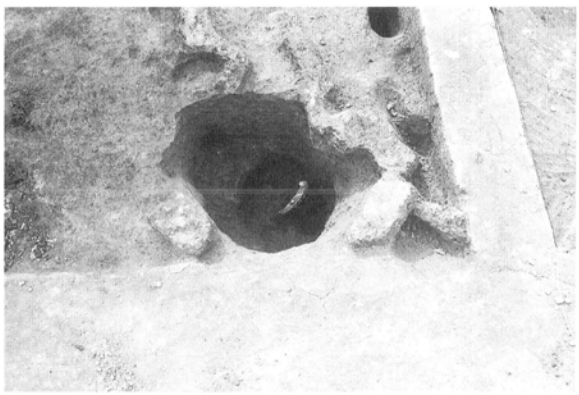
遺物は炭化材・焼土に混じって床面上から土師器埦・土師器甑・須恵器坏などが出土した。

Fig.95に出土遺物を示した。

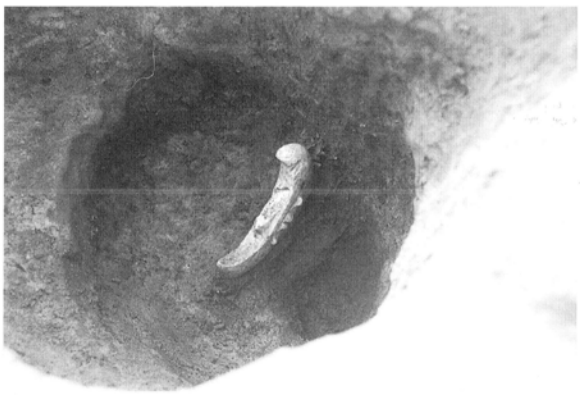
1～3は土師器埦である。1は底部は平底となるであり、口径15.6cm、底径9.2cm、器高4.9cmを測る。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈する。2は口径16.0cm、底径9.0cm、器高9.0cmを測る。身が深く、底部は平底を呈する。外器面には横方向の刷毛目調整が施される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。3は復元口径14.2cm、残存高5.1cmを測る。体部は直線的に開く。

4は土師器小壺の胴部片である。胴部のみが出土し、口縁部・底部は欠損する。胴部最大径10.8cm、残存高は5.6cmを測る。内器面には指頭圧痕が観察できる。色調は褐色を呈する。

5は土師器甑である。復元口径11.0cm、残存高8.4cmを測る。口縁部は胴部上半より内傾し、ほ



Ph.107 SC-0891遺物出土状況（子持勾玉）（北東から）



Ph.108 SC-0891遺物出土状況（子持勾玉）・近景（北東から）

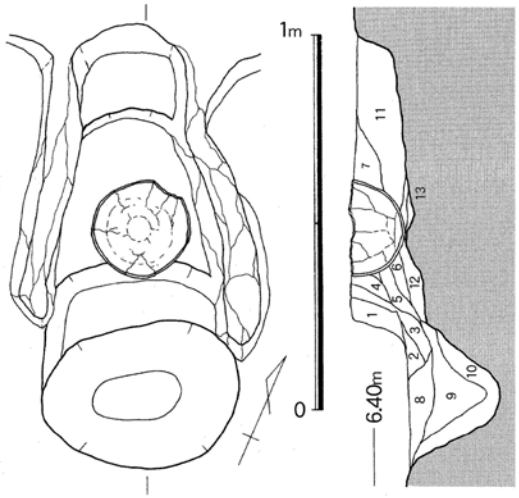


Fig.94
SC-0891カマド土層
1．橙色砂質土　焼土
2．暗橙色土　硬化した焼土
3．暗灰褐色砂質土
4．暗褐色土
5．橙色土
　焼土+炭化物
6．暗灰褐色土
7．橙色土　焼土+炭化物
8．暗灰褐色土
9．暗黄褐色粘質土
　炭化物混入
10．暗黄灰褐色土
11．黒灰褐色土
12．暗黄褐色土
13．暗黄褐色土
　暗灰褐色粘質土が混ざる

Fig.94 SC-0891カマド実測図 (S=1/20)

ぼ直立する。6は須恵器坏である。胴部最大径は、12.4cm、残存高3.2cmを測る。底部はヘラ削りで調整される。焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。7・8は土師器壺の口縁部片である。7は復元口径13.8cm、残存高6.5cmを測る。頸部の締まりはゆるく、口縁部の外反はわずかである。8は復元口径15.2cmを測り、残存高は6.5cmを測る。口縁部端部で外反する。

9は弥生土器の甕口縁部片である。SC-0891は弥生時代の土坑SK-1277を切るように掘削されており、その土坑の遺物が混入したものと考えられる。復元口径25.8cm、残存高3.4cmを測る。

10は土師器壺である。口径17.0cm、胴部最大径25.6cm、残存高14.5cmを測る。外器面には縦方向の刷毛目調整が施され、口縁部付近には横方向のナデ調整が施される。内器面はヘラ削りで調整され、頸部付近は断続する刷毛目調整が強く施される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

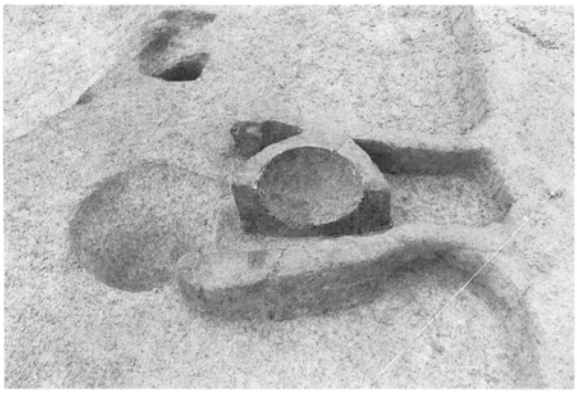
11は土師器甑である。復元口径24.2cm、底孔径7.0cm、器高18.5cmを測る。把手は差し込み式で胴部中程に接合される。把手は基部を残して欠損する。外器面は摩滅され器面調整はほぼ失われる。

12は滑石製の石錘か。残存長4.1cm、残存幅2.7cm、残存高2.3cm、重量37.5ｇを測る。両端部か欠損しているため、本来の形状は判然としない。背面には突起の痕跡が観察できる。

13は滑石製の子持勾玉である。腹面に一個、背面に二個、両側面に各二個ずつの子勾玉を配置する。穿孔は両側面方向から行われているが、進入角度が少しずれた状態で穿孔され紐通し孔は合流部で折れる。全長11.8cm、全幅2.5cm、重量136.0ｇを測る。側面には子勾玉を削り出すための沈線状の当たり線が観察できる。14は滑石製臼玉である。縦方向に割れており、輪の一部が欠損するが、直径4.3㎜を測る。

これらの出土遺物よりSC-0891とした住居の年代は6世紀前半代の時期が考えられる。

Ph.109 SC-0891カマド半裁状況（南東から）



Ph.110 SC-0891カマド半裁状況（北東から）

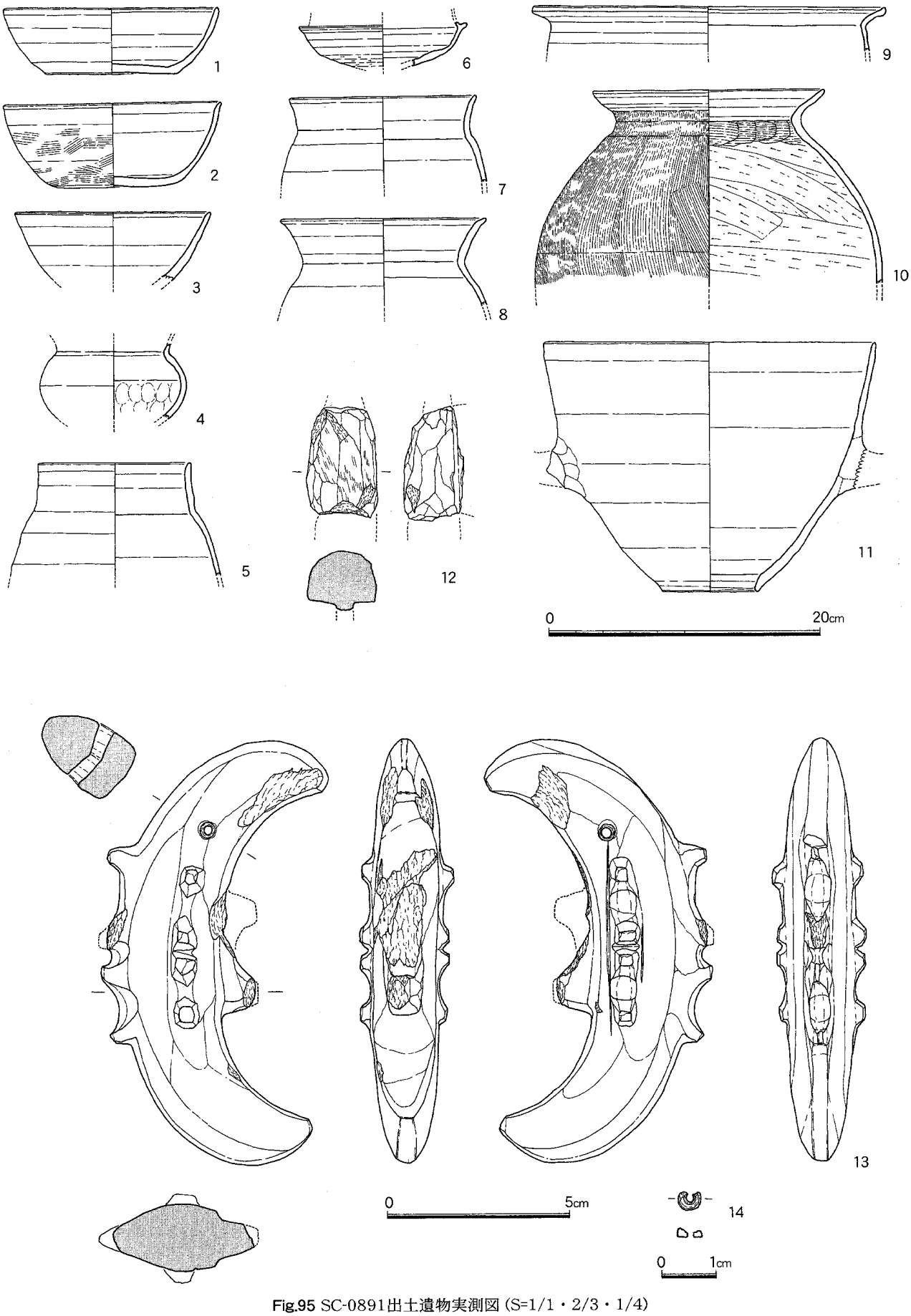


Fig.95 SC-0891出土遺物実測図 (S=1/1・2/3・1/4)

SC-0892（Fig.96）

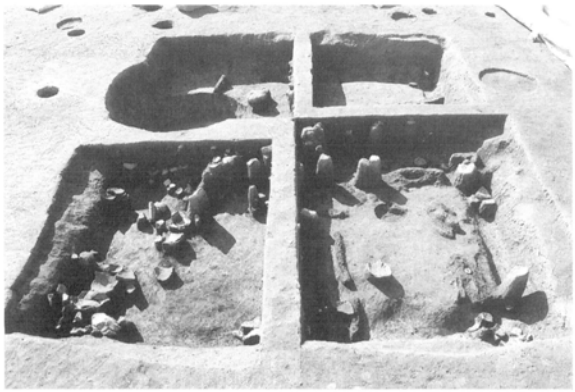
L-7区で検出した方形竪穴住居である。現状での平面形は東西方向に延びる長方形で460cm×380cm、検出面から住居床面までの深さは50cmを測り、検出面の標高は5.90m前後を測る。中世の井戸であるSE-0879に住居南側壁の西側部分を切られる。住居の主軸はN－10°－W方向を採り、住居北側壁中央部付近にはカマドの痕跡が検出される。カマドの壁体は住居廃絶時に破壊されており、カマドに使用された白色粘土は完全に取り去られており、焼土が壁に取り付くように残存している状況が検出される。カマド基底部には掘り込みは検出されず被熱による硬化面も検出されない。

住居床面上には残存長0.8～１m前後、残存幅10～15cm、厚さ５cm前後の扁平な炭化材が数点と、直径５cm前後、残存長20cm前後の炭化材が多数検出された。炭化材は住居中央方向を向いて検出されるものと、住居壁方向と同方向を向いた状態で検出されるものに分けられる。前者は壁材または屋根材と考えられ、後者は梁材または桁材と考えられる。

壁溝は住居を全周するように掘削される。壁溝内からは土師器などの遺物が多量に検出された。

住居床面上で検出される柱穴は三本であるが、一本はSE-0879によって切られ消滅している。本来の主柱穴は四本柱である。各柱穴は直径25～30cm前後を測り、住居床面から柱穴底面までの深さは35～45cm前後の深さを測る。

住居は床面まで50cmほど残存しており、１層から11層までに分層される。住居壁際では堆積する層は細分されるが、基本的に住居全体に堆積する層は１～３層とした三層に大別される。上層の１層とした堆積層は暗灰褐色砂質土層で、西側方向から流入する自然堆積層である。中層の２層は暗褐色土と焼土の混合層である。床面上の３層は暗褐色土と黄褐色粘質土との混合層である。多量の土師器埦・土師器甑・炭化材などの遺物はこの層に包含されていた。



Ph.111 SC-0892調査状況（北東から）

Ph.112 SC-0892完掘状況（南東から）

Ph.113 SC-0892遺物出土状況・甑（西から）

Ph.114 SC-0892遺物出土状況・壺（南から）

住居壁溝内には暗灰褐色粘質土が堆積する。壁溝内埋土からは有孔円盤、滑石臼玉、未製品などの遺物が出土した。カマド痕跡の前面に位置する床面上には暗灰褐色砂質土が５cm前後の厚さで堆積する。この層には炭化材・灰・焼土が多量に含まれていた。

住居床面上からは、土師器埦・土師器甑・土師器壺・須恵器・礫石錘・滑石製品などの遺物が多量に出土した。また、床面上には作業台として使用されたと考えられる扁平な石材が数点据えられており、叩き石などの石器も出土した。土師器甑は壁際で破砕された状態で検出されたものが多かったが、他の住居からの出土数より多く５個体以上の甑が出土した。

このSC-0892とした住居からは、コンテナケース５箱分の遺物が出土した。

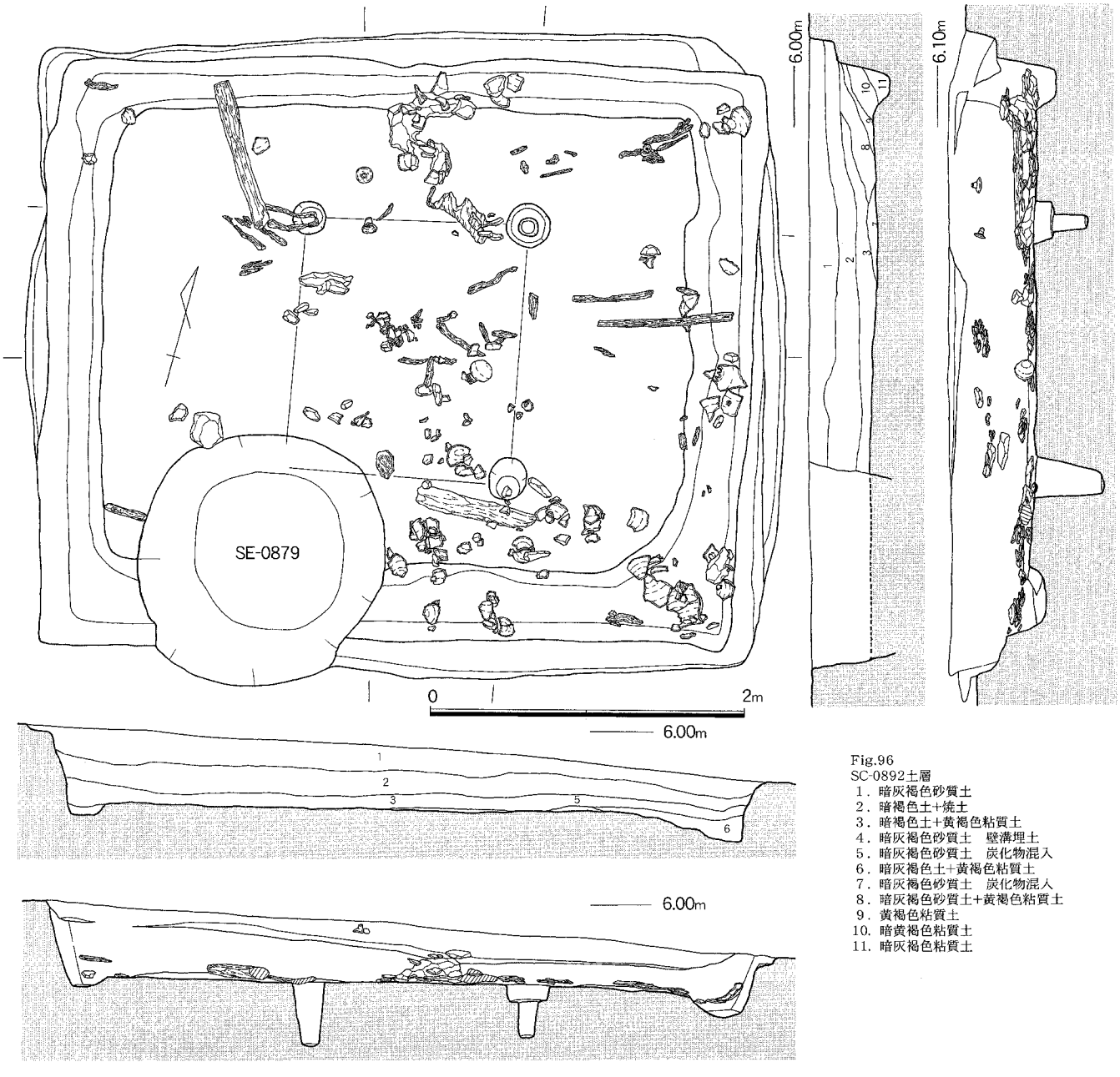


Fig.96
SC-0892土層
1．暗灰褐色砂質土
2．暗褐色土+焼土
3．暗褐色土+黄褐色粘質土
4．暗灰褐色砂質土　壁溝埋土
5．暗灰褐色砂質土　炭化物混入
6．暗灰褐色土+黄褐色粘質土
7．暗灰褐色砂質土　炭化物混入
8．暗灰褐色砂質土+黄褐色粘質土
9．黄褐色粘質土
10．暗黄褐色粘質土
11．暗灰褐色粘質土

Fig.96 SC-0892遺構実測図（S=1/40）

Fig.97・98に出土遺物を示した。

1～5は土師器埦である。1は口径12.4cm、器高7.2cmを測る。身は深く口縁部はほぼ直立し、体部は底部方向からナデ調整される。2は口径12.4cm、器高5.8cmを測る。口縁部は内反しており、底部には指頭圧痕が観察される。3は復元口径13.6cm、器高4.6cmを測る。4は復元口径12.4cm、器高5.8cmを測る。3・4共に口縁部はほぼ直立する。5は復元口径15.2cm、器高6.1cmを測る。

6～8は土師器高坏坏部片である。6は口径13.2cm、残存高4.0cmを測る。口縁部端部で内反し、内器面には横方向のヘラ磨きが施される。外器面は口縁部下のみヘラ磨きが施される。7は復元口径

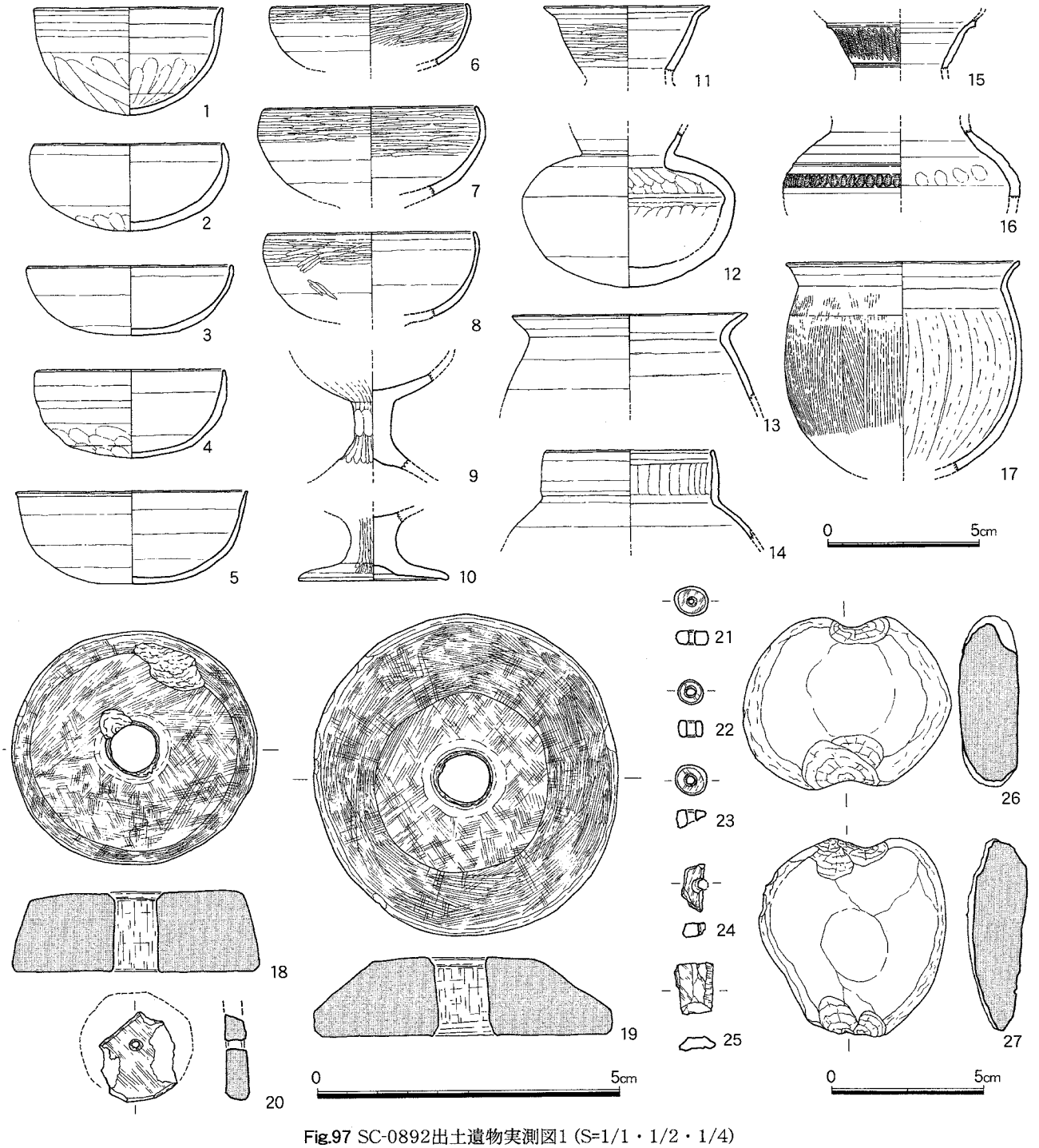


Fig.97 SC-0892出土遺物実測図1 (S=1/1・1/2・1/4)

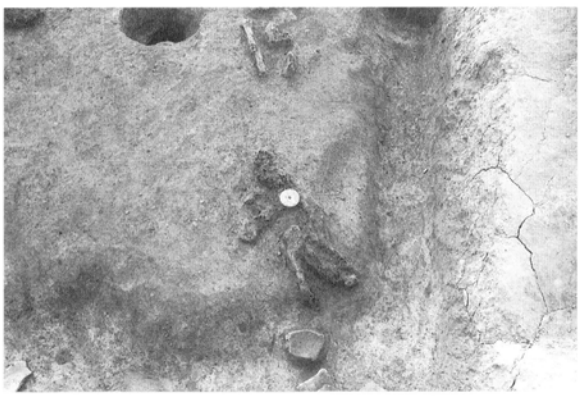
14.0cm、残存高5.9cmを測る。内器面と口縁部下にヘラ磨きが施される。８は復元口径13.8cm、残存高5.6cmを測る。６～８はいずれも口縁部は内反する。９・10は土師器高坏脚部片である。９は残存高6.5cmを測る。坏部との接合部付近には上方への刷毛目調整が施され、脚柱部にはナデ調整とヘラ磨きが施される。10は底径9.6cm、残存高4.6cmを測る。外器面には刷毛目調整が施される。11は土師器小壺の口縁部片である。復元口径11.0cmを測り、残存高は4.5cmを測る。横方向のヘラ磨きが施される。12は土師器小壺胴部片である。胴部最大径は14.2cm、残存高は10.1cmを測る。頸部より口縁部にかけて欠損するが、胴部は完存する。胴部内器面には指ナデ調整が施される。13・14は土師器壺口縁部片である。13は復元口径15.4cm、残存高6.0cmを測る。14は復元口径11.0cmを測り、残存高は6.0cmを測る。ほぼ直立する口縁部を持ち、内器面は断続する板ナデが施される。

15は須恵器甕である。頸部片であり、口縁部は欠損する。残存高は3.2cmを測る。緻密な波状紋が施される。16は須恵器壺胴部片で、頸部より上部と胴部下半部は欠損する。復元胴部最大径15.2cm、残存高は4.7cmを測る。17は土師器甕である。復元口径15.4cm、残存高12.0cmを測る。外器面には刷毛目調整、内器面にはヘラ削りが施される。

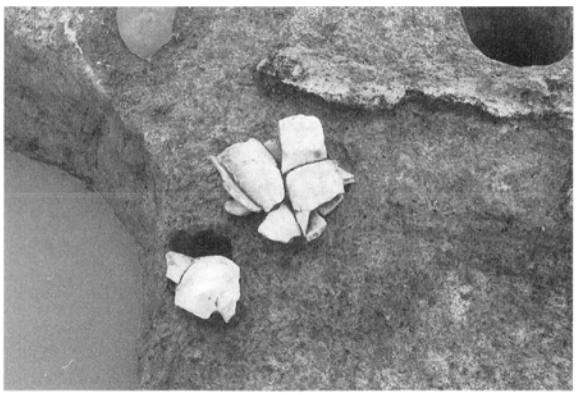
18・19は滑石製紡錘車である。18は直径3.4～4.0cm、孔径0.7～0.9cm、器厚1.3cmを測る。器面全体に研磨痕が明瞭に残る。19は直径5.2cm、孔径0.8～1.0cm、器厚1.3cmを測る。20は滑石製有孔円盤である。21～23は滑石製臼玉である。24・25は滑石製臼玉未製品である。26・27は礫石錘である。26は短軸両端部が打ち欠かれており、重量112.4ｇを測る。27は重量77.9ｇを測る。

Fig.98-28・29は土師器壺である。28は復元口径18.6cm、残存高8.0cmを測る。直線的な胴部を持ち、体部には斜め方向の刷毛目調整が施される。内器面にはナデ調整が施される。29は復元口径15.4cm、胴部最大径24.0cm、残存高18.9cmを測る。外器面はやや摩滅され、刷毛目調整がわずかに残る。内器面は粘土紐の輪積み痕跡が残る。指押さえで接合され、ナデ調整は施されていない。

30は土師器甕である。口径21.8cm、器高20.3cmを測る。底部は平底を呈し、体部は直線的に立ち上がり口縁部は外反し如意形を呈する。外器面体部中程には縦方向のヘラ磨きが施される。ヘラ磨きの幅は２～６㎜、長さ５cm前後の単位で施される。31～35は土師器の甑である。把手はすべてナデ調整で接合される。31は口縁部を欠損し、底孔径9.8cm、残存高16.0cmを測る。把手は下方に垂れ下がる断面円形のものが接合される。外器面には刷毛目調整、内器面にはヘラ削りが施される。32は把手と底部を欠損し、口径29.4cm、残存高27.9cmを測る。外器面は摩滅され調整痕はほぼ消滅するが、内器面にはヘラ削りの痕跡が観察される。33は復元口径30.0cm、器高27.0cmを測る。34は把手と底部の一部を欠損する甑で、復元口径23.2cm、残存高21.5cmを測る。35は胴部下半部を欠損する。口径24.0cm、残存高15.3cmを測る。



Ph.115 SC-0892遺物出土状況・紡錘車（東から）



Ph.116 SC-0892遺物出土状況・甑（北から）

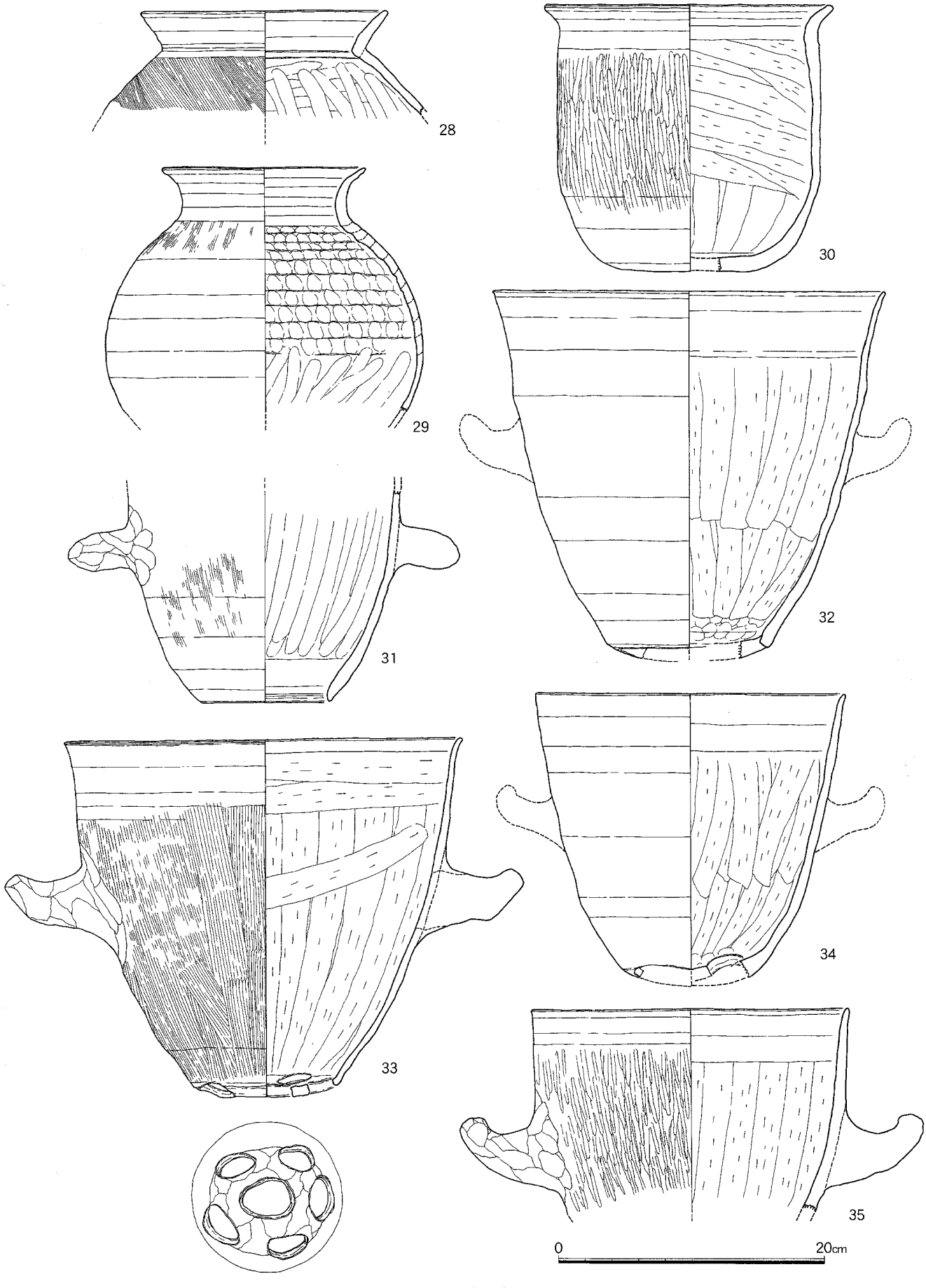


Fig.98 SC-0892出土遺物実測図２（S=1/4）

SC-0893（Fig.99）

J-12区で検出した方形竪穴住居である。検出時は平面形がほぼ方形を呈していたが、完掘後では北西側壁が南東側壁長より短く、台形状の平面形を呈する住居となった。長軸325cm×短軸315cmを測るやや小型の住居で、検出面から住居床面までの深さは20cmを測る。住居を検出した遺構面の標高は5.30m前後を測る。住居の主軸はN－31°－E方向を採る。

住居北東側壁東寄りの部分にはカマドの痕跡が検出された。白色粘土などのカマドを構成していた壁体は住居廃絶時に破壊され住居外に撤去されており、支脚として使用されたと考えられる全長18cm前後の柱状の礫が直立に据えられた状態で検出された。カマド基底部付近は被熱により赤変化しており、焼土・灰・炭化物が周辺に散乱する。

壁溝は丘陵側の南側壁隅部付近から南東側壁部分にかけて掘削される。壁溝内には暗褐色粘質土が堆積していた。住居床面上では、住居西側隅部に接して長径2.0m×短径1.2m前後を測る楕円形の土坑が検出された。土坑は住居床面から20cm前後の深さで掘削されており、土坑内の埋土は二層に分層される。暗黄褐色砂質土が上層に堆積し、下層には暗灰褐色土と黄褐色粘質土の混合層が堆積する。上層と下層の境目付近からは残存長50cm前後の炭化材、土師器埦などの土器片、石器等が多量に出土した。土坑上面には30cm前後の扁平な石材が検出されており、土坑は作業用としての性格が考えられた。炭化材はこの西側土坑から集中して出土した。また、住居対角線上の東側隅部からも長径80cm×短径50cm前後を測る楕円形の土坑が検出された。土坑内には暗黄褐色粘質土の埋土が堆積しており、土師器甕などの遺物が出土した。

主柱穴は住居床面上からは検出されなかった。住居周辺に掘削されたものと考えられるが削平のため検出されなかった。住居埋土は三層に分層される。上層より暗黄褐色砂質土、暗褐色砂質土、暗灰褐色砂質土の順に堆積する。

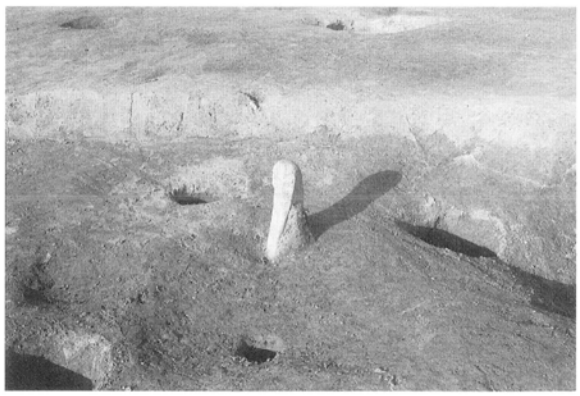
この住居からは土師器埦・土師器壺・土師器甕・須恵器坏蓋・滑石製品などの遺物が出土した。Fig.100に出土遺物を示した。

1は須恵器坏蓋である。復元最大径13.2cm、残存高3.2cmを測る。天井部にはヘラ削りが施される。

2～5は土師器埦である。2は口径12.8cm、器高5.8cmを測る。3は復元口径14.8cm、器高5.8cm

Ph.117 SC-0893完掘状況（南西から）

Ph.118 SC-0893調査状況（北西から）



Ph.119 SC-0893カマド支脚石検出状況（南西から）

を測る。口縁部は内反する。４は口径14.4cm、器高6.0cmを測る。口縁部は体部中程より外側へ直線的に開く。底部付近には指頭圧痕が観察できる。焼成は良好で色調は褐色を呈する。５は口径14.8cm、器高5.9cmを測る。口縁部はほぼ直立し、色調と淡橙色を呈する。６は土師器の高坏坏部片である。接合部より脚部は欠損する。坏部の復元口径は15.0cm、残存高5.6cmを測る。内外器面共に口縁部下には横方向のヘラ磨きが施される。焼成は良好で色調は橙色を呈する。

７は土師器壺である。底部は破損しており、復元口径11.4cm、胴部最大径12.4cm、残存高6.6cmを測る。摩滅を受けており調整痕はほぼ失われる。８は土師器甑の胴部上半部片である。復元口径17.6cm、残存高7.2cmを測る。口縁部は端部でわずかに外反する。９～13は土師器壺口縁部片である。９は復元口径11.2cm、残存高5.0cmを測る。外器面には刷毛目調整が残る。10は口径12.2cm、残存高6.0cmを測る。内器面にはヘラ削り痕とナデ痕が観察できる。11は復元口径15.4cm、残存高5.7cmを測る。12は復元口径20.8cm、残存高4.7cmを測る。13は復元口径19.8cm、残存高5.3cmを測る。内面頸部には断続する板ナデが施されている。14は土師器壺である。口径13.0cm、胴部最大径18.4cm、器高18.5cmを測る。外器面上半には刷毛目調整が残り、内器面には全面に指頭圧痕と指ナデ痕が残る。色調は橙色を呈する。15・16は土師器壺の胴部上半部片である。15は復元口径19.0cm、残存高15.5cmを測る。16は復元口径17.4cm、残存高11.0cmを測る。17は土師器甑である。把手は欠損するが胴部には差し込み用の孔が残る。口縁部は如意形に外反する。復元口径21.2cm、器高23.2cm、底孔径は3.2cmを測る。

18は手捏土器である。内外器面共にナデ調整によって成形される。

19は滑石製有孔円盤である。穿孔部から体部約1/4程度の扇形部分が残存する。両面には研磨痕が明瞭に残る。

これらの出土遺物よりこの住居の年代は６世紀前半から中頃の時期が考えられる。

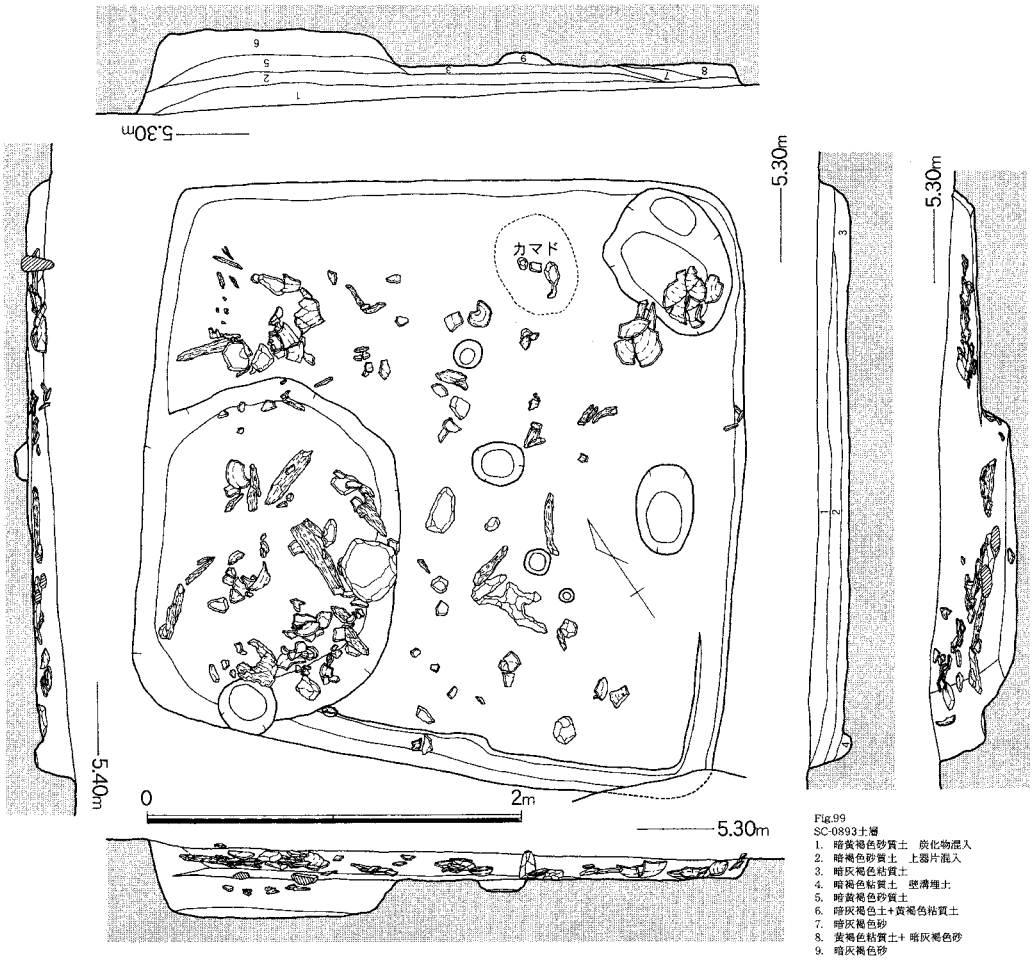


Fig.99 SC-0893遺構実測図 (S=1/40)

Ph.120 SC-0893遺物出土状況（北東から）

Ph.121 SC-0893遺物出土状況（西から）

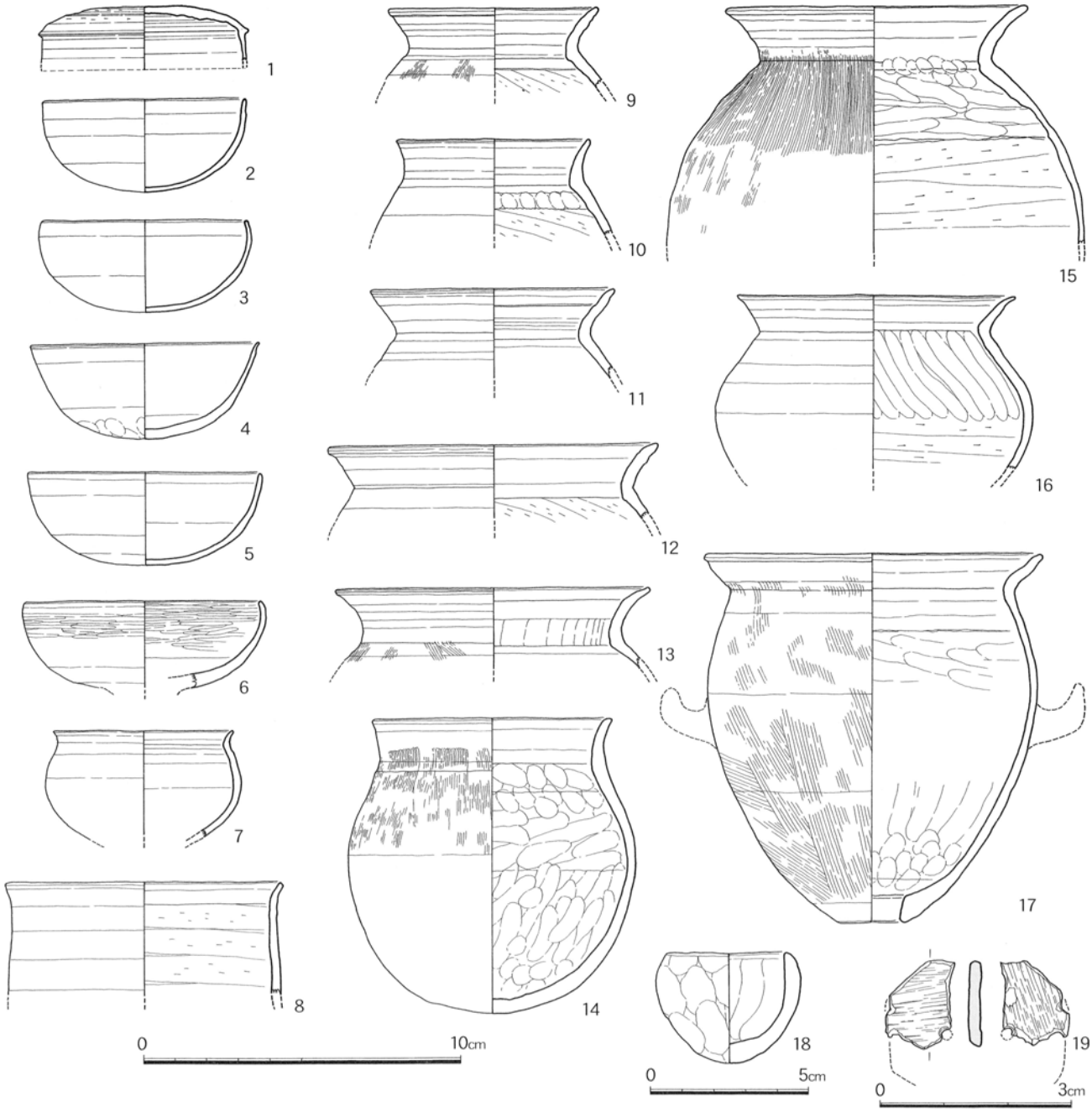


Fig.100 SC-0893出土遺物実測図（S=1/1・1/2・1/4）

SC-0894（Fig.101）

J･K-11区で検出した方形竪穴住居である。住居北西側半分は中央部付近より農水路掘削によって攪乱されており、床面以下の高さまで削平される。現状での平面形は方形で、検出された部分から一辺510cm前後の規模の住居が復元できる。東西方向では290cm前後の部分が残存しており、検出面から住居床面までの深さは５～10cm前後を測る。住居を検出した遺構面の標高は5.20m前後を測る。

住居の主軸はＮ－47°－Ｅ前後方向を採り、壁溝は検出された住居東側半分では全周するように掘削されている状況が検出された。壁溝内には暗褐色粘質土が堆積しており、土師器壺・土師器甑などの遺物が出土した。

残存する住居内からは被熱による硬化面などのカマドの痕跡は検出されなかった。住居は出土遺物より５世紀前半頃の時期が考えられるため、カマドは付設されていなかった可能性も考えられる。
住居中央部付近と住居東側壁中央部分には土坑が検出される。中央部土坑は西側半分が農水路の削平により消滅するが、残存部分より長径2.0m×短径1.8m前後の楕円形土坑が復元される。住居床面より土坑底面までは５cm前後の深さを測り、土坑内には炭化物を少量含んだ暗褐色粘質土が堆積していた。東側土坑は長径1.8m×短径1.1m前後を測る平面形が楕円形を呈する土坑で、土坑埋土は二層に分層される。上層には土器片を多く含む暗褐色土が15cm前後堆積し、下層には暗褐色粘質土が10cmほど堆積する。下層からは比較的大きな土器片・礫などの遺物が出土した。

住居の主柱穴は四本柱であるが、北西側二本の柱穴は農水路によって上部が削平され、農水路底面にて検出された。各柱穴は直径20～40cmを測り、住居床面から柱穴底面までは50～60cm前後の深さを測る。住居南側の柱穴は柱穴内に段を有しており、住居廃絶時に柱穴が抜き取られた際の痕跡と考えられる。

住居内からは土師器埦・土師器壺・須恵器・滑石製品・礫石錘・叩き石などの遺物が出土した。

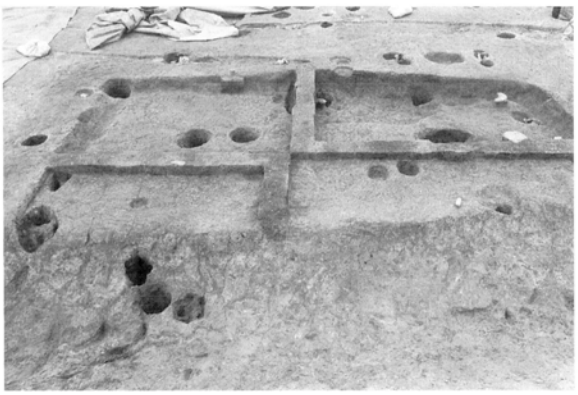
Fig.102に出土遺物を示した。

１は土師器埦である。復元口径16.8cm、残存高5.2cmを測る。口縁部は体部中程より直線的に開く。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

２・３は土師器壺口縁部片である。２は復元口径18.8cm、残存高5.3cmを測る。内外器面共に摩滅され、器面調整は失われる。色調は橙色を呈する。３は復元口径18.4cm、残存高6.8cmを測る。内外器面共に摩滅され、器面調整は失われる。色調は橙色を呈する。

４・５は須恵器甕である。共に住居東側土坑から出土した。４は口径11.4cm、胴部最大径9.0cm、器高11.8cmを測る。口縁部下と頸部には密な波状紋を施し、一部をナデ消している。胴部最大径付近上にはヘラ状工具突端部によって沈線を巡らし、その下位に櫛状工具突端部による刺突紋を胴部全周に施す。ラッパ状に開く口縁部を持ち、胴部下半部はヘラ削り調整が施された後にナデ調整が施される。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。５は胴部下半を欠損するが、復元口径13.6cm、胴部最大径14.4cm、残存高10.2cmを測る。ほぼ直線的に開く口縁部をもち、胴部は肩が張った形状を呈する。胴部穿孔は出土した破片には観察できない。頸部には櫛状工具による波状紋が施されている。焼成は良好で、色調は濃灰色を呈し、器面の一部に自然釉が掛かる。

６は壁溝内から出土した土師器の壺である。口径は



Ph.122 SC-0894調査状況（北西から）

16.2cm、頸部径13.2cm、胴部最大径26.4cm、残存高24.0cmを測る。外器面は摩滅により器面調整は失われている。内器面も摩滅を受けており、器面調整の大部分は消滅するが、頸部付近には粘土紐接合痕をナデ消した痕跡が見られる。色調は橙色を呈する。

7は滑石製の石製品である。十字形に周囲を穿孔し研磨する。端部はいずれも欠損しているため本来の形状は不明であるが柄頭の可能性が考えられた。残存長2.3cm、残存幅1.8cm、器厚0.7cmを測る。8は滑石製臼玉である。直径5.28～5.4㎜、器厚2.48㎜、重量0.12ｇを測る。この他にも数点の

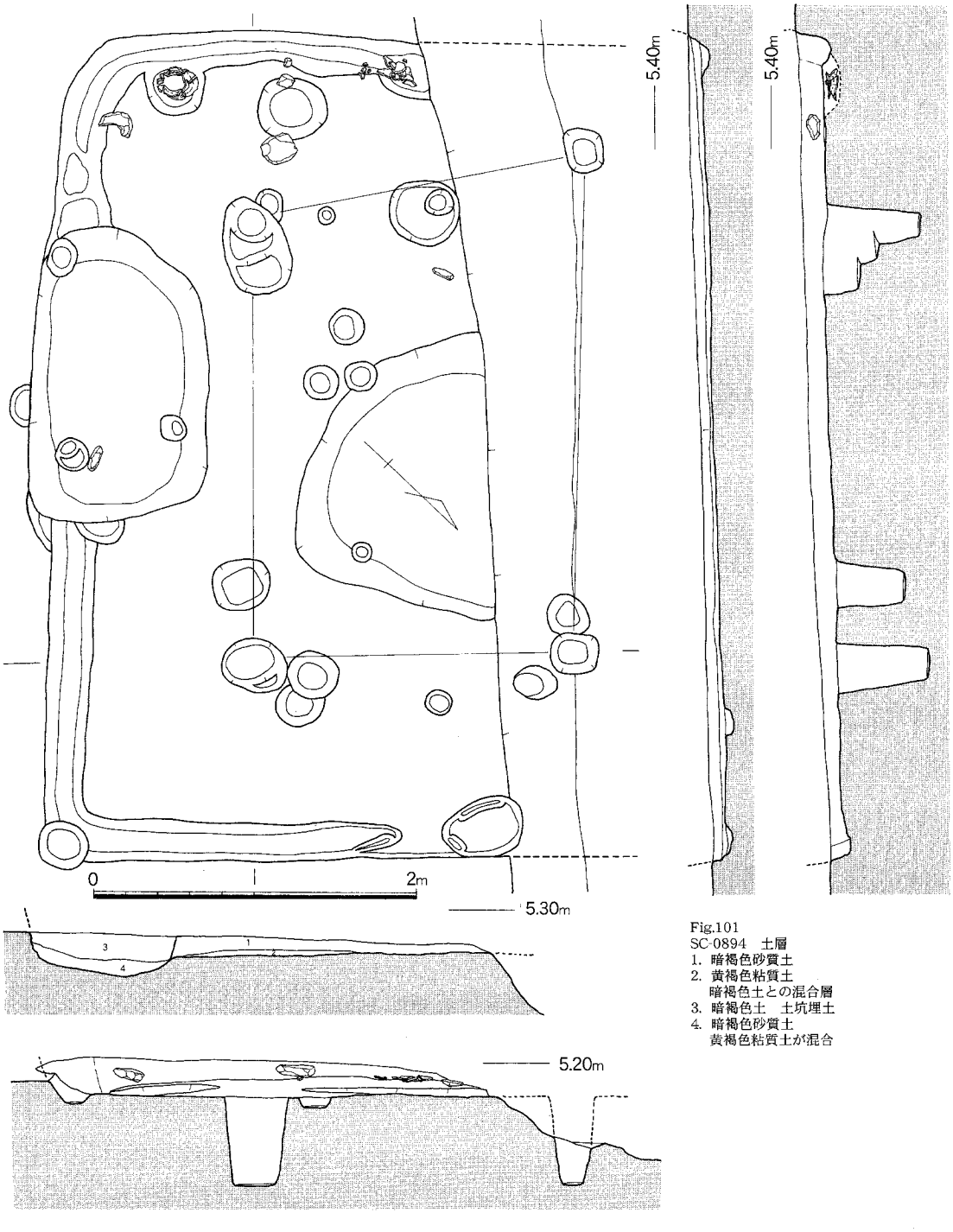


Fig.101 SC-0894遺構実測図 (S=1/40)

滑石製臼玉、臼玉欠損品、臼玉未製品が出土している。

9・10は礫石錘である。9は楕円形の扁平な礫の長軸両端部を打ち欠き、紐掛け用の緊縛部を造り出す。長径6.8cm×短径6.7cm、器厚1.8cm、重量は140.2ｇを測る。10は長径6.7cm×短径5.9cm、器厚1.3cm、重量は91.6ｇを測る。

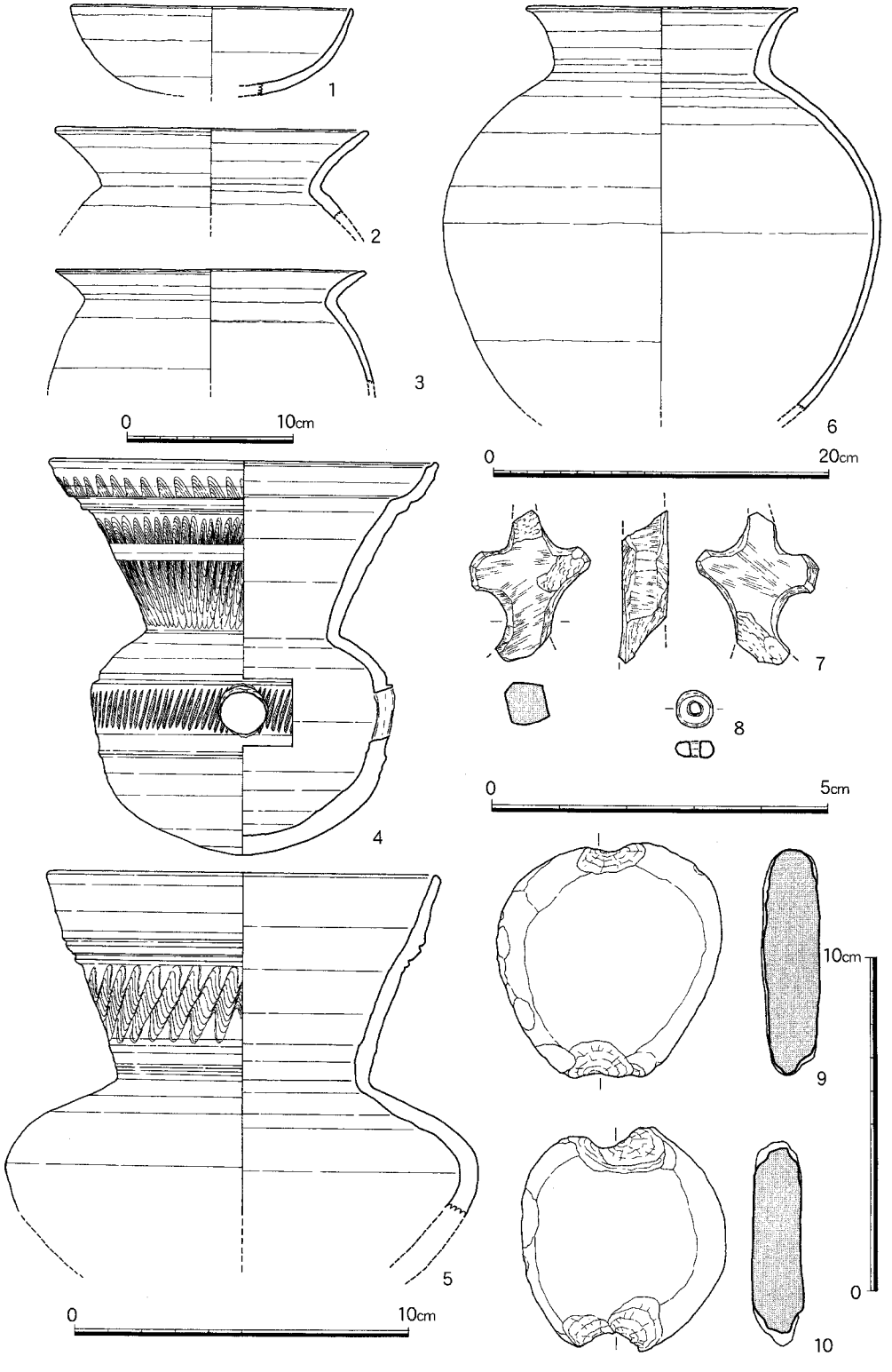


Fig.102 SC-0894出土遺物実測図（S=1/1・1/2・1/4）

SC-0897 (Fig.103)

N-2区で検出した方形竪穴住居である。畑地段際で検出された住居で、住居東側は２m前後の段落ちになり住居東側部分は完全に消滅する。住居中心線より西側部分が検出され、現状での平面形は方形を呈し一辺480cmの規模の住居が復元できる。東西方向では235cmの部分が残存し、検出面から底面までの深さは15～25cm前後を測り、検出面の標高は7.50m前後を測る。住居の主軸はN－30°－W方向を採る。住居北東側壁の中央部付近からはカマドの痕跡が検出される（Fig.104）。白色粘土などのカマド壁体は住居廃絶時に破壊されており袖部の痕跡がわずかに残る。カマド中央部には基底部の掘り込みが検出された。掘り込みは深さ３cm前後で、灰・焼土が充填される。その上面には支脚として使用されたと考えられる全長15cm前後の土師器高坏が逆位の状態で検出された。カマド基底部付近は被熱により赤変化しており、焼土・灰・炭化物が周辺に散乱した状態で検出された。壁溝は丘陵側である西側壁部分のみ掘削される。壁溝内には暗灰褐色土と黄褐色粘質土の混合層が堆積していた。住居中央部からは長細い土坑が検出された。土坑東側は削平によって消滅するが、残存長１m、最大幅55cm、深さ10cm前後をる。土坑内には暗褐色土と黄褐色粘質土の混合層が堆積していた。

主柱穴は四本柱であったと考えられるが、東側二本は削平のため消滅する。各柱穴は直径60～70cm前後、住居床面から柱穴底面までは70cm前後の深さを測る。柱穴内の上位部分には円礫が数個体ずつ検出された。柱穴の根固め用の礫と考えられる。

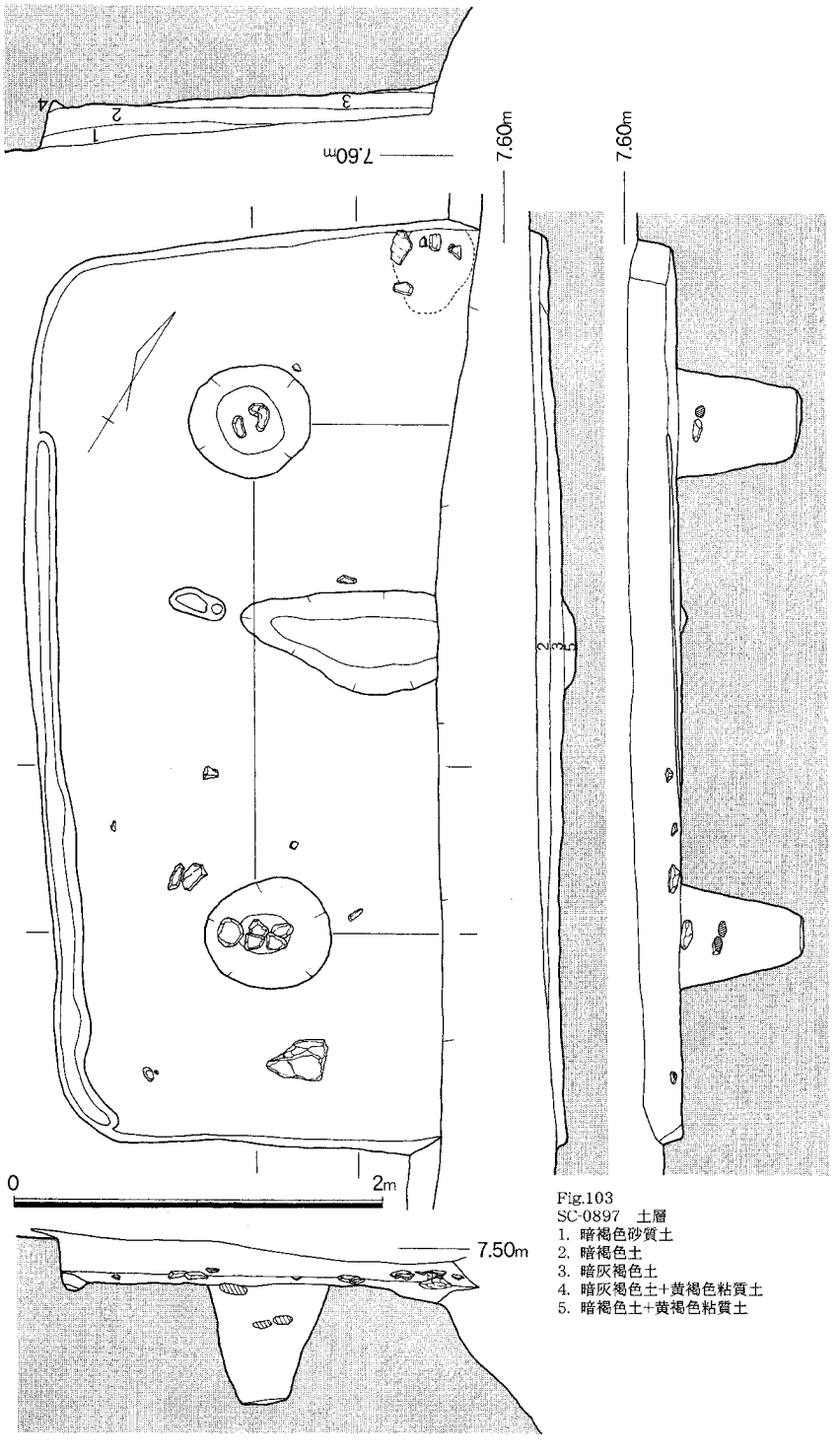


Fig.103 SC-0897遺構実測図 (S=1/40)

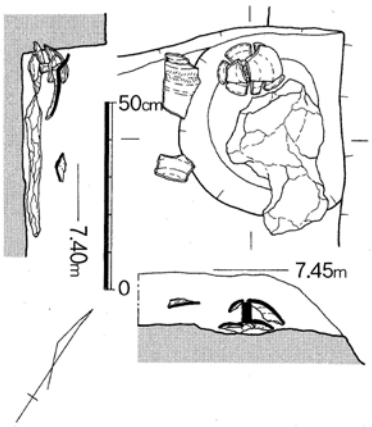


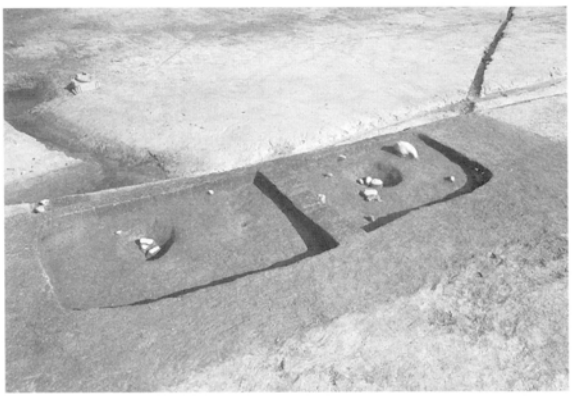
Fig.104 SC-0897カマド実測図(S=1/20)

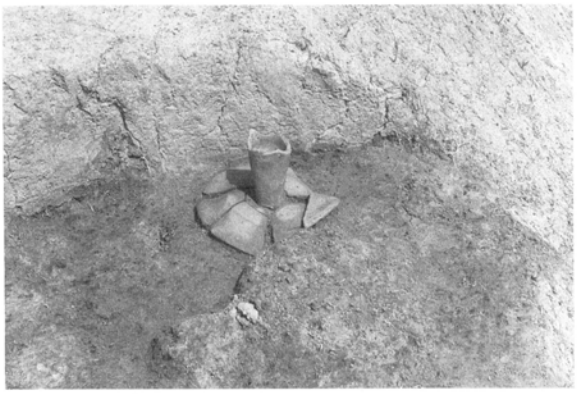
住居の埋土は三層に分層された。上層には暗褐色砂質土、中層には暗褐色土、下層には暗灰褐色土が堆積する。住居床面上からは作業台として使用された台石や叩き石などの石器の他に、土師器壺などの遺物が少量ではあるが出土した、

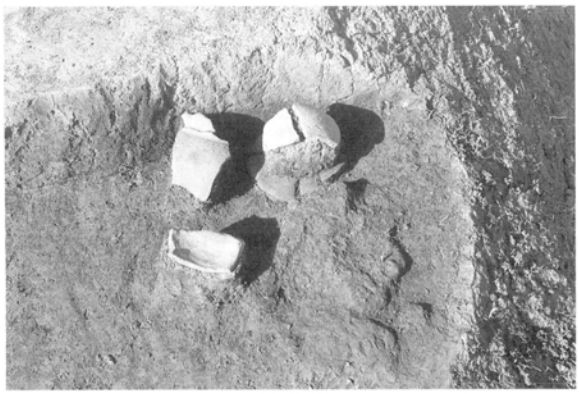
Fig.107に出土遺物を示した。

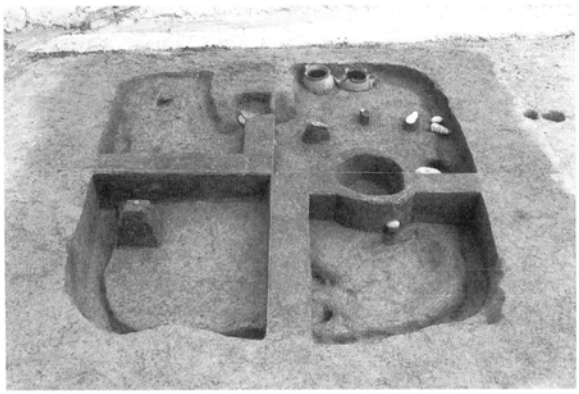
1は土師器高坏である。カマドの支脚として転用されていたものである。坏部口径は15.4cm、底径14.6cm、器高15.4cmを測る。坏部には縦方向のヘラ磨きに重複するように横方向のヘラ磨きが施され、脚部には刷毛目調整とナデ調整が施され、脚内面には指ナデ調整が観察できる。坏部は被熱により赤変化するが、脚部の色調は褐色を呈する。5はカマド周辺から出土した土師器の壺胴部片である。口縁部を欠損し、頸部から胴部上半部のみが復元できた。頸部径15.4cm、胴部最大径26.6cm、残存高は13.3cmを測る。胴部外器面にはカキメが施され、頸部下にヘラ状工具突端部による刻み目が全周するように施される。胴部内器面には叩き痕が平行に残る。頸部付近は内外器面共にナデ調整が施される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

これらの出土遺物より住居の年代は5世紀前半から中頃の時期が考えられる。


Ph.123 SC-0897調査状況（西から）


Ph.124 SC-0897カマド支脚土器検出状況（南東から）


Ph.125 SC-0897カマド検出状況（南東から）


Ph.126 SC-0898調査状況（南西から）

Ph.127 SC-0898遺物出土状況（南西から）

SC-0898（Fig.105）

M-3区で検出した方形竪穴住居である。SB-0925に切られる。現状での平面形は方形で270cm×235cmと住居の規模は小さく、検出面から底面までの深さは25cmを測る。検出面の標高は7.50m前後を測る。住居の主軸はN－66°－E方向を採り、北東側壁中央部には白色粘土で形成されたカマドが付設されていた。カマド上部は畑地開墾により削平されていたが、カマドの両袖部は10cmほどの高さで残存する。カマド内からは支脚は検出されず、カマド前面部分から土師器甑片が出土した。カマド基底部には浅い掘り込みがあり、灰・焼土が堆積していた。

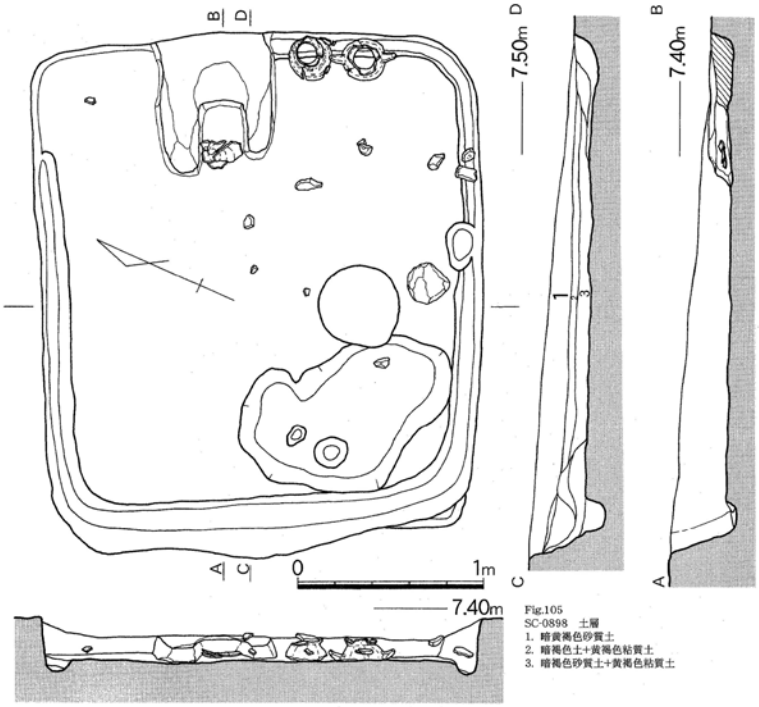


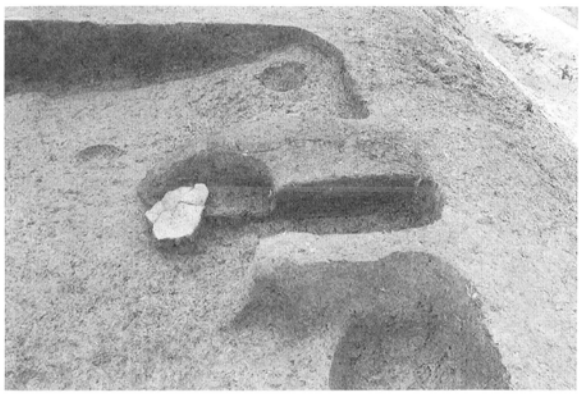
Fig.105 SC-0898遺構実測図（S=1/40）

壁溝は住居をほぼ全周するように深さ５～10cm前後で掘削されるが、住居北側隅部付近では検出されなかった。壁溝内には暗褐色粘質土が堆積していた。住居内床面上からは主柱穴は検出されず、住居外の周提部に柱を配置する住居であったことが考えられる。

住居埋土は基本的には三層に分層される。上層には１層とした暗黄褐色砂質土が堆積し、中層には２層とした暗褐色土と黄褐色粘質土の混合層が堆積する。下層の床面直上には３層とした暗褐色砂質土と黄褐色粘質土の混合層が堆積する。また、住居南西側の壁際には暗黄褐色粘質土を盛りつけられていた。カマドと正対する位置であり、住居入り口部の段とも考えられるが、判然とはしなかった。

住居内南側には不定形の浅い土坑が検出される。住居床面から土坑底面までは10cm前後の深さを測り、埋土は暗黄褐色粘質土である。土坑内からの遺物の出土はなかった。

住居床面上のカマド横からは土師器壺と土師器甑が据え置かれた状態で検出された。共に胴部下半



Ph.128 SC-0898カマド半裁状況（南東から）

Ph.129 SC-0898カマド半裁状況（南西から）

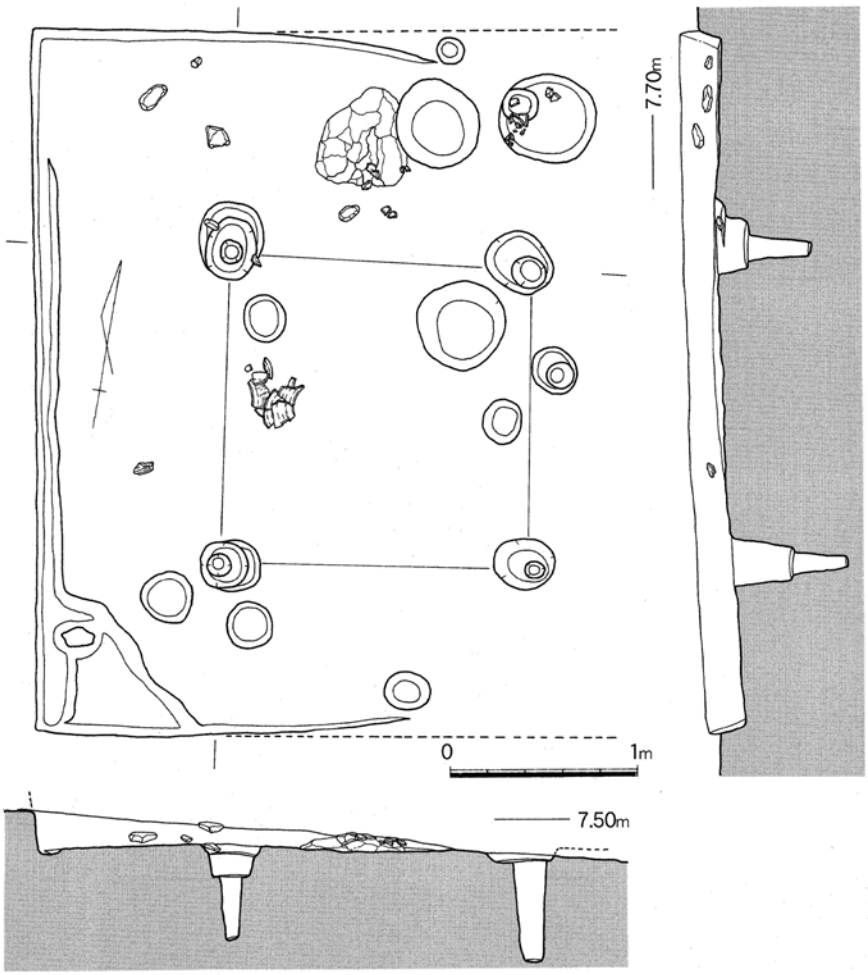


Fig.106 SC-0899遺構実測図 (S=1/40)

部は欠損する。住居廃絶時に底部を打ち欠いて埋置したものか。Fig.107に出土遺物を示した。2は土師器の甑である。胴部下半を欠損する。

口径18.6cm、頸部径16.2cm、残存高15.2cmを測る。把手はナデ調整によって胴部に貼り付けられる。胴部上半部の器面は縦方向の刷毛目調整が施されており、中位付近には叩きが行われる。内器面には指頭圧痕が残り、重複するように叩きが加えられ器形を調整する。口縁部付近は内外器面共に横方向のナデ調整が施される。色調は橙色を呈する。

6は土師器の壺である。口径19.6cm、頸部径17.0cm、残存高11.0cmを測る。器形・調整共に須恵器壺を模倣する。外器面はカキメが加えられた後叩きが行われる。頸部にはヘラ状工具突端部による沈線が巡らされ、「へ」の字状のヘラ記号が描かれる。内器面には同心円文状の叩き当て具痕が残る。口縁部付近は内外器面共にナデ調整が施される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

これらの出土遺物より住居の年代は6世紀後半から6世紀末にかけての時期が考えられる。

SC-0899 (Fig.106)

L-4区で検出した方形竪穴住居である。SB-0926に切られる。畑地開墾より住居東側は床面以下の高さまで削平される。残存する部分から復元できる平面形は方形で、一辺375cm前後の規模を測る住居である。東西方向では220cm前後の部分が残存する。検出面から住居床面までの深さは10cm前後を測り、検出面の標高は7.50m前後を測る。住居の主軸はN－10°－W方向を採る。住居北側壁中央部付近にカマドの痕跡が検出される。カマド壁

Ph.130 SC-0899完掘状況（北西から）

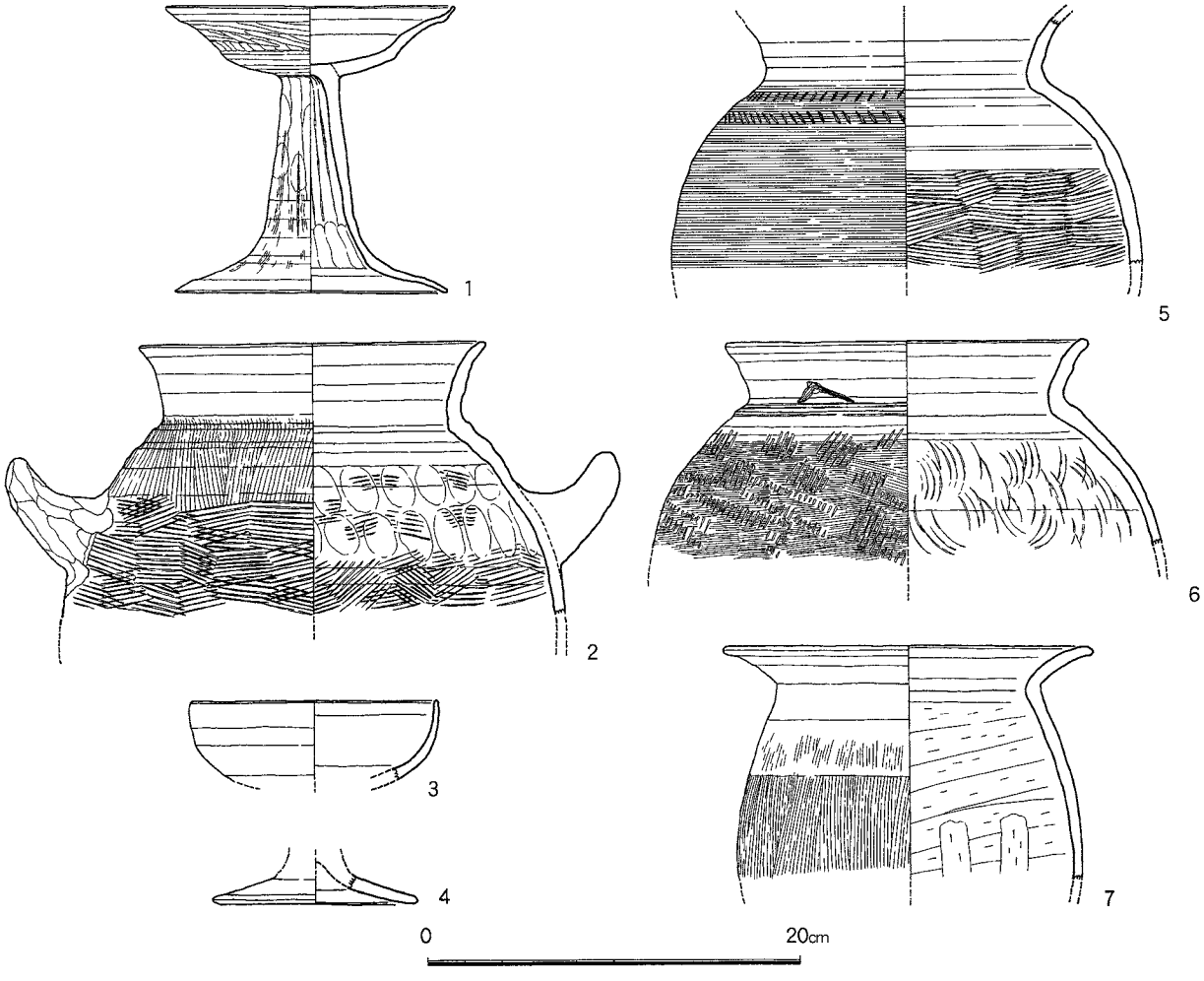


Fig.107 出土遺物実測図 (S=1/4)

体は住居廃絶時に破壊されており、白色粘土塊が焼土・灰と共に検出される。カマド基底部には浅い掘り込みがあり、床面付近は被熱により赤変化している。壁溝は丘陵側である西側壁部分に沿って掘削される。主柱穴は四本柱であり、各柱穴は直径30～40cm前後を測り、住居床面から柱穴底面までは50～60cm前後の深さを測る。

住居の残存は10cm程度と浅く、埋土は暗褐色土の１層が観察できただけである。床面上にはカマドを破壊した際の白色粘土塊や焼土に混じって土師器壺・叩き石などの石器などの遺物が出土する。

Fig.107に出土遺物を示した。

３はカマド周辺から出土した土師器の高坏坏部片である。復元口径13.2cm、残存高4.3cmを測る。ほぼ直立する口縁部を持ち、外器面はナデ調整が施される。焼成は良好で色調は橙色を呈する。

４は土師器高坏脚部片である。復元底径11.0cm、残存高1.6cmを測る。

７は土師器の甕である。復元口径20.0cm、残存高12.7cmを測る。口縁部は内外器面共にナデ調整が施され、外器面胴部には縦方向の刷毛目調整が施される。内器面にはヘラ削りが施される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

これらの出土遺物より住居の年代は６世紀前半から中頃の時期が考えられる。

SC-0921（Fig.108）

J-13区で検出した方形竪穴住居である。SC-0922を切るように掘削される住居で、住居南東側隅部は調査区外に延びるため、住居全体の調査はできなかった。検出された部分より、平面形はやや南北方向に延びる長方形で、長辺425cm×短辺370cmの規模を測る住居が復元できる。SC-0921はSC-0922の埋土上に重複して掘削されているが、SC-0922より遺存は浅く、検出面から住居床面までの深さは10cm前後を測る。住居が検出されたJ-13区は丘陵裾部付近に位置しており、住居検出面の標高は5.10m前後を測る。

住居の主軸はN－25°－W方向を採る。北側壁中央部付近には白色粘土で形成されたカマドが付設される（Fig.109）。カマド上部は削平により消滅しており、カマド両袖部が検出される。カマド内には灰と焼土が堆積しており、中央部には土師器高坏が逆位の状態で据えられていた。カマドの支脚として使用されたものと考えられる。支脚周辺には土師器甑片が散乱した状態で検出される。住居埋土は残存が浅いため、全体に堆積する二層が観察されただけである。上層には暗灰褐色砂質土が堆積しており、下層には暗灰褐色土が堆積する。壁溝は検出された部分では全周するように掘削されていた。壁溝内には暗褐色粘質土が堆積し、土師器壺・須恵器坏などの遺物が集中して出土する。

住居の主柱穴は四本柱であるが、南東側の柱穴は調査区外に位置しており検出されなかった。各柱穴は直径30～40cm前後、住居床面から柱穴底面までは40～60cm前後の深さを測る。住居床面上・壁溝・カマド周辺から土師器高坏・土師器壺・須恵器・滑石製品・石器などの遺物が出土した。

Fig.110・111に出土遺物を示した。

Fig.110-1は擦石である。全長9.9cm、全幅5.9cm、器厚6.4cmを測る。底面周辺には敲打痕がほぼ全周するように観察できる。2は頁岩製の片刃石斧である。残存長3.9cm、残存幅1.4cm、残存厚0.7cmを測る。3・4は滑石製臼玉の未製品である。3は全長1.7cm、全幅0.9cm、全厚0.4cmを測る。

Ph.131 SC-0921・0922完掘状況（北西から）

Ph.132 SC-0921遺物出土状況（北東から）

Ph.133 SC-0921遺物出土状況（南西から）

Ph.134 SC-0921遺物出土状況（南東から）

４は方形チップ状の未製品であり、穿孔は２㎜程度の深さで止まっている。残存長8.5㎜、残存幅7.0㎜、残存厚3.1mmを測る。５～７は滑石製臼玉である。直径3.1～5.1㎜、器厚1.7～2.7㎜を測り、重量は0.04～0.90ｇを測る。８は滑石製紡錘車である。他の住居で出土している紡錘車に比べ全体的に薄手の造りになっている。直径4.6cm、孔径0.6～1.0cm、器厚0.8cmを測る。上下面共に研磨痕が明瞭に残る。この他にも図化できなかったが、臼玉未製品・滑石屑が計50ｇ前後出土している。

Fig.111-１は須恵器坏である。口径10.8cm、器高4.5cmを測る。２は土師器埦である。復元口径13.4cm、器高5.8cmを測る。３はカマド内より出土した土師器高坏である。カマド支脚として転用される。坏部口径は14.8cm、底径10.3cm、器高11.2cmを測る。坏部内器面にはヘラ磨きが施される。４・５は土師器高坏脚部片である。共に坏部を欠損する。底径は9.6cm、10.8cm、残存高は7.2cm、

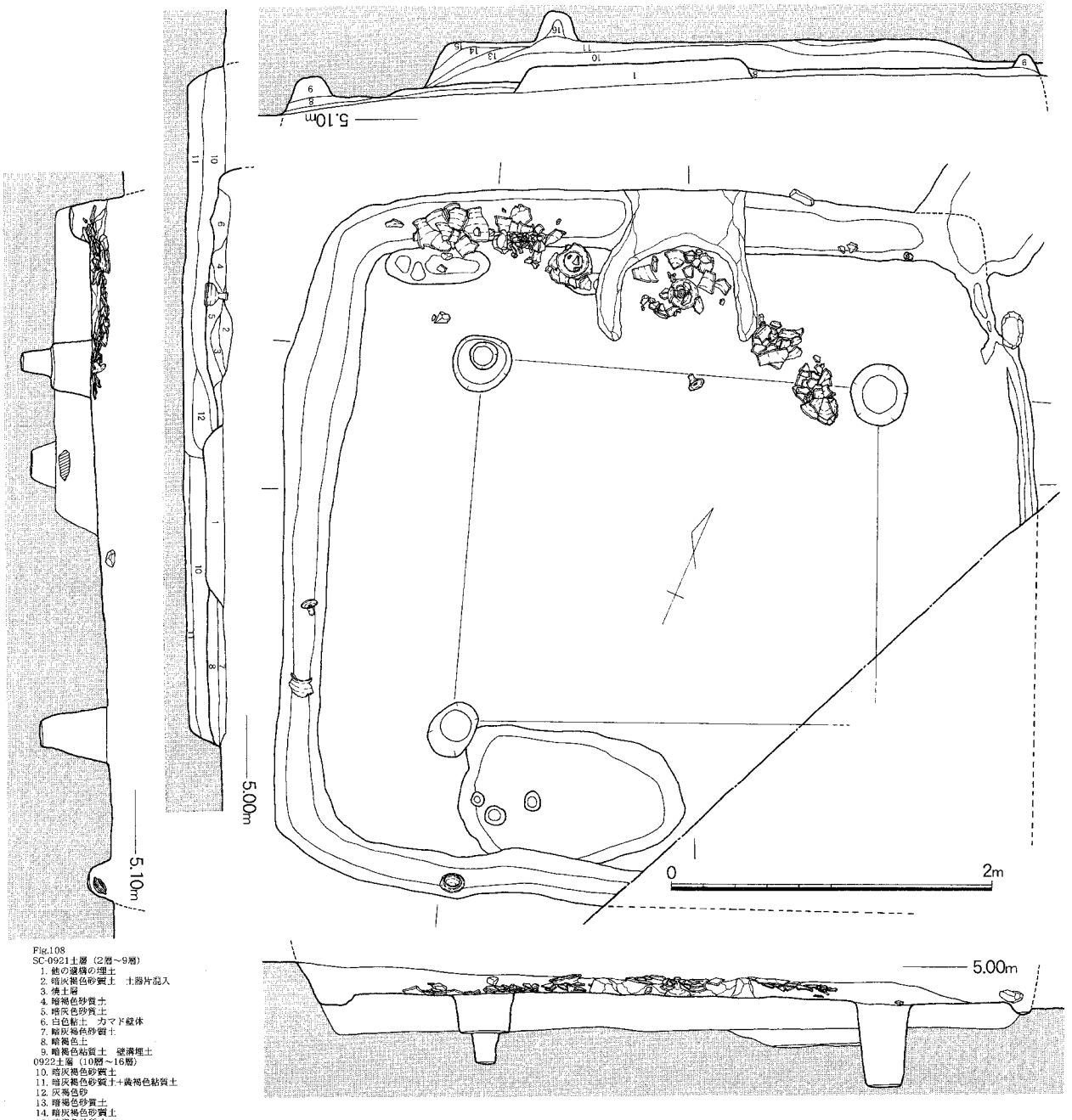


Fig.108
SC-0921土層（2層～9層）
1. 他の遺構の埋土
2. 暗灰褐色砂質土　土器片混入
3. 焼土層
4. 暗褐色砂質土
5. 暗灰色砂質土
6. 白色粘土　カマド袖体
7. 暗灰褐色砂質土
8. 暗褐色土
9. 暗褐色粘質土　壁溝埋土
0922土層（10層～16層）
10. 暗灰褐色砂質土
11. 暗灰褐色砂質土＋黄褐色粘質土
12. 灰褐色砂
13. 暗褐色砂質土
14. 暗灰褐色砂質土
15. 暗褐色粘質土
16. 黄褐色粘質土＋灰褐色砂

Fig.108 SC-0921遺構実測図（S=1/40）

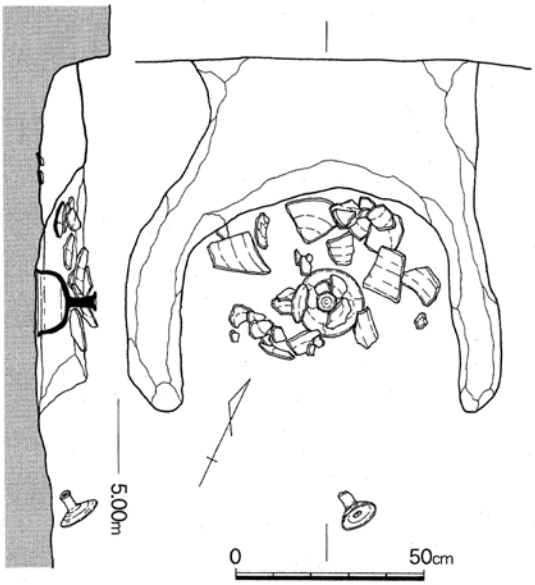
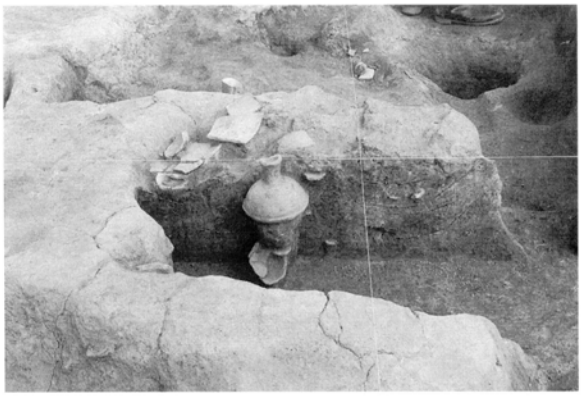


Fig.109 SC-0921カマド実測図 (S=1/20)



Ph.135 SC-0921カマド半裁状況（南西から）

Ph.136 SC-0921カマド半裁状況（南東から）

6.7cmを測る。6は土師器甕である。復元口径13.2cm、器高10.7cmを測る。ナデ調整が施される。7～9は土師器の壺である。7は復元口径11.2cm、残存高12.0cmを測る。内外器面共にヘラ磨きが施される。8は復元口径13.2cm、残存高11.8cmを測る。板ナデ調整される。9は復元口径16.8cm、残存高7.6cmを測る。外器面には斜め方向の刷毛目調整が施される。いずれも焼成は良好で、色調は淡橙色を呈する。10・12・13は土師器の甑である。10は口径27.2cm、器高24.6cm、底孔径8.0cmを測る。12は把手を欠損する単孔式の甑である。

口径23.8cm、器高24.4cm、底孔径8.0cmを測る。外器面は板ナデ調整される。13は体部中程より上

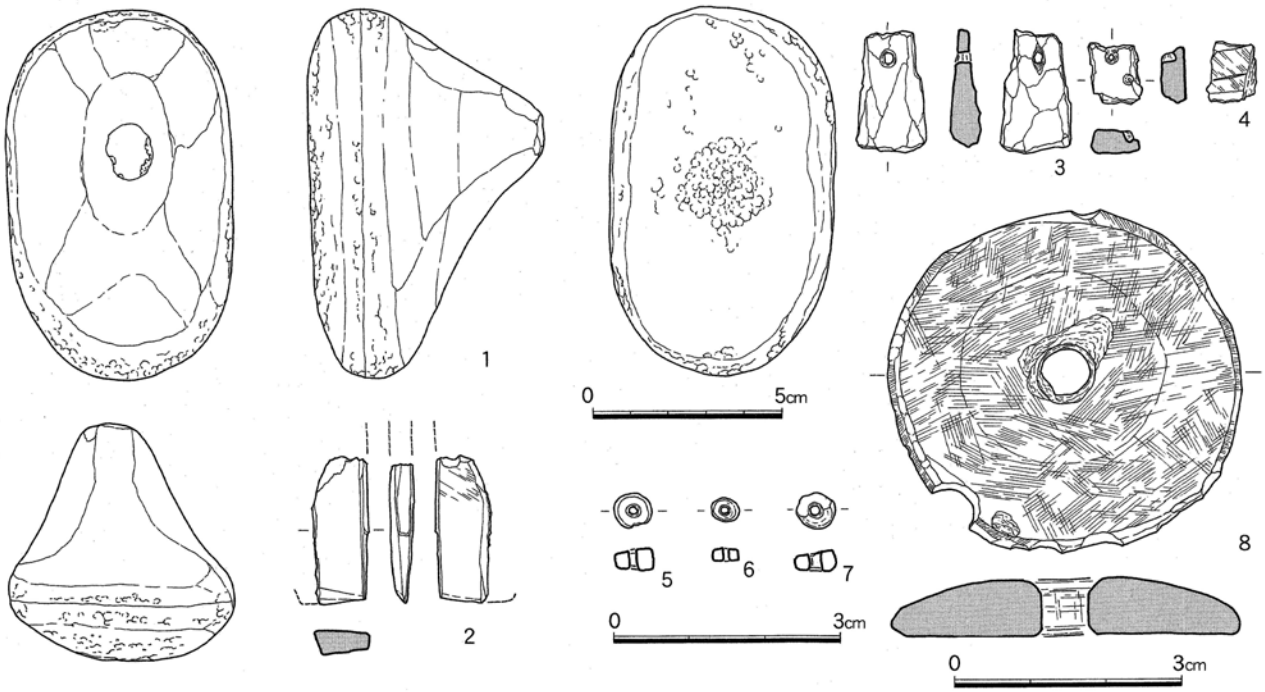


Fig.110 SC-0921出土遺物実測図1 (S=1/1・1/2)

半部を欠損する。底孔径8.4cm、残存高16.2cmを測る。把手はいずれも胴部壁にナデ付けられる。

11は土師器の壺である。器形・調整共に須恵器の製法を踏襲する。口径20.6cm、残存高30.2cm、胴部最大径30.4cmを測る。外器面はカキメが施され、全面に叩きが施される。内器面には同心円文の当て具痕が観察される。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。

これらの出土遺物より、この住居の年代は6世紀前半から中頃の時期を考えることができる。

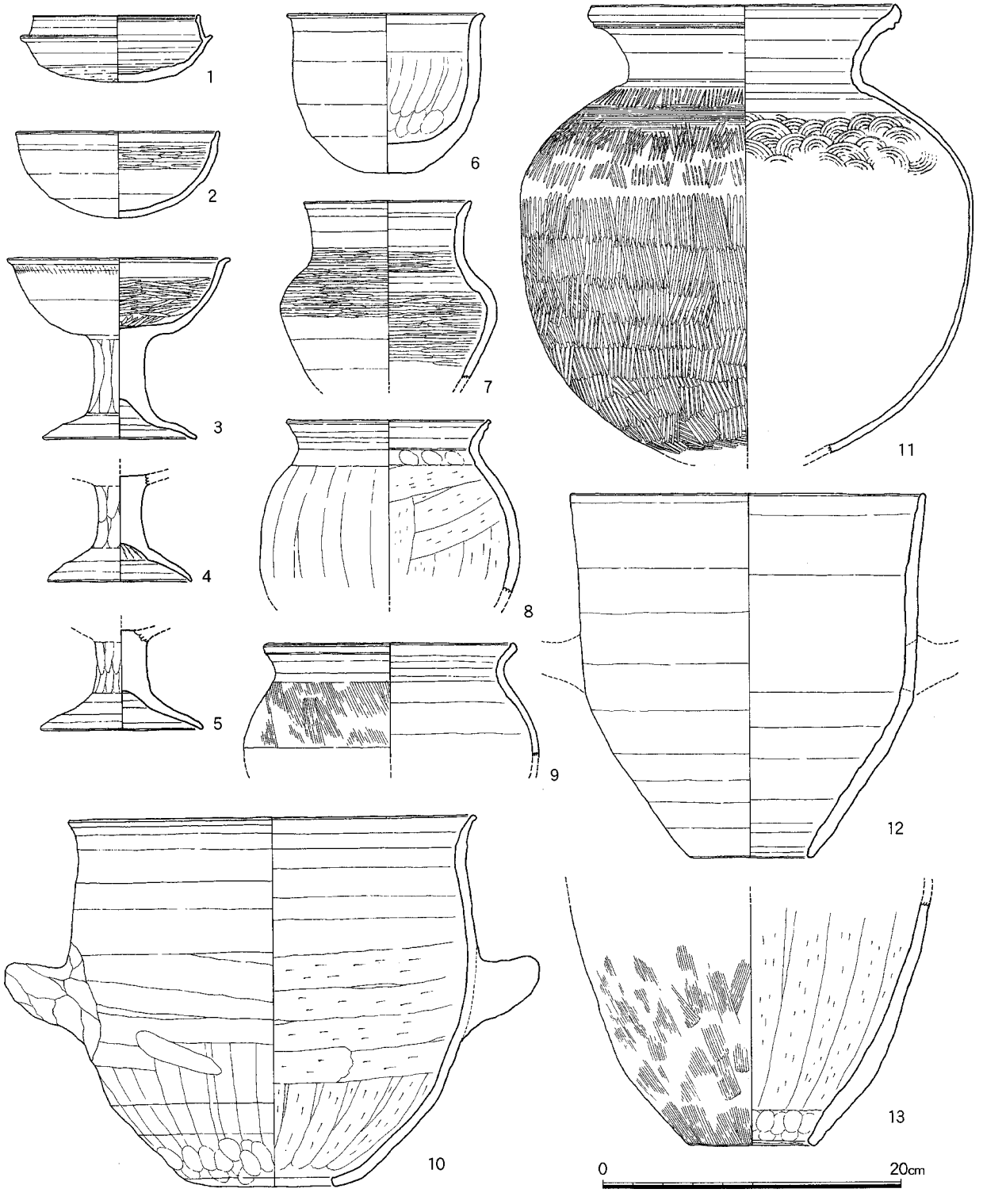


Fig.111 SC-0921出土遺物実測図2 (S=1/4)

SC-0922（Fig.112）

J-13区で検出した方形竪穴住居である。SC-0921に切られる。現状での平面形は東西方向に長い長方形で、長辺350cm×短辺290cmを測り、検出面から住居床面までの深さは35cm前後を測る。

住居検出面の標高は5.10m前後を測り、住居の主軸はN－27°－E方向を採る。住居北側壁中央部付近にはカマドの痕跡が検出される。カマド壁体などは住居廃絶時に破壊されており、支脚に使用された全長13cm前後の柱状礫が直立に据えられた状態で検出される。カマド基底部付近は被熱により赤変化しており、焼土・灰・炭化物・土器片が周辺に散乱する。壁溝は北東側壁の一部分のみ検出された。住居内には基本的に二層の堆積層が観察される。上層は暗灰褐色砂質土層が堆積する。下層には暗灰褐色砂質土と黄褐色粘質土の混合層が堆積する。SC-0921のカマド付近にはSC-0922床面にまで達する掘り込みがあり、灰褐色砂と暗黄褐色粘質土によって埋め戻されている。SC-0921掘削時に床面補強を行った痕跡と考えられる。主柱穴は住居壁際の対辺に掘削される二本柱であり、各柱穴は住居床面より20～35cm前後の深さを測る。

住居床面上からは土師器・須恵器・滑石製品・石器などの遺物が出土した。

Fig.113に出土遺物を示した。

1は須恵器坏である。復元口径12.4cm、残存高3.8cmを測る。2・3は土師器の埦である。2は復元口径12.4cm、残存高6.1cmを測る。身は深く直線的に立ち上がる体部を持つ。外器面上半部は縦方向の刷毛目調整が施され、下半部には縦方向の刷毛目に重ねるように横方向に刷毛目調整が施される。3は口縁部に向けてわずかに内反する体部を持ち、底部は丸味を帯びる。口径15.0cm、器高6.2cmを測る。焼成は良好で色調は橙色を呈する。4は土師器壺の胴部片である。口縁部付近は欠損する。頸部径11.4cm、胴部最大径14.8cm、残存高12.0cmを測る。外器面は摩滅により器面調整はほぼ失われるが、内器面下半にはヘラ削り痕が観察される。上半部には指ナデ調整が施される。5～7は土師器壺の口縁部片である。5は復元口径15.6cm、残存高6.6cmを測る。6は口径14.2cm、残存高11.0cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がる。内器面には反時計回り方向に施された指ナデ調整痕が観察できる。7は口径15.0cm、残存高6.2cmを測る。器面調整は摩滅により失われる。8は礫石錘である。長軸6.5cm×短軸5.7cmを測り、器厚は1.4cm、重量は99.85ｇを測る。扁平な円礫の長軸両端部を打ち欠き紐掛け部を造り出す。9は滑石製臼玉の未製品である。いわゆる方形チップであり、穿孔途中に破損したため廃棄されたものと考えられる。残存長9㎜、残存幅6㎜、器厚2㎜を測る。10は本来は敲打器であるが、カマドの支脚石として転用されたものである。端部には敲打痕が明瞭に残り、側面には擦痕が広範囲に観察され、砥石としても使用されていたことが推測される。

これらの出土遺物より住居の年代は5世紀末から6世紀初頭の時期が考えられる。

Ph.137 SC-0922完掘状況（南から）

Ph.138 SC-0922カマド支脚石検出状況（南西から）

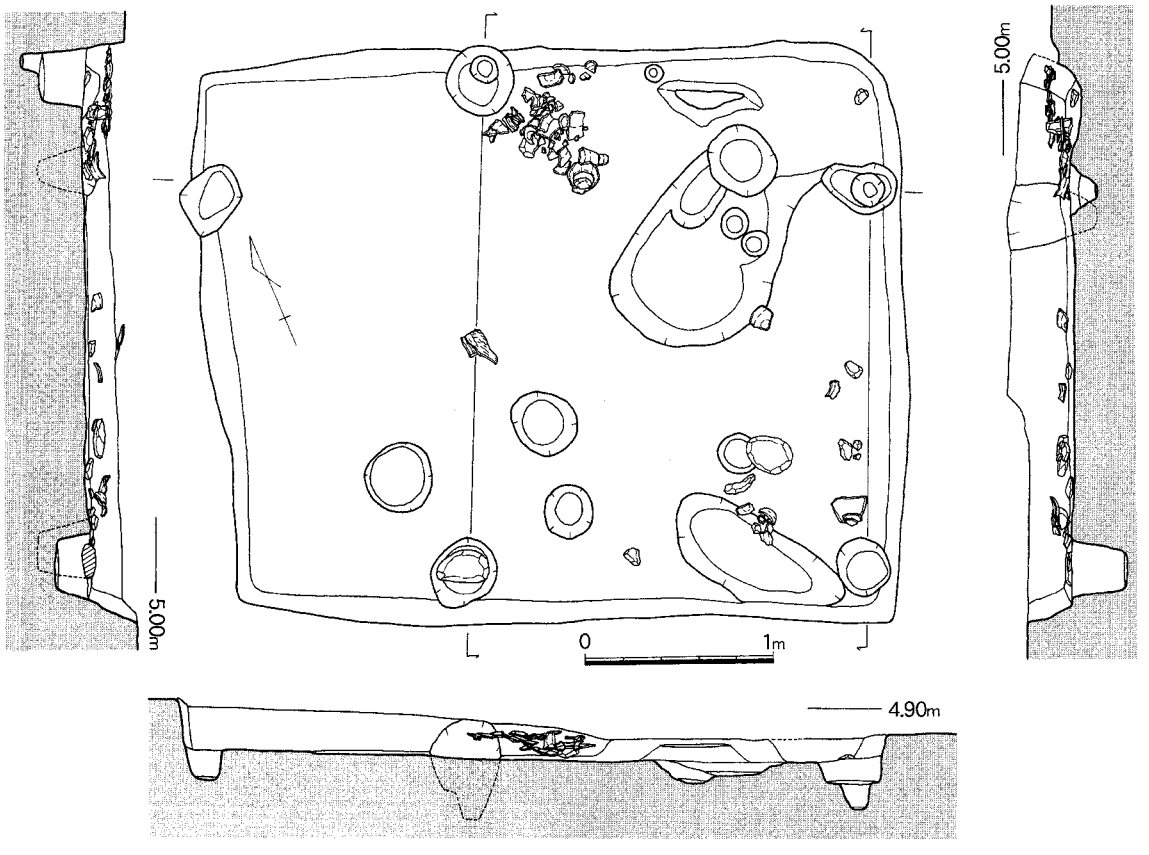


Fig.112 SC-0922遺構実測図 (S=1/40)

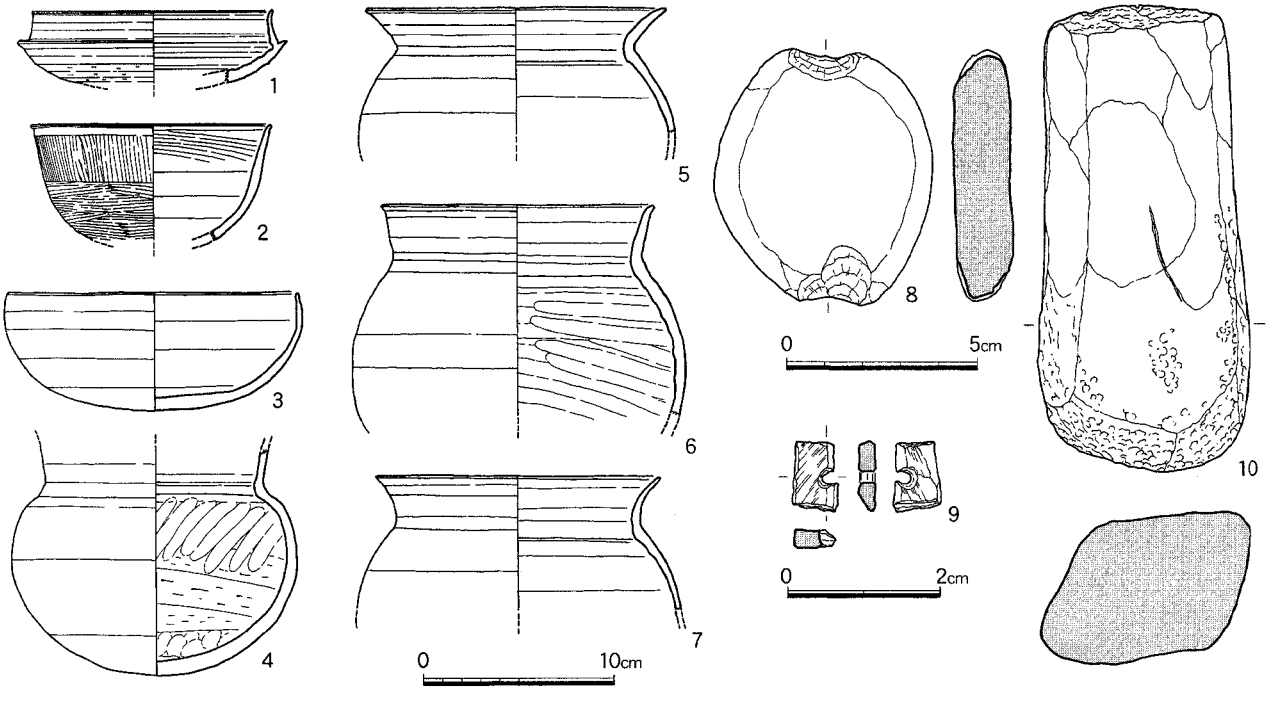


Fig.113 SC-0922出土遺物実測図 (S=1/1・1/2・1/4)

SC-0923（Fig.114）

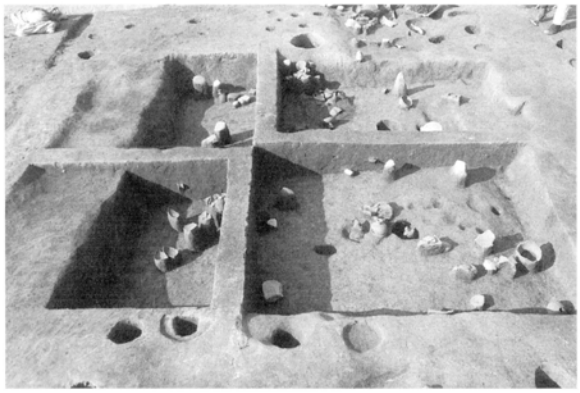
M-6区で検出した方形竪穴住居である。現状での平面形は方形で長辺360cm×短辺350cmを測り、検出面から住居床面までの深さは50cm前後を測る。検出面の標高は6.30m前後を測り、住居の主軸はN－23°－W方向を採る。住居北側壁中央部付近にはカマドの痕跡が検出される。カマド壁体は住居廃絶時に破壊されており、土師器高坏が逆位に据えられた状態で検出される。カマドの支脚として転用されたものである。カマド基底部付近は被熱により赤変化しており、カマド壁対の残骸である白色粘土塊。焼土・灰・炭化物土師器甑片などが周辺に散乱する状態で検出された。壁溝は住居北側壁のカマド付近を除いた住居全周部分に掘削される。壁溝内には暗褐色粘質土が堆積しており、土師器埦などの遺物が検出される。住居内埋土は大別して四層に分層される。上層には暗灰褐色砂質土が堆積する。丘陵側である西側方向からの流入層である。２層には暗灰褐色砂質土と黄褐色粘質土の混合層が堆積する。３層には暗黄褐色砂質土が堆積し、床面上の４層には暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合層が堆積する。４層には完形の土器などが多量に含まれる。主柱穴は四本柱である。

Fig.115に出土遺物を示した。

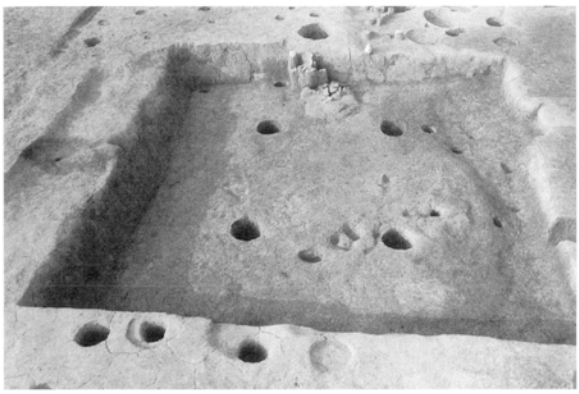
１・２・３は土師器の埦である。１は復元口径14.6cm、器高5.9cmを測る。２は復元口径12.4cm、器高5.9cmを測る。１・２の内器面には放射状のヘラ磨きが施される。３は復元口径12.8cm、残存高5.3cmを測る。内外器面共に横方向に丁寧なヘラ磨きが施される。いずれも色調は橙色を呈する。

４～11は土師器の高坏である。４は坏部口径13.2cm、残存高11.9cmを測る。坏部口縁部は如意形を呈し、内器面には横位のヘラ磨きが施される。５はカマド支脚として転用されたもので、口径14.4cm、残存高11.9cmを測る。６は坏部口径13.8cm、底径10.4cm、器高9.6cmを測る。７は口径14.4cm、底径10.9cm、器高10.4cmを測る。５・７の坏部内器面には放射状のヘラ磨きが施される。８は口径 14.2cm、残存高6.7cmを測る。９は口径14.4cm、残存高10.2cmを測る。10は口径13.8cm、底径10.2cm、器高10.8cmを測る。11は口径13.4cm、残存高9.9cmを測る。８・11の坏部外器面には横方向のヘラ磨きが施される。いずれも焼成は良好であり、色調は橙色～淡橙色を呈する。

14は須恵器高坏脚部片である。脚部には上下に長い透し孔が設けられている。残存高は3.5cmを測る。焼成は良好で色調は灰色を呈する。15は須恵器の壺縁部片である。復元口径27.2cm、残存高8.5cmを測



Ph.139 SC-0923調査状況（南東から）



Ph.140 SC-0923完掘状況（南東から）

Ph.141 SC-0923カマド基底部土器検出状況（南東から）

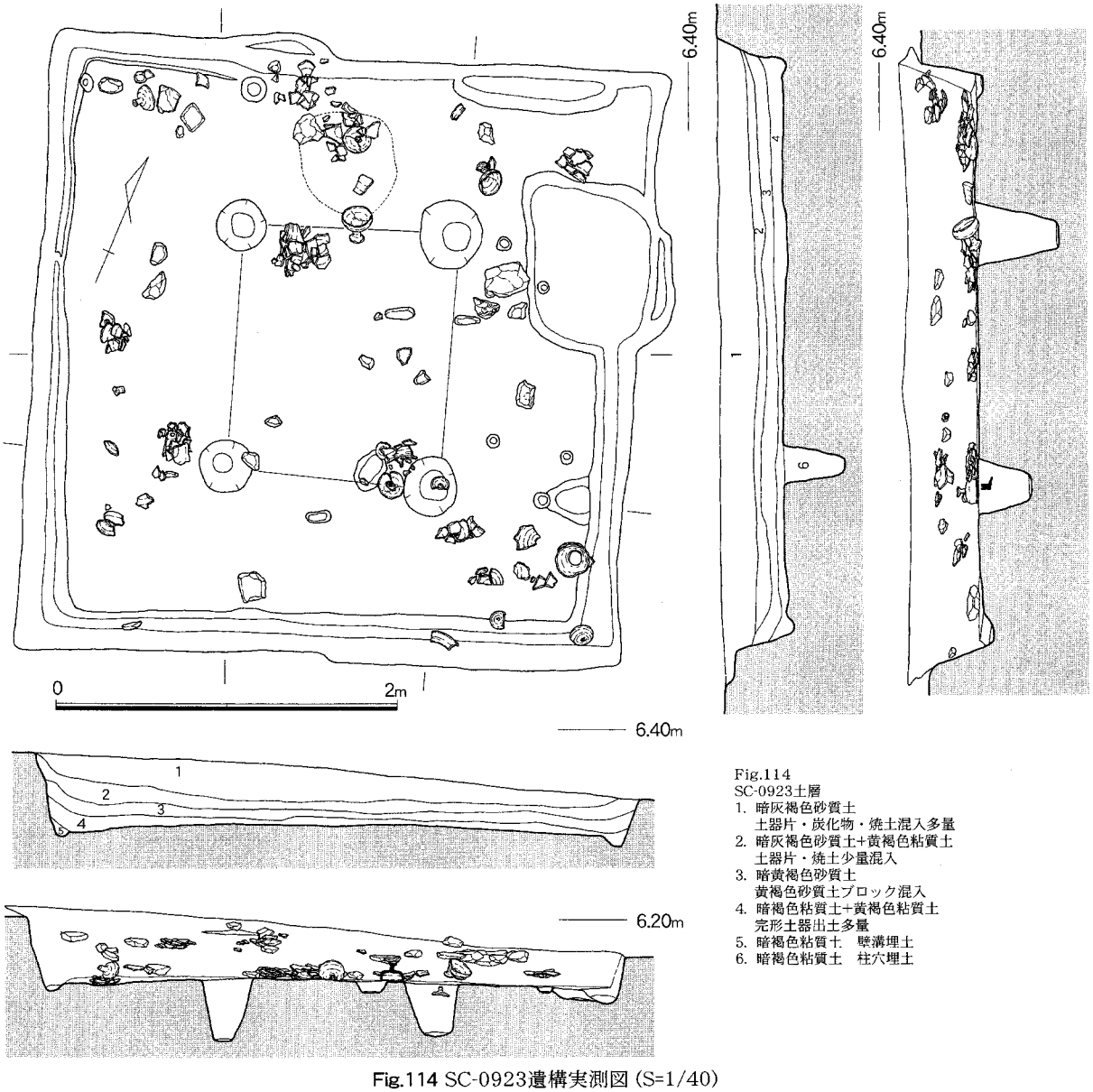


Fig.114 SC-0923遺構実測図 (S=1/40)

る。口縁部下には波状紋が施され、胴部上半部には叩き痕が観察できる。内器面派に同心円文の叩き当て具痕が観察できる。16は陶質土器甕の胴部片である。平行叩文が観察できる。

17は土師器の甑である。底部は単孔式で、口径に対して器高の低い器形を呈している。復元口径18.1cm、器高16.5cm、底孔径6.2cmを測る。把手は胴部壁にナデ付けられる。

18は土師器の壺である。口径14.2cm、器高22.0cm、胴部最大径cm19.2を測る。胴部は長胴形で最大径が胴部下半部に位置し、口縁部の外反も弱い。色調は橙色を呈する。外器面には指頭圧痕とナデ調整痕が残り、内器面はヘラ削りで調整される。19は土師器の壺である。口径14.4cm、胴部最大径18.8cm、残存高14.2cmを測る。外器面は摩滅により器面調整は失われるが、内器面にはヘラ削りの痕跡が観察できる。

これらの出土遺物より住居の年代は6世紀前半の時期が考えられる。

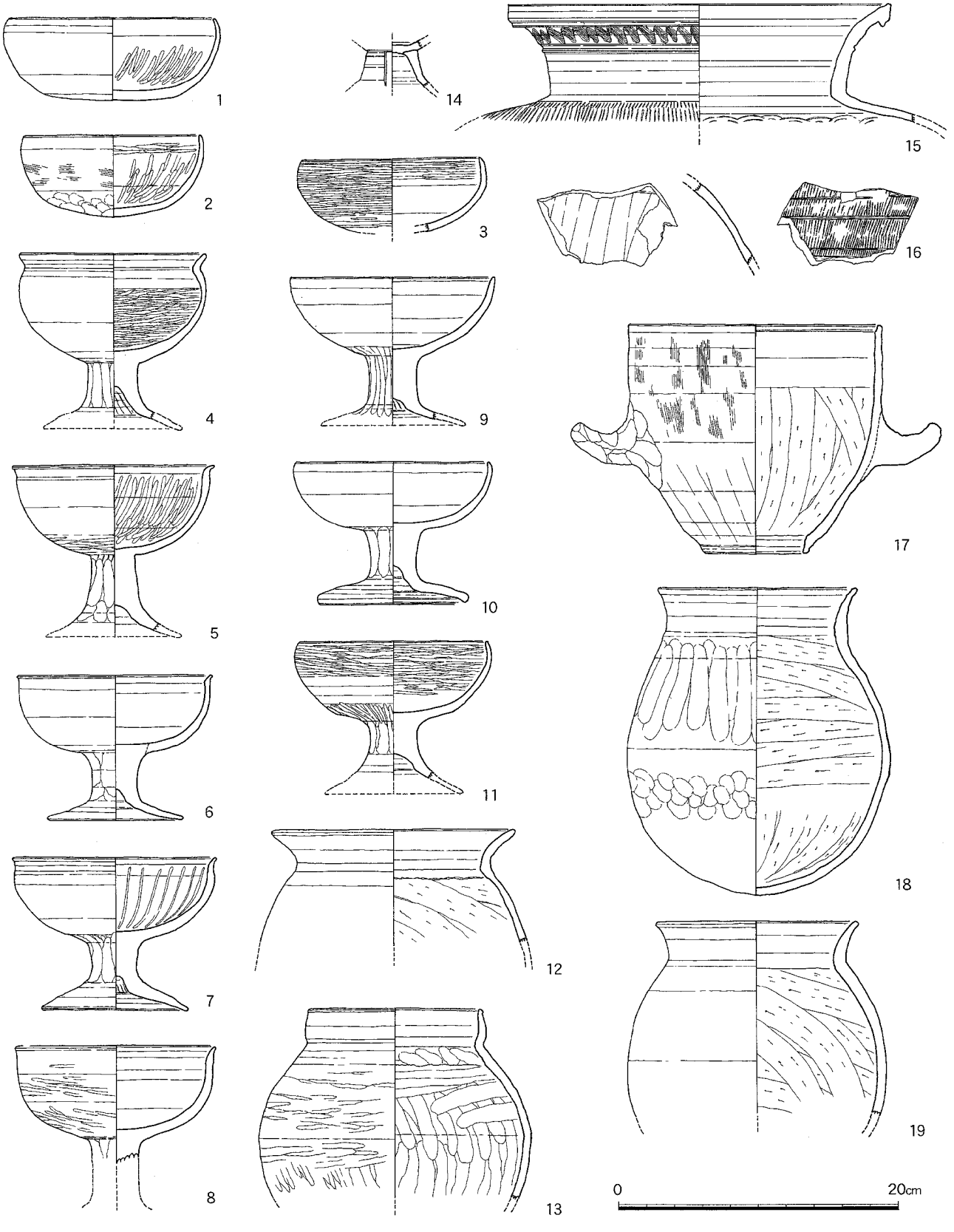


Fig.115 SC-0923出土遺物実測図 (S=1/4)

SC-0924（Fig.116）

J-12・13区で検出した方形竪穴住居である。SB-1308・SB-1352に切られる小型の住居であり、現状での平面形は方形で275cm×275cmを測る。検出面から住居床面までの深さは35cm前後を測り、検出面の標高は5.00m前後を測る。住居の主軸はN－47°－W方向を採る。住居北東側壁の東側部分にカマドの痕跡が検出される。カマド壁体は住居廃絶時に破壊されており、支脚に使用された全長20cm前後の柱状礫がカマド中央部付近から直立に据えられた状態で検出される。カマド基底部付近は被熱により赤変化しており、焼土・灰・炭化物・土器片などが周辺に散乱した状況で検出される。

壁溝は住居内では検出されず、主柱穴も住居内での検出はなかった。上部構造材を支えるための柱穴は住居外に掘削されていたと考えられるが、調査では検出されなかった。住居埋土は基本的には三層に分層され、上層より暗灰褐色砂質土、暗褐色砂質土、暗褐色土と黄褐色粘質土の混合層が堆積する。上層からは蛸壺の集積が検出された（Ph.145・146）。

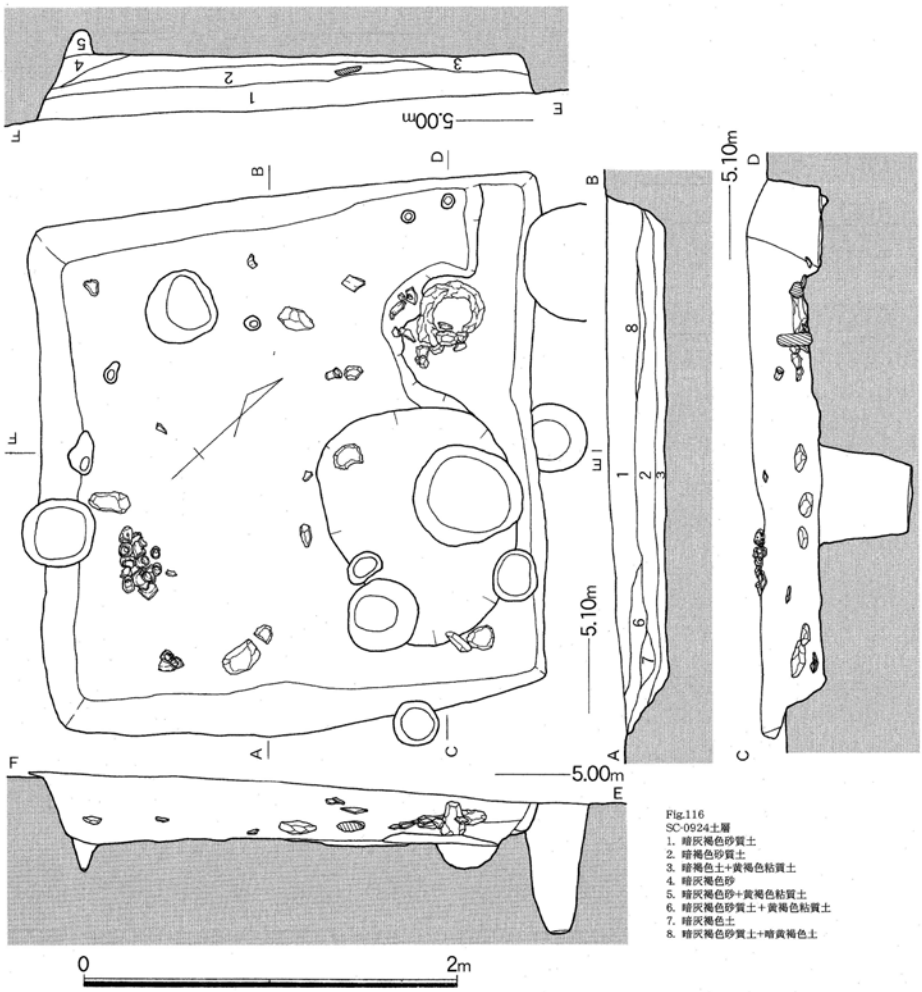


Fig.116 SC-0924遺構実測図（S=1/40）

Ph.142 SC-0924完掘状況（南西から）

Ph.143 SC-0924完掘状況（南東から）